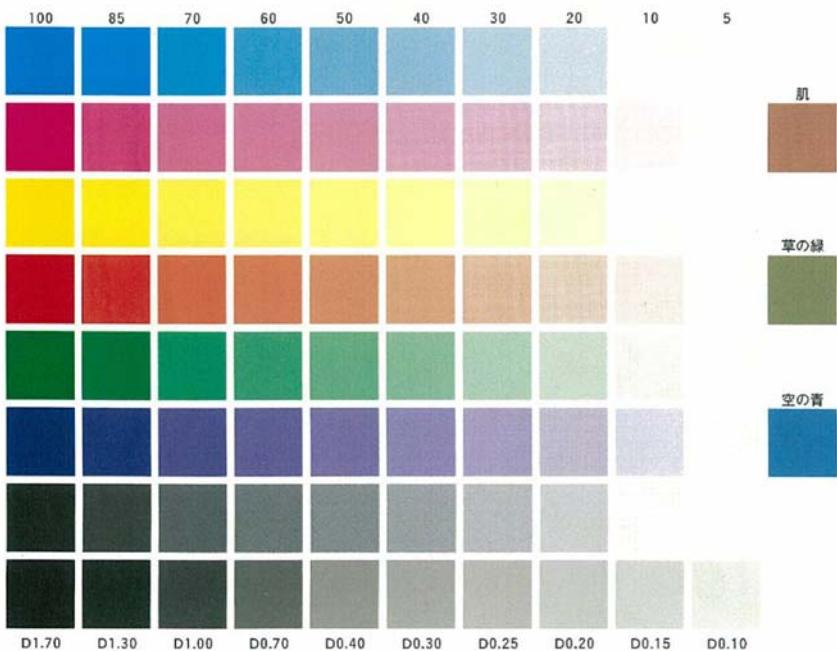


近世初期俳諧の表記に関する研究

田中
巳榮子



目 次

序 章 本稿の目的と構成	1
第一章 振り仮名が付される漢字表記語と表記形態	19
導 言	19
第一節 『紅梅千句』における振り仮名	21
第二節 『軒端の独活』『江戸宮筈』の表記	37
第三節 『正章千句』の振り仮名	62
第四節 『宗因七百韻』と『七百五十韻』の表記—振り仮名の機能と表記形態の特徴—	77
結 語	94
第二章 近世初期俳諧の用字考証	97
導 言	97
第一節 近世初期俳諧における「やさし」の用法 —『江戸八百韻』に見える「嬌嬈」・「艶」について—	97
第二節 『當流籠抜』における「悶」について	113
第三章 仮名遣から見た近世初期俳諧集—語頭に「お（オ）」「を（ヲ）」が付く語について— 導 言	130
第一節 本文中の語頭に「お・を」が付く仮名表記語—定家仮名遣を通して—定家仮名遣を通して—	151
第二節 振り仮名の語頭の「オ・ヲ」の仮名遣	170
結 語	200
第三章 仮名遣から見た近世初期俳諧集—語頭に「お（オ）」「を（ヲ）」が付く語について— 導 言	173
第一節 本文中の語頭に「お・を」が付く仮名表記語—定家仮名遣を通して—定家仮名遣を通して—	174
第二節 振り仮名の語頭の「オ・ヲ」の仮名遣	187
結 語	203
終 章 本稿の結論と今後の課題	19
資料編	1
資料一 『紅梅千句』の振り仮名付き語と付合指導書との関係	(1)
資料二 『紅梅千句』の振り仮名を付す語と条件との関係	(7)
資料三 一〇俳諧集における振り仮名付き語	(19)

序 章 本稿の目的と構成

一 目的と方法

一一 はじめに

日本語の表記の史的研究において、近世に焦点を絞つてみると、近世期のまとまつた資料として、俳諧というひとつの文学ジャンルがある。俳諧は当時の日常語を多く含む。したがって、日常語の表記を考える上で貴重な資料となり得ることは言うまでもない。そこに、俳諧を資料として取り上げる価値があり、検討して行く必要性がある。

寛文から元禄にかけて、多数の俳諧集が出版されるようになり、その中には、振り仮名を付す俳諧集も散見する。日常語を多く含んだ短詩型の表記において、振り仮名はどのように機能しているのだろうか。日本における漢字の用法において漢字と訓の関係では、元来、漢字一字に与えられる訓が必ずしも一対一の対応ではなく、例えば「揚屋・^{アヤ}揚屋」のように複数のヨミがあり、ヨミによって意味が異なる場合には語義を確定するために振り仮名が必要となる。

また一つの和語に対して複数の漢字が与えられる場合がある。例えば「ホトリ」に対応する漢字に「畔・辺・頭」などがある。「頭」では「アタマ・カシラ」のヨミが常用され、使用頻度が低い「ホトリ」と読む場合には振り仮名を付す必要がある。

一方において、俳諧の表記体は、概ね漢字仮名交じりで一句が構成されている。それらに使用されている漢字を取り上げてみると、使用される漢字の中には工夫を凝らした用字が見える。そのような常用されない漢字、例

えば「肋骨（あばらぼね）」の「肋」に「害偏に善」の造字、あるいは「石の帶」に「胃糸の帶」を当てる当て字などには振り仮名がヨミを確定する働きをする。

さらに、特殊なヨミが与えられる「閑る」では、「イキ（る）」と振り仮名を付すことにより、「閑」の漢字が持つ義と振り仮名「イキ（る）」で一・重表現の効果をねらう。

もう一つ加えれば、易しい漢字「読・照・霞」などのように、送り仮名を付けない代わりに語形を明示する振り仮名がある。

以上のように、振り仮名にはいくつかの目的が考えられ、様々な例があるから考える意味があり、俳諧の特質を知る手がかりともなる。

さらに加えて、振り仮名を俳諧のことばの面から考えると、これまでの韻文とは異なり、方言やかたことを用いることがあり、それのことばを文字化したときに、仮名で書けば意味が理解できず、漢字で書けば意味は理解することができるが、実際の音声言語を読み取ることは不可能という現象が起こる。このような、音声と書かれた漢字表記に差異がある場合では、俳諧の特質である俗語と表記を如何に近づけるかが問題となり、振り仮名が関わってくる。

いざれにおいても、書き手が自分だけの記録として残しておくる口記のような場合は、振り仮名が付されないのは当然である。手紙のように、書き手と読み手が一対一の場合も、読み手に応じた書き方をするので、振り仮名が付されることはない。ところが、位相の異なる、多くの人を対象として書記するときには、様々な読み手を想定しなければならない。出版された俳諧集のように、書き手と読み手が場を共有しないときには、書き手の意図を伝えるために、振り仮名を付す必要性が生じてくる。

このような振り仮名に関する問題を含め、漢字で書記する場合におこる諸問題において、乾善彦氏（一〇〇二¹⁴）

が日本語書記の史的研究にとつて「日本語書記のさまざまの方法の中で、それぞれにしめる漢字の用法や機能は、代から現代への通時的な考察と同時に、それぞれの時代における検討を欠かすことは出来ない。

よって、近世初期の蕉風が確立する前の慶安元年から延宝末年までの、貞門の俳諧集では正章千句（一六四八年刊）・紅梅千句（一六五五年刊）、談林では宗因七百韻（一六七七年刊）・江戸八百韻（一六七八年刊）・當流籠抜（同上）・西鶴五百韻（一六七九年刊）・江戸蛇之鮈（同上）・江戸宮箭（一六八〇年刊）・軒端の独活（同上）・七百五十韻（一六八一年刊）の俳諧集を取り上げ、江戸時代初期の俳諧における振り仮名のあり方を中心とした、表記に関する問題を考えて行くことにする。

一一一 表記研究における課題

今野真二氏（二〇〇九²）は「和歌を分析対象とした国語学／日本語学の研究は、『万葉集』以外ではほとんど行われていないようみえる」（『大山祇神社連歌の国語学的研究』一二頁）と指摘し、「和歌も連歌も『韻文』だから特殊で国語学／日本語学の資料とはならない、と切り捨ててしまう前に、そこで使われていることばをきちんととした「方法」に基づいて「定位」させることが必要であろう」（前掲の書一五頁）と述べる。このことは、ことばにおける問題であるが、ことばを文字化するときに、どのような形で出力されるか、その出力されたものが表記であると捉えると、ことばと表記の関係は、切り離して考えられるものではない。和歌や連歌はうたであり、使用されることばが特殊である。同時に、表記の特徴として、わずかに漢字が使用されることはあるても、主に仮名で書かれ、伝統を踏まえた表記という特徴があり、そこに、国語学研究の対象外とされていった根拠がある。

俳諧についても、今まで、韻文の中でも特殊な文芸形態であると見做され、国語学的研究からは除外される傾向にあつたようだ。しかしながら、俳諧のことばについて『日本語の歴史5』（文芸に俗語を登場させた俳諧）に次のような記述がある。

「日本語の歴史」の流れのなかで、近世の新しい文学様式の展開を考えるにさいして、もちろん、私たちが焦点をしほるべきは、それらの文学に時代のことばがいかにえらびとられ、その言語表現のうえに、新しい文学の発想がいかに具現しているかの点である。

そういう意味で、いわば時代の俗語のうえに、新しい文芸の世界を展開していくた俳諧こそ、まず私たちのとりあげなければならないものであつた。(二二二九頁)

このように、俳諧は和歌や連歌の縁上に位置するけれども、右の文に示される「時代の俗語」、すなわち、和歌や連歌に用いられないことばを用いることを俳諧の特質とし、和歌や連歌とは、使われることばに雅語と俗語という相違がある。俳諧が今までの韻文と異なるのはことばだけではない。表記法においても、一句を漢字のみで構成する例、捨て仮名を片仮名で右に小さく記す例、漢字に振り仮名が付される例などが見え、和歌や連歌に比べて多様である。その中の漢字と振り仮名の関係を取り上げてみると、ヨミが常用的か、特殊なヨミであるかが問題になり、振り仮名はどのような役目を担っているのかも問題となる。また、用字においては、偏の増画・省画、あるいはあて字的用法などの遊戯的な文字遣いが見え、これも振り仮名の問題と併せて重要な課題となる。

一　一　三　振り仮名に関する先行研究

振り仮名に関する先行研究を概観すると、前田富祺氏(一九九二)^④が近世・近代の文学者が漢字に付ける振仮名(表記されている漢字を主と考へるか、振仮名によつて表わされる言葉を主と考へるか)に特別な文学的意図を托していたことは明らかである。これらの文字に関する様々な問題の研究は、文章研究・文体研究としての文字の研究に止まらず、文学的な評価との関わりの面からの検討を必要としているのである。(『国語文字史の研究一』国語文字史研究の課題 六頁)

と述べる。また細川英雄氏(一九八九)^⑤の「振り仮名—近代を中心にして」では

振り仮名の問題は、すなわち漢字・仮名表記の問題であり、同時に和語・漢語の問題とも深くかかわつている。従来、なぜ振り仮名が施されるのかという観点での個別的・選択的な研究はいくつかなされているものの、どのような場合にどのような形で振り仮名が付されるのか付されないのかという観点からの具体的な基礎調査は少ないので現状である。(『漢字講座4』一二二一頁)

と、振り仮名の研究は未開拓部分の多いことが指摘されている。

玉井喜代志氏は「振假名の研究 下」(『国語と国文学』第九卷第六号)^⑥で、振り仮名を「漢字」と「邦語」と「音」の関係、あるいは「漢字」と「邦語」と「意味」の関係など形態上からの分類(五三頁)、または、「文字を読ましむる爲」「翻訳に於て原文の意味なり、面影なりを、なるべく忠実に伝えるため」「字面を美しくするため」など、振り仮名の目的からの分類をし(五六頁)、ルビは上記の三つの目的のいずれかによるものでなければならぬと述べる。つまり、「読みますためのルビの濫用」「不自然なるもの」「蛇足的なるもの」「ペダンチックなるもの」はルビの理想に反するとする(六九頁)。

鈴木丹士郎氏(一九六六^⑦)は、「近世文語の問題」で『弓張月』『八犬伝』などを取り上げ、漢字の左右両側に付されたルビについて、字音と和語・字音と類義の字音語・左右とも和語などの例を示し

これは文語と口語とを接近させる文章の口語化をめざしたとみるよりは、むしろ文語と口語とは性質を異にするものであり、両者を対にして示すことにより、ことばを教えようとすることにあつたと考えられる。(『専修大学論集3』六一頁)

と述べている。また、『英草紙』を取り上げ、漢字一字一字の音と訓を付していることについて

一語両ヨミの手法は書きことばと話すことばとを近づけようとした意図とみるよりは、用語・用字を教えるためであつたとみられるのである。(前掲の書六二頁)

と述べ、漢字の両側に付す振り仮名には「ことば」「用語」「用字」を教える機能があるとする。

屋名池誠氏（二〇〇九⁽⁸⁾）は、「『総ルビ』の時代——日本語表記の十九世紀——」で、一九世紀の日本文学の表記における外形的な共通点の一つとして総ルビを取り上げる。

「総ルビ」の文章では、動詞などの場合、原則として読みが一拍までの語では送り仮名が送られない：（内省略）：そのため、たとえば「よむ」も「よみ」も「読」とだけ書かれ、漢字だけでは「よむ」なのか、「よみ」なのか決定できないことが多い。（『文学』二〇〇九年十一月—十二月一二〇頁）

これは、本稿の資料の一つである『紅梅千句』でも、当俳諧集は総ルビではないが、「読」「照」などと易しい漢字ではあるが振り仮名を付す例があり、振り仮名がヨミを指定する機能を果たしている。

明治期では進藤咲子氏（一九六八⁽⁹⁾）が「明治初期の振りがな」（『近代語研究第一集』四九一頁）で、『近世新聞』『生産道案内』『郵便報知新聞』『英日經濟論』『安樂鍋』など一〇種の資料から用例を挙げ、種々の振り仮名の機能を示している。その一つである「本文の漢字そのもののよみを助けるよみがな」では、パラルビの場合には「使用度の高い語の一般的な漢字表記には、あまり振られない傾向が見られる」（四九四頁）と述べ、西欧の学術書の試語では「概念を読み手に伝える効用」（四九四頁）、戯作では「漢字と振りがなの二重表現の効果をねらつて漢字を補助手段として用いたもの」（四九五頁）などと分類し、「明治期の振りがなの特色の一つは、西欧語との交渉によつて新しく生じた役割であろう」（四九六頁）と述べる。

大島中正氏（一九九一⁽¹⁰⁾）は、「語の漢字仮名並列表記は有用か」（『日本語日本文学』三号）同志社女子大学で、漢字と振り仮名で示す表記形式を「並列表記」と呼び、タイプによつて、何とかかわるかによつて、「有用・無用の評価が変わつてくる」（三一頁）とする。

矢田勉氏（二〇〇五⁽¹¹⁾）は、「振り仮名」（『漢字と日本語』朝倉漢字講座1）で、振り仮名について「漢字には所謂辞書的意味の他に文脈によつて与えられる意味があるということ」「本来の中国的カテゴリからより大きく異なる漢字の大きな特徴の一つであり、振り仮名が日本語表記において要請される理由になつたと論述されている。また、ヨミが複数ある中で、その場でのヨミを指定するのが振り仮名の本質的・本來的機能であるとし、用途上の分類では大きく三つに分類され、「①啓蒙・學習的用途②読み指定の用途③臨時的な読みを与える用途」（一六六頁）があるとする。

俳諧での振り仮名を考えてみると、ごく初期の天文年間に著された『大筑波集』『守武千句』を初めとして、一六三二年刊の『犬子集』『塵塚俳諧集』などでは振り仮名は施されない。俳諧に振り仮名が付されるようになるのは、江戸時代に入つて、俳諧が庶民に広がるようになつたことと、同時に板行が可能になり、書肆が売るための本を作ろうとしたことによるところと考えられる。

そして、俳諧を学ぶ人たちが増加するに従い、教科書的な用途を備える書には上述の矢田氏の分類による①「啓蒙・學習的用途」が大きく関わり、多訓を有する漢字には、作者の意図するヨミが振り仮名にあらわれ、②の「読み指定」と関係し、③の「臨時的な読み」では、熟語の問題や常用されないヨミが関わつてくるだろう。このように、用途上の分類に示される①から③は切り離せるものではなく、臨時的なヨミは、即ちヨミを指定することにつながり、それが読み手に対してもなる。

また、矢田氏（二〇〇五）は用途上の分類に加え、機能上の分類では「A音形表示機能、B二重イメージ機能」の二種に分類され、BはAから派生した後発の機能であるが、当該漢字と振り仮名によつて与えられた語形とを合致させることが目的ではなく、表現の多層化に活かすものであるとする（前掲の書一六八頁）。

今野貞二氏（二〇〇九⁽¹²⁾）は『振り仮名の歴史』（九三頁）で、平安期を振り仮名の始まりとし、振り仮名の機能では、室町期までは主に漢字の「読み」であった振り仮名が、江戸時代に入つて、「表現としての振り仮名」が加わ

ると述べる。

要するに、振り仮名はヨミを指定することが基本であり、そのヨミによつて文学的評価ともつながり、読み手への便宜を図ることにもなる。時には、俳諧集『當流籠抜』で、「閑る」に「イキ（る）」と振り仮名が付される場合のように、一つの語に対して、漢字が表す意味と振り仮名で表す意味の一面性を持ち、前述の矢田氏（二〇〇五）の表現の多層化「二重イメージ機能」、及び今野氏の「表現としての振仮名」に相当し、表現性を重要視した振り仮名がある。

一・四 仮名遣に関する先行研究

次に、本稿では振り仮名との関連で、本文中の仮名遣と振り仮名の仮名遣に相違が見られることから、仮名遣についても考えていきたい。仮名遣における先学の研究では、中世の仮名遣については、大野晋氏が「仮名づかいの歴史」¹³で

仮名の使い分けに関する規範の設定と、その実行という問題は以上述べて来た通り藤原定家に始まり、その学問につらなる行阿の『仮名文字遣』などによつて中世の歌文の世界の常識となつた。（『第8回 日本書8』三二〇頁）

と述べる。しかし、また「定家はこの仮名遣を世間に強いるつもりはなかつたらしい」とも記す。

一方、小松英雄氏（一九九八¹⁴）は「定家仮名遣の軌跡」で、「定家は当世の人たちの書く文字がでたらめであつて、古来の用法を過つてゐる」（『日本語書記史原論』一七五頁）と考え、「整然たる規則を定めて厳密に適用したりすることではなく、読み誤られることのないテクストを整定すること、すなわち証本テクストを整定するために「仮名の綴りを択一的に決定する必要があつた」（同書一七五頁）と述べる。そして、「この特殊な技術は定家以外のだれにとつても必要がなかつた」から「定家はみずから開発した文字運用の規範を子息の爲家にすら伝

授した形跡が認められない」（同書一八二頁）とする。

安山章氏の『仮名文字遣と国語史研究¹⁵』（五六頁）では、個人の内部での平仮名・片仮名両種表記文献として、親鸞の『唯信鈔』（平仮名）と『唯信鈔文意』（片仮名）、北条重時の『極樂寺殿御消息』（平仮名）と『六波羅殿御家訓』（片仮名）などを取り上げ、文献の質などと関係して、「ヲ—お・を」の対立、「お・を」の共用などの背景を詳しく論述されている。

さらに、今野真一氏は『仮名表記論 改¹⁶』（二八五頁）で、大山祇神社連歌や荒木田守武の独吟千句を仮名文字遣の資料として取り上げ、後者に関して、前掲の安田氏と同様に、個人としての文字遣の実態という事になると述べる。

近世初期の仮名遣では、酒井憲一氏の「近世初期通行の仮名遣いについて」（『国語と国文学』二〇〇〇年）において、『寛永諸家系図伝』の仮名本を資料として取り上げ、「當時通行の仮名遣いの根幹は、やはりいわゆる「定家仮名遣」（行阿の『仮名文字遣』の源流としての）にあつたとすべきもののことである」（一二頁）とする。この資料は、一六四三年に完成された、江戸幕府の編纂による大名・旗本の系譜であり、本稿で資料の一つとする、『正章千句』（一六四八年成立）と成立年代が近い関係にある。

定家の仮名遣については、江湖山恒明『新・仮名づかい論¹⁷』（昭和二十五年）、木枝増一『仮名遣研究史¹⁸』（昭和八年）、馬渕和夫「定家かなづかいと契沖かなづかい」（『続日本文法講座2』昭和三四年）、今野真一「定家以前¹⁹」（『国語学』二〇〇〇年）などの数多くの論考があり、馬渕氏は前掲の『続日本文法講座2』で、「かなの原則」がやぶれて「かなづかい」がおきたのは、「和歌・和文の書写の風習がさかんになつたためであろう」（一一一頁）と記す。

本稿では、振り仮名と本文中の仮名書きの中で、語頭に「お（オ）・を（ヲ）」が付く語のみを取り上げるが、「お・を」の使用法については、大野晋氏の前掲の「仮名づかいの歴史」に「定家が仮名遣の方式を定めたのは

一七歳から一歳までの年少の時期であったのだから、独自の見解でそれを決定することはまず不可能』（『語学』伊藤忠）日本語8』三一五頁）とある。それだから定家は何を根拠として「お」と「を」を使い分けたかについて、次のように記されている。

語数も多く、決定に最も困難の感じられた「お」「を」について、『色葉字類抄』の「お」「を」の分類が、伊藤忠

呂波歌の「散りぬるを」「おく山」におけるアクセントの高低と照応していることを知り、そこに一つの信憑すべき根拠があると見たことは考えやすいことのようと思われる。

また、本稿で資料とする俳諧集では、本文は漢字と平仮名（外来語などは片仮名）を用いるが、振り仮名は片仮名で記される。その片仮名の振り仮名に関しては、矢田勉氏（二〇〇五）が前掲の書で

振り仮名の由来が訓点の仮名点にあった以上、本来、振り仮名の用字は片仮名であるのが理の当然であった。

振り仮名の主たる機能が、対応する漢字の音形の表示であることからしても、より表音性の傾向が強い文字である片仮名が選択されるのが自然である。（一七三頁）

と述べていることから、本文中で「お」を用いる語が、振り仮名ではアクセントに関係なく「ヲ」で記され、両者に差異が生じていると言える。

以上のように、中世から近世の仮名遣については、前掲の安田氏、今野氏、酒井氏等が考察の対象とされた資料があり、安田氏・今野氏の仮名遣の実態の調査では、それぞれの筆者個人の仮名遣によるものであるとし、書く人により使い分けがあるとする。しかしながら、文献資料が豊富にあるのにも関わらず俳諧の仮名遣を論じた先行研究では、寺島徹氏（一〇〇六・一〇〇八）⁽²²⁾が、江戸中期の俳諧の仮名遣について、蕪村・曉台・也有・士朗を対象に、定家仮名遣・歴史的仮名遣・近世通行の仮名遣の観点から、それぞれを比較分析しているが、江戸初期の俳諧においては、十分に検討がなされているとは言い難い。そこで、前田富祺氏が、前掲の書の「国語文字史の課題」で

定家仮名遣いとか歴史的仮名遣いとかいう規範についての考え方も問題であるが、資料ごとに実際に用いられている仮名遣いの実態を明らかにしてゆくことが必要である。（『国語文字史の研究』一）二五頁）

と指摘していることから、仮名遣の実態の一斑ではあるが示しておくことにしたい。

一一五 本稿での問題点

これまで述べてきたように、本稿は、近世初期俳諧集で振り仮名が付されない俳諧集もある中で、振り仮名が散見する俳諧集を資料とし、振り仮名の目的を主とした表記に関する問題を取り上げ、特殊性と一般性を見極めながら検討を加えて行くものである。

テキストとした俳諧集の振り仮名の中には、前述のように難読字に付す振り仮名を基本として、俳諧のことばと表記を近づけるための振り仮名など、様々な機能があるのでないか、また一つには、それぞれの俳諧集により振り仮名を付す割合が異なり、ある俳諧集では振り仮名が付される同じ語が、他の俳諧集では振り仮名が付されない、その差異は何かなど、漢字と振り仮名の関係における種々の問題点がある。

また、漢字の用法の考察と同時に、振り仮名と本文中の仮名書きに、語頭の「オ（お）・ヲ（を）」の仮名遣に相違があることから、「正」か「誤」ではなく、近世初期俳諧の仮名遣の傾向性を提示しておきたい。

なお、用語について、少し触れておくと、本稿で使用する「表記」・「書記」・「用字」の用語については、用字はそこにどのような文字が使われているかが用字であり、書記は、本稿では「書記方法」「日本語書記」などと用い、文字や符号を以て書き表された状態に用いる。表記は、振り仮名・仮名遣い・文字の種類など書き記されたすべてのものに、縦書き・横書き・分から書きなどの書式を加えて表記と捉える。つまり、書記・用字は表記の下位に置かれるとするのが稿者の考え方である。

山田俊雄氏（一九五五）は「国語学における文字の研究について」（『国語学』第一一集）において、右の三語

についての直接的な解説はなされていないが、文字の位置付けについて論述されている。その中で、橋本進吉氏の「国語学概論」（著作集第一巻 岩波書店）から、文字の研究における「文字を中心として」と「言語を基礎にして」の二つの方法を引用して、後者の場合に「素材としての文字の有する可能性」に相当する語として、次のように「文字観念」を用いるとする。

文字の表記を意識する場合に：（略）：現実の表記を云々しないでも、記憶の中の文字の諸属性に還元して、語を意識することから起るのであって、そこに儼として動かすべからざる、字音・字訓の観念の存在を我々に知らせる。このような場合に、私は文字観念といふことばを用いて：（『国語学』第二一集 一〇頁）乾善彦氏の前掲の書（二〇〇二）では、用語について、「（広義の）文字」には「文字（文字の素材面）」と「書記（文字の機能面）」があり、「書記（用字の面を含む広義の表記、書き様）」には「表記（用字と対概念の狭義の表記、書き様とも）」と「用字（表記内における個々の文字の用法、用い様）」があるとする（一二・一三頁）。

また、乾氏は「書記」について、「現在ではまだ、『書記』が動詞性が強く」（一・一頁）と述べているように、稿者も、「書記」を単独で用いる場合は動詞として用いることがある。

テキストの俳諧集には、近世文学資料類從¹²から『正章千句』（正）・『紅梅千句』（紅）・『宗因七百韻』（宗）・『當流籠抜』（當）・『西鶴五百韻』（西）・『江戸蛇之鮐』（江蛇）・『江戸宮筈』（江宮）・『軒端の独活』（軒）・『七百五十韻』（七）の九作品集と天理図書館綿屋文庫¹³から『江戸八百韻』（江八）の一作品集を選択した。以上の俳諧集中で調査の対象とするのは句のみであり、詞書・題詞は除外した。また、本文中各俳諧集の句番号は、稿者が便宜上通し番号を付けたものである。

以上のような考察を進めるに当り、伊京集（伊）・明応五年本（明）・天正十八年本（天）・饅頭屋本（饅）・黒本（黒）・易林本（易）（以上の六種の節用集を本文中一括して「古本節用集六種」と記すことがある）・合類節用集（合）・書言字考節用集（書）の八種の『節用集』¹⁴と適宜他の辞書を参照し、仮名遣の考察では『仮名文字遣』¹⁵

『定家卿仮名遣』¹⁶・『下官集』¹⁷を使用する。（俳諧集と節用集のへ～内は本稿で使用する略称である）

二 構成と概要

構成としては、大きく二つの章を立て、それぞれの章は次のような構成となっている。

第一章 振り仮名が付される漢字表記語と表記形態

第一節 振り仮名における振り仮名

第二節 『紅梅千句』の表記

第三節 『軒端の独活』・『江戸宮筈』の表記

第四節 『正章千句』の振り仮名

第五節 『宗因七百韻』と『七百五十韻』の表記――振り仮名の機能と表記形態の特徴――

第二章 近世初期俳諧の用字考証

第一節 近世初期俳諧における「やさし」の用法――『江戸八百韻』に見える「嫋娜」¹⁸・「艷し」¹⁹について――

第二節 『當流籠抜』における「悶る」²⁰について

第三節 『江戸八百韻』に見える「哆」²¹の訓みについて

第四節 『西鶴五百韻』の用字考証――熟字訓と当て字――

第五節 本文中の語頭に「お・を」が付く仮名表記語――定家仮名遣を通じて――

第六節 振り仮名の語頭の「オ・ヲ」の仮名遣

近世には出版文化が発達し、読者層への配慮から、書き手の表記意識が大きく変化する。その一つが漢字に振

り仮名を付すことである。振り仮名は書き手の意図したことばを読み手に正しく伝えることに存在理由がある。

第一章では、主として、振り仮名に視点をおいて考察を加えていく。振り仮名には一つに漢字の複数のヨミに対するヨミを指示する機能があり、また一つに、書き手の表現意識が内在する振り仮名がある。後者の例では「かかし」を文字遊戯的に「驚鹿（紅梅千句）・鹿驚（正章千句）」のように、ことばの意義を漢字で表し、ヨミを示す振り仮名がある。このような振り仮名を付す漢字について漢字と振り仮名の関係・振り仮名の機能などを検討していくと同時に、それぞれの俳諧集に見える特徴的な表記法を提示する。

第一章第一節では『紅梅千句』において、漢字表記語に付される振り仮名を、音読み・訓読みの点から調査した結果を示した。また、どのような場合に振り仮名が付されるのか、様々な条件を設定して振り仮名を付す語と対応させてみた。その結果では、同じ漢字表記の語で、同じ条件でありながら、振り仮名を付す場合と付かない場合がある語があり、この点に関して、文学的意図と関わりがあるのか、その根拠を明らかにする必要があることを指摘する。

第二節では、『軒端の独活』『江戸宮箋』を取り上げ、表記の特徴や振り仮名の実態を考察していく。資料とした一〇俳諧集で、使用される漢字数など数量的側面からの様相、また、『軒端の独活』に見える雑多な表記法を提示し、振り仮名については、振り仮名を付す人により振り仮名を付す傾向に違いが生じることを明らかにする。

第三節では、『正章千句』と『紅梅千句』とは清書者が同じであるという観点からの考察を試みる。振り仮名を付す語を『紅梅千句』と比較してみたときに、同じ正章が清書したとは言え、板下を書いた人は同じではないと推定できることから、両者の振り仮名を付す傾向が異なるとし、清書することと板下を書くことは別の工程であることを明らかにする。

第四節では、『宗因七百韻』と『七百五十韻』の振り仮名の傾向、表記法について検討を加える。『宗因七百韻』は異なる興行の作品を収録した作品集であり、一書の中で、作品により同じ漢字の振り仮名の仮名遣が異なるこ

となどから、板下を書く人が統一的に振り仮名を付したのではないことを指摘する。一方、『七百五十韻』の雑多な表記法、あるいは古辞書や文献などで用例が見出せない漢字が出現することを報告し、そこに筆者の視覚的印象性を求めようとする意図が窺えることを述べる。

第二章では、俳諧では造字・当て字などを意識的に用いる傾向が見える。それが読者に新鮮味を与える一つの方法である。そこで、現段階では用例を見出せない特殊な用字や、漢字とヨミが常用的に結びつかない語について検討を加える。

第二章第一節では、『江戸八百韻』には一つの和語に対し複数の漢字表記がある語に二〇語があり、その中から「やさし」に「姫娜」「艶し」の二種の漢字を対応させた意図を探つて行く。

第二節では、『當流籠抜』に見える「悶る」に、「イキ（る）」と振り仮名が付されることに注目して考察を進める。節用集や中国の辞書では「悶」に「イキル」と訓を付す例はないけれども、「煩」に「イキル」と訓を付す節用集がある。中国の辞書に「煩」は「悶也」と収録があり、節用集でも「悶」と「煩」は同じことから「いきる」と読める道筋を解明して行く。

第三節では、『江戸八百韻』で「あつかひ」に「哆」を対応させることについて考察を加える。「哆」のヨミについて言及し、その他「あつかい」に対応する「曖」「扱」について、それぞれ用例を挙げ用法を検討する。

第四節では、『西鶴五百韻』に見える熟字訓「日外（いつぞや）」「織姫（たなばた）」と当て字「明上（明星）」「上夫（丈夫）」「性牀（正体）」「冑糸の帶（石の帶）」についての考察を試みる。

第二章では、「オ（お）・ヲ（を）」が語頭に付く語に限るが、本文中の仮名遣と振り仮名の仮名遣について、その実態を提示していく。俳諧は和歌や連歌の線上に位置するが、雅語を用い定家仮名遣を規範とする前時代の韻文とは異なり、俳諧では日常語が用いられる。それならば、仮名遣にどのような傾向が見えるか、振り仮名に連して仮名遣の観点から俳諧集を見る。

第三章第一節では、資料の一〇俳諧集の中で語頭に「お・を」が付く本文中の仮名書きの語を取り上げて、定家仮名遣との一致度を調査し、用例から、一致しないのは一〇俳諧集だけの現象ではないことを報告する。

第二節では、「つには、同語において振り仮名の語頭に「オ・ヲ」が付く語と本文中の仮名書き語の語頭の「お・を」とを比較する。もう一つには、それぞれの俳諧集ごとに、振り仮名の語頭に「オ・ヲ」が付く語を定家仮名遣・節用集と比較し、どれだけ合致するか検討を進めていく。

本稿は、以上のような構成で、振り仮名を中心にして俳諧における表記について論を進め、俳諧での振り仮名の機能、及び表記の特徴などを明らかにしていくものである。

表記に関して言うならば、初期俳諧の特質の一つとして、雑多な表記法や特殊な漢字を用いる場面がある。しかし、決して特殊性一辺倒ではなく、前時代から受け継がれた一面がある一方で、俳諧に見える漢字の用法や表記の形式が、後の時代へと引き継がれたものもあり、俳諧は江戸初期の表記の資料として重要な位置にあると考えられる。

今回は俳諧の表記に関する一片の報告に過ぎないけれども、今まで、殆んど国語学的研究の資料とされてこなかつた俳諧を、一つの文字領域として分析を試み、ここに示すものである。

注

- 1、乾善彦『漢字による日本語書記の史的研究』一〇〇三年 城文房
- 2、今野真二『大山祇神社連歌の国語学的研究』一〇〇九年 清文堂
- 3、龜井孝他『日本語の歴史5 近代語の流れ』昭和五一年第二版第一刷 平凡社
- 4、前田富祺『国語文字史の研究一』一九九一年 和泉書院
- 5、細川英雄『振り仮名―近代を中心にして』(『漢字講座4 漢字と仮名』一九八九年 明治書院)
- 6、玉井喜代志『振假名の研究(下)』(『国語と国文学』 第九卷第六号 一九二二年 至文堂)
- 7、鈴木丹士郎『近世文語の問題』(『専修大学論集3』 一九六六年)
- 8、屋名池誠『「総ルビ」の時代―日本語表記の十九世紀―』(『文学』一〇〇九年十一―十二月 岩波書店)
- 9、進藤咲子『明治期の振りがな』(『近代語研究 第一集』 昭和四三年 武蔵野書院)
- 10、大島中正『語の漢字仮名並列表記は有用か』(『日本語日本文学』三号) 同志社女子大学 一九九一年)
- 11、矢田勉『振り仮名』(『朝倉漢字講座1』漢字と日本語 二〇〇五年 朝倉書店)
- 12、今野真二『振り仮名の歴史』一〇〇九年 集英社
- 13、大野晋『仮名づかいの歴史』(岩波講座 日本語8) 一九七七年 岩波書店)
- 14、小松英雄『日本語書記史原論』一九九八年 等間書院
- 15、安田章『仮名文字遣と国語史研究』一〇〇九年 清文堂出版
- 16、今野真二『仮名表記論叢』二〇〇一年 清文堂
- 17、酒井憲二『近世初期通行の仮名遣いについて―『寛永諸家系図伝』仮名本の表記から』(『国語と国文学』平成一二年 東京大学国語国文学会)
- 18、江湖山恒明『新・仮名づかい論』昭和三五年 牧書店
- 19、木枝増一『仮名遣研究史』昭和八年 賛精社
- 20、馬渥和夫『定家かなづかいと契沖かなづかい』(『続日本文法講座2 表記論』昭和三四四年 明治書院)
- 21、今野真二『定家以前』(『国語学51卷2号』一〇〇〇年 国語学会 武蔵野書院)
- 22、寺島徹『江戸中期における俳諧の仮名遣いについて』(桜花学園大学人文学部研究紀要第8号 一〇〇六年)
- 23、寺島徹『江戸中期の俳諧句集における仮名遣いの用法について』(桜花学園大学人文学部研究紀要第10号 一〇〇八年)

- 24、山田俊雄「国語学における文字の研究について」『国語学』第一十一集 昭和三十一年 国語学会 武藏野書院)

- 25、『正章千句』『紅梅千句』『西鶴五百韻』『江戸官箇』『軒端の独活』『宗因七百韻』『當流籠抜』『江戸蛇の鮐』
『七百五十韻』(『近世文学資料類從 古俳諧編』) 28・30・33・34・35・36・39 勉誠社 昭和五〇年(五一年)
26、『江戸八百韻』(『談林俳書集一』) 天理図書館綿屋文庫俳書集成第六巻 平成七年 八木書店)
27、改訂新版『古本節用集六種並びに総合索引』昭和五四年 勉誠社／『天正十八年本』昭和三六年 白帝社
／『合類節用集研究並びに索引』昭和五四年 勉誠社／『書言字考節用集』昭和四八年 風間書房
28、『仮名文字遣』(『国語学大系』第六巻 昭和五六六年 国書刊行会)
「天文廿一重陽前日記之 稱名野釋御判」の奥書ある美濃木版本に拠るものである。

- 『仮名文字遣』文明一一年本・東大本(駒沢大学国語研究 資料第一 昭和五五年 沢古書院)
『定家卿仮名遣』(『国語学大系』第六巻 昭和五六六年 国書刊行会)
文明本假名文字遣所収(赤堀又次郎氏編語學叢書所収本)に拠つて翻刻したものである。

- 30、『下官集』不忍文庫旧蔵写本を底本とする(『国語学大系』第六巻 昭和五六六年 国書刊行会)

参考文献

- 小松寿雄『江戸時代の国語 江戸語』一九八五年 東京堂
中野三敏監修『江戸の出版』一〇〇五年 ペリカン社

- 前山富祺『川柳の漢字』(『漢字講座7 近世の漢字とことば』)一九八七年 明治書院)

第一章 振り仮名が付される漢字表記語と表記形態

導　　言

仮名と漢字を併用する表記体において、文芸作品の各ジャンルにより、漢字の使用状況に違いがある。例えば、漢字の数量的問題、あるいは漢字に振り仮名を付す形態など、多種多様な様相を展開する。振り仮名を付す方法一つを取り上げても、振り仮名を付す目的・条件・表記方法など諸種の問題が付隨してくる。

近世の俳諧では概ね平仮名漢字交じりで表記され、その中には振り仮名が散見する作品集がある。しかし、振り仮名の先行研究⁽¹⁾では、俳諧以外での論考はあるが、俳諧の振り仮名に関して言うならば、まとまつた基礎調査はなされていない。

そこで、本章では振り仮名についての先行研究で、前田富祺氏(一九九二)⁽²⁾が「近世・近代の文学者が漢字に付ける振り仮名に特別な文学的意図を托していたことは明らかである。」と指摘し、細川英雄氏(一九八九)⁽³⁾が「具体的な基礎調査は以外に少ないのが現状である。」と指摘するのを踏まえ、近世の初期俳諧の漢字の使用状況、特に、どのような漢字に振り仮名を付し、振り仮名にはどのような機能があるのか、その実態を明らかにしていきたい。

資料には、振り仮名が一箇所に集中するのではなく、一書で全体的に平均して振り仮名が散見する俳諧集を選択し、文学的意図との関わりなど、多角的な視点から調査検討していくことにする。

第一節の『紅梅千句』は貞門の代表的連句作品であり、季吟の跋文には有馬友仙が貞徳に直接教えを受けたいために興行し、清書したのは正章であることが記されている。最初に当該集での総漢字数・異なり漢字

数・振り仮名付き漢字数の調査を行い、次に漢字一字ではなく、漢字表記の語単位で、そこに付される振り仮名は音読みか、それとも訓読みかの点からも調査した結果を示した。また、同じ語で振り仮名を付す場合と付さない場合がある語については、初出語・付合語・字音語などの条件を設定して、振り仮名との関係を考える手立てとする。

第二節では『軒端の独活』と『江戸宮箇』を取り上げ、一〇俳諧集の数量的側面からの考察、そして一〇俳諧集中最も漢字使用率の高い『軒端の独活』の表記の実態と、最も振り仮名付記率の低い『江戸宮箇』の実態を提示し、それぞれの特徴を述べる。

第三節では漢字使用率が最も低い『正章千句』を取り上げる。当該集は『紅梅千句』と清書者が同じという観点から、振り仮名を付す語の違い、振り仮名を付す割合の違いから、清書者と振り仮名を付す人は別であることを明らかにしていく。

第四節では談林初期の『宗因七百韻』と談林末期の『七百五十韻』について、『宗因七百韻』は、異なる興行での作品を一書に収録したものであり、作品により、振り仮名の仮名遣が異なること、また「土産」に「ニヤゲ」と「ミ」から「ニ」に音韻交替した振り仮名が付されることなどを述べる。『七百五十韻』では有意的に創造した漢字が多用され、新鮮味を出す試みがなされている実態を提示する。

以上のように、本章では、漢字と振り仮名の関係を中心にして、振り仮名の機能を明らかにすることを目的とする。

注

1、先行研究

- * 大島中正 1991 「語の漢字仮名並列表記は有用か—語彙教育とのかかわりにおいて—」(同志社大学日本語学部紀要四四号 1991)
- * 京極興一 「振り仮名表記について」(信州大学教育学部紀要四四号 1981)
- * 進藤咲子 「ふりがなの機能と変遷」(『講座日本語学 6』昭和五七年 明治書院)・「明治初期の振りがな」(『近代語研究 第二集』昭和四三年 武藏野書院)
- * 鈴木丹士郎 「読本における漢字語の傍訓―兩月物語と弓張月を中心にして―」(『近代語研究』第二集 昭和四二年 武藏野書院)・「馬琴の語彙」(専修国文創刊号 1967)・「里見八犬伝の用字についての一試論」(専修国文第十一号 1972)
- * 玉井喜代志 「振假名の研究(下)」(『国語と国文学』第九卷第六号 一九三二年 至文堂)
- * 蜂谷清人 「振り仮名」(佐藤喜代治編 『国語学研究事典』昭和五一年 明治書院)
- * 細川英雄 「振り仮名—近代を中心にして—」(『漢字講座4 漢字と仮名』平成元年 明治書院)
- * 矢野準 「人情本の漢字」(『漢字講座7 近世の漢字とことば』昭和六一年 明治書院)
- 2、前田富祺 『国語文字史の研究一』一九九一年 和泉書院
- 3、細川英雄 「振り仮名—近代を中心にして—」(『漢字講座4 漢字と仮名』一九八九年 明治書院)

第一節 『紅梅千句』における振り仮名

はじめに

『紅梅千句』は、貞門の代表的連句作品であり、承応一年(1653)正月に興行された^①。一座は松永貞徳・安原

貞室（正章）・北村季吟・荻野安靜・青地可頬・符類屋政信・有馬友仙と執筆者の大野長久からなり、興行の主催者は有馬友仙、目的は季吟の跋文に次のようにある。

右ちゞの説譜連哥はなしにかし友仙先生ため有て催し給へる也ためとは何のためそ：（略）：しかあれともゝとせにさのみはたらすといふへくもあらぬよはひなれば会なとも國に杖つきて出給ふ事かたくて其みづから句をきく事まれなりきされはもといひ捨給へる言の葉のわつかに落ちれるをきゝつたへてはかはきにつくを得たる心らせり友仙先生もはるかに此風流をしたひておほしきまゝにきゝてはらふくらさんとのためとかや：（略）：かくたのしきよろこひをしるしとめて今の世の人にもひけらかしのちみんすきものにわけなりからせんとて高弟正章のぬし清書せしむるにそへて承應何のとしみなつきその日そんてふそれ氏季吟聊其おもむきを此こゝにかきつけぬ又この清書にいたりてくやめるところゝもあれとあとさきのさはりをおもひてさながら見過すことゝもさはいへと彼としのつもりのなせるわさよとみん人おもひなしねといへりつまり、友仙が貞徳に直接教えを受けたいがため興行したものであり、清書したのは正章である。貞徳の指導の下に作られた百韻十巻と追加八句は貞徳の「紅梅やかの銀公のからころも」を巻頭の句とし、日本の古い文芸に取材していることは言うまでもなく、貞徳が「銀公・堯・鍾馗・杜子美」、友仙が「化狄」などの中国の伝説上の人物や詩人を題材にし、中国の故事に登場する地名では安靜が「下坯」を詠み、正章が印度の一角仙人の説話を背景にして「仙のいほり」を詠むなど、衍学趣味的な面が窺われる。底本には振り仮名が散見し、ここに挙げた「仙のいほり」以外の「銀公・堯・鍾馗・杜子美・化狄・下坯」には振り仮名が付されている。

振り仮名に関する先行研究^②には、いくつかの論考があるものの、近世初期俳諧の振り仮名の研究は未開拓の分野であると考えられる。そこで、本節は、俳諧作品集の中から『紅梅千句』を取り上げ、漢字に振り仮名を付す書記方法が、文学的意義とどのように関わっているか、またどのような場合に振り仮名が付されるなどを考えるために、振り仮名の基礎調査を行い、ここに報告するものである。

テキストとして『近世文学資料類從』（古俳諧編）三九巻に所収、底本東京都立中央図書館蔵、刊記明暦元年五月吉日、書肆敦賀屋久兵衛方より版行された書を使用し、調査に当つては、漢字の字体は、異体字「虱」「虫」「尼」「ノ」「十」等「ニシテ」と「虫」の如きを上下来ては「ノシテ」と表記する。また、崩し字で字体の細かい部分が明らかでない場合などは現行の漢字を用いた。

一

まず、どういった語に振り仮名を付すかを探るにあたり、『紅梅千句』に使われている漢字と振り仮名の数量的な状況を抑えておきたい。

総句数	一〇〇八	延漢字数	四一〇〇	異なり漢字数	一〇九六
振り仮名付き漢字数	九九三	振り仮名付記率	約二四%	反復記号	一二

音訓別読み	延総語数	異なり語	振り仮名
音読み	数	振り仮名付記率	約二四%

訓読み	延総語数	異なり語	振り仮名
音訓混交読	六四四	五四五	約二四%

総数	二七四一	八七	六四四	五四五	六五五（二四%）	*六一五
音訓混交読	音読み	訓読み	音読み	音読み	音読み	音訓混交読

上の表は漢字一字ではなく、漢字で表記される語単位で、語に付す振り仮名を見たときに、

右の異なり漢字数は、異体字「聲・声・」・「條・条」は同字とし、「ねる」に対応する「寝」・「寐」も使い分けは見られず、同じ意味で用いているので同字とした。このように同字・異字の捉え方により異なり漢字数には異同が生じることがある。一句当たりの漢字数は、右の数字から約四字の漢字が使用されていることになる。

音読みか訓読みかの点から調査したものである。一語の漢字列全てではなく、漢字列の中の一宇にでも振り仮名がある場合も、振り仮名を付す語数の中に組み入れた。

また、「ジユズ」に「念珠・珠枚」の二種の異なる漢字が使用され、漢字と振り仮名の対応では「珠枚」が音読みに、「念珠」は訓読み（熟字訓）に、異なり語一に対し二重に含まれることになり、異なり語総数と振り仮名付き異なり語総数（＊印）の欄では合計数に差異が生じる。

この表を一覧すると、訓読み語が非常に多く使われているにも拘わらず、訓読み語に対する振り仮名の割合が最も低い。この現象は、文芸作品に於いて多用され、読み方が易しいと思われる漢字が多く含まれるからである。試みに、六回以上使用される訓読み語を回数が多い順から並べると、（「人・物・霞・中」は左の回数の内一回振り仮名を付す。）

月 47	・花（華を含む）	36	・秋 35	・春 33	・見 25	・露 19	・出 19	・袖 18	・人 17	・身 16	・物 16	・名 15	・霞 15	・手 13	・日 10	
松 9	・山 9	・夜 9	・跡 9	・水 9	・此 8	・今 8	・聞 8	・引 8	・道 7	・雪 7	・雨 7	・海 7	・火 7	・外 7	・恋 7	・中
7	・哥 6	・時 6	・影 6	・子 6	・庭 6	・冷 6	・長 6	・閑 6	・目 6	・宿 6	・世 6					

となり、これらの合計数が訓読み語二〇一〇語中五・一七語を占める。音読み語では、六回以上使用する語は見られず、使用回数が三回から五回までの語を示すと

五回・繁昌（内二回振り仮名付き）・邊（内二回振り仮名付き）・祈祷

四回・氣・京・牀（内一回振り仮名付き）・能・景（内一回振り仮名付き）

三回・賀茂・源氏・詩・屏風・風呂・用心・例（内一回振り仮名付き）・紋（内一回振り仮名付き）

となり、音読み語では一語での使用回数は五回が最多である。五回とも振り仮名がないのは「祈祷」、使用回数四回で四回とも振り仮名がない漢字には「氣・京・能」があるが、一語の出現度数が訓読み語とは比較にならない。この事から、訓読み語の振り仮名を付す割合が低い事象は、振り仮名を付さない使用度の高い語が、音読みより

訓読み語の方に多いことが起因していると言える。

二

『紅梅千句』を概観したところで、振り仮名のある漢字表記の語と俳諧式日書や付合用語集などの付合指導書に収載されている用語との関連性を見ていくことにする。

照合の資料には、『はなひ草』・『俳諧御傘』・『俳諧類船集』の三書を使用した。『はなひ草』は立圃が著した式目書であり、貞徳もこれに式目を倣うところがあり、式目書の嚆矢といわれている。貞徳が著した式目書『俳諧御傘』は、一條良基が制定した『連歌新式』や木食上人の『無言抄』を典拠とし、俳諧の作法を説明するために約一四二〇の用語を見出し語として挙げ、百韻俳諧への指標を示した指導書であり、後に及ぼした影響も大きい。三つ目の『俳諧類船集』は、高瀬梅盛著で一七〇〇余の付合語を所収し、付合用語集として他の類書に比べると所収語が非常に多い。このような三書を使用し、付合語だけではなく各書の見出し語、及び式目に例として挙げられている語などを対象とし、振り仮名のある語と付合指導書を照合した結果を【資料一】にまとめた。

【資料一】で、『紅梅千句』の漢字表記と、付合指導書の漢字が異なる場合、或いは平仮名表記である場合などは、それぞれの書に記載がある文字を記し、振り仮名が『紅梅千句』と異なる場合は、「訓（－）」と記す。又三書の漢字には必ずしも振り仮名が付されているとは限らず、例えば、『紅梅千句』での「花車」は「花車なる人の「花」なる秋 安静」と詠まれ、「キヤシヤ」と振り仮名があり「花見車」を意味するのではない。『俳諧御傘』では「は」の項に「花車 正花也、春也。花見車の事也。」とあり、明らかに「きやしや」と「はなぐるま」の読み方の違いが窺える。また、『紅梅千句』では「五月五日」とあるが『俳諧御傘』では「五月五日」に振り仮名がなく読み方は不明である。これらのように読み方に相違があると思われる場合は「＊」を付記する。「墜栗」について

ては、『はなひ草』に「ついくわつ」と振り仮名が付されているが、『はなひ大全』では「墜栗花」とあり、『易林本節用集』『合類節用集』には「墜栗花」とある。ここに挙げた「花車・五月五日・墜栗」に加え、「泉郎」に対する「海士」のような用字の違い、「琴」の訓「コト」のような読みの違いも含めて、『はなひ草』に一二五語、『俳諧御傘』に一三〇語、『俳諧類船集』に三二八語の収載を見た。

【資料一】の中で、『紅梅千句』の振り仮名付き語が三書に収載はあるが、漢字表記、または訓が三書とは異なるものを列挙すると以下のようになる。（（）内は三書での表記を示す。）

一、『紅梅千句』と三書の漢字表記が一致しない語（三書中一書でも表記が同じ場合は除外した）

①『紅梅千句』と一語全体の用字が異なる

泉郎〔蟹・海士・海人〕	静ふ〔あらそひ〕	歩く〔ありく〕	温飽〔うどん〕	條〔枝〕
旅〔えびら〕	縁〔えん〕	跳る〔躍・おどる〕	驚鹿〔かゞし・案山子〕	
脚布〔きやふ〕	喰〔くふ〕	漕ぐ〔こく〕	菜〔さい〕	
大角豆〔さゝげ・小角豆〕	指身〔さしみ〕	金精〔さび・波〕	冴還〔さゑかへる・寒帰〕	
透間〔すき間〕	卓散〔沢山〕	詰る〔結〕	獅笛〔し・ぶえ〕	
運ぶ〔はこぶ〕	臂〔肱〕	寐〔みどり・縁〕	躰〔体〕	
	親王〔みこ・御子〕	届〔みどり・縁〕	雇はれ〔傭〕	

②『紅梅千句』の振り仮名付き語の表記と一部が相違する

荒波〔荒浪〕	恵比湧講〔恵比酒講〕	叟草〔翁草〕	楫枕〔楫枕〕	買もの〔買物〕
烏瓜〔からす瓜〕	元興じ〔元興寺〕	真盛〔実盛〕	一途河〔三途川〕	時守〔時宗〕
白髮〔白かみ〕	涼かぜ〔涼風〕	錢湯〔洗湯〕	高養齒〔高楊枝〕	時守寺〔時宗寺〕
屠蘋〔白散〕	土鰐〔鰐〕	菜畑〔菜畠〕	墜栗〔墜栗花〕	時守〔時宗〕
部や〔部屋〕	文字余り〔文字あまり〕	餅突〔もちつき・餅つき〕	とし越〔年越〕	時守寺〔時宗寺〕
		焼めし〔焼飯〕	仙びと〔仙人〕	

二、二書に『紅梅千句』の訓が見えない語

花車〔訓なし〕	琴〔コト〕	五月五日〔訓なし〕	乞食〔コシジキ〕	神興〔ミコシ〕
誰〔タレ〕	出る〔出（イ）で〕	法〔ノリ〕	御田植〔オンタウヘ〕	情〔ナサケ〕
（但し「法」は『俳諧類船集』の付合語では振り仮名が付されないが、「ほ」の項に「法」がある）				

右の一と二に挙げた語を節用集（古本節用集六種・合類節用集）と照合してみると次のようになる。

①『節用集』に収録が見えない語

荒波	恵比湧講	楫枕	喰	貞盛	獅笛	時守寺	涼かぜ	錢湯	高養齒	菜畑	一女狂ひ	風爐釜
廬地口												

②『節用集』とは異なる表記（（）内は『節用集』にある表記である。また漢字列の一部が仮名書きされている語を含む）

泉郎〔白泉郎〕	歩き〔行〕	叟草〔白頭草・白頭花〕	買もの〔買物〕	元興じ〔元興寺〕	情〔ナサケ〕
驚鹿〔案山子〕	烏瓜〔〕	大角豆〔小角豆〕	冴還り〔寒返〕	時守〔時宗〕	
墜栗〔墜栗花〕	とし越〔歲越〕	土鰐〔鰐・土〕	僻言〔僻事〕	文字余り〔文字あまり〕	
餅突〔餅つき〕	仙びと〔仙仁〕	嫂入〔嫁〕			
（漢字の収載はあるが訓が相違するもの）	（（）内は『節用集』での訓）				
					一〇語

泉郎〔カヅキメ〕

詰る〔ナジル〕

法〔ノリ〕

親王〔シンワウ〕

（＊「泉郎」は②と③に重複する）

以上の語の中には「高養齒・泉郎・金精」など考証を必要とする語があるが後稿に譲りたい。

以上【資料一】の『紅梅千句』の振り仮名付き語と、付合指導書との関係をまとめると

(一) 振り仮名を付す異なり語六一五語と一種の表記がある「鰐・鯢」「珠枚・念珠」「三寸・三木」の三語を加え、六一八語のうち『はなひ草』『俳諧御參』『俳諧類船集』(以下三書と記す)のいずれか、またはいずれにも収載がある語数

(二) 三書に収載のある語の中で用字の表記が一致しない語

①語を表記する漢字すべてが一致しない語

一八語

②語を表記する漢字列の一部が一致しない語

三二語

(二) 『紅梅千句』の訓が三書と異なる語

九語

となり、『紅梅千句』の振り仮名と付合指導書との関係において、表記・訓の相違がある語も含めると、約六〇%を占める三七一語が三書に見えるという結果を得た。

三

これまでとは視角を異にして、次の二つの事を考察の対象とする。

第一に振り仮名を付す六五五語すべてを抜き出して、①文頭に位置する・付合語である・字音語である、の三条件に②『節用集』に収載がある、の条件を加えて、該当するかしないかの調査を試みる。

第二に、同じ漢字で表記された語六三語に振り仮名を付す場合と付さない場合がある点を問題にして、文頭・付合語・初出語の三条件に振り仮名を付す場合の方が、どれだけ適応するかを調査する。ここでは、字音語に関しては、振り仮名を付す場合も、付さない場合も字音語であるので条件としては除外されることになる。

これら二つの調査結果をまとめて示したのが【資料二】である。

【資料二】は、振り仮名を付す六五五語（異なり語六一五）を、文頭である・付合語である・字音語である・初出語である、の四つの条件のいずれかに該当する語に○印、②『節用集』との関係では、異なり語数六一五に二種類の漢字を使用する「鯨・鯢」「二寸・三木」「念珠・珠枚」があるので三語を加え、六一八語中一致する語に○印、異表記には△、異訓に▲、訓なしに●、収録がない語に×の印を記入し、それぞれの収載状況を示したものである。振り仮名を付す場合と付さない場合の両方にある語に*印を付記し、初出語は*印語にのみ該当する項目である。

各条件について、付合語は前句からの付合になつてている語であり、付合語であるかに関しては『貞徳紅梅千句』（飯田正一編）を参考にした。「入部」は同書の注では付合の記述がないが、『俳諧類船集』に「いはひ」の付合語として「入部」があり、七八〇番の前句「大ぶくはせばきかこひの内いはひ 正章」の「いはひ」からの付合とする。俳言と密接な関係にある「字音語」については、すでに前掲の表に数字が現れている。『節用集』との関係は『節用集』七種（黒本本・明応五年本・伊京集・天正十八年本・饅頭屋本・易林本・合類節用集）を参照し、見出し語と、見出し語の注記からも取り上げた。

まず、【資料二】の振り仮名を付す語全体においての調査結果を整理してみよう。

振り仮名を付す語全体においては、四つの条件との調査結果を数量的に示すと次のようになる。

(①は(一)内に振り仮名付き延絶語数六五五語に対する割合を示し、②は六一八語に対する割合を示す。)

- ① ○ 文頭に位置する語 一九六語 (約二〇%)
- 付合語 三四七語 (約五二%)
- 字音語 一四八語 (約三八%)
- 『節用集』(七種)との関係
- 『節用集』にない語

○『節用集』にある語

四六五語（約七五%）

- ・用字が一致する語（『紅梅千句』の「かい橋・買もの・元興じ・部や・まん中」に対する「搔楯・買物・元興寺・部屋・真中」と、「解怠・喧」に対する「懈怠・喧嘩」を含む）
- 三九五語

・用字に相違がある語

三九五語

四一語

・漢字の收載はあるが訓が相違する語

四五語

・漢字の收載はあるが訓がない語

四五語

①には適応しないが②『節用集』と一致する語

九四語（延数）

となり、右の二項目を合わせた五九三語が、①②の条件のどちらかに該当し、約九一%を占める事になる。

『節用集』との関係では、約七五%が何らかの形で收載され、收載のない約一五%の語では、「あら寒、荒波・敵酒・宇治香・艮角・有得者・恵比須講・縁付・臆病風・落武者・折鳥帽子・搔合せ・かさね疊・寒垢離・感じ入・喰くらべ・透とをり・付そめ・泣いる・逃こむ・逃かへり・引捨」などの複合語が二分の一以上を占め、取り立てて読みが難しい漢字表記でもない。難読と思われる漢字はわずかであり、「叟草・一齒・高養齒・驚鹿」や「官司・老婆」の訓「ミヤジ・オヒウバ」などは未だ例を得ず、『紅梅千句』独自の漢字表記であると推察する。これらの語についても、前項の考証を必要とした用字と共に稿を改めて検討していきたい。

次に第二の調査事項に掲げた、六五五語の中で同じ漢字表記語でありながら、振り仮名を付す場合と付さない場合がある六二語に焦点を移し、振り仮名を付す根拠を検討していく。

挨拶・哀れ・醉・奥・行ひ・落す・首途・上・花車・奇麗・景・乞食・衣・桜・座頭・濕氣・品・書院・虱・巣・薄・情・節分・候・手折・卓散・尋・蓼・弦葉・躰・亭主・手飼・出・鉄炮・照・道場・燈籠・尼公・

人部・盜み・軒・濱・繁昌・風爐釜・邊・法・蓬萊・程・稀・二木・溝・虫氣・胸・珍し・持・戻る・森・紋・タ立・讀・盡・例・脇

などの六三語に振り仮名を付す場合と付さない場合があり、ここに掲出した語以外にも漢字だけを取り上げれば、「付く・這ふ・踏む」も含まれるが、語としては「付そめ」と「付し」、「這まはり」と「這かくれ」、「踏たて」と「踏あひ・踏ぬ」のような相違があり除外した。

第一の調査では、振り仮名を付す語全体において検討してきたが、右の六二語の振り仮名を付す場合と付さない場合の差異を解明しないと、振り仮名を付す根拠が解決できないのではないかと考え、文頭語である、付合語である、初出語であるの三条件で、調査したのが次の結果である。

六二語と一語に付き二句に振り仮名がある例に四語があるので、初出語以外は合わせて六七語中、

○振り仮名を付す語が文頭である場合 二二三例で約三四%

○付合語である場合 三八例で約五七%

○初出語である場合 六三語中 二四例で約三八%

となる。文頭という条件を取り出してさらに検証してみると、

1 イ、あし手まめにと首途いはへり 一五四 安静

ロ、首途の馬をおひの坂こえ 三一四 友仙

2 イ、尼公たち参る五条の天神に 三五七 安静

ロ、愛敬のある尼公にこやか 六一二 安静

とあるように文頭に位置する方には振り仮名がない場合、また、左の3から6のように両方とも文頭であるのに拘わらず、一方にしか振り仮名が付されない場合があるので、文頭という位置的なものだけでは振り仮名を付す理由は成り立たない。

イ、タ立こそ寶の瓶の水ならめ

二四五

友仙

ロ、タ立の露は鉢の玉に似て
イ、手折て供にもたせぬる萩

七六五

季吟

ロ、手折じな餅躡躅てふ華の條

五一四

安静

イ、蓬萊と嶋ふたつつく庭の華

六〇九

正章

イ、卓散にしも下す篠士

三三一

可頼

ロ、卓散に出る松茸はうらやまし

八八九

友仙

また、初出の句であるからという条件を考えてみよう。すると、右に挙げた2・4・5・6は再出の方に振り仮名があり、初出語も振り仮名を付す決め手とはならないだろう。

もう一つ付合語との関係では、前掲の振り仮名を付す場合と付さない場合の差異がある例句の中から取り上げると（～）内は振り仮名がある句）

7 手折て供にもたせぬる萩

五一四

安静

（手折じな餅躡躅てふ華の條

六〇九

正章）

賀茂山やたゞすの森のあふれ者

九一七

友仙

（森の木間を落る涼かせ

七六四

正章）

きよめねは蜩の巣となる大工小屋

七六九

長頭丸

（巣はうくひすかあの高き枝

一一〇

季吟）

首途の馬をおひの坂こえ

三一四

友仙

（あし手まめにと首途いはへり

一五四

安静）

11 尼公たち参る五条の天神に

三五七

安静

（愛敬のある尼公にこやか

六一二

安静）

などのように一句全体に振り仮名を付さない句もあり、7は「供・萩」、8「あふれ者」、9「蜩・大工」、10「首途・おひの坂」、11「尼公・五条の天神」などが付合語であるにも拘わらず振り仮名が付されない。さらに、もう一つ「書院」での事例を示すと

イ、霞まする精進の指身奇麗さよ

五〇九

友仙

ロ、あまだりやことの外なるよるの雨

八三七

可頼

書院のさきの苔の朝露

八三八

政信

とあり、両句とも付合語である。イは前句が客を迎えるための膳の様子を描写しているのに對して、書院もきれいに飾ると受けている。『俳諧類船集』には「書院」の項目に「：御成の時はかざり故実有よしくさり釜のにえ音燒物の香などほのめけば客も馳走をかんし入侍る」とある。ロは昨夜の烈しい雨の後の書院の先にある苔庭の美しい光景を詠み、「よるの雨」から「朝露」の付合と共に、書院は「あまだり（雨だれ）」からの付合となる。振り仮名を付すイ五一〇番の「書院」は、振り仮名を付すことにより、付合以外に特別な意味を持ち、何か含みを持たせているのか、それとも恣意的なのか、どちらにしても、ロの「書院」に振り仮名を付さないということは、必ずしも付合語という条件だけで振り仮名を付さないのは確かである。

「書院」や11の「尼公」のように、振り仮名を付す場合と付さない場合の両方が付合語である語を、前掲の六三語の中から取り出すと次の二九語がある。（語の下に振り仮名を付さない句番号を記す。）

行ひ 773 花車 690・乞食 15・衣 673・座頭 374・濕氣 890・書院 838・虱 13・薄 480・節分 153・鉄炮 174・道場 493・燈籠 516 787

尼公 357 盗み 27 濱 175 濱 820・三木 369 紋 976・タ立 765

ここに挙げた二九語の中には、振り仮名を付さない場合の方が多くの条件にあてはまるものがある。たとえば「振り仮名を付す場合」「振り仮名を付さない場合」

虱

付合語

付合語・初出語

盜み

付合語

付合語・初出語

などがあり、このような実態を看過することは出来ないだろう。

したがつて、なお明らかに出来ない点があるけれども、本節での調査の結果をまとめると、第一の全体における調査では、約九一%が四つの条件のいずれかに当たる。第二の振り仮名を付す場合と付さない場合がある語についての調査では、六三語中五二語が二条件のいずれかに適応し、その割合は約八三%となる。

このように、総括して各条件との適応率は高い数字を示すのが認められるが、前掲の「虱・盜み・尼公」に付す振り仮名の様相を含め、さらに振り仮名を付す根拠を究明していく必要がある。

おわりに

『紅梅千句』における漢字表記語に付す振り仮名の効用は、読みやすくするためだけではない。振り仮名が果たす機能の一つに、明確には説明できないが、一句において俳言や付合語以外にも視点を置く要語の存在があると想定する。つまり、文学的意義の観点から、注意をひくための振り仮名の機能があると考えるのは可能である。文頭である、付合語である、字音語である、初出語である、『節用集』での収載状況、などの条件を設定して調査をした結果では、俳言と密接な関係にある字音語や、貞門の俳諧では物付手法を専らとする付合語でも、すべてに振り仮名が付されるとは限らない。前述の「虱・盜み・尼公」のような現象を、どう捉えるかを言及する必要も残されている。

乾善彦氏の『漢字による日本語書記の史的研究』（瑞書房 二〇〇二年）に「書記の目的」（一四頁）の論述

があり、それを踏まえると、俳諧では文学的意図との関わりが密であり、その場を共有していない読者に対してもどう伝わるか、どう理解されるかに書記の目的がある。『節用集』に収載がある以外には、文頭語・付合語・字音語の二条件に適応しない「買もの・栗・まん中」のような、多訓を持たない平易な漢字に振り仮名を付すこと、または、付合語である、文頭である、というように同じような条件でありながら、振り仮名を付す場合と付さない場合の違いがあるなどは、俳諧の振り仮名の機能を考える上で重要なポイントとなり、今回検証してきた条件以外にも、もっと多方面に視点を置いて、より細密に考究していくことが必要である。

本節では『紅梅千句』の振り仮名について、一斑を報告し、問題を提起したに過ぎない。多くの課題が残されたままである。今後さらに考察を重ね明らかにしていきたい。

ならば、「慶安何のどし」と書した筈である。従つて季吟の跋は承応一年にかかれたものと思はれる。と述べられている。

2、二〇〇頁「注1」を参照

3、「月」は「月」一字で一語を成すものと「月」の漢字と平仮名からなる語「月しろ」「月み」を含み、「月影」「月毛」のように漢字一字で構成する熟字は含まない。「花」も「花」一字で一語を成すものと「花やか」など、漢字と平仮名からなるものを含む。他の漢字も同様である。

4、『花火草』の初版が出て後、それを訂正増補し、寛文四年『花火草大全』を脱稿したが、その開板は延宝四年である。(『蕉門俳諧續集』日本俳書大系一七より 稿者要約)

5、『漢字による日本語書記の史的研究』乾善彦 二〇〇一年(一四頁)

たとえば、稻荷山古墳出土鉄劍銘に刻まれた系譜部分は、：(略)：それを氏族以外のものを含む多くの聞き手(読み手)に一方的に伝えるためなのである。：(略)：一方通行であっても、話し手と聞き手と話題とがあるかたちで存在することが、ここに繋ぎ止められた「ことば」の存在意義なのである。

と述べられている。一方的伝達を目的とする銘文と、文芸としての俳諧には、勿論書記の目的の違いがあり、俳諧では、作者が伝えようとすることが読者に正しく理解されなければならない。

参考文献

- * 赤羽学 「俳諧の用字」(『漢字講座7 近世の漢字とことば』昭和六二年 明治書院)
- * 赤羽学 「俳諧・俳文の語彙」(『近世の語彙』第五卷 昭和五七年 明治書院)
- * 飯山正一 「貞徳紅梅千句」昭和五一年 桜楓社
- * 小高敏郎 「俳句講座4名句評釈」昭和三四年 明治書院
- * 小高敏郎 「紅梅千句」(『俳諧大辞典』昭和五一年一九版 明治書院)
- * 小高敏郎 『松永貞徳の研究』続篇 昭和六三年復刻版 臨川書店
- * 前山富祺 「国語文字史の研究一」一九九一年 和泉書院
- * 宮山正信 「付合文藝史の研究」平成九年 和泉書院
- * 『校注俳諧御金索引篇』(赤羽学 昭和五八年 福武書店)
- * 『紅梅千句』(『貞門俳諧集一』古典俳文学大系1 昭和四五年 集英社)
- * 『俳諧御金』一六五一年刊 松永貞徳著(『蕉門俳諧續集』日本俳書大系一七 昭和二年 日本俳書大系刊行会)
- * 『俳諧類船集』一六七六年刊 高瀬梅盛著(監修 野間光辰 近世文藝叢刊1 昭和四四年)
- * 『俳諧類船集索引 付合語篇』(監修 野間光辰 近世文藝叢刊 別巻1 昭和四八年)
- * 『はなひ草』文禄四年 立圃著 底本:正保四年版 天理図書館蔵(『貞門俳諧集二』古典俳文学大系2 昭和四五年 集英社)
- * 『はなひ草大全』寛文四年刊(古典文庫 平成七年)

第二節 『軒端の独活』『江戸宮筈』の表記

はじめに

前節では、振り仮名の研究に関して、前田富祺氏が「文学的な評価との関わりの面からの検討を必要としている」(『国語文字史の研究一』)と指摘し、また細川英雄氏が「具体的な基礎調査は以外に少ない」(『振り仮名―近代を中心にして』)と指摘するのを踏まえて、『紅梅千句』の振り仮名の実態を考察した。いくつかの条件を設定して調査を進めた結果、難読字だけではなく、易しい漢字にも振り仮名が付されているのが認められたが、その根拠は未解決のままである。そこで、より多くの俳諧集を取り上げて、振り仮名を付す条件を解明していく手がかりとして、本節は『軒端の独活』と『江戸宮筈』での漢字使用の実態と振り仮名について考察していきたい。

六五五年刊の『紅梅千句』などの貞門派の作品よりも、約一〇年後の談林派の『宗因七百韻』では、わずかではあるが漢字の使用率が上がり、『江戸八百韻』からは一句あたり五字以上の漢字が使用されるようになることが認められる。中でも『軒端の独活』は最も漢字の使用量が多く、一句全体が漢字ばかりで表記される例もある。漢字のみで一句を構成するのは『軒端の独活』以外にも『當流籠抜』『西鶴五百韻』『七百五十韻』にも同じような現象が見られ、乾裕幸氏が『軒端の独活』の解説⁽⁶⁾で「当時流行した漢詩文調の洗礼を受けて」と述べていることとも関わっていると捉えることが出来る。振り仮名付記率については『江戸宮箋』は一句当たり約五・四と一番目に漢字使用量が多いのにも拘わらず、僅か約二・二%にしか振り仮名は付されない。この数字は漢字の使用量がそれほど高くない『紅梅千句』の漢字付記率に対しても、割合にも満たない数字を示している。表に現れた数字から、漢字含有率と振り仮名付記率の関係を次に示してみると

【順位】		【漢字含有率】	【振り仮名付記率】
1	軒端の独活	七百五十韻	
2	江戸蛇の鮐	紅梅千句	
3	江戸宮箋	當流籠抜	
4	江戸八百韻	西鶴五百韻	
5	七百五十韻	軒端の独活	
6	當流籠抜	正章千句	
7	宗因七百韻	江戸八百韻	
8	西鶴五百韻	宗因七百韻	
9	紅梅千句	江戸蛇の鮐	
10	正章千句	江戸宮箋	

となり、矢野氏が述べる滑稽本や人情本のように、漢字含有率が高いから、振り仮名付記率が高いとは限らず、俳諧では、漢字含有率と振り仮名付記率の間に相関関係は成り立たないといえる。

次に、漢字の使用状況を調査した一〇種の俳諧集の中で、最も漢字使用度が高い『軒端の独活』と、最も振り仮名付記率が低い『江戸宮箋』を取り上げて、表記の特徴や振り仮名の様相を考えていきたい。

二 『軒端の独活』を中心とした表記の特徴

まずは資料とした俳諧集一〇作品の中で、一句あたりの漢字使用量が五・九と最も多い『軒端の独活』を取り上げて、漢字使用の実態を見していくことにする。

『軒端の独活』は出代松意編であり、延宝八年十月の自序がある。松意は、寛文一三年神田に俳諧談林の結社を開き、談林十百韵を興行した江戸談林派の中心的人物とされる。当該集は『談林十百韵』の連衆は名を連ねることなく、松意一門の俳諧興行であり、守武・梅翁・兼豊・露沾・在色・不ト・松意・宗鑑・山夕・江雲・昨今非・暁夕寥・松花跡・白温虎・雅計・松水・松嘯・松律等が主なメンバーとして名を連ねる(『近世文学資料類従』の解説より)。また『軒端の独活』という題名は、『俳諧大辞典』に、定家卿の「忍ばれんものともなしに小倉山軒端の松で馴れて久しき」に因んでつけられたとある。

乾裕幸氏が『軒端の独活』(『古典俳文学大系4』)の上述の解説で

本書の俳風は当時流行した漢詩文調の洗礼を受けて、佶屈聱牙破調の甚しいものであるが、俳諧態度は旧態依然として談林の滑稽主義に耽溺している。

(一) 漢詩文調である。

- 1、笑止三界平等利慾(ヨク) 五四二 昨今非
 2、時寒シハ食シ火消中シム間ミ掲焉(チヤン) 五五一 昨今非
 3、幽明錄に日恋は寝覺の夜風ふく 二四五
 4、袂燒飯ツサノヲ斐鳥ヒタカの為行無ナシ状(ワゼキナシ) 五五九 昨今非
 5、筋縫子の翻へるは不ハシ辯ゼルに虹 五六二 晓夕寥
 右の1の句は四つの漢語で構成され、仮名を使うことなく漢字だけで一句をなし、2も読み方を特定するための片仮名による捨て仮名は記されるが、基本的には漢字のみの表記による。3は「日く」、4・5は「無ナシ状(ハシ)」「不ハシ辯ゼル」のような漢文に使われる返説が見える。また、一句中平仮名が一字しか使われない句が一八例あり、例えば次のようない句がある。
 (* () 内の振り仮名は稿者が付した。)

6、御戸代幾重紫歲(サンマツ)の杣 一三八 昨今非
 7、拂ひ物所謂折琴繼銅壺(ドウフウ) 一五九 雅計
 8、大無盡紫磨黃金を恭 三二九 昨今非
 9、尖柱牕角根滑 二八四 松律
 10、僻諧春に法鱗鳳龜龍 五二一 晓夕寥

1・2の句、及び6から10の句を視覚的に捉えたときに、これがすぐには俳諧であると認識されないのでないだろうか。

次に漢字含有率が最も高い『軒端の独活』の平仮名の使用率を調査し、最も漢字含有率が低い『正章千句』の平仮名使用率と比較してみたい。漢字使用総数には踊り字を含まないので、平仮名の場合も踊り字を除外した。右の調査によると、『軒端の独活』の平仮名使用総数は三二七四字で、一句当たり約五・一字の使用となる。漢字の一句当たりの使用数が約五・九字であるから大きな差異はないが漢字の方が多用されている。一句当たり約三・九と均五字として、一句中平仮名使用五字以下の句数を『正章千句』と比較すると

【軒端の独活】(六四〇句中)
 【正章千句】(一一〇〇句中)

平仮名ナシ	一句 約 ○・一%	なし
一字	一八句 約 一・八%	一句 約 ○・〇九%
二字	四七句 約 七・三%	八句 約 ○・七%
三字	六六句 約 一〇・三%	一二句 約 一・一%
四字	一〇二句 約 一五・九%	五六句 約 五・一%
五字	一一句 約 一七・一%	五六句 約 五・一%

となり、『軒端の独活』では六四〇句中一句での平仮名使用数が五字以下であるのは、三四六句で約五四%、『正章千句』では一一〇〇句中一三三句で約一一・一%を占める。

一作品全体の漢字含有率では、踊り字を除外した漢字と平仮名の合計で計算すると、『軒端の独活』は約五四%、『正章千句』は約一二%となる。この現象は彦坂佳宣氏の洒落本の六作品における漢字含有率の調査の数字と比べると、俳諧集の方が漢字含有率は高く、『正章千句』と洒落本の表に添えられた『奥の細道』の漢字含有率とは同率である。³³彦坂佳宣氏の論述の中で「現代の新聞・雑誌でも、三〇%台」とあるので、『正章千句』の三二・%という数字は現代では標準的と言える。

前掲のような一句に漢字を多用し、奔放で自由な形式を持つ『軒端の独活』の作風は『七百五十韻』『當流籠抜』にも現れる。『當流籠抜』は、重頼門の宗旦が木兵・百丸・鬼貫・鉄幽などの子弟と共に第一結集として、五吟五百韻を収めている書であり、本書名は最後の句「あうといふより籠ぬけの春」による。岡田利兵衛氏が『鬼貫全集』¹⁰

に所収される『當流籠抜』の解説で

宗旦は重頼門下中でも磊落な性格と奔放な句風で知られる人であるから、それが伊丹風に一層拍車をかけたので、思い切って自由で異形な作風が本書にも行なわれ、独りよがりのものも多い。（四五一页）と記し、さらに、放埒を気取つた付句のあり方が述べられている。自由で異形な点では、次のような句の表記形態にも現れていると言えよう。

（（）内は前句）

イ、（人形のとくろはげたる野人の色 七 木兵） 次郎太郎又吉桔梗刈萱 八 百丸

ロ、（時に西行宗旨帳かく 一四 鬼貫） 丁巳保延三年八月日 一五 鐵幽

ハ、（伊奘諾の尊已前の御剣刀 一五九 宗旦） 小間物所出雲八重垣 一六〇 百丸

ニ、（弦升も公義の捷花に風 三七七 宗旦） 江戸大霞樽屋北村 二七八 鉄幽

右の四つの句は、名前や干支・年月日・地名などの漢熟字を並べるだけで一句を構成し、半仮名が使われない句が見え、そのうえ振り仮名が付されない。振り仮名を付さなくとも日常的に見慣れている語の集まりであり、視覚的に一つ一つの語のまとまりが判断できるからと捉える。また、『七百五十韻』では

イ、一枚手形源空在判 一一〇 如風

ロ、志賀巖湯谷融祝言 五九六 春澄

ハ、榮螺鮑長辛螺 六二四 仙菴

ニ、柴積車千里一時 七一四 信徳

ホ、加減幾度銀鍋の霜 四六四 信徳

ヘ、小板大板塩竈の浦 五六〇 正長

と漢字だけで一句を構成する例が四句あり、次の二句は一句中、平仮名を一字だけ用いる例である。

ホ、加減幾度銀鍋の霜 五九六 春澄

ヘ、小板大板塩竈の浦 五六〇 仙菴

これらイからニの四句は、上述の『當流籠抜』のイからニと同様に、単語の羅列であり、助詞や動詞が使われ

ることがない。『當流籠抜』の四句は分かりやすい語で構成されているので振り仮名が付されることもないが、『七百五十韻』のハには全てに振り仮名が付され、ロ・ニも部分的に振り仮名を付すことにより、読みつかえを防いでいる。このように漢字だけで表記され、動詞や助詞を使わないで一句を構成するのは、貞門の俳諧集である『正章千句』『紅梅千句』、または談林初期の『宗因七百韻』では見られない作風である。

（二）片仮名を用いる。（傍線は稿者付記）

11、月日妙アンヘンビル茶染にやる 一六五 白温虎

12、グルスイ躍友そゝるらむ 一六六 昨今非

13、幾ク何問ンつもるスタメン猩々緋 五六一 昨今非

『談林俳諧集二』（古典俳文学大系4）の注では、「アンヘンビル茶」や「グルスイ躍」は未詳、「スタメン」は「オランダ語 Stammet の訛。羊毛に麻を混ぜた織物」と記されている。

『七百五十韻』でも次のように片仮名を使う例が見える。

イ、遙なるカビタン人の雲のぼる 一六七 正長

ロ、テリ布しほれば月かはくらん 一八四 如風

ハ、世のかまひイクチ捨ふて居られけり 五九二 如泉

ニ、ベウタレ青き苔の小蓮 七三六 春澄

イの「カビタン」はポルトガル語で、『談林俳諧集二』（古典俳文学大系4）の語訛に「長崎のオランダ商館長。毎年三月江戸に参礼して物品を献納した。」とあり、一六七八年成立の『俳諧江戸通り町』に「かびたんもつくばはせけり君が春 桃青」と詠まれる例がある。

ロの「テリ布」は、乾きが速い上質の白い麻布のことであり、川例では「夏の月はさらしな山にててりふ哉 利正」と一六三八年刊の『鷹筑波』に見える。

ハの「イクチ」は『書言字考節用集』(六)には「黄葦 イクチ〔本草〕叢 生山中 黄色者」と記載があり、『炭俵』(下)に「茸狩や黄葦も児は嬉し兒 利合」と用例が見え、『蕉門俳諧集二』(古典俳文学大系6)では「黄葦」は「黄色の毒葦」と注記されている。

二の「ベウタレ」は、『続無名抄』(下・世話字尽)に「米滴」^(べう)とあり、雑炊のことを意味するようである。このように、13の「スタメン」や『七百五十韻』イの「カビタン」は外來語を表わす片仮名であるが、「テリ布・イクチ・ベウタレ」は和語である。漢字に振り仮名を付す、或は平仮名で表記するのではなく、和語が本行に片仮名で表記される。

(三) 送り仮名・捨て仮名を小さく片仮名で表記し、読みを特定する。

14、桐油張小 ^ヲ 船一艘 比は花

三五一 曉夕寥

15、同ク切レ 売 ^リ 源太殿のほころび

一九〇 松意

16、奥だまし数度の名高 ^シ 弥生山

一九一 白温虎

17、秋轡赤松の神 ^シ 天降

四六七 松律

14は「しようせん」と読むために捨て仮名の「ウ」を小さく書き添え、15は「きれうり」と読むように送り仮名を、16は「たかし」と読むための「シ」、17は「神」を訓読するのではなく、音読み「しん」であることをそれ示すものである。この表記法は複数の訓を持つ漢字の読み方を特定するためのものであり、振り仮名に類似する機能を果たしていると言えよう。同様の表記法が『七百五十韻』『江戸蛇の鮆』でも見え次のような例がある。

イ、歌唇 ^{クツ} や冬の存分を餽 ^リ 奴

一四 心色

ロ、折番や御麒麟 ^{シキリン} 一疋君か春

一六 幽石

(江戸蛇の鮆)

ハ、虫漬 ^ミ 柱三輪のさと山

二九八 春澄

(七百五十韻)

イは「餽」を「カザリ」と訓読することを、ロは「御」を「オン」、ハは「漬」を「クヒ」と読むことを指示する

ために送り仮名、或いは捨て仮名を小さく片仮名で記している。このような表記法について、前田富祺氏は「川柳の漢字」で次のように指摘されている。

川柳では、漢字平仮名混じり体ではあるが、漢字に振り仮名を付けることはないかわりに、送り仮名・捨て仮名を付けることによつて誤読を避けるようにしていることには注意をしておかねばならない。(一四七頁)

(四) 漢字の左右両側に傍訓を付す

18、いき初の鈍 ^シ 客脰辱 ^{シクニラト} にして

五一五 曉夕寥

このように、右に音読みの振り仮名を付し、左に語の意義を振り仮名として付すのは、一〇俳諧集中右の18の句一例だけである。『正章千句』一五六番の「撃捕」に、左右両側に振り仮名が付されてはいるが、右傍訓の「イケドラレ」は上に薄く墨で訂正の線が引かれているのが看取でき、後で左に「カラメトリ」と正しい読み方を付したものである。『正章千句』の七・九番には「イケドラレ」に「生捕」の漢字が当たられ、節用集では「撃捕」には「カラメトル」と訓が付される。

右の18の「脰辱」は、右に音読みで「ヲクヂヨク」と付し、その下に文選読みの「ト」を付け、左には語の意義からくる和訓「マジメ」を振り仮名として付し、『ヲクヂヨクトマジメ』にして」と左右の振り仮名を読ませ、視覚的と同時に聴覚的にも音と意味を表わしている。「脰辱」は、古辞書類、『大漢和辞典』などには見えず、どこかに使われている可能性は考えられるが未だ探し出すことは出来ない。

このような漢字の左右の傍訓については、鈴木丹士郎氏の「近世文語の問題」(専修大学論集二)に論考があり、読本諸本から例を挙げ次のように述べる。(語例は一部省略する)

たとえば、「弓張月」をみると、

19、濫觴 ^{ハニコリ} 村落 ^{カムナカ} 郷導 ^{シラモ} 誘引 ^{ハダナヒ} 新樹 ^{ハニコロバ} 用意 ^{シヨウイ} 瀑布 ^{ハタキ} 経営 ^{ハシナヒ} 好意 ^{ハニシギ} 哀悼 ^{ハナタス} 集会 ^{シヨウイ} 恩恵 ^{ハネゲ}

このように、右に音読みの振り仮名を付し、左に語の意義を振り仮名として付すのは、一〇俳諧集中右の18の句一例だけである。『正章千句』一五六番の「撃捕」に、左右両側に振り仮名が付されてはいるが、右傍訓の「イケドラレ」は上に薄く墨で訂正の線が引かれているのが看取でき、後で左に「カラメトリ」と正しい読み方を付したものである。『正章千句』の七・九番には「イケドラレ」に「生捕」の漢字が当たられ、節用集では「撃捕」には「カラメトル」と訓が付される。

のように、漢語につけられたヨミは意味を示していると思われる。さらに、右側と左側両方にヨミをつける場合もすくなくない。右側が音を、左側は訓（意味）を示すという場合が多いが、それだけにかぎらない。次にその類型を示すことにしよう。

a 右ルビに字音をあて、左ルビに和語をあてる。

— 活路（弓） 噴飯（弓） 嘸賞（弓） 森然（弓） 秘策（大）
ニダミテ ワラフ フンボム ハンセウ ボメル ヒサク

b 右ルビに字音をあて、左ルビに類義の字音をあてる。

— 律（垣） 淫（英） 犢（垣） 賊（垣） 僕（唐） 宦（唐）
ハツ フギ フジツ ハツク ハツク ハツク フク

b bのルビが逆になる。 — 矮楼（犬）

リヨロウ ダウジカウ

c 右ルビに和語をあて、左ルビに字音をあてる。

— 躍躑躅（弓） 案内（弓） 相貌（犬） 長座（犬） 戰世（犬）
チウチキ アンナインヤ タビ ナガス

c 右ルビに和語をあて、左ルビに類義の字音をあてる。 — 稅斂（弓） 告訴けり（弓）

ミツザイ ツクニシ
センセイ ツクニシ

d 左右のルビとも和語をあてる。

— 館（弓） 砂（弓） 首級（弓） 不意（弓） 日本（弓） 猩人（弓）
ヤカタ サガ チョウル フミハシ ヤマト サツモ

細川英雄氏は左ルビの問題について

こうした左ルビは、当時の節用集関係の諸辞書にも見ることができ、平安時代からの古辞書類の割注や下注に相当するものであるといえる。（「振り仮名－近代を中心にして」二〇九頁）

と指摘する。『正章千句』に振り仮名を左側に付す例が一句ある。しかし、それは前行との行間に松永貞徳の判詞が書き込まれ、右側に付す余地がないため左に付したものである。

上述の「臆辱」は鈴木丹士郎氏の分類では、類型としては a に属するが、振り仮名の表記法が左右両側とも片仮名で記され、文選読みをする点では何れにも適応しない。

以上のように『軒端の独活』の表記における特徴を四つ挙げ、検討を加えてきた。その結果、(一) の漢詩文調であることが、漢字を多用することに反映していると捉えられる。

振り仮名に関しては、『軒端の独活』の振り仮名の中には、振り仮名を付す場合と付さない場合の両方がある漢字には次のような一六語がある。

鰐（アオキ） 乾（カハ） 如（コト） 栄螺（サカイ） 三途河（サンツカ） 濁（トヨリ） 泥（ナダ） 瀧（ハタカ） 初（ハツ） 恵（メダ） 茎（エキ） 黄（ヤエキ） 柳（ヤナギ） 鎗（ヤリ） 鉛（ヨツ） 律（リツ）

前節の『紅梅千句』では、同じ漢字で振り仮名を付す場合と付さない場合が六三語あり、その例を挙げて差異を検討することを試みたが、明確な根拠は得られなかつた。前節での調査と重複するけれども、確証を得るため簡単に触れておきたい。

一〇作品の中で、「鱗・乾・如・鎗（鎗は使用例あり）」は当該集にのみ出現する漢字である。出現頻度が低く、難読字であるから振り仮名を付すのかというのではない。もし難読字であるならば、初出のほうに振り仮名を付すはずである。四字の中では「乾」だけが初出に振り仮名が付される。このほかに初出に振り仮名を付す漢字には一六語中「恵み・粧・律・灘」がある。「灘」は同じ一句の中で「霧のたゞまひ遠江灘はいかなる灘ぞ」（五五五番）と使われ、前のほうに振り仮名を付せば、後ろはおのずと読みが判断できる。これは読みを助けるための振り仮名と捉える。

文頭である場合は一六語中振り仮名を付す例として「三途河・恵み・萌黄」の三語がある。「三途河」は『紅梅千句』で「三途河」と「途」にのみ振り仮名が施される。当該集での使用例は

イ、乗さがれ夕がほ馬を三途川

四
吟松

口、^{ミサツカ}三途河の接木嵐に来てみれば

四七三
松水

とあり、口は「さんずがわ」ではなく、「サウツカ」と読ませるための振り仮名と考えられる。「恵み」は

イ、^{メグ}恵み雨深し独活の大木一夜松

一三七
松意

口、祇汗の恵み野らや下崩

一二六
曉夕寥

のように、文頭に位置し、初出語でもある方に振り仮名が付される。イの「恵み」は六巻第一の冒頭の語であり、それが振り仮名を付す重要な根拠になつていて解する。

「萌黄」においては、左に示すように口に振り仮名が付される。

イ、桶ヶ輪や萌黄匂ひの菖蒲の湯

一〇九
^{カモ}菖風

口、^{ミヤキ}萌黄の夏野瑠璃糺の雉子

二二〇
雅計

これは単に読み方を特定するための振り仮名ではない。前句では「こび茶蛇びらうど蛇のまく所」（曉夕寥）二一九番）と詠まれ、黒ずんでいて黒に黄色を帶びた濃い茶色の媚茶色から、瑞々しい萌黄色に色が転換する重要な語句であるためと推察する。

文頭でも初出語でもない「隣」は、『軒端の独活』では三回出現し、一〇作品では一三回使われているのにも拘らず、左に例示するように一三回使用中、当該集の口の句にのみ振り仮名が付される。

イ、初ものくはする隣友猿

一九八
曉夕寥

口、秋更る隣の祖母の屢啼て

二二三
白温虎

ハ、冷々として夜るの隣の好ましき

五八九
松嘯

前掲の「萌黄」と同様に、文脈の中でその語が持つ環境により、たとえば前後の句との関係から、振り仮名を付す・付さないの差異が生じるのだろうか。『軒端の独活』では、初出の句に振り仮名を付す場合は五例、文頭である場合は三例に過ぎず、初出・文頭であるから振り仮名を付すと限らないのは、前節『紅梅千句』での調査結果と同じと言える。今回も振り仮名を付す場合と付さない場合の差異は、猶解明することが出来ず、推測の域を出ない。さらに今後の検討を必要とする。

もう一つ振り仮名に関して言うならば、『軒端の独活』六二七番に「帝の御^{ナリ}日に艳^{アヤ}をなま疵^{マダラ}の見立も今は皆松水」とあり、この句は背景に古今集仮名序があり、「秋のゆふべ、たつた河にながるゝもみぢをば、みかどのおほんめには、にしきと見たまひ」を想起させるために、「御目」に「オホン日」の振り仮名を付したものである。つまり、古典文学を典拠にしていることを明示するための振り仮名の機能が存在すると言える。

三 『江戸宮笥』の振り仮名

『江戸宮笥』について、『近世文学資料類従』の解題（島本昌一）から要約すると、「伊勢の中田心友編の連句集で、一塵軒政義の序があり、曲言・心友・露言・調和・幽山・立詠・正友・閑友・宗也・言水・政義の句が収められている。立句の殆んどが伊勢に言及し心友の俳風を讃え、詠句も伊勢の或は江戸調和門の俳風を称えている。心友が延宝七年初旬、奥州下向の途に出、その往反、江戸滞在中に江戸調和一流と唱和した作品である。心友の句は調和系・神風館系の俳書に散見し、佶屈とした句風である」とあり、書誌では、本文は撰者中田心友の自筆板下であることも記述されている。

本書は前掲の【表一】で示したように、漢字使用率が一句あたり約五・四と高いのにも拘わらず、振り仮名を付す漢字数は、総漢字数三四一八の中七五字で、その割合は、約一・二%と非常に低い。この振り仮名付記率が最

も低い事象を踏まえて、『江戸宮箋』の振り仮名の実態を中心に考察を加えていきたい。その前に、まず前述の『軒端の独活』と同様に、表記の特徴を見てみると。

(一) 一句全体を漢字で表わす

1、在郷行郎等人形朝嵐

五三五 心友

「行」あたりに振り仮名がほしいところであるが、すべての漢字に振り仮名は付されない。漢字のみで構成された句はこの一句だけであるが、一句中平仮名が一字だけの句が一七例あり、例えば次のような句がある。

2、不足奉公陰暗き荻

一三六 心友

3、履踏草履草鞋芝の片道

一五二 調和

4、文殊の淨土巻筆巻楊枝

一八四 心友

5、数月の寄合郭公呼

一九八 心友

6、王道仏道世は飛鳥川

三九〇 心友

7、真萩原風の朝立飛脚宿

四二五 宗也

8、荻の夕聲伎番呼

四三六 閑友

9、御金荷岩浪越る大井川

五四六 政義

10、白性清淨道人の菴

五七四 心友

11、餓鬼道に乗車善七

六二三 政義

12、種分る産神參日影山

右の句のように、漢字が多用され平仮名が一字だけしか使われないのに、どの漢字にも振り仮名を付すことはない。『軒端の独活』と同様に、当該集の平仮名使用の様相を数量的に表わしてみると、平仮名総数は三五五六字で一句当たり約五・六字(『軒端の独活』は約五・一字)となる。一句中平仮名が五字以下の割合を平仮名数・句数・

割合・()内に『軒端の独活』の割合の順に示してみると

平仮名ナシ一 句 約〇・二% (約〇・三%)

一字一 一七句 約一・七% (約二・八%)

二字一 四〇句 約六・三% (約七・三%)

三字一 六六句 約一〇・四% (約一〇・三%)

四字一 八九句 約一四・一% (約一五・九%)

五字一 一〇三句 約一六・三% (約一七・三%)

となり、平仮名五字以下使用的句が六二二句中三・一六句を占め、五〇%の割合となる。『軒端の独活』が約五四%であつたので、『軒端の独活』よりも低い割合であるが、それほど大きな差異はない。

また『江戸宮箋』での漢字と平仮名の割合は、『軒端の独活』と同様に、踊り字を除外した漢字と平仮名の合計を総字数として計算すると、

漢字数	三四二〇字	約四九%	平仮名数	二五五六字	約五一%
で、漢字一に対しても平仮名約一・〇四の割合となる。					
(二) 本行に片仮名が使われる(傍線は稿者付記)					
13、イツとして貫錢唐織戴く	一六八	調和			
14、ホツハヒひやら	四五〇	心友			
15、蟬とんて口慰みにヒイ／＼ひ	二八五	幽山			

14の「ホツハヒひやら」は狂言のはやしことばであり、大蔵虎明本「鬼類・小名類」(鬼のまゝ子)に「ふえしやぎりにたつてほつはひうる」とめてと用例が見え、「ほつはいひうる」は「シャギリ留めの笛の譜」と注が記される。「シャギリ」とは狂言で笛だけで演奏されることを言い、「ホツハヒひやら」はその笛の口拍子である。片

仮名は『軒端の独活』では外来語や物の名前を表わしていたが、『江戸宮筈』では状態・擬声などを描写するのに使われている。

(三) 一句の中で反復記号を多用する

16、山くくく郭公くほときす 五一 心友

右の句はたつた二つの単語「山」と「ほときす」で一句が構成され、反復記号が二回使われている。

以上のように『江戸宮筈』の特徴的な様相を見てきたのに統いて、少数にしか振り仮名を付さない点に注目して、どのような漢字に振り仮名を付しているかを考察していきたい。振り仮名を付す漢字表記の語（延四九語）を次のような条件による類型別を試みた。（○の中の数字は回数を示す）

(一) 一〇作品中『江戸宮筈』以外の他の九俳諧集には出現しない語
 鯛 アザリ 大吃 ドクダ 葛西 カサイ 鉄床 カツ 寓言 ツク
 上紅 エラミ 白庭鳥 シロニン 真紅 シンラ 痴持 ダン 肯 チ 調市 デブチ
 馬刃 マテ 謙ひ ムク 沐浴 スクリョク 摸様 モクヤウ 蘭溪織 ランケイ 謙 ク
 庫裏 クーリ 毛兜羅綿 モウタロメン 胱量 ケンクン 痢癥 ケンハキ 小面 コトマ 下妻 シセツ 樟脳 シャクナ
 调市 デブチ 天柱 テンジウ 土砂 ツクシ 剣馬 ヘタマ 海鹿 カシマ 鰐甲 カニカマ 斑 マダラ

(二) 他の作品集でも使われているが、ア、表記する漢字に違いがある語、イ、同じ漢字表記であるが異訓の語に分類して次に示す。（六語）

ア、延弱 ヨクヤク 大ぢやく ハヂヤク 軒 エハ
 家猪 カバ .. 猪 ブク 江八①
 嘘ひ モラ .. 請ふ セラフ 正① .. 紅② .. 貰て ガラフ 西①
 イ、癩病 カツタ .. ライビヤウ 正①

(三) 『江戸宮筈』では各一回に振り仮名が付され、他の九作品集にも出現する同じ漢字表記の語（一一語）

【表三】(当分類に属する一語を表にまとめてみた。)

江戸宮筈で一回		他の九俳諧集で振り仮名		一〇俳諧集中振り仮名なしで出現する回数	
振り仮名を付す		振り仮名を付す回数		他の九俳諧集中振り仮名なしで出現する回数	
調 <small>シラヘ</small>	3 (軒)	調 <small>シラヘ</small>	3 (軒)	1 (正) <small>シラヘ</small> (る)	1 (正) <small>シラヘ</small> (る)
盥 <small>タライ</small>	1 (宗)	盥 <small>タライ</small>	1 (宗)	1 (正) <small>タライ</small> (る)	1 (正) <small>タライ</small> (る)
綴 <small>ツマレ</small>	1 (正) <small>ツマレ</small> (る)	綴 <small>ツマレ</small>	1 (正) <small>ツマレ</small> (る)	1 (正) <small>ツマレ</small> (る)	1 (正) <small>ツマレ</small> (る)
連 <small>ツレ</small>	2 (江八) · 1 (軒 · 西)	連 <small>ツレ</small>	2 (江八) · 1 (軒 · 西)	1 (西)	1 (西)
女房 <small>女ホ</small>	2 (七) <small>女ホ</small>	女房 <small>女ホ</small>	2 (七) <small>女ホ</small>	2 (江宮 · 正 · 江八)	2 (江宮 · 正 · 江八)
剥 <small>ハギ</small> たる	1 (正)	剥 <small>ハギ</small> たる	1 (正)	1 (宗 · 当 · 江蛇 · 軒)	1 (宗 · 当 · 江蛇 · 軒)
筆耕 <small>ヒツカウ</small>	1 (七)	筆耕 <small>ヒツカウ</small>	1 (七)	1 (軒)	1 (軒)
干物 <small>ヒ物</small>		干物 <small>ヒ物</small>			
糞 <small>フン</small>	1 (正) · 1 (江八)	糞 <small>フン</small>	1 (正) · 1 (江八)	4 (紅 · 江八) 1 (正 · 西 · 七) 2	(宗 · 当 · 軒) 3 (江蛇) 5 (江宮)
俎 <small>マナイタ</small>	2 (江蛇)	俎 <small>マナイタ</small>	2 (江蛇)		
分 <small>ワケ</small>		分 <small>ワケ</small>			

上の【表三】の「俎」は『七

百五十韻』で異表記「俎板」が一回出現し、「マナイタ」と振り仮名が付される。

上述の分類の結果、振り仮名が付された語、延べ四九語中、

(一)と(二)を合わせた三八語が『江戸宮筈』にのみ現れる語が『江戸宮筈』で表記された語(訓が異なる「癩病」を含む)であり、その割合は約七八%となる。他の九作品集には登場しないといふことは、俳諧での使用度は低く、それが振り仮名を付す根拠であることは明らかだろう。問題になるのは「女房」「分」のよう

振り仮名を付さないで多用されることは明らかだろう。問題に

てゐる漢字に、なぜ振り仮名が付されるかである。「女房」は、当該集では振り仮名を付す場合と付さない場合があり、次のように三回使用されている。

イ、見入女房はテとれへ御座る

ロ、女房かな袂のみどり松靡く

一五六 調和

二五五 心友

ハ、月を露を女房心に乱れては

三一五 心友

右のハだけが「房」に振り仮名を付す。他の九作品集を見ると、『七百五十韻』に「女房」が二回使われ、二回とも同じく「房」にだけ「ボ・ホ」と振り仮名を付す例がある。ハは前句「儀理も外聞も萩も薄も 露言」の薄から、「穂が乱れる」への連繋を示すためかと推測するが、定かではない。

「分」は

ニ、水の月手にいれられぬ分もめて

二五七 心友

の一句にだけ「分」に振り仮名が付される。

二七一 心友

ハ、占やさん遠くは分し思ひ種

二八九 幽山

ト、砂裏付馬芦邊を分て露はこふ

三四一 立詠

チ、昼のことし大明松の篠分る

三五一 心友

リ、種分る産神参日影山

六二三 政義

右の本からりの五句には振り仮名が付されてはいない。この五句に使われている「分」は動詞であり、ニの「分」は名詞として用いられている。一〇作品中『正章千句』では程度を表す名詞「分」に振り仮名が付され、『紅梅千句』では、五回出現する中で、次の一句だけに振り仮名が付される。

ヌ、近江でも分て品よき袖ならし

二〇九 季吟（紅梅千句）

と右の「分て」に振り仮名が付され、「分まひ」（四六）、「分いりて」（二三七）、「分かへる」（四九〇）、「分のばる」（九五七）には振り仮名が付されない。この違いを見てみると、振り仮名のある二〇九番の「分て」は「品よき」にかかる「殊に」という副詞の役割を果たしている。他の振り仮名が付されない四句（一四六・二三七・四九〇・九五七）に使われている「分」を含め、一〇俳諧集中二五回振り仮名を付さないで使用される単純語「分る」は、すべて動詞としての用法である。

以上のことから勘案して、多用される動詞の用法とは異なり、名詞や副詞として使われている場合、つまり使用頻度が低い用法にだけ振り仮名が付される事が認められる。

次に、異なり語数四八（『調市』のみ二回使用）の振り仮名を付す語を古辞書での載録状況を見ると左のようになる。参照した古辞書は『節用集』のうち、黒本本・明応五年本・伊京集・天正十八年本・饅頭屋本・易林本・合類節用集・書言字考節用集である。

（②の（）内は『江戸宮箋』での用語であり、③の（）内は『節用集』での表記を示す）

○載録あり

①『節用集』に語全体の載録がある—鯛・庇弱・萬西・癩病・庫裏・眩暈・痃癖・下妻・樟脳・調・真紅・

盥・芭・綴・連・天柱・女房・剥・海鹿・筆耕・家猪・糞・鼈甲・斑・馬刀・俎・酬・沐浴・模様・囉ふ・
（毛兜・羅綿）

②熟字のうち振り仮名を付す漢字のみ載録がある—紅（上紅）・吃（大吃）・白（白庭鳥）・啖（啖持）・兜羅綿

分

○載録なし—小面・調市・土砂・蘭溪織・讒

巾（帛）・（襷襪・綱席）

○載録なし—小面・調市・土砂・蘭溪織・讒

『節用集』に載録がない「小面」は、能における女面の代表的なものであり、『わらんべ草』に「金春小面と同じ作」と用例が見え、能に関する特殊な用語である。「蘭渙織」は固有名詞、「土砂」は再考を要する漢語であり、稿を改めて検討したい。「讒」は文字要素の音を表わす「讒」が同じである「縋」として用いられている。「調市」は當て字と考えられ

あやめ草酒買調市今日もくれ

四三 幽水

下界の調市あでかひ餌食成けりとて 一八九 調和

と二回使われ、二回とも振り仮名が付される。江戸後期刊『大全消息往来全』（続消息往来講釈）に

調市「正字は丁稚 商家につかふ小年のもの」

とあり、「江戸宮箋」が早い使用例なのかかもしれない。文化一一年の『浮世床』には次のような用例が見える。

でつち「おめへの口はかりねへ ちやば「口の達者な調市だナ

以上、「江戸宮箋」の漢字量・表記の特色・振り仮名を付す語などについて考えてきた。

その結果、振り仮名を付す語の中で、約七八%が『江戸宮箋』にしか出現しない漢字表記の語であること、漢字と平仮名の使川数は、ほぼ同数であること、「軒端の独活」と同様に本行に片仮名を用いることなどが認められた。同時に、近世初期の俳諧に使われている「調市（デツチ）」のような漢字が、後の文学作品『浮世床』に受容されている例が見出された。

おわりに

俳諧は、平仮名のみで一句を構成する例、漢字のみで一句を構成する例など、多少の例外があるものの、概ね平仮名に漢字を交えた表記体であり、即興を本質とした音声言語を文字化したものである。

乾裕幸氏が『談林俳諧集二』（古典俳文学大系4「解説」三頁）で

既に早く慶長・元和の頃から營利を目的とする出版書肆が現れはじめ、需要の増大と共に、貞門派の拾頭する寛永期以後未曾有の活況を呈し、元禄期に至る約七十年間に毎年平均約百部（寛文十年から元禄元年までの二十二年間では毎年平均約百五十部）の書が刊行されたという（『日本書の歴史』卷一）

と述べているように、書記の目的には幅広い読み手が想定され、同一の場をもたない読み手が、文字化した音声言語を理解できることが必須条件であり、振り仮名を付すことには、読み手の位相的な要因が関与する。

前節での調査の結果、振り仮名のいずれの条件にも適応しない平易な漢字の語例として挙げた「買もの・栗・まん中」の内、「買もの」は、今回の一〇作品での調査では、『紅梅千句』で一回使用されるのみであり、「まん中」は『西鶴五百韻』で「真中」と表記され、一回用いられるが振り仮名は付されない。「栗」は一〇作品中、正章千句二回・紅梅千句一回・江戸八百韻二回・江戸蛇の鮐二回の合計五回使用されている中で、『紅梅千句』の一回にだけ振り仮名が付される。なぜ振り仮名が付されるのか、再度詳細な検討が必要であると考えている。

本節では、近世初期俳諧の中で二つの作品集を中心にして、表記の特徴や振り仮名の実態を考察してきたが振り仮名を付す・付さない場合の差異など、前節での問題点を解明できず、考察の経過を示すのに止まった。俳諧での振り仮名は、振り仮名を書記する段階で、誰が振り仮名を付したかにより目的に違いが生じてくる。それを特定しなければ文学的意図との関わりを論じることは出来ないだろう。なお課題は多く残され、引き続き究明していくべきだ。

注

1、前田富祺「国語文字史研究の課題」（『国語文字史の研究一』一九九二年 和泉書院）六頁参照

2、細川英雄「振り仮名―近代を中心にして―」（『漢字講座4 漢字と仮名』平成元年 明治書院）二二一頁参照

3、前田富祺『川柳の漢字』(『漢字講座7 近世の漢字とことば』昭和六一年 明治書院) 一四九頁参考

4、矢野準『人情本の漢字』(『漢字講座7 近世の漢字とことば』昭和六二年 明治書院)

人情本では作品ごとのばらつきが比較的小幅で、概して漢字含有率が高いといえるだろう。：(略)：小

松寿雄氏によつて指摘されたごとく滑稽本や人情本では、おおむね、漢字含有率と振り仮名付記率とに相

関が見られるようである。(一〇一頁)

5、彦坂佳宣『洒落本の漢字』(『漢字講座7 近世の漢字とことば』昭和六一年 明治書院) 一六一頁参考

6、乾裕幸『談林俳諧集二』(古典俳文学大系4 昭和四七年 集英社) 四八二頁

本書の俳風は、当時流行した漢詩文調の洗礼を受けて、佶屈聱牙、破調の甚しいものであるが、俳諧態度は旧態依然として談林の滑稽主義に耽溺している。……

7、『遊子方言』『辰巳の園』(『英道中粹語錄』)『卯地臭意』(『總辭』)『傾城賈・筋道』

8、「洒落本の漢字」(『近世の漢字とことば』昭和六二年 明治書院) 一六一頁

この含有率の意味を考える比較材料は少ないが、表一に添えた『奥の細道』では二二・〇% (この値は、岩波文庫をつかい各行の活字組面を一杯にしての算定なので、低めに出ている)、

注に「前田富祺『奥の細道の漢字』(『宮城学院女子大学研究論集』28を参照)」とある。

9、「洒落本の漢字」(『近世の漢字とことば』昭和六二年 明治書院) 一六一頁

明治以後の文学作品四六の調査によれば、三〇%を割るものは概してまれで、なかには四〇%強に及ぶものもあるという。現代の新聞・雑誌でも、三〇%台で、これを下回るものはまれなのである。

「国立国語研究所報告22『現代雑誌九十種の用語用字』、同56『現代新聞の漢字』(ともに秀英出版)による」と注がある。

10、岡田利兵衛『鬼貫全集 三訂版』 昭和五三年 角川書店

11、鈴木丹士郎「近世文語の問題」(一九六六年 専修大学論集 第二号) 五九頁参考

参考文献

- * 赤羽学「俳諧の用字」(『近世の漢字とことば』漢字講座7 昭和六二年 明治書院)
- * 赤羽学「俳諧・俳文の語彙」(『近世の語彙』第五卷 昭和五七年 明治書院)
- * 阿部喜三男『蕉門俳諧集一』(古典俳文学大系6 昭和四七年 集英社)
- * 飯田正一『貞徳紅梅千句』昭和五一年 桜楓社
- * 乾善彦『漢字による日本語書記の史的研究』(一〇〇二年 執書房)
- * 榎坂浩尚『談林俳諧集一』(古典俳文学大系3 昭和四六年 集英社)
- * 小高敏郎他『俳諧大辞典』昭和五一年一九版 明治書院
- * 『正章千句』『紅梅千句』『宗因七百韻』『軒端の独活』(古典俳文学大系1・3・4 昭和四五年(四七年)集英社)
- * 『江戸八百韻』『江戸蛇の鉤』『當流籠抜』『七百五十韻』(日本俳書大系7 大正一五年 日本俳書大系刊行会)
- * 『江戸官笥』(俳書叢刊第四卷 昭和六二年 臨川書店)
- * 『浮世床』二編卷之下(新編日本古典文学全集 二〇〇〇年 小学館)
- * 『古今和歌集』(日本古典文学大系 一九七九年 岩波書店)
- * 『大藏彌太郎著 古本能狂言』第一卷 大藏彌太郎編 昭和五一年 臨川書店
- * 『玄侯』(『蕉門俳諧集一』古典俳文学大系6 昭和四七年 集英社)
- * 『続無名抄』(近世文学資料類從 古俳諧編 47 昭和五一年 勉誠社)

*『大全消息往来』江戸後期刊（往来物大系二〇巻一九九三年 大空社）

*『鷹筑波』（貞門俳諧集上巻）俳書大系13 昭和四年 春秋社）

*『俳諧江戸通り町』（談林俳諧集二）古典俳文学大系4 昭和四七年 集英社）

*『わらんべ草』（四）一六六〇年（伏之音 古本能狂言）第六巻 大蔵彌太郎編 昭和五一年 臨川書店）

第三節 『正章千句』の振り仮名

はじめに

『正章千句』は、安原正章（後の貞室）三九歳正保四年に成立し、慶安元年（一六四八年）に刊行された俳諧集であり、独吟千句として公刊されたものでは最も古いとされる。⁽¹⁾

今回テキストとした近世文学資料類従（勉誠社）所収の『正章千句』は、底本「赤木文庫藏本」、内題「千句独吟之俳諧 判者貞徳」、刊記「慶安元年仲冬吉旦」とあり、千句と追加百句を収める。末尾には「：猶みつから後学のため清書して鳥鶯のさかいを窺ふ此趣よろしう老師にうたへて良鷹の爪駿をつけとりかひたうひよ」と独吟興行の経緯と貞徳の批評を乞う正章の正保四年の跋文が記され、正章独吟の俳諧を自ら清書しているのが窺える。書肆名は記されていないが、同書の解題で、安藤武彦氏は『古典俳文学大系』で底本とする「東京大学附属図書館酒竹文庫藏・刊記慶安元年下秋吉旦／柳馬場通二条下町／古野屋権兵衛」を「ていねいに覆刻したものである」と述べている。

一節で『紅梅千句』を調査した結果、漢字の使用数は、『紅梅千句』が一句当たり約四字となり、『正章千句』が約三・九字であるから略同じである。この現象は、一節の『紅梅千句』も跋文から、『正章千句』と同じ正章が清付記率は低いのにもかかわらず、同じ漢字でありながら『紅梅千句』では振り仮名が付されず、『正章千句』だけに振り仮名を付す場合がある。このような振り仮名に視点を置いて、振り仮名を付す場面に、どのような傾向が見られるか、近世初期俳諧の表記形態を論じる一つの過程として、『節用集』・『倭玉篇』などの古辞書を参照しながら、考察を加えていきたい。

一 振り仮名の分類

考察を進めるにあたり、『正章千句』（句数一一〇〇）に用いられる漢字数を先ず呈示し、次に漢字表記の語数を語単位で音訓別に示すと次のようになる。

【漢字数】 延漢字数 四二・五八

振り仮名付き漢字延数 四六〇

振り仮名付き異なり漢字数 一二二五

一句当たりの漢字数 約三・九

振り仮名付記率約一〇・八%

【漢字表記の語】（漢字と平仮名で構成された語、及び訓読みには熟字訓を含み、③の（ ）内は、延語数①に対する③の振り仮名付き語の割合である。）

①延語数

②異なり語数

③振り仮名付き延語数（割合）

④振り仮名付き異なり語数

総語数 一九八〇

一八四六

五一七

一二九（約二〇・八%）

一二八

音読み語 一二四七

一一九二

一四五（約六・五%）

一四三

音訓混交語 一一四

一〇七

一五（約一三・一%）

一五

右の結果から、音読み語は、訓読み・音訓混交読みに比べると振り仮名を付す割合が高く、振り仮名を付す語全体では、漢字表記の延語数中約一割を占める。それならば当該集では、どのような漢字に振り仮名が付されるのか、他の九佛諺集との比較を試みながら、一つは当該集にのみ出現する漢字表記の語、もう一つは当該集以外の九佛諺集にも出現する漢字表記の語の二つに大別し、さらに前者の振り仮名のヨミを音訓別に分類し、後者では他の九佛諺集での振り仮名を付す・付さないの状況を四項目に分けて検討していくことにする。四項目の中に、は、同義語であっても、表記が異なることにより、振り仮名を付す場合もあり、それも一つの分類の条件とし、『正章千句』の振り仮名の意義を考えていきたい。

(漢字表記の語には漢字と平仮名の混ぜ書きを含み、○の中の数字は振り仮名を付す回数を示す。)

【一】一〇佛諺集中当該集中のみ出現する漢字表記の語 延一七〇語 (異なり語数一六八)

(1) 振り仮名部分が音読みである語 (延八二語・異なり語数八一)

行脚	硫黄	鳴鷗	姪女	淫乱	恵比須殿	黃疸	脰肭臍	会稽	家財	鞆鼓	果李	寒国	龜前堂	五調
看病	几帳	擬文章	禁盃	虞氏	競馬	腫瘍	脰肭臍	会稽	家財	鞆鼓	果李	寒国	龜前堂	五調
託宣	達磨	大師	痰氣	調樂	迫從	田家	毒藥	觸體	会稽	鞆鼓	果李	寒国	龜前堂	五調
諷誦文	不如歸	補陀樂	不動	不犯	無礼講	僕	凡夫心	職	蜀江	隨身	水門	夕日	奏す	蘇生
卵塔	濫妨	臨時	淋病	灵文	錄									

右の語の中には当該集中振り仮名を付す場合と付さない場合がある語がある。「賢」(二二二番)「後朝」(三九五番)「毒」(八番)「優な」(二五番)では振り仮名があるが、「賢」(二〇三番)「後朝」(一〇五七番)「毒」(八一五番)「優に」(九五四番)では振り仮名は付されない。

(2) 振り仮名部分が訓読みである語 (延七七語・異なり語数七六)

アカツ	アカツ	アシメ	アシメ	アラ	アラメ	アラメ	アラメ	イエント	イエント	イエント	イエント	イエント	イエント	イエント
履	尼衣	荒行	荒目	家産	生靈	十六夜	放會	賦ひ②	疣	疣	疣	疣	疣	疣
ウハナツ	アヤコギ	アラ	アラメ	アラメ	イキ	イブヨニ	イオダキ	イオダキ	イオダキ	イオダキ	イオダキ	イオダキ	イオダキ	イオダキ
後妻	大原	ざし	夥	腕	與とゞめ	與ひそめ	鍼蕨	缺る	坎	坎	坎	坎	坎	坎
クマタカ	オホバサ	オビカ	オビカ	カイナ	カキ	カキ	カギ	カギ	カギ	カギ	カギ	カギ	カギ	カギ
角鷹	楓	戸	柿	境日	摩れ	流石	狹間	シヤカリ	シヤカリ	シヤカリ	シヤカリ	シヤカリ	シヤカリ	シヤカリ
モチ	謎子	四十九日	穢	境	ハリキヨ	ハリキヨ	ハリキヨ	ハリキヨ	ハリキヨ	ハリキヨ	ハリキヨ	ハリキヨ	ハリキヨ	ハリキヨ
纏ふ	繼子	罔裸	水棹	茅	惑清	刃	蠅虎	揭捕	餉	揭捕	餉	揭捕	餉	揭捕
マト	マ、ヨ	ハダカ	ミナホ	サブ	ハ	ハ	モヤ	カフメドリ	カレモリ	カレモリ	カレモリ	カレモリ	カレモリ	カレモリ
早	早	早	早	早	早	早	早	早	早	早	早	早	早	早
鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
会	会	会	会	会	会	会	会	会	会	会	会	会	会	会
雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪
船遊	船遊	船遊	船遊	船遊	船遊	船遊	船遊	船遊	船遊	船遊	船遊	船遊	船遊	船遊
密夫	密夫	密夫	密夫	密夫	密夫	密夫	密夫	密夫	密夫	密夫	密夫	密夫	密夫	密夫
藩架牆	藩架牆	藩架牆	藩架牆	藩架牆	藩架牆	藩架牆	藩架牆	藩架牆	藩架牆	藩架牆	藩架牆	藩架牆	藩架牆	藩架牆

○「色」は複合語や単純語として一〇佛諺集中七六回用いられる。その中で当該集一四番の「色めく賀茂の神主の袖」の「色めく」と、『七百五十韻』で「色・色人」各一回に「イロ」の振り仮名が付される。上記の一語と「色めく」は複合語として違いがあるので当分類に属するとした。「色めく」は、漢字で意味を示し、音韻変化した実際の発音「ゆる」を振り仮名で示している。六一四番の「色めく」には振り仮名は付されない。

○「女」は当該集では「才覺な女」(九六一番)、『宗因七百韻』では「はすは女」、『西鶴五百韻』では「戯女」とあり、それぞれ別の語とした。

(3) 振り仮名部分が音訓混交読みである語 (一〇語)

闇伽桶	伯父者	鉄棒	故殿	塩堀離	何本	人御々供	物怨じ	弓断	轆轤頭					
アカツ	アカツ	カツホウ	コトノ	シボゴ	ナンボン	ミコク	ヤノエン	ユダン	ヨコヨクビ					

以上のように、当分類では一七〇語中、訓読みよりも音読みの振り仮名が多く見られること、表記と発音にずれがある「色めく」のような特殊な読み方に付される振り仮名があることに注意される。

【二】当該集で振り仮名を付す語が、他の九佛諺集にも出現する語 (延語数一一九・異なり語数一一六)

((1) から (4) の「」内には佛諺集名を記す)

(1) 他の九佛諺集でも振り仮名が付される語 延四七語 (異なり語数 四六)

(漢字列の中振り仮名を付す範囲、及び訓が異なる場合、及び振り仮名を付す佛諺集名などは「」内に記す。)

罪障	〔当①〕		月代	〔江八①当①江蛇①七②〕	跳	〔紅①跳る〕
執②	〔紅①〕		新羅	〔紅①新羅〕	穢多	〔紅①江八①〕
洗濯	〔紅①七①江蛇①洗濯物〕		知死期	〔紅①知死期〕	誹	〔紅①〕
綴る	〔江宮①綴・江八①綴〕		〔紅①宗②軒①七①〕	〔紅①〕	穢多	〔江八①開〕
沿	〔軒①七①〕		〔當①投る・七②投つらむ／投られ〕	〔紅①〕	穢多	〔江八①穢多〕
齒黒	〔七①〕		〔當①突出す〕	〔紅①〕	穢多	〔江八①穢多〕
蓋	〔紅②江八②当①〕		〔萬歳〕	〔江蛇①万歳〕	無慚	〔紅①無慚〕
廄	〔紅②〕		〔ミロク〕	〔江八①〕	〔ムヂン〕	〔江八①穢多〕
格氣	〔紅②宗①格氣〕		〔七①〕	〔江八①〕	〔ムヂン〕	〔江八①穢多〕
右の語の中には、和製漢語「尾筆・洗濯・格氣」や、漢字二字以上の連続した熟字に付す特殊な訓「泉郎・蟻娘・月代」などの語が含まれる。	○ 「泉郎」は『紅梅千句』『正章千句』に（傍線は稿者付記）	三五六	〔紅梅千句〕	〔膝〕	〔宗①當①〕	〔尾筆〕
とあり、次のような用例が一〇佛諺集以外の佛諺集で見出しが出来る。	○ 「泉郎」をよるべにしたる船頭	四二〇	〔正章千句〕	〔宗①當①〕	〔宗①〕	〔宗①〕
泉郎人までも祝ふとし越	〔泉郎〕をよるべにしたる船頭	三九〇	〔佛諺塵塚〕	〔七①〕	〔七①〕	〔七①〕
海底にしも入し泉郎人	〔泉郎〕をよるべにしたる船頭	三九〇	〔佛諺塵塚〕	〔七①〕	〔七①〕	〔七①〕
是ほどまでに泉郎のかかへ子	〔泉郎〕をよるべにしたる船頭	三九〇	〔佛諺中庸姿〕	〔七①〕	〔七①〕	〔七①〕
○ 「月代」は一〇佛諺集中五佛諺集に六回出現し、当該集では「そる月代は月をいたゞく 七四」と見え、他の九佛諺集では『江戸八百韻』(八一)、『當流籠抜』(三五七)、『江戸蛇之鮒』(一〇)、『七百五十韻』(一九九・三〇九)に出現し、これら六句全てに振り仮名が付され、最も振り仮名を付す傾向が著しい漢字表記語である。節用集では『饅頭屋本節用集』に「坂池」、『書言字考節用集』には「月代」の記載がある。	○ 「月代」は一〇佛諺集中五佛諺集に六回出現し、当該集では「そる月代は月をいたゞく 七四」と見え、他の九佛諺集では『江戸八百韻』(八一)、『當流籠抜』(三五七)、『江戸蛇之鮒』(一〇)、『七百五十韻』(一九九・三〇九)に出現し、これら六句全てに振り仮名が付され、最も振り仮名を付す傾向が著しい漢字表記語である。節用集では『饅頭屋本節用集』に「坂池」、『書言字考節用集』には「月代」の記載がある。	延	〔七語〕	〔異なり語数一六〕	〔霞〕	〔江八②當⑤〕
(2) 同じ漢字で表記されるが当該集にのみ振り仮名が付された他の九佛諺集では振り仮名が付されない	(2) 同じ漢字で表記されるが当該集にのみ振り仮名が付された他の九佛諺集では振り仮名が付されない				〔傘〕	〔江宮①七①〕
〔〕内に振り仮名が付されないで出現する佛諺集と出現回数を記す)	〔〕内に振り仮名が付されないで出現する佛諺集と出現回数を記す)				〔身躰〕	〔宗①江八③當①(身體) 七①〕
豈	〔軒①〕		〔薰〕	〔江宮①〕	〔夏〕	〔江蛇④江宮②〕
枯	〔妹〕	〔江八①江蛇①〕	〔樂〕	〔紅①當①〕	〔紅③宗②當①江蛇④江宮②〕	〔江宮①〕
軒	〔黄鸝〕	〔紅①〕	〔霞〕	〔江八②當⑤〕	〔對〕	〔紅①江宮①〕
居	〔江蛇〕	〔枯る〕	〔御物〕	〔江蛇①〕	〔七①〕	〔七①〕
八	〔故郷〕	〔江宮②七①〕	〔薰〕	〔江宮①〕	〔七①〕	〔七①〕
(腹心)	〔爪先〕	〔西④軒①七②〕	〔身躰〕	〔江宮①〕	〔七①〕	〔七①〕
爐	〔拔〕	〔根〕	〔對〕	〔江宮①〕	〔七①〕	〔七①〕
	〔半分〕	〔江蛇③軒①七②〕	〔臺〕	〔江宮①〕	〔七①〕	〔七①〕
		〔腹心〕	〔爪さき〕	〔江蛇〕	〔七①〕	〔七①〕
		〔眞白〕	〔眞白〕	〔眞白〕	〔眞白〕	〔眞白〕

この類型で、「夏」は「夏に入れるはきのふおとゝい 七八六」と、当該集でのみ「ダ」の振り仮名が付される。

これ以外には、当該集では「春夏(六七)・夏の夕ぐれ(七〇五)・夏の夜の(一〇九五)など、「夏」は一〇佛諺集中熟語を除外すると合計一九回出現するが振り仮名は付されない。「げ(夏)」とは、僧尼が夏の二か月間安居を行い他出しないことをいう佛教用語である。単なる季節用語「なつ」とは語の意義が異なる。「故郷」は、「西鶴五百韻」では「古郷」とある。他の佛諺集では「ふるさと」に対応する漢字表記に用いられ振り仮名は付され

ない。「樂」は『西鶴五百韻』では「樂屋」とあり、「ラク」と読む例では「樂長老」（七百五十韻）「樂里」（軒端の独活）「樂寢」（紅梅千句）の熟語に「ラク」の振り仮名が見え、「樂」は「ガク・ラク」の複数の音を持つ。

(3) 他の九俳諧集では振り仮名を付す場合と付さない場合がある語 延一九語（異なり語数 一八）

語	振り仮名あり	振り仮名なし	語	振り仮名なし	語	振り仮名あり	振り仮名なし
愛石 エイセキ	七（愛石講）①	紅（愛石参り／まふで）②	紅湯 レントウ	江八・軒①	江八①	実タマ	宗（産）①
衣 イフ	江八・軒②	江宮①	錢湯 センダク	江八①	江八①	紅①	宗（実）・江八・当①
來ざる カミザル	江八・江蛇・軒①	江八・江蛇・江宮①	霧 タマニ	江八①	江八①	軒①	当①軒①
冴還る サニカヘル	江八・江蛇・軒②	江宮（冴かへる）①江八（寒	田樂 デンガク	江八・軒②	江宮・軒①	軒②	當①軒③
來ざる カミザル	江八（来ぬ）①	江八（来ず）①	芭石 ハシケイ	江八①	江宮・軒①	軒①	當①軒①
冴還る サニカヘル	江八（冴還る）・宗（寒	江宮（冴かへる）①江八（寒	分 ブン	江八（轡石）①	江八・江宮①	江八①	當①
來ざる カミザル	かへる）①	帰る）①	黃 ブン	江八②	江宮・軒①	江八②	當①
江蛇 リク	江八①	江八①	轡 ハシケ	江八②	江宮・軒①	江八②	當①
龍 リラ	江八（夜這）・七（夜這）①	江八（夜這）・七（夜這）①	轡石 ハシケイ	江八③	江宮・軒①	江八③	當①
夜這 ヨバ	江八（夜這）・七（夜這）②	江八（夜這）・七（夜這）②	轡石 ハシケイ	江八④	江宮・軒①	江八④	當①
床 ルカ	江八①	江八①	轡石 ハシケイ	江八⑤	江宮・軒①	江八⑤	當①
鎧 ヤド	江八①	江八①	轡石 ハシケイ	江八⑥	江宮・軒①	江八⑥	當①
補薬 ホヤク	江八①	江八①	轡石 ハシケイ	江八⑦	江宮・軒①	江八⑦	當①
語 ゴ	江八①	江八①	轡石 ハシケイ	江八⑧	江宮・軒①	江八⑧	當①

文ブン	分 ブン	轡 ハシケ	轡石 ハシケイ	轡石 ハシケイ	轡石 ハシケイ	轡石 ハシケイ	轡石 ハシケイ
当（文）①	江八①	江八②	江八③	江八④	江八⑤	江八⑥	江八⑦
七①江宮④	宗・当・軒②江宮③江蛇③						

表中当該集で振り仮名が付されない出現数は省略した。この分類に属する語の中には、振り仮名付記率が高い『紅梅千句』や『七百五十韻』でも

振り仮名が付されない場合もあり、特にヨミが難しいとは言えない漢字もあるが、その文脈で語が持つ環境により振り仮名が付されると考えられる。

そして複数のヨミを持つ「文・分・床」のような漢字では、読み分けによる意義の相違があり、「分」は前節の『江戸宮箋』で既述したように、動詞「分ける」として多用され、『紅梅千句』では副詞、『江戸宮箋』と当該集では名詞としての用法に振り仮名が付される。振り仮名のない「床」は「どこ」の意として多用される。

「文」は単字で当該集では五回、『紅梅千句』五回、『宗因七百韻』『西鶴五百韻』各二回、『七百五十韻』一回

出現する。当該集での「文」の用例では、振り仮名を付す①「文書くどく恋の玉章 九六〇」と、②文のとりやりに（九二九）、③そへてやる文（九九六）、④えよまぬ文（一〇一二）、⑤後朝の文（一〇五七）の五例がある。

文脈から考えれば②から⑤は「ふみ」のヨミであると推定できる。『當流籠抜』では「此文」遍空に聲して三九八」と、「文」に「モソ」の振り仮名が付され、「文」が表わす意味内容が、当該集とは異なる用法が見える。

(4) 他の九俳諧集にも出現するが、当該集で振り仮名を付す語と表記する漢字が異なる語 餅アヌ（宗①江宮（振り仮名なし）①）・〔江八①〕

煎豆

「正①江宮①」・煎豆「軒①」

蛙「正①宗①当①江蛇①江宮①七①」

垣「紅①江宮①」

蟾「カヘツ」

神無月「江蛇①」・神な月「江蛇①」

古郷「カヤク」

假名月

事「正①紅③宗⑨江八⑯当③西⑧江蛇④江宮⑨軒⑤」

蒟蒻「江八②」昆弱「西①」

時雨「宗③江八③当②西②江蛇②軒①七③」

露時雨「宗①西②江蛇①江宮①」

時「紅⑥宗⑨江八⑤当⑨西⑦江宮⑥江蛇①軒⑫七⑦」

玉章「江八①」

露時雨「江八①」

化物「紅①」妖物「七①」化もの「江宮①」化物「江宮①」

当分類では「鹿驚」のような当て字、「」のような難読字、異体字「」が特徴としてあらわれている。

○「鹿驚」：『書言字考節用集』卷一には「案山子へ出傳／燈錄」^{鹿驚}と載録がある。『正章千句』以後には『貞徳諱詣記』（卷之下 諸国作者の系図）・『滑稽太平記』（卷六 神川貞頼の事）に「春清撰 鹿驚集」の記事があり、その他芭蕉七部集『阿羅野』（巻四）・『其便』・『梅園日記』（巻二 案山子四）などに用例が見えるが、『正章千句』より前の用例を見出せない。「かかし」は、田畠が鳥獸に荒らされるのを防ぐためのおどしのもので

『正章千句』より前の用例を見出せない。「かかし」は、田畠が鳥獸に荒らされるのを防ぐためのおどしのもので

あり、表意的に漢字を対応させた用字である。『紅梅千句』では、字順の前後が逆の「驚鹿」の表記が見える。

- 「」：『俳諧類船集』の掲出項目には「時雨」とある。『正章千句』では（傍線稿者付記）
- イ、降さうな雲こそたてれ露
一六五
- ロ、造宮をするや ふるみや
九一四
- ハ、 雰雪にも船をえわたさて
一〇〇三

二、うそさむき時雨に秋の山こえて

一〇三・九

と詠まれ、イの「露」は、『宗因七百韻』『江戸蛇之鮒』『江戸官笥』での表記は「露時雨」であり、用字差が窺え振り仮名は施されない。『合類節用集』に「雨」（左傍訓シグレ）、『世話用文章』（『近世文学資料類従 参考文献編9』勉誠社）にも「雨」と二字での載録が見え、『倭玉篇』（夢梅本）には「〈小雨也／コサメ／シグレ〉」と当該集と同じ漢字表記が見える（〈〉内割書き／は改行を示す）。『類聚名義抄』『伊呂波字類抄』にも一字での載録があるが、現段階では使用例を見つけることが出来ず、難読字と捉える。

○「」：異体字「皆」は『節用集』に載録があり、「日」の上は「之」の古字である。『新撰万葉集』（寛文版）では「日」偏に「之」の漢字が見える。

以上の大別【一】の分類に属する一七〇語と【一】の（4）「他の俳諧集でも出現するが表記する漢字に相違がある語」に属する一六語の両者を合わせた一八六語は、俳諧での使用頻度が低いと考えられ、そこに振り仮名を付す理由が存在するのではないだろうか。また、【一】の（1）「他の九俳諧集でも出現し且つ振り仮名を付す語」の四七語は、振り仮名を付す傾向にある漢字と捉えられる。前述の一八六語とこの四七語を合わせた二三二語には、「据・夕口・毎朝・後朝」のような音読み語、「泉郎・家産・家主」のような熟字訓、「放會」のような一字を二字に分解した解字に振り仮名が付されるのが含まれ、これら一二二語の振り仮名は機能としてヨミを助けていると捉え、振り仮名を付す総数二八九語の約八〇・六%を占める。「放會」は『倭玉篇』（篇目次第）、及び『書言

字考節用集』(巻八)に一字で「」とあり、『反故集』(『近世文学資料類従』 古俳諧編 47)にも一字で「」と収載されているが、「放會」のような一字での用例は見つけ出しができず、「方」偏に「會」の字を二字に分解し、振り仮名を付したと考えられる。

【一】『正章千句』にのみ出現する語		【二】『正章千句』で振り仮名を付す語が他の九俳	
漢字表記の語	漢字表記の語	（1）他の俳	（1）他の俳
いとふ⑤	いとふ②	（2）出現す	（2）出現す
きぬぎぬ①	きぬぎぬ①	（3）振り	（3）振り
かいな①	かいな①	（4）同義語	（4）同義語
いとふ⑤	いとふ②	（1）他の俳	（1）他の俳
あま①	あま①	（2）出現す	（2）出現す
はがれて①	はがれて①	（3）振り	（3）振り
かれたる①	かれたる①	（4）同義語	（4）同義語
ね①	ね①	（1）他の俳	（1）他の俳
かすむ②	かすむ②	（2）出現す	（2）出現す
なびかず①	なびかず①	（3）振り	（3）振り
かど①	かど①	（4）同義語	（4）同義語
なしおの両方	なしおの両方	（1）他の俳	（1）他の俳
なる	なる	（2）出現す	（2）出現す
で漢字が異	で漢字が異	（3）振り	（3）振り
約三二%となる。	約三二%となる。	（4）同義語	（4）同義語

それでは次に、漢字使用率が一〇俳諧集中最も低い当該集での平仮名使用の様相を見てみると、漢字延数四二五八字に対しても、平仮名使用延数九〇〇七字で漢字含有率は約三二%となる。

この表から、当該集では平仮名の含有率が、仮名書きされる傾向にあるのか、振り仮名が付された漢字表記の語と仮名書きとの関係を、前掲の分類項目別に示したものである。○の中の数字は出現回数を示す。

上の表は、当該集で振り仮名が付される語が、仮名書きと併用されるのはごく僅かである。「厭ふ」は漢字表記で二回出現し、二回とも振り仮名が付され、仮名書きでは五回出現することから、仮名書きが通用的であつたと捉えることが出来る。但し、例えば表中「ね」は「貝」と「音」、「かいな」は「貝」と「腕」のように、仮名表記の中には固定した概念を排除し、掛詞などの機能をもつものもある。また、「尿」の片言「しし」を、そのまま文字として書き表すのに仮名が用いられる。

次に、この表中の一五語の仮名書き語に対する漢字表記が、どれだけ出現するかを左の表に呈示してみた。

左の表のように、振り仮名を付す語の中には、同じ語が漢字で表記される場合には、同じ語が漢字で表記される場合もあれば、仮名で表記される場合もある。また、第一節・第二節で見てきたように、当該集でも複数回出現する語の中には、同義語・同表記でありながら、振り仮名を付す場合と付さない場合がある語がある。その二一語の中で、初出に振り仮名を付す語には「黄鸝・跳・薰・主・仙・疊・瓢・勒め・毒・投・膝・倍氣・瘦・娘・優」の一七語があり、「奏・震・賢・狹間」の四語は初出語ではなく、再出語に振り仮名が付される。「床」(品詞の相違)・「女」(複合語と単純語の相違)・「色めく」「後朝」(ヨミの相違)は除外した。

この結果二一語中一七語が初出に振り仮名を付し約八一%を占める。一節の『紅梅千句』の調査では、約三八%にしか満たなかつたのに比べると、初出に付す傾向が大きいと言える。但し少數の中での結果であり、初出語に振り仮名を付すと結論付けることは出来ず、あくまでも初出語に振り仮名を付す傾向があることを示すに過ぎない。

二 『紅梅千句』との比較を通して

前に述べたように、『正章千句』と『紅梅千句』の一旬あたりの漢字使用数は略同じであるが、振り仮名付記率には『正章千句』は『紅梅千句』の約半数という差異がある。このように『紅梅千句』の方が振り仮名付記率が高いのにも拘らず、『正章千句』で振り仮名を付し、『紅梅千句』では振り仮名を付さない漢字表記の語に「黄鶴・愛宕・樂・門・物・護摩・對・臺・根・鐸」の一〇語がある。「黃鸝」は当該集巻頭の句最初の語であること、「物」は『倭玉篇』（慶長十五年版）に「物」の両側に「ブツ・モツ」の傍訓があり、下に「モノ・タグヒ・コト」と記されているが、「コト」と読むのは当該集のみであり、特殊であることなどが振り仮名を付す根拠と考えられる。

「根」は『正章千句』一回を含め、一〇俳諧集中一四回出現するのに、当該集にのみ「根から手折て送るしら菊 四七四」と振り仮名が付される。この事象は、暉嶺康隆氏が『連歌俳諧集』（日本古典文学全集』三一頁）の解説で、俳諧の使用を条件とする貞門俳諧の付合の手法について、「物付」（詞付）、「見立付」、「本歌取り」、「心付」など、「要するに情よりも詞をもてあそぶ言語遊戯の域を出でていない。」と述べることに関連すると捉える。一節における『紅梅千句』の「栗」や、「栗」と同様に平易な漢字「森」に付す振り仮名と同じ現象と捉え、付合の手法などを考え合わせて、俳諧の表現方法により、前句からの約束事に関する重要な語であると推測する。

前述の一〇語とは反対で、『紅梅千句』では振り仮名を付すが、『正章千句』では振り仮名を付さない語は異なり語にして九五語がある。この九五語を付表の【資料一】「紅梅千句振り仮名付き語と付合指導書との関係」と照合することを試みた。そこで、次に『正章千句』では振り仮名が付されないが、『紅梅千句』では振り仮名が付さ

(一) 内の表記は『正章千句』での用語、(二) 内は右の俳諧作法書三書での振り仮名を示す)

壙	アカ	威勢	イセ	戴く	ヘテ	威	イセ	威勢	イセ
栗	カリ	威	イ	勢	セイ	威	イ	威勢	イセ
暗	ケンハ	威	イ	勢	セイ	威	イ	威勢	イセ
食	エシ	威	イ	戴	ヘタ	威	イ	威勢	イセ
乞	ヨシキ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
木	キ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
間	カマ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
碁盤	バン	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
衣	ヨコ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
透	スケミア	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
間	カマ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
薄	ヌカ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
蜂	ハチ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
節	セイツ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
分	ブン	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
候	ソロ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
誰	タマ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
（たれ）	タレ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
薪	タカ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
人	ヒト	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
踏	フミ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
邊	ヘン	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
坊	バッ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
前	マヘ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
溝	ミヅ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
宮	ミヤ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
筍	ヤク	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
物	モノ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
(宮筍)	(ミヤヤク)	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
麦飯	マカル	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
胸	ムキ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
森	モリ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
湯	ヨ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
夕立	ヨダツ	威	イ	威	イ	威	イ	威勢	イセ
ヘンフ									

右の七三語は三書いずれかに載録があり、『紅梅千句』で振り仮名を付す語の中には、付合用語との影響関係を否定することは出来ない。裏返して言うならば、『正章千句』では、右に挙げた語に振り仮名は付されず、付合用語と振り仮名の関係は成り立たないと見える。但し一節での検証の結果では、『紅梅千句』では必ずしも付合語であるから振り仮名を付すとは限らず、振り仮名を付す総語数六五五語中、三書に収載があるのは三六一語で、同じ付合語でも振り仮名が付されない現象を解明できないままである。因みに前掲の七三語以外で『紅梅千句』で振り仮名が付され、『正章千句』では振り仮名が付されない語には次の二二語がある。(一) 内は『正章千句』での表記を示す。)

崇め	アガル	蘆	アシ	哀れ	アハ	臆病風	オクベウ	(臆病)	落す	ホト
る	スル	若僧	ミヤク	煮る	ヒ	歯	ハ	唇狐	ヒカル	程稀
若僧	ミヤク	煮る	ヒ	歯	ハ	唇	ヒカル	唇狐	ヒカル	程稀

おわりに

本節では、『正章千句』における振り仮名の分類と、『紅梅千句』との比較を通しての考察を試みてきた。同じ漢字で訓読みと音読みの両方が出現する場合は、読み分けによる意味の違いがある語もあり、使用される頻度が低い音読み語に振り仮名を付す傾向があることが認められた。同時に二節における『江戸宮筍』の振り仮名と同

様に、『正章千句』特有の漢字表記の語に振り仮名を付す割合が高く、振り仮名の多くはヨミを助けるための機能と考えられ、読み手の便宜を考慮して付した振り仮名である。

『紅梅千句』との比較では、『正章千句』と『紅梅千句』は同じ正章が清書したとは言え、書肆や筆跡に相違があることから、板下を書いた人は同じではないと推定でき、振り仮名を付す傾向にも違いが見られた。つまり、清書する事と板下を書く事は別の工程であり、板下を書く人は、清書者が付した振り仮名をそのまま書くのではなく、板下書きによって、それぞれ振り仮名を付す傾向が異なると言える。

以上のように、清書者が同じ二つの作品を比較する事により、振り仮名に関する問題点の一片を明らかにし、『正章千句』の振り仮名の実態の報告としたい。

注
1、龟井孝・堤精一・中村俊定・前田金五郎・宮本三郎『正章千句』研究（一）（1970『文学38』岩波書店）

参考文献

- *『曠野』元禄二年成立（『芭蕉七部集』新日本古典文学大系 一九九〇年 岩波書店）
- *『紅梅千句』『詠諺中庸姿』『俳諺塵塚』『正章千句』（古典俳文学大系1・2・4 昭和四五年（四七年集英社）
- *『滑稽太平記』一六八〇年直後成立 稿者不詳（『貞門俳諺集』古典俳文学大系2 昭和四五年 集英社）
- *『詞林三知抄』著者未詳（『連歌資料集3』昭和五一年 ゆまに書房）
- *『梅園日記』弘化二年刊 北慎言著（『日本隨筆全集 第十卷』昭和二年 国民図書）
- *『俳諺類船集』一六七六年刊 高瀬梅盛著（京都大学国語国文学研究室 昭和二〇年）
- *『連歌俳諺集』（日本古典文学全集 昭和四九年 小学館）

第四節 『宗因七百韻』と『七百五十韻』の表記 —振り仮名の機能と表記形態の特徴—

はじめに

近世初期俳諺での表記について、これまでに一節・二節・三節で、『紅梅千句』『江戸宮寄』『軒端の独活』『正章千句』の、表記の特色や振り仮名に関する考察を重ねてきた。振り仮名についての先行研究は、近代についての研究が中心で、近世初期の俳諺における研究は未開拓分野と思われるからである。

本節では、俳諺の表記に関する一連の研究の一環として、調査資料に『宗因七百韻』と『七百五十韻』を取り上げる。『宗因七百韻』については、テキストとした『近世文学資料類従 古俳諺編28』所収、柿衛文庫蔵本の解題で、加藤定彦氏が、

書名『宗因七百韻』は内容を正確に表してはいらず、宗因出座の百韻四巻（二吟・両吟・十吟・九吟各一巻）。

獨吟百韻一巻・三吟歌仙一巻・梅翁判歌仙一巻及び似春・幽山との三ツ物一組・発句十三を収録したものである。わざわざ書名に「宗因」の名を冠していることや、「イニ氷柱」「イニナガノ」と校注していることから、書肆の企画するところであつたと見て間違いない（版下の筆蹟から書肆は寺田重徳と推定される）。刊年は、『故人俳書目録』の記述「延宝五」に従うべきか。

と述べるように、異なる興行での作品を収録した俳諺集である。つまり作品によつて、それぞれの清書者が異なり、様々な読者層を想定して書肆により編纂された俳諺集である。

一方『七百五十韻』は、同じく『近世文学資料類従 古俳諺編33』所収、光丘文庫本（延宝九辛酉歳／青陽吉

日／京極二条上ル町／板行）をテキストとした。同書の雲英末雄氏による解題には

本書は、京の信徳・如風・春澄・政定・仙庵・常之・正長・如泉ら八吟百韻七巻と五十韻一巻を収めるものである。所収の作品は、談林末期の奇警な句風を多く示しているが、『俳諧次韻』との関係が強く、俳風革新に大きな影響を及ぼした点は、十分評価すべきものと思われる。

と記されている。『詠七百五十韻評駁』では、暉峻康隆氏が「脱談林の新方向として、漢語や中国趣味を取り入れた『七百五十韻』をまとめ、」と述べる。本章一節においても、『七百五十韻』に関する記述で、仮名が用いられずに漢字だけで構成される句があること、本行に片仮名を用いること、送り仮名・捨て仮名を片仮名小字で右寄りに記すことなど、初期の貞門俳諧では見られない表記の特色があることを報告した。同時に、今回の資料二種を含む、一〇俳諧集の漢字の数量的側面からの調査結果も提示した。参考までに、本節の資料である、二作品集の漢字使用数を示すと次の通りである。（上段『宗因七百韻』、下段『七百五十韻』）

●『宗因七百韻』

句数 六五五

七五〇

一句あたりの平均漢字使用数 約四・五

約五・二

延漢字数 二九二一

三八七四

異なり漢字数 九〇五

一一八四

反復記号（漢字のみ） 一〇

八

振り仮名付き漢字数 二八二

九六二

振り仮名付記率 約九・七%

約一四・八%

この両俳諧集の一句あたりの平均漢字数では一〇俳諧集中『宗因七百韻』が七位、『七百五十韻』は五番目に位置し、振り仮名付記率では前者が八番目、後者は最も高い。

●『七百五十韻』

六五五

約四・八

二九二一

三八七四

九〇五

一一八四

一〇

八

二八二

九六二

約九・七%

約一四・八%

以上を踏まえて、本節では振り仮名の傾向や、語と振り仮名の結び付きを考えると同時に、表記形態の特色など漢字使用の様相を提示していきたい。

一 『宗因七百韻』の振り仮名を中心にして

資料の一〇俳諧集中、二節の『江戸宮筈』、及び三節の『正章千句』での調査では、振り仮名を付す語の中での振り仮名付記率は、漢字表記語と漢字一字で表記される語（例「茜・淡」）、漢字二字以上の連結で表記される語（例「行燈・五十年」）と、厳密には漢字表記語とは言えないが、漢字と仮名を混用する語（例「相あひ蒲団・飛つく」）など、一語の一部に仮名が用いられる場合も含むものとする。○の中の数字は出現回数、へゝ内には他の九俳諧集での出現状況を示す。

【一】『宗因七百韻』にのみ出現する漢字表記語 延七九語 異なり語数七六

振り仮名付き延語数 二〇九五語

振り仮名付き異なり語数 一二九五語

振り仮名付き延語数 二〇四語

振り仮名付き異なり語数 一九五語

右の振り仮名付き語を、他の俳諧集との関係によつて分類し、さらに、どれだけ節用集と一致するかを見ていたい。本節で用いる漢字表記語とは、漢字一字で表記される語（例「茜・淡」）、漢字二字以上の連結で表記される語（例「行燈・五十年」）と、厳密には漢字表記語とは言えないが、漢字と仮名を混用する語（例「相あひ蒲団・飛つく」）など、一語の一部に仮名が用いられる場合も含むものとする。○の中の数字は出現回数、へゝ内には他の九俳諧集での出現状況を示す。

【一】『宗因七百韻』にのみ出現する漢字表記語 藍 横 あら筵 幾日 何国 入替り うす化粧 えり裏 追剥 大瘡 術 ふ 鶯 御造作 御傍 御乳

落瀧フタタキ 大根葉カボチャ 火焰エニ かし駕籠カゴ かた隅スミ 陸カサハ
 塞翁テイフウ 馬ウマ 笹原シバハチ 砂鉢シラハチ 塩辛シヨウキ 汐時シキ 仕着せシテスル 白駄シロタケ 腥氣シムギ 賞翫シラクバン 鮎添シマウカ 具足櫃シツヅケ 実シメ
 龍愛テウアイ 頭カブ 仕來てシラタマ 椅音シヨウ 結奉公ジツボウコウ 出女トモダチ 箕屋シモヤ 睡肌スリミ 仙すシエンスル 橋結シヨウク / はし爪ハシヅメ はすは女ハスハメ 破損ハガク 蜘ヒラシ 他ヒト 百
 足フナゾコ 船底ボトム 古かね店コカネテン 閉門ヘイモン 亡母ムカデ 穏蓼ハクセ 真直マツシキ 裳ミノ 海松ミツバ 目代メタタク 蔻ミツバチ 医師イヒキ 横川ヨコイハラ よこ槌ヨコタケ 患ヒヤウ

ここに属する「橋結」「結奉公」では、「詰」に、偏が交替した「結」を対応させ、「一語とも振り仮名が付される。前者の「橋結」は「はし爪」と二種の用字が見え、この異なる二種の表記による語は、両者とも「橋のたもと」を意味する。また「幾日」は、延宝四、五年頃の「京のぼりの舟の中三吟哥仙」では「イクカ」、延宝五年の「萩何」百韻では「イツカ」と、異なる一種の振り仮名が付される。「他」は「他人」を意味する語であり、單なる「人」と同義ではない。「魂」「頭」は『七百五十韻』では、それぞれ「コン」「ホトリ」と振り仮名が付され、振り仮名が語を確定する機能を果たしている。

【二】同語ではあるが、他の九俳諧集では表記が異なり、『宗因七百韻』にだけ出現する漢字表記語 六語

隱坊ブンボウ (隱房ブンボウ ①) 形躬カタヌ (記念カタミ ①・記念カタミ (江宮エマ) ①) 轉りドリ (轢エマ ②) (軒エマ ①)
 撃出しツキダ (突出すツキダ ①) 人多ヒン (人参ヒン (江八エマハ) ①) 連飛レンブ (れん飛エマハ ①)

これらは、一般的ではない漢字表記、あるいは頻出度の低い漢字表記語であることから、振り仮名を付したと考えられる。

【三】他の九俳諧集にも出現する漢字表記語

(1) 他の九俳諧集でも振り仮名が付される語

飴 <small>アメ</small>	誤り <small>アヤマ</small>	祈 <small>イフ</small>	口 <small>イハク</small>	上 <small>ウヘ</small>	打綿 <small>ウタマ</small>	綿 <small>ウタマ</small>	及ぬ <small>オヨバ</small>	買 <small>ウカハ</small>	②	駕籠 <small>カゴ</small>	延二四語	異なり語数一二
挨拶 <small>アイサツ</small>	化野 <small>アシナ</small>	按摩 <small>アンマ</small>	飯 <small>イハ</small>	甥 <small>ヲチ</small>	負 <small>ヲシ</small>	伯父 <small>ヲチ</small>	御祓 <small>ヲハラ</small>	及ぬ <small>オヨバ</small>	②	瓦灯 <small>カバトウ</small>	銀 <small>カネ</small>	肥 <small>ヨヘ</small>
脛 <small>ハギ</small>	卑下 <small>ヒハ</small>	看棚 <small>カタナ</small>	汐風 <small>シホ</small>	修羅 <small>シヨウラ</small>	甥 <small>ヲシ</small>	小便 <small>ベニ</small>	澄 <small>スミ</small>	瓦灯 <small>カバトウ</small>	②	繁 <small>シゲ</small>	忽 <small>ハグ</small>	駕籠 <small>カゴ</small>
脚 <small>トセ</small>	情 <small>ナシ</small>	梨壺 <small>ナシボ</small>	寝巻 <small>ネマキ</small>	修羅 <small>シヨウラ</small>	或 <small>アル</small>	小便 <small>ベニ</small>	澄 <small>スミ</small>	背中 <small>セナカ</small>	トセ	店 <small>テン</small>	鹽 <small>クライ</small>	出かした <small>デカシタ</small>
友 <small>トセ</small>	情 <small>ナシ</small>	梨壺 <small>ナシボ</small>	寝巻 <small>ネマキ</small>	修羅 <small>シヨウラ</small>	或 <small>アル</small>	小便 <small>ベニ</small>	澄 <small>スミ</small>	背中 <small>セナカ</small>	トセ	其 <small>ソノ</small>	其 <small>ソノ</small>	出かした <small>デカシタ</small>
梶 <small>コブ</small>	世中 <small>ヨコブ</small>	尾筆 <small>ビヨウ</small>	寝巻 <small>ネマキ</small>	旅籠 <small>ハタタケ</small>	半豈 <small>ハニダケ</small>	獨 <small>ヒトリ</small>	雲雀 <small>ヒバリ</small>	田植 <small>ウエ</small>	田植 <small>ウエ</small>	其 <small>ソノ</small>	其 <small>ソノ</small>	出かした <small>デカシタ</small>
梶 <small>コブ</small>	世中 <small>ヨコブ</small>	呼 <small>ヨコブ</small>	来迎 <small>ヨコブ</small>	利發 <small>リハツ</small>	我 <small>ワタクシ</small>	佗 <small>ヒビ</small>	普請 <small>ブンジン</small>	魂 <small>ウエ</small>	魂 <small>ウエ</small>	接木 <small>ソクモク</small>	革 <small>カバ</small>	延五七語
梶 <small>コブ</small>	世中 <small>ヨコブ</small>	呼 <small>ヨコブ</small>	来迎 <small>ヨコブ</small>	利發 <small>リハツ</small>	我 <small>ワタクシ</small>	佗 <small>ヒビ</small>	普請 <small>ブンジン</small>	魂 <small>ウエ</small>	魂 <small>ウエ</small>	接木 <small>ソクモク</small>	革 <small>カバ</small>	延五七語
梶 <small>コブ</small>	世中 <small>ヨコブ</small>	呼 <small>ヨコブ</small>	来迎 <small>ヨコブ</small>	利發 <small>リハツ</small>	我 <small>ワタクシ</small>	佗 <small>ヒビ</small>	普請 <small>ブンジン</small>	魂 <small>ウエ</small>	魂 <small>ウエ</small>	接木 <small>ソクモク</small>	革 <small>カバ</small>	異なり語数五五

(2) 他の九俳諧集では振り仮名が付されない語

(3) 他の九俳諧集で振り仮名を付す場合と付さない場合がある語

朝朗 <small>ボウカ</small>	納 <small>アミ</small>	顎 <small>アマハ</small>	或 <small>アル</small>	産 <small>クミ</small>	縁 <small>ヨン</small>	(椽を含む) <small>ヨン</small>	②	悌 <small>ゼキカ</small>	口說 <small>シドク</small>	喰ふ <small>クラ</small>	扈 <small>コヨウ</small>	頭 <small>クモ</small>
伊達 <small>イダ</small>	綱 <small>ゾオ</small>	床 <small>トヨ</small>	灘 <small>ナゾ</small>	②	土産 <small>ミヤク</small>	(七・土産) <small>ミヤク</small>	②	旅 <small>リ</small>	説 <small>シテ</small>	喰 <small>クラ</small>	從 <small>ツコ</small>	虚空 <small>クク</small>
福氣 <small>ボクイ</small>	蕨 <small>ワラビ</small>	福氣 <small>ワラビ</small>	福氣 <small>ワラビ</small>	福氣 <small>ワラビ</small>	福氣 <small>ワラビ</small>	福氣 <small>ワラビ</small>	福氣 <small>ワラビ</small>	福氣 <small>ワラビ</small>	福氣 <small>ワラビ</small>	福氣 <small>ワラビ</small>	福氣 <small>ワラビ</small>	寒か <small>クモ</small>
梶 <small>コブ</small>	世中 <small>ヨコブ</small>	呼 <small>ヨコブ</small>	来迎 <small>ヨコブ</small>	利發 <small>リハツ</small>	我 <small>ワタクシ</small>	佗 <small>ヒビ</small>	普請 <small>ブンジン</small>	魂 <small>ウエ</small>	魂 <small>ウエ</small>	接木 <small>ソクモク</small>	革 <small>カバ</small>	寒か <small>クモ</small>
梶 <small>コブ</small>	世中 <small>ヨコブ</small>	呼 <small>ヨコブ</small>	来迎 <small>ヨコブ</small>	利發 <small>リハツ</small>	我 <small>ワタクシ</small>	佗 <small>ヒビ</small>	普請 <small>ブンジン</small>	魂 <small>ウエ</small>	魂 <small>ウエ</small>	接木 <small>ソクモク</small>	革 <small>カバ</small>	寒か <small>クモ</small>

右の分類で【三】の(1)に属する「肥」と【三】の(3)に属する「扈従」は一回出現し、一回ともに振り仮名が付されるが振り仮名の仮名遣いに相違がある。「肥」「扈従」は「萩何」百韻(延宝五年)、「肥」「扈従」は「攻也追善」百韻(延宝四年)に收められた句に出現する。したがって、それぞれの仮名遣いの相違、及び上述の(1)の類型に属する「幾口」の読み方も含め、差異は同一資料のものではなく、資料の違いによるものと考えることができる。当然、板下の筆者が統一的に振り仮名を付したものではないことになる。因みに、「土産」は『七百五十韻』では「ミヤゲ」と振り仮名が付され、『軒端の独活』では振り仮名が付され、と「ニ」の字形の類似による誤刻の可能性があるが、『浮世鏡』(第三)には「にやく 脈也(中國の詞)」の記事が見え、このように「に」と「み」の音韻交替が生じていた地方もある。また『かたこと』(三)には「阿闍梨を:(略)・民部を。にんぶは如何。」とあり、ここでも「み」から「に」へ音韻が交替しているのが窺える。

このように、振り仮名が付された語の分類を試みた結果、『宗因七百韻』特有の漢字表記の語が占める割合は、

約三八・七%となり、上述の『江戸宮箋』約六五・三%、『正章千句』約六一・六%、そして次の『七百五十韻』約五六・〇%に比べると低い数字を示す。また、振り仮名が付された延二〇四語（異なり語一九五）を節用集と照合して見ると、

藍	アイ	アブチ	アバツ	アバツ	アミ	アダシノ	アヌ	アヤマ	アラハ	アンタ	アラハ	イ、イクカ	イノリ	イハク	フヘ	フデ	フミ	フホナ
②	ふ	坊	ヲニ	負	ヲニ	伯父	ヲチ	禦乳	ヲチ	御祓	ヲハツ	佛	ヲモカゲ	ズバハ	カツ	カハ	カミコロ	カハラケ
砂鉢	サハチ	死	シ	②	死	シ	塗辛	シホカラ	塗辛	シホカラ	繁	ジタ	ジタ	火	エ	火	エ	火
園	ガツ	忽	カツチ	伊達	イダ	店	タナ	監	タナ	監	鑑	カビ	火焰	エ	燭	カツ	瓦灯	カツ
寝肌	キハダ	伸	ハバ	糊	ハグ	膚	ハグ	寵愛	ハグ	寵愛	ハグ	實	ゲニ	燭篭	カツ	神慮	カツ	神慮
蒲團	ブツン	振	ブリ	摸	ハミモン	脛	ハギ	接木	ハギ	接木	ハギ	肥	ゴベコ	燭籠	カツ	革	カツ	革
氣	ワカ	我	ワガ	佗	ワガ	蕨	ワガ	葛籠	ワガ	葛籠	ワガ	既	スダ	火	エ	火	エ	火
我	ワガ	佗	ワガ	蕨	ワガ	破筆	ワガ	綱	ワガ	綱	ワガ	及ぬ	ズバハ	燭	カツ	燭	カツ	燭
氈	ワカ	我	ワガ	佗	ワガ	破筆	ワガ	床	ワガ	床	ワガ	既(2)	スダ	燭	カツ	燭	カツ	燭
②	氣	ワカ	我	ワガ	佗	ワガ	破筆	ワガ	傳奏	ワガ	傳奏	ワガ	既(2)	スダ	燭	カツ	燭	カツ
我	ワガ	佗	ワガ	蕨	ワガ	破筆	ワガ	爲	ワガ	爲	ワガ	既(2)	スダ	燭	カツ	燭	カツ	燭
氈	ワカ	我	ワガ	佗	ワガ	破筆	ワガ	友	ワガ	友	ワガ	既(2)	スダ	燭	カツ	燭	カツ	燭
氈	ワカ	我	ワガ	佗	ワガ	破筆	ワガ	情	ワガ	情	ワガ	既(2)	スダ	燭	カツ	燭	カツ	燭
氈	ワカ	我	ワガ	佗	ワガ	破筆	ワガ	梨壺	ワガ	梨壺	ワガ	既(2)	スダ	燭	カツ	燭	カツ	燭
氈	ワカ	我	ワガ	佗	ワガ	破筆	ワガ	灘	ワガ	灘	ワガ	既(2)	スダ	燭	カツ	燭	カツ	燭
氈	ワカ	我	ワガ	佗	ワガ	破筆	ワガ	濁	ワガ	濁	ワガ	既(2)	スダ	燭	カツ	燭	カツ	燭
氈	ワカ	我	ワガ	佗	ワガ	破筆	ワガ	寝卷	ワガ	寝卷	ワガ	既(2)	スダ	燭	カツ	燭	カツ	燭

など一四三語（異なり語一二四語）が、古本節用集六種と合類節用集・書言字考節用集の中で、いざれか一書とでも漢字表記・訓が一致し、その割合は約七〇%を占める。この事象と特有語が占める割合が低いことを考え合わせると、ある程度通用していた漢字表記語を用いる傾向があると言える。

以上のように、『宗因七百韻』では、偏が省略された「轉り」、「詰」に對して偏が交替した「結」のような用字が見えるものの、特殊な漢字表記や熟字訓などはあらわれるところがない。「結」は「橋結」「結奉公」の一語に見え、上述の「ニヤゲ（土產）」と同様に「詰」の誤刻とも考えられる。しかしながら、系偏が言偏に交替する例では、二節の『江戸宮箋』には「縫」を「謬」と書記する例、あるいは異体字の古字書『古今字様』（異体字研究資料集成所収）には、古字「縫」・今字「謬」のような例もある。さらに『俳諧類船集』（近世文藝叢刊 第一巻）には「結」とあり、この用字は誤刻によるものではなく、通用していたと捉えられる。

次に漢字含有率の觀点から、漢字使用率が一〇俳諧集中七位の『宗因七百韻』の仮名の使用状況を呈示してみたい。総字数⁽¹⁾七五七六（反復記号は除外）、漢字使用数二九二二字、平仮名使用数四六五二字、片仮名使用数二字（ワキ）となり、使用文字総数のうち、仮名が約六一・四%、漢字が約三八・六%となる。二節で調査した『正章千句』での漢字含有率は、約三二%で一〇俳諧集中最も低く、最も比率が高い『軒端の独活』の漢字含有率は約五四%であった。当該集の平仮名使用の特徴として、一つには「振舞」を「ふれまひ」、「南無阿弥陀仏」を「なもをみだうぶ」など、訛語を表現する手段に仮名が用いられていることが挙げられる。また、「命かけぬるすねはぎの露 宗因」（二七七番）では、仮名表記の「すねはぎ」の「はぎ」に「膚脛」と「萩の露」を掛け、「下帯もとくる氷のひまくに 宗因」（二四二番）では、「帶」と「氷」の掛詞である「とくる」に仮名が採用されるように、掛詞の部分を仮名で表現する例が見られる。さらに集中に一句全体が平仮名だけで表記される句に、「二〇三・四六三・六四二番の三句がある。

また、表記形態の特徴の一つには、「巾着きられ躍り 機嫌も 四九一 保友」のような、送り仮名や捨て仮名を右寄りに片仮名小字で書き表す例があり、上述の句以外にも「狂」・息切・余・流・戾・成⁽²⁾て（二組・発句十三）（延宝三年）に一例、「宗因・弘氏両吟百韻」（延宝四年）に一例が見え、「三ツ物に一例、「玖也追善」百韻（延宝四年）に四例、「梅翁判素玄・定祐・保俊三吟百韻」（延宝二年乃至同五年の成立と推定）に五例があり、「梅翁判素玄・定祐・保俊三吟百韻」の成立年代にもよるが、「於鎌倉三吟」百韻（延宝三年）以外は延宝四年、五年に集中している。この現象は上述したとおり、作品集全体を同一の人が清書したのではないことから、一書の中で作品により異なる表記形態を持つ。

の意がある。後部の では

「竹」「」は前と同じ。「卓」は「机・すぐれる」、「殳」は「書体の名」

の意を持つ、何かに彫られた「文字」を意味し、漢字や部首を組み立てて「知れぬ文字」としたのではないかと推測する。

右のような特異な漢字表記は、前述の『宗因七百韻』には現れなかつた。これら以外にも、節用集と用字差がある漢字表記の語に「生子」がある。節用集では、「息子・息男・男」を「ムスコ」と読むが、「生子」は収録されていない。『塵芥』(上 95 ウ)には「生子」(古今秘注後成恩寺御作苔ノムスハ年ヲムスト云)とあり、日比谷図書館本の『浮世物語』(日本古典文学大系『仮名草子集』所収による)には、「そのあひだに生子をまうけたり。」とある。但し京版の本書以外に、江戸版・大阪版があり、江戸版(十四行本)の『近世文学資料類従 仮名草子編 12』(昭和四七年 勉誠社)所収、赤木文庫蔵本の『浮世ばなし』では「むすこ」と仮名書きされている。後述の「榮耀喰ひ」も『浮世ばなし』では「えようぐひ」と仮名書きである。

上述のような特異な漢字表記語と共に、当類型には複合語が多く属し、それらは節用集にも収載されない。「常舞台」「柴積車」「色人」などは、『好色一代男』に例が見られ、「細波」は『日本永代歳』に、「榮耀喰ひ」は、「生子」と同じ日比谷図書館本の『浮世物語』に用例が認められる。

「カビタン人」の「人」の振り仮名については、『紅梅千句』で「乘人稀」「国人」「籠り人」と「人」に異なる振り仮名が付され、『江戸八百韻』で「死人」、当該集では「道人」と見える。このように熟語の上部に位置する単語によつて、下部の「人」が様々に読み分けられており、「カビタン人」もヨミを指示するための振り仮名と考えられる。「樵」は「木樵」とあるが、『正章千句』の「樵夫」と同語ではない。『連歌俳諧集』(俳諧編 江戸桜の巻)に「名詞『樵夫』ではなく『木(薪)を樵り』である。」と語釈がある。

さらに、この類型に属する語の中には、同表記でありながら他の九俳諧集とは訓が異なる語に「揚屋・魂・頭」

がある。『七百五十韻』一番には「揚屋はとぢけん雲の空淋し 如風」、二六五番では「又や見ん揚屋の寝覚比の秋 春澄」とあり、両者の「揚屋」は、同字であつても同語ではない。『當流籠抜』では「揚屋」と振り仮名が付され、これは『七百五十韻』三六五番と同義語である。『日本国語大辞典』には、「あがりや」は「江戸時代の牢屋の一つ」、「あげや」は「高級な遊女を呼んで遊興する店」と語釈が見える。「魂」は前掲の『連歌俳諧集』の「魂」とは別語である。「頭」は「江島の頭」と詠まれ「辺」に通じ、『宗因七百韻』では「頭をふる花」と「ヅ」の振り仮名が付される。この外に「頭」の漢字表記は『江戸宮箇』では二例、『當流籠抜』では一例見えるが振り仮名は付されない。これらの訓が異なる漢字表記語から、振り仮名は意味の弁別に重要な役目を果たしている事が認められる。

【二】 同義語ではあるが、他の九俳諧集では漢字表記が異なり、『七百五十韻』にのみ出現する漢字表記語

- () 内は他の異なる表記、() 内には俳諧集名、○の中には出現回数を示す。) 延一二語(異なり語数二〇)
- | | | | |
|---------------|--------------|---------------|-------------|
| 化人(あだ人)(正①) | 鮑(鮑)(アハビ) | 紙屋川(紙や川)(江八①) | 野馬(野馬)(シロマ) |
| 上氣(うは氣)(江八①) | 鰐(鰐)(アベビ) | カクロコ | カケロコ |
| 鑰(鑰)(江八①) | 小葦(小葦)(サムシナ) | ナガキ | ナガキ |
| 柘(柘)(軒①) | 杯(盞)(サヌシナ) | サヌシナ | サヌシナ |
| 細々浪(さゝ浪)(江八①) | 小葦(狭葦)(サムシナ) | サヌシナ | サヌシナ |
| 背(背)(中)(宗①) | 模(頭巾)(シキン) | シキン | シキン |
| 時計(斗鶏)(正①) | 模(頭巾)(ブキン) | ブキン | ブキン |
| 妖怪(化妖物)(正①) | 練薬(練藥)(ネリヤク) | ネリヤク | ネリヤク |
| 化妖物(化物)(正①) | 練藥(江八①) | 江八① | 江八① |

鍼（針）_(正①江八①)
腋（臂）_(紅①)

蜀魂②（郭公_(正②紅②宗①江八②江蛇⑦江宮②)・杜宇_(當①軒②)・子規_(江蛇①江宮①軒①)・時鳥_{(江}

八①當③江蛇①七①)

火燧石_(火打石江蛇①)
冷汁_(寒汁西①)

俎板_(俎江蛇②江宮①)

右の類型に属する「時計」について、『正章千句』では「枕上の斗鶲に夢をさまされて七八一」とあり、『七百五十韻』では、「時計に四方の風をめぐらす二二〇 仙菴」とある。「時計」の漢字表記は、一〇佛諦集中『七百五十韻』にのみ出現し、節用集にも収載がなく、節用集では「土圭・斗景・圓景」が見える。「時計」の生成については、田島優氏の『近代漢字表記語の研究』（一九九八）に詳細な論考があり、「物自体の形態が変化したために本来の漢字表記とは合わなくなり、意味的表記を用いる」と指摘する。元來の表記「土圭」は中国に由来するものであり、昔日かげの長さを計るのに用いた道具を指すものであった。田島氏は「とけい」の近世での漢字表記を江戸時代の小説から用例を挙げ、その中では『好色一代男』の「土圭」を最初とし、漢字「時計」は、一六八七年刊の『武道伝來記』『男色大鑑』を初出とする。『日本国語大辞典』では一六八八年刊の『日本永代藏』が初出例であるが、一六八一年刊の『七百五十韻』での「時計」の漢字は、『武道伝來記』より六年早く使用される。『七百五十韻』と同じ年に刊行された『西鶴大矢數』では「計鶲」「土圭」と表記される。

【三】振り仮名が付される語の中で、他の九佛諦集にも出現する語

（1）他の九佛諦集でも振り仮名が付される語

延七一語（異なり語数六五）

朝	穴	淡	行燈	②意趣	色	生	柄	④	生	て	起	て	男鹿	驚	す	和	尚	阿蘭陀	咳氣		
蜘蛛	餓	る	顛	交野	記念	合點	申	甲	皮	神田	絹	急	清	玉	樓	着	巾	着	金殿	下す	
なむ	來	来	鍼	氣	外科箱	化して	小督	御前	木葉	胡粉	覺	て	三口	小夜	仕	た	シ	歯黒	ス	コロ	
董	初	て	太	高	き	焼	告	出	豆腐	融	飛	來	り	屏	馬	子	詠	め	穀	守	
成	脱	で	念佛	早	比丘尼	蹄	風蘭	古巢	降	らし	經	ぬ	人	樹	道	人	緑	水	上	銚	
蒸	廻	リ	食	面	求	る	諸	山	守	夢	②	瑞	瑠璃	ト	ナ	テ	ナ	ハ	カ	ム	モ

当分類では、「月代」が『正章千句』『江戸八百韻』『當流籠抜』『江戸蛇の鮒』に一回、「七百五十韻」に二回と一〇佛諦集中六回見え、全てに振り仮名が付され、最も振り仮名が付されて出現する回数が多い。統いて複合語も含め、「隅・瘡」五回、「虛」四回、「挨拶・滑・渭・乳母・洗濯・浴衣」三回、その外は二回であり、これらは必ず振り仮名が付されて出現する漢字表記語である。

（2）他の九佛諦集では振り仮名が付されない語

延一一〇語（異なり語数一〇〇）

明	蟹	朝	穴	淡	行燈	②意趣	色	生	柄	④	生	て	起	て	男鹿	驚	す	和	尚	阿蘭陀	咳氣
梯	餓	る	顛	交野	記念	合點	申	皮	神田	絹	急	清	玉	樓	着	巾	着	金殿	下す	朽	クチ
なむ	來	來	鍼	氣	外科箱	化して	小督	御前	木葉	胡粉	覺	て	三口	小夜	仕	た	シ	歯黒	ス	コロ	
董	初	て	太	高	き	焼	告	出	豆腐	融	飛	來	り	屏	馬	子	詠	め	穀	守	
成	脱	で	念佛	早	比丘尼	蹄	風蘭	古巢	降	らし	經	ぬ	人	樹	道	人	緑	水	上	銚	
蒸	廻	リ	食	面	求	る	諸	山	守	夢	②	瑞	瑠璃	ト	ナ	テ	ナ	ハ	カ	ム	モ

右に属する語の中で、「朝・着る・朽・來・淋しき・鹿・下・高き・成・夢」などは、他の九佛諦集で多用されるが振り仮名は付されず、『七百五十韻』においても振り仮名が付されない場合もある。「色」は『正章千句』に「色めく」とあり、「飛來り」は『紅梅千句』に「飛次第」、「古巢」は同じく『紅梅千句』に単純語で「巢」とある。

（3）他の九佛諦集では振り仮名が付される場合と振り仮名が付されない場合がある語

（一）内に振り仮名が異なる場合は片仮名で示す。	延七〇語（異なり語数六四）
（二）内に振り仮名が異なる場合は片仮名で示す。	延七一語（異なり語数六五）

（一）内に振り仮名が異なる場合は片仮名で示す。

浅漬

或は

戴く

馳

埋れ

榮耀

驕

蚊

樂屋

肩

帷

門

②

鳴

問鍋

牙

口説

喰ひ

金

コガネ

当類型に属する「女房」は、他の九俳諧集中一回出現するのにもかかわらず、一〇俳諧集中『七百五十韻』と、振り仮名付記率が約二・一%と最も低い『江戸宮箋』でしか振り仮名が付されない。『七百五十韻』では二回出現し二回に振り仮名が付され、『江戸宮箋』では三回出現のうち一回だけに「女房」と振り仮名が付される。以上の振り仮名が付された六一一語の中で、音読み語は延一一語で異なり語にして一〇八語がある。部分的振り仮名の場合は、振り仮名を付さない部分も音読みと推定でき、一語全体が音読みと認定できる漢字表記の語である。一節の『紅梅千句』では、振り仮名を付す語の中で、音読み語が占める割合が約三八%であったのに比べると、『七百五十韻』では約一八%であり、音読み語の比率は高くない。次に、表記形態の特徴の一つとして、漢字だけで一句を構成する例があり、それを列举する。

①賦 <small>アキカ</small>	日月明 <small>ヒツキルミ</small>	借 <small>シカク</small>	樓船 <small>ヤカタ</small>	八七	仙菴
②一枚手形源空在判				二一〇	如風
③池田橘胡桃髭籠屋	<small>タチバナタルミヒグ</small>			四四四	仙菴
④如何禪山青 <small>コトハカルカヤン</small>	月白 <small>ツキシロ</small>	帰依和尚		五四二	常之
⑤志賀能湯谷融祝言	<small>シガノハヤハラヨウ</small>			五九六	春澄
⑥咸進榮螺鮑長辛螺	<small>コンジンヨウザイ</small>			六二四	仙菴
⑦柴積車千里一時	<small>カツヅキサカニシ</small>			七三四	信德

このような表記形態は、二節の『軒端の独活』では二例であったが、『七百五十韻』では七例ある。この七句以外の二一番では「無御座候」のような漢文での返説用法が見え、右の七句と共に漢詩文調を指向している姿勢が窺われる。しかしながら、③⑥などは見掛け上漢詩文風であるが、漢字で表記された物の名前を羅列しているに過ぎない。因みに、『宗因七百韻』では漢字のみで書かれる句は存在しないが、仮名のみで一句を構成するのは三句あり、『七百五十韻』では一句全体が仮名書きされるのは二例ある。また、送り仮名・助詞を右寄りに片仮名小字で記す用法は、例えば「借 シ」(四例)・「借 ス」・「借 ル」・「世 ノ」中・開 テ・偽 リ・鳴 ク」など、三六句に用例が見える。その中で送り仮名が最も多く付されている漢字は「借」であり、「借 シ」四例、「借 ス」一例、「借 ル」一例が見え、「借」は「かす」と「かる」の両者に使われていたために、その読み分けを指示していると捉えられる。このような表記形態は、一六四八年刊の『正章千句』、一六五五年刊の『紅梅千句』、刊行年は不明であるが一六七五年著の『花千句⁽¹⁾』には現れない⁽²⁾。本稿での調査資料である一〇俳諧集中、『正章千句』『紅梅千句』を除いた一六七七年刊『宗因七百韻』から一六八一年刊の『七百五十韻』まで、七種の俳諧集には送り仮名・捨て仮名を片仮名小字で右寄りに記す用法が見える。

また、「おすゑ人」など「人」に三回、それ以外では「女草」など合せて八語の漢字に濁点が付され、これもミを助ける振り仮名に類似した機能である。この現象は、『宗因七百韻』では借音仮名以外に、二五五番の「木戸口」に濁点が付されるのが一例だけ登場する。

さらに、「いそじ」に「五十・五十年」の二種、「びろうど」に「天鵝毛・天鵝絨・天鵝」の二種による変字法と思える漢字の用法が見え、『七百五十韻』では『宗因七百韻』に比べると、様々な要素を含む表記形態の様相を呈している。

本節では『宗因七百韻』と『七百五十韻』の二つの近世初期の俳諧集を取り上げ、振り仮名の機能や表記形態の特色について述べてきた。

『宗因七百韻』は談林初期の作品である。振り仮名を付す二〇四語中同書にだけ見える語には七九語があり、約三八・七%を占める。使用される漢字には、偏が省略される「轉り」^{タラフ}のような漢字は出現するけれども、どこにも見えない『七百五十韻』のような特異な漢字を使用することはない。

それに比べ、談林末期の『七百五十韻』では、振り仮名を付す漢字表記語六一語の中で三四二語が一〇俳諧集中同書にのみ使用される漢字表記語であり約五六%を占める。振り仮名を付す語を見てみると、和訓に対しても、日常的に定着していない漢字に振り仮名を付す傾向があること、既出例よりも早い「時計」の漢字の使用がみえることなどの特徴が窺える。また、節用集に収録がなく、未だ用例を探し得ない特異な漢字には、有意的に非日常的な漢字で書記しようとする、書き手の意思表示が見え、視覚的印象性を求めるとする漢字の用法の一面を窺う事が出来る。『七百五十韻』の振り仮名付記率は一〇俳諧集中最も高く、編者である信徳は「談林からの転向気運を作り出す一方の中心とする、新風展開のために積極的な活動を示し」と『俳諧大辞典』(二九四頁)に見え、『七百五十韻』は談林調から蕉風への過渡的様相をあらわし、俳諧史的価値は大きいとされる。消書した人や書肆は不明であるが、板下の筆者は一座の一員ではないかと想定する。

注

- 1、『^語七百五十韻』評計——第一、江戸櫻の巻——(近世文芸 研究と評論 第一号第一号 昭和四六・四七年 早大文学部 嶋峻研究室)
- 2、『浮世鏡』(『片言 物類稱呼 浪花聞書 丹波通辭』昭和六年 日本古典全集刊行会)
- 3、『かたこと』安原正章著 一六五〇年刊(『国語学大系九卷 方言』昭和五六 年 国書刊行会)
- 4、文字の使用数は捨て仮名・振り仮名・詞書を除き、句にのみ使用される数を示す。
- 5、一〇〇番に「めてたく頗而出る僧ワキ」と本行に片仮名が用いられる例が見える。
- 6、『続無名抄』岡西惟中著 延宝八年(近世文学資料類從 古俳諧編 47 昭和五一年 勉誠社)
- 7、『同文通考』新井白石 宝永一年頃成立 白石没後の宝暦一〇年新井白蛾により補校版行(『語源辭典 東雅』昭和五八年復刻版 名著普及会)(○隸書 四二〇頁)
- 8、『浮世物語』浅井了意(前田金五郎校注『仮名草子集』日本古典文学大系 十一行本 昭和五〇年九刷 岩波書店)
- 9、『好色一代男』(大坂版) 天和二年(近世文学資料類從 西鶴編 1 昭和五六年 勉誠社)
- 10、『日本永代藏』貞享五年(近世文学資料類從 西鶴編 9 昭和五一年 勉誠社)
- 11、『連歌俳諧集』岬峻康隆注解(日本古典文学全集 昭和四九年 小学館)
- 12、田島優『近代漢字表記語の研究』「「とけい」の漢字表記をめぐって」一九九八年 和泉書院
- 13、『西鶴大矢数』延宝九年(近世文学資料類從 古俳諧編 31 昭和五〇年 勉誠社)
- 14、『花千句』は『貞門俳書集一』(大理図書館綿屋文庫 俳書集成 第十五卷 平成八年 八木書店)所収による。一六七五年北村季吟・湖春・正立父子著で刊行年は不明。
- 15、但し、『紅梅千句』では「ふためきてときにし帶を忘れ置^{リス}キ 季吟」(七五七)と右傍に送り仮名「キ」を記す

例が一例見える。『正章千句』では「無跡に一キの位てんぜられ」(四二七)と「キ」が右寄りに記される例があるが、「一キ」は二字で「一級」を表す自立語である。

結語

第一章では漢字に関する問題として、振り仮名の機能を中心にして検討を重ねてきた。振り仮名では、難読字は勿論のこと、当時通用する漢字に比べ非日常的な使用頻度が低い漢字に振り仮名が付される傾向があること、意味を弁別する機能が振り仮名にあること、音読み語と訓読み語では前者の方に振り仮名を付す割合が高いことなど、振り仮名には様々な機能があることを提示できたと考えている。しかし、同じ漢字表記語で振り仮名を付す場合と付さない場合がある語では、振り仮名を付す根拠を明らかにすることが出来ない語があり、引き続き検討を必要とする。

第一節では『紅梅千句』の漢字表記の問題の中で、主として、漢字と振り仮名の関係についての考察を試みた。音読みと訓読みの調査の結果では訓読み語が多用されているにも拘らず、音読み語に比べて訓読み語に対する振り仮名の割合が低いことが認められた。この現象は、文芸作品に於いて出現頻度が高く、読み方が平易な漢字が多く含まれるからである。また、振り仮名を付す漢字表記の語と、『はなひ草』『俳諧御傘』『俳諧類船集』との関連、併せて、文頭・付合・字音語・『節用集』における収載の有無の条件を設定し、該当するかしないかの調査を試みた。その結果、総括して各条件との適応率は高いけれども、反対に振り仮名を付す語の中には、同じ語で振り仮名を付さない場合の方が、多くの条件に当てはまる事例が見られ、振り仮名を付す・付さないの差異を明らかにすることができないままである。振り仮名の機能の一つには、序章で述べた難読字・意味を弁別するため・二重表現の効果をねらう・語形を示すなどの振り仮名以外に、一句に於いて、強調したい重要な語の存在があり、文学的意義の観点から、注意を引くための振り仮名があると想定した。

第二節では一〇俳諧集の中で漢字使用率が最多の『軒端の独活』と振り仮名付記率が最も低い『江戸宮箋』の二つの作品集を中心にして、それぞれの表記の特徴や振り仮名の実態を考察してきた。前者では表記法において様々な形式が見え、片仮名の使用場面、送り仮名を片仮名小字で書記する様式などを提示した。後者の『江戸宮箋』では多用される同じ易しい漢字でも、職能により振り仮名が付されることがあることを明らかにした。

第三節では一節の『紅梅千句』と清書者が同じ『正章千句』における振り仮名の考察を行つた。両者には振り仮名付記率に大きな違いがあり、出版された目的に違いがあると推察する。

漢字と振り仮名の関係では音読み・訓読みのどちらに振り仮名が付される傾向にあるか、一節の『紅梅千句』と同様に調査をしたところ、ここでもやはり音読みの方に振り仮名が付される割合が高いことが明らかになつた。また、「色」を「ユロ」と読むように、表記と発音にずれがある場合にも振り仮名が付されることと、「夏」や「文」のように複数のヨミがある場合に、「夏」は「ナツ」、「文」は「フミ」が多用される中で、前者は「ゲ」、後者は「ブン」と読み、意味の弁別に重要な役目をはたす振り仮名があることを明らかにした。

第四節では談林初期の『宗因七百韻』と談林末期の『七百五十韻』を取り上げた。前者はいくつかの作品をまとめた俳諧集であり、各作品により振り仮名の仮名遣、熟漢字のヨミの違いなどがあり、それぞれの清書者の違いが窺えた。

『七百五十韻』では一〇俳諧集中『七百五十韻』のみに出現する漢字が多くを占め、振り仮名を付す漢字表記語の中には、偏の増画の漢字や節用集に見えない漢字がいくつか見える。それらは新しさを出すための工夫を凝らした漢字の用法であり、振り仮名を付さなければ読むことができない。このようなヨミを助ける

ための振り仮名、また意味を弁別するための振り仮名などの機能と同時に、振り仮名に類似する漢字に濁点を付す、あるいは送り仮名を片仮名小字で書記する方法など多種の表記形式があることを明らかにした。

以上本章では、俳諧における振り仮名使用の様相、及び表記形態の様相を述べてきた。最も振り仮名付記率の高い『七百五十韻』の編者は信徳であり、芭蕉と投合する所があつて、俳諧史の上で後の蕉風へと転向して行く重要な位置にある。同書は特徴の一つとして、奇警な漢字を使用する例があり、それが振り仮名付記率の高さに結びついている。一方、二番目に振り仮名付記率の高い一節の『紅梅千句』は、貞門の代表的連句作品である。貞徳は俳諧において当代の中心的人物であったことから、俳諧を学ぶ人たちにとって同書は教科書的な要素を持つことが、振り仮名を付す割合が高いことに繋がつていると考えられる。同書もまた、上述の『七百五十韻』と同様に俳諧史上見のがすことはできない作品集である。

以上のような調査を通して、一つには俳諧では様々な振り仮名の機能があること、一つには漢字の用法の中には、ありきたりの漢字を用いるのではなく、音が共通する変え字、あるいは意味を考えての造字、あるいは既存の漢字の特殊なヨミ、同時に既存の漢字の組み合わせによる特殊な熟字などが特徴として認められた。

第二章 近世初期俳諧の用字考証

導　言

前章では、漢字と振り仮名の関係において、振り仮名の機能・表記形式など、書かれたものに認められる諸現象の検討を重ねてきた。対象資料とする一〇俳諧集には振り仮名が散見し、振り仮名に関しては、同語で振り仮名を付す付さないの問題があるなど様々な問題が内蔵されているからである。

本章では、用いられている特殊な文字と、中国の字義に対応しない訓が見えることなどについて検討していくたい。例えば、前者では使用される漢字が一般的ではない、漢語の一字を置き換える当て字的用法に焦点を当て、後者では漢字とヨミとの関係で、常用されない特徴あるヨミが与えられる漢字について述べていく。

第一節では「やさし」に「婀娜・艶」を当てるのは、一〇俳諧集中『江戸八百韻』のみであることから、「婀娜」と「艶」はどのような場面を表現しようとしているのか、「婀娜」と「艶」には使い分けがあるのか、文脈での用法を考察し、この二語を用いる意図を考える。

第二節では『當流籠抜』において、「悶る」「いきる」と読むことについて、「悶る」を「イキ（る）」と読むのは見かけない用法であり、辞書や用例を通して「イキ（る）」と読める道筋を明らかにする。そして、そこには、どのような振り仮名の機能があるのか、検討していくことにする。

第三節では「あつかひ」に「哆」の漢字を当てるについて、このように「アツカヒ」に「哆」を対応させるのは、當時通用していたのか、「哆」を「アツカヒ」と読めるのか、前節と同様に辞書類を参照しながら、用例を見出すことに努め問題を解決していきたい。

第四節では、一つは「いつぞや」に「口外」、「たなばた」に「織姫」のようなヨミと漢字の関係を検討する。今一つには「明星」に「明上」、「正体」に「性躰」、「丈夫」に「上夫」のように熟語の漢字列の一字を置き換える用法、または、「石の帶」に「冑糸の帶」を当てるような、意図的な借字の用法について分析を加えていく。

以上のように、本章では、付された振り仮名と漢字の関係について、何故そのように読めるのか、意図するものは何であるかなどを明らかにしていくことを目的とするものである。

第一節 近世初期俳諧における「やさし」の用法

一 『江戸八百韻』に見える「婀娜」「艶し」について

はじめに

漢字の持つ義が、中国本来の義から離れ、日本で特殊な用い方をした漢字がある。本節では、漢字に付される特殊な振り仮名の一つとして、『江戸八百韻』の集中

相宿り天狗も婀娜郭公 青雲 (二〇一)

半分見えし姿艶しき

来雪 (四四)

と詠まれる句の中に、「ヤサシ」に対して「婀娜」「艶しき」の漢字表記⁽²⁾が見えることに着目して、考察を試みていきたい。両者は一〇俳諧集中『江戸八百韻』にのみ見える漢字表記語であり、「ヤサシ」に対して常用されたとは考えられないこと、また「ヤサシ」に対して、この一種の漢字を用いることは、そこに何らかの表現意图を伝えようとしているのではないかと考えられるからである。

資料には天理図書館綿屋文庫蔵本の『江戸八百韻』(天理図書館 佛書集成 第六卷『談林俳書集一』所収)を使用した。同書の解説によると『江戸八百韻』は延宝六年(1678)刊の幽山・安昌・来雪・青雲・言水・如流・一鉄・泰徳等八名が興行した百韻八巻を收めるものであり、幽山等著、幽山・言水共編、寺田重徳刊の作品集である。参照する『節川集』には、古本節用集六種・合類節用集・書言字考節用集に、適宜その他の古辞書をも使用する。また、本文中の傍線は稿者が付記したものである。

一 「婀娜」について

まず初めに当該集において、

ア、相宿り天狗も婀娜郭公 青雲 (二〇一) 鬼心せよ五月雨の闇 来雪 (二〇一)

と「婀娜」を「ヤサシ」と読むことについて検討していくことにする。古辞書類で「婀娜」を見ると、

『易林本節用集』——「ヤサシ・ナマメク・アダ・アナ」

『合類節用集』『書言字考節用集』——「ナマメイテ(ナマメク)・タヲヤカ」

と訓が付され、『色葉字類抄』では「たをやか」と読む。また『倭玉篇』(慶長十五年版)には「婀 タヲヤカ」

「娜 ナマメク／タヲヤカ／シナヤグ」の和訓が記される。それならば、実際にどのような場面に使用されているか、その実態を提示してみたい。

『江戸八百韻』に

「婀 娲腰 文」——左傍訓「タヲヤカナルコシハセ」

「婀 娲 菲 芭」——「娜」の左傍訓「トナマメキ」

「芭」の左傍訓「トサカリニシテ」

「華 容 姪 娜」——「容姫」の左傍訓「カタチタヲヤカニシテ」

「姉 娜 徒 行」——「姉娜」の左傍訓「ナマメイテ」

とある。『玉造小野小町壯衰書』には、『遊仙窟』と同じ「姉 娜 腰 支」が見え、

「姉 娜 腰 支 説 ニ楊 柳 之乱 ニカト春 風」

と「姉娜」の左傍には、「タヲヤカナル」、「腰支」の左傍には、「コシハセ」と訓を付し「アタトタヲヤカナルヨウシノコシハセハ」と文選読みをする。この『玉造小野小町壯衰書』を典拠として、謡曲「卒都婆小町」に「ひすいのかんざしはあだとたをやかにしてやうりうのかぜになびくがごとし」という一文があり、さらに、「卒都婆小町」を典拠とする作品には、俳論書『評判之返答』や仮名草子『恨の介』がある。これらの文選読みの文例における和訓は、「ナマメク」或は「タヲヤカ」と記され、何れも「ヤサシ」ではない。『鶴衣』(寿光先生伝)には「げに先生や姉娜たる美少年なりし」とあり、これもヨミは「アダ」であつて「ヤサシ」ではない。以上の用例で取り上げた「姉娜」は、美しい人を形容する語として使用されている。西鶴の浮世草子では、「やさし」と振り仮名が付される例が見えるので、列举してみたい。

◇『男色大鑑』には

①わつかのうちも恋路はやるせなきに此事しらせてよと仰せけるは姉娜御心入と水桶捨て立出 (卷一・四)
②されども戀よりの悪事なれば此上ながら御前世問をつつむと咄せば姉娜心入感じて自然と沙汰して若道の隨一と申も懲なり

③年長たる女房の姿姉娜しかも面子の なるが錦ひとつかざして是をさへ恥るも有に

* 「 」はママ

(卷二・一)

(卷三・五)

(卷三・五)

④ひだり手に山吹の姉娜花をかざして静に豈なるを人間とは思はれず

(卷三・五)

⑤思はずも渾然しに戀君も心にかゝり初しや千嬌ある御顔ばせにて姉娜も兄かへし給へり

(卷三・五)

とあり、「姉娜」は①②では「優しいお心遣い」と心づかいの細やかさ、③ではしなやかで美しい姿、④⑤では仕種の優美さを描写する場面に「姉娜」が用いられる。

◇『好色一代女』(卷三・二)では

⑥形を生移しなる女人形取出されけるにいづれの工か作りなせる姿の姉娜も面影美花を欺き見しうちに女さへ是に奪われる

とあり、この場面では「姉娜」は姿の美しさを表し、『男色大鑑』③と同じ用法である。以上の用例から、頗かたちの美しさに対しでは、③では「面子の なる」、⑤では「千嬌ある」、⑥では「美花を欺き」と「姉娜」では表現されず、別の言葉を用いる。このように①から⑥までの「姉娜」は、姿や態度の優美さ、或は対人態度や内面的な美の表現に用いられ、頗かたちの美しさには用いられない。

当該集アの句は「天狗がやさしい」ということが、この句のポイントであり、相宿りした郭公の鳴き声を聞いて天狗もやさしくなると、想像と実際のギャップの面白さを詠む。その意外性を表現するのが「姉娜」の漢字である。

二 「艶しき」について

前節の「姉娜」に続いて、もう一つの用字「艶」を「ヤサ(し)」と読むことについて考察していきたい。

イ、都也と有所の竹格子 安昌 (四二) 半分見えし姿艶しき 来雪 (四四)

と詠まれ、イの句の「艶しき」は、竹格子の間から半分見えた姿が、なまめかしく美しいと表現するための文字遣いである。「艶」は、類聚名義抄・温故知新書・蓮歩色葉集・文明本節用集・伊京集・黒本本節用集・易林本節用集・書言字考節用集・和漢通用集・俳字節用集などに収録がある。「ヤサシ」以外の「艶」に対するヨミでは

『類聚名義抄』—「ウルハシ・ナマメイタリ・ナヨ、カナリ」
『易林本節用集』『書言字考節用集』—「ウルハシ」

などの訓が付される。

『倭玉篇』（慶長十五年版）では、「艶」に「ウルワシ・カヲヨシ・ハナヤカナリ・ミヤビヤカ」とあり、「ヤサシ」は見えない。同書での「やさし」に対応する漢字は「女十号」であり、下に付された和訓は「ナマメイタリ・ヤスシ・アハス・ヤサシ」と記される。『倭玉篇夢梅本』では「ヤサシ」に「齐」、『篇目次第』では「左」とあり、節用集では、漢字「婀娜」「艶」以外には「優・有情・優美・迷美・幽美・謔・嬌・尋常」などの収録がある。「艶」を「ヤサシ」と読む用例を前掲の「婀娜」と同様に、西鶴の浮世草子から取り上げてみると

◇『好色一代男』

⑦ 風うるはしく生れつき艶しきをちいさき時より是に仕立てとりなり男のごとし

（卷四・五）

◇『武道伝来記』

⑧ 尋常体の艶きに付てもありし世を思ひくらべて母のなげき大かたならず

（卷六・四）

と⑦⑧では、姿・容貌が美しい女性を描く場面に用例が見える。

◇『本朝二十不孝』

⑨ みづから賤しき形ながらそれその勤もあれば傾城屋に身を売事はといふにそ心ざし艶しく

（卷一・一）

⑩ 人の心のおろしさに艶しき狼を恐れる

（卷四・一）

⑪ 此里艶くも是をいたはり色々此子の人なる事を申ぬ

（卷五・一）

⑫ 掛乞宵よりの事とも段々見て袖をしたしかかる艶しき女の有べきか

（卷五・一）

とあり、⑨から⑫では、「婀娜」の用例①②と同じく心づかいの細やかさが描かれている。

西鶴の作品中、『男色大鑑』『好色一代女』では「やさし」の表記に「婀娜」を使い、『本朝二十不孝』『好色一

代男』『武道伝来記』では「艶」を用いるというように、同じ作者でありながら作品による用字差が見え、「やさし」の表記に、同じ作品中では「婀娜」と「艶」を混用することはない。この事象は、杉本つとむ氏が『西鶴語彙管見』で述べているように、一つには、西鶴自身が意図的に使い分けしていると考えられるが、それ以外に、作品による板下の筆者の違いなど、出版事情の関係も考える必要があるだろう。

一二〇〇年初めの歌論書では、『無名抄』に「艶にやさしく」「えんにやさしく」とあり、『後鳥羽院御口伝』には「やさしく艶なるあり」「やさしく艶に」「艶にやさしきを」など「艶」は「やさし」とともに使われる。『角川古語大辞典』の「やさし」の項には、「特に中世和歌文学の世界において、艶（えん）や優（うい）同類の美的価値」とあり、歌論用語から「艶」に「やさし」の訓が施されるようになつたと推察できる。

◇近世の俳文学作品での用例

⑬ 田地塞き吾妻も艶し花続

調管子

『説話坂東太郎』（九三）

と「艶し」が見え、校注者は「艶し」に「なまめか（し）」と振り仮名を付す。⑬の花続は大唐米に似ていることから、田と花続は縁語であり、吾妻には吾妻琴と妻が掛けられ、貧しいながらも、狭い田地に花続が咲き乱れ、妻が奏でる吾妻琴のやさしい音が聞えてくると情趣ある光景を詠む。⑭ではいとこにまで衣服を与える心配りのやさしさを詠み、⑮では別れの朝の美しい姿に、梅がぼんやりかすんで見えると詠む。

⑯ 衣賦り艶しや遠きいとこ辺

ひさ女

『俳諧難波曲』

⑰ 艶しさや後悔のおぼろく

素韻

『蕉門名家句集』

などに「艶し」が見え、この二句には校注者は「やさ（し）」と振り仮名を付す。⑯の花続は大唐米に似ていることから、田と花続は縁語であり、吾妻には吾妻琴と妻が掛けられ、貧しいながらも、狭い田地に花続が咲き乱れ、妻が奏でる吾妻琴のやさしい音が聞えてくると情趣ある光景を詠む。⑭ではいとこにまで衣服を与える心配りのやさしさを詠み、⑮では別れの朝の美しい姿に、梅がぼんやりかすんで見えると詠む。

⑯ 此句行脚轍士ニ対スル送別ノ吟ナリ。コレニ轍士ハ

ひかれぬ足に濁す夏川

ト駒ヲ附シ「白雪か子十二歳の即興也。余に艶しく覚て脇に及びし」ト添書セリ

（『蕉門名家句集』の句「卯の花をうちつけながら涙かな」（桃後）の左の詞書）

⑯匂ひの花といふ事、故実あり。：（略）：牡丹花指上げられし時、何にても御褒美有べしと勅し給る故、此花の事申されしに、艶しく思召て勅免を蒙りしより、匂ひの花といふ也：

『蕉門昔語』

⑰⑯の二例は情趣ある様子を「艶し」で表現し、底本には振り仮名が付されていないが「やさし」と読むと想定できる。

以上のような検討の結果、「婀娜」は『遊仙窟』では、美しい姿・容貌を表現する語として用いられる。それに比して、当該集や西鶴の浮世草子の「婀娜」は、心のやさしさや姿の美しさを表現し、「艶」は心のやさしさ、姿の美しさ以外に、『倭玉篇』の訓には「カヲヨシ」ともあり、⑧の用例のように「佛」をやさしと表現するのに用いられる。また⑯⑰では和歌文学に通じる情趣などを表し、「婀娜」との相違点が窺える。

俳諧では一句の少ない文字数の中で、どの漢字で表現すれば句の雰囲気を出せるかが重要であり、当該集の「婀娜・艶し」はそれぞれの句に適応した漢字表記であると言える。

三 「やさし」に対応する他の漢字の用法

上述したように、節用集には「やさし」に対して、「婀娜・艶」以外に「優・有情・優美・迷美・幽美・謫・嬌・尋常」などの収録がある。これらの用字が近世初期の俳諧で、「やさし」として使われているか、考察を加えてていきたい。調査には『古典俳文学大系 C D - R O M』（集英社）を使用した。

○ 優一ア、（色めく賀茂の神主の袖 一四） 優な姫をうへ人達や恋の歌 二五 『正章千句』

イ、（はたしにて御狩の供は成がたみ 九五三） 公卿は優にそだちたまへり 九五四 『正章千句』

ウ、（よめる屏風の哥そめてたき 貞徳 三七四二） 優なるはけふの御賀の座敷にて 瞼光 三七四二

エ、（よき小刀をもとめまほしき 周令 四七八） へしるといふも花には優ならず 季吟 四七九

『玉海集』

など、形容動詞として音読み「ゆう（いふ・いう）」で用いられるが、現在では「やさしい」に当てられる「優」を「やさし」と読む例は見出せない。

アは上品で美しい様、イは立派に、ウは上品で優雅な様、エは勝ることはないの意で用いられ、対人態度の心のやさしさを表現するのではない。

中国の辞書『大廣益会玉篇』では「優」（^{イフ} ^{（サナフ）} ^也 ^{併也} ^ヤ ^シ）（卷三）とあり、『字彙』では「和也」（^{マツル} ^{（マツカ）}）又「優游」（^{マツカ} ^也 ^{優游}）、「優劣」（^{マツカ} ^也 ^{優劣}）、「優又倡」（^{マツカ} ^也 ^{優又伊}）、「優屈曲佞」（^{マツカ} ^也 ^{優屈曲佞}）（子集人部）『正字通』でも「字彙」と同義の記事が見える。

日本の古辞書では

・類聚名義抄「優」（イフ） アツシ マサレリ メクシ ユタカナリ ュルス マス（タハフル ヤスシ
ウレフ スクル イウナリ）（佛上 二二）

・白河本字鏡集「優」（イフ） メクシ ユタカナリ アツシ マフ マサレリ ヤスシ スクル ウレフ
ユルス タハフル スクル（一〇卷 四一四）

・倭玉篇（慶長一五年版）「優」（イフ）（左訓ウ） マス ヤスシ ユタカナリ マサル
(夢梅本)「優」（イフ）（ユタカナリ マサル イサナフ）（人第二 18）

(篇目次第)「優」（イフ）（ユタカ メクム マサレリ ヤスシ タハフル）（第三六人部）

とある。また、節用集には次のように収録されている。

・伊京集・優劣（左傍訓マサル ヲトル）

・天正十八年本・優（形一）

・易林本・艶優／勝優／優／優（左訓イウ スンタリ）

・合類節用集・優（左訓ユウ）へ又有情○幽美○迷美 並同）

右のように「ヤサシ」は『易林本節用集』と『合類節用集』に見え、それ以前の古辞書では「マサル・ユタカ」などが和訓として記される。

○優美—上手ほど名も優美也すまひ取

見わたせばいと優美なりけりや春

『蕉門名家句集』其角（五九七）
『俳諧句選』（一三三）

など芭蕉以降の俳諧に見えるが、「優」と同じく形容動詞であり、音読みである。

○有情—有情かとみれば螢はひ情かな

と、「ひ情」の対語として用いられ、中興の俳諧集にも「有情」が出現するが、「ヤサシ」のヨミではない。

○尋常—『繼尾集』には「皇后尋常御肌にいだかせ給ふ千満の二珠によそへ」とあるが、「じんじょう」或は「よ

のつね」と読むか、それとも「やさしく」と読むかは明らかではない。

○幽美—『源氏鬢鏡』の序文に「言葉幽美にして」とあり、音読みであると判断できる。

○謔—次のように、たしなみが備わる様子を「謔く（やさしく）」と表現し、腕白者も髪置の儀式を行う年齢になると、おとなしくなると詠む。

⑯わやく者も髪置といへば謔く成ぬ

『洛陽集』（一〇二・一）

以上、節用集で「やさし」に当てる漢字を『古典俳文学大系』で調査した結果では、「迷美・嬌」の例は見られず、これらの漢字以外に、節用集では「やさし」として収録されていないが、『滑稽太平記』（卷三 新光寺の事）

に次のような例がある。

○甘身き

⑰近比、和歌の道甘身き物を、下劣に云下す事、沙門の身にて尾籠千万ならずやと、世人評しけり。

右の「甘身き」の注には、乾裕幸氏の「ヤサシ」のヨミとした経緯が記されている。「和歌の道」との関連からも、ヨミは「ヤサシ」とあると認めることができる。

もう一つには、時代が下るが蕪村の発句集の句（明和八年以前）に「しぐるゝや萬のわたる琴の上」の詞書に「賀越の際、婦人の俳諧に名あるもの多し。姿嫩く情の痴なるは女の句なれば也。」とあり、校注者は「嫩く」に「やさし（く）」と振り仮名を付す。しかしながら、「蓑虫説」（文章編 短編類四 明和八年）に同じ文の掲載があり、「姿嫩く」が「姿弱く」と「嫩」が「弱」に書き換えられている。一七二三年刊の『海音集』（海下一・四九）には「嫩い思案はむらさきて書 青輔」とあり、「嫩い」に「ワカ（い）」と振り仮名が付されているのが見える。また「嫩」は辞書類においては、『倭玉篇』（慶長十五年版）・『節用集』（易林本・天正十八年本・明応五年本・黒本本・合類・書言字考）で「ワカシ」とあり、『合類節用集』『書言字考節用集』の「嫩」の下には「弱也」少也」と注記がある。これらのことから「嫩く」は「わか（く）」と読むと推測する。

以上のように、「嫋娜・艶」以外の「やさし」を表す漢字について考察を重ねてきた。『古典俳文学大系CD-ROM』で「やさし」の表記を一覧してみると、仮名書きが句のみでは約一一二例、漢字表記が一例（句以外の⑯は除く）、この内、近世初期の『貞門俳諧集（一）（二）』『談林俳諧集（一）（二）』だけを見ると、句のみの仮名表記が二六例に対し漢字表記は⑯の一例である。『古典俳文学大系』に所収されていない『江戸八百韻』を含めても、漢字表記は三例しかない。西鶴の前掲の五作品中では仮名表記が二九例、漢字表記が一一例と、何れも仮名表記が圧倒的に多い。

四 仮名書き「やさし」の用法

当該集では前掲のア・イの句以外には、用語「やさし」は、漢字の異表記や仮名表記でも出現する事がない。

他の俳諧集での仮名書き「やさし」の用例では

②花^さきをするかやさしき心ばせ
『正章千句』(一〇九九)

①農人もするかやさしき方違へ 可頼
『紅梅千句』(八九七)

②糸ゆふといへばやさしき歌の道
『貞徳説諺記』(卷之上)

③やさしくも草花売て帰るらん
『新增大筑波集』(秋)

などがある。②の「やさしき」は、情趣を解するやさしい心を表現する。②の句は、前句に節分が詠まれ、飯田正一氏(『貞徳紅梅千句』桜楓社)は、「節分には、農民もするのだろうか、床しい方違えの習慣を」と解釈を施し、優雅な様相を「やさし」で表現したと捉える。②では幽玄・優美のような美の理念の表現に用い、③では控えめな様子を「やさし」で表している。近世初期の句のみの仮名表記二六例中、花鳥月と共に詠まれるのが八例、心と併用されるのが三例、和歌をやさしと詠む例が一例あり、人の姿のたおやかさ・あでやかさをやさしと表現する例は見出しえない。

上述の「婀娜」と「艶」の用例を引用した西鶴の浮世草子五作品において、「やさし」に対応する他の表記について調査してみると、漢字での異表記は出現せず、平仮名で表記される。そこで、「婀娜・艶」と仮名書き「やさし」の表現する場面では、語としての使い分けがあるのか、五作品での「やさし」を文脈上の意味を通して考えてみる事にする。

「婀娜」を使用する『男色大鑑』では、「やさし」と仮名表記されるのが一七例見え、『好色一代女』では六例見える。「艶」を使用する『本朝二十不孝』では二例、『好色一代男』では八例、『武道伝来記』では六例出現する。

それらには次のような場面が表出されている。

- 1、心づかいのこまやかさ・対人態度において思いやりのある様を表す。(一五例)
- 2、美しい姿(優美、なまめかしさ、色っぽさを含む)を表す。(一三例)
- 3、風雅な趣がある様・言語や動作が優美である様を表す。(八例)
- 4、おらしい情景を表す。(二例)
- 5、雨が降る情景(弱い様)を描写する。(一例)

右の五つの分類の中で、1に該当する「やさしき心ざしふかし」(『男色大鑑』卷五・一)などは、漢字の用例①②の「婀娜心入」と同様に心づかいの細やかさを表現するが、必ずしも漢字「婀娜」で表記されるわけではない。

4「おらしい」に属する「薄縁敷きし奥の間に、やさしくも屏風引廻してありける」(『好色一代男』卷三の五)や「人の口をしのぶこころもやさし」(『好色一代男』卷三の六)の、控えめでおらしい情景を描く場面、また、5の「雨が降る情景」に属する「雨はやさしく風はあらけなく」(『男色大鑑』卷三の一)のように、雨の降る様が「さほどではない」と表現する場面では、「婀娜」「艶」は情景描写に適さないだろう。

以上が「婀娜」及び「艶」の用語が見える作品での、仮名書き「やさし」の出現状況である。このように見てくると、仮名書き「やさし」は、漢字「婀娜・艶」では表現できない幅広い場面に登場する。漢字で表記された場面では、漢字本来が持つ意義と、振り仮名「ヤサシ」を合わせて、同じ美しさの中でも、なまめかしさ・しなやかさなど、視覚的にその用語の環境を想定する事が出来る。前掲の『西鶴語彙管見』によると、『好色一代女』の「冒頭の構想は『遊仙窟』によるといわれる」(一六〇頁)とあり、『好色一代女』(卷一の一)や『男色大鑑』では「婀娜」以外にも、「調謔・面子・覗粧・透迤」などが見え、『遊仙窟』に範を仰いでいる事が認められる。杉本つとむ氏は、また同書で

西鶴の場合は愛読書といふことは推測される。しかしまた「婀娜」も上掲の辞書では「ナマメク・ヤサシ」であり、慶安版の『遊仙窟』ではタヲヤカであつて、むしろ西鶴が特定のものに求めたというよりも、当時の用字として文章語（中国小説など、この種漢文訓説的なもの）から取り出したものであろう。（一六〇頁）

と述べ、続いて『節用集』などに見られる点から、日常的な語彙と考えるのはむしろ本末転倒である。『節用集』の語彙の性格は今後究明さるべきである（一六一頁）と説明が加えられている。節用集に関しては、安田章氏が『中世辞書論考』の中で、「節用集は和漢聯句のための用語辞典であると臆断する」、または「室町時代に成立の辞書は概ね韻事をを目指したものであった」と述べられていることに注意したい。

当該集で「婀娜」に「やさし」の訓が与えられるのは、西鶴の作品よりも早く、俳文学作品で「艶」を「やさし」と読むのも、当該集より後に用例が見え、当時の新しい表現として両者を取り入れていることは、俳諧における用字の観点から注目すべきだろう。

おわりに

当該集には、一つの和語に対しても複数の表記がある語に二語があり、俳諧の表記の多様さを示していることに視点をおいて、「婀娜」「艶しき」について検討してきた。その結果次のようなことが明らかになった。

一、西鶴の浮世草子では、「婀娜」「艶し」の用字は、作品による両者の使い分けが看取でき、「婀娜」には「艶」のように、顔の美しさや和歌の美を表現する場面には例が見えない。

二、『江戸八百韻』の「婀娜」は、「天狗」と対立的な語「婀娜」を取り合わせる事により、意外にも天狗がほとどぎすの声を聞くとやさしくなると句の面白さを効果的に表現する。「艶」は竹格子の間から見えた美しい女

性の姿を表現し、両者は表現性を重視した漢字の用法である。

三、「婀娜」を「ヤサシ」と読むのは、現段階では、『易林本節用集』と西鶴の浮世草子以外では用例を見出すことが出来ず、また「艶し」も「やさし」に対して頻出する漢字ではない。これらは当時の「やさし」の和訓に対しても、一般的に常用されていたとは考えられない。

四、俳諧及び西鶴の浮世草子での「やさし」の表記には、漢字よりも仮名で表記される方が多い。

五、「婀娜」「艶し」は、節用集に「やさし」に対応する漢字として収録があることから、幽山等の文字意識は、節用集の教養の世界と共通していると言える。

俳諧に新鮮味のある用字で書き表そうとする傾向があることについては、第一章第四節で『七百五十韻』において、既出の用例よりも早い「時計」を初めとして、辞書にも収録がなく、且つ用例も見出せない漢字表記語がいくつかあることを述べた。「婀娜」を「ヤサシ」と読むことにおいても、現段階では『江戸八百韻』より早い例を探し出す事ができず、著者高野幽山等の創意工夫を凝らした漢字の用法が窺える。

注

- 1、「^{ヤサシ}」の「」は『大漢和辞典』に、「或は婀に作る」と記されているので、本節では「婀」を用いる。
- 2、『江戸八百韻』には同じ語に対して複数表記される語が次のように三一語ある。

（○の中の数字は二回以上の出現回数を示す）

- | | |
|---|----------|
| ・一方は漢字二字での表記、一方は漢字一字のうち一字を仮名表記する複数表記（異なり語数一一） | |
| 朝かすみ／朝霞 | 大かた／大方 |
| 取たて②／取立 | こと葉／言の葉 |
| 野へ③／野邊 | 住よし／住吉 |
| 松むし／松虫 | 立わかれ／立別れ |
| 夕ぐれ／夕暮⑤ | ゆく衛／行衛② |

・ 使用漢字が異なる複数表記（異なり語数 二〇）

明ほの②／曙②	うき世／浮世／憂世	大觴／大益	面影／佛	親仁・親仁／親父	兒／顔
着更衣／衣更着②	駕／駕籠	皮／革	苅／莓	前／先⑥	既に／已に
啼①／鳴たる②	乘物／駕	一人／独り	郭公②／時鳥	村艳／村紅葉	嫋娜／艶しき
棣棠／山茨					

3、日本古典文学大系（『謡曲集上』昭和三五年 岩波書店）所収の「卒都婆小町」の頃注には、「壯哀書に「嫋娜腰支誤ニ楊柳之乱・春風」とある腰つきの形容を、髪の形容に転用した。」とある。

4、『西鶴語葉管見』（杉本つとむ著 昭和五七年 ひたく書房）には、次のように述べられている。

一つのコトバがいろいろに表記されていることである。たとえば、ササヤクはつぎのように見られる。（略）これに、かな表記を加えれば十一種類となる。これは一人の使い分けか。このうち真性の西鶴のそれはどうれなのか。（略）一個人の幅として、十種はユレがありすぎる。だからこそ板下も数人というか、いろいろの人物を仮定することになるのである。（略）板下の複数、さらには西鶴作か否かの作品論へも発展するのではないかと思つてゐる。（一九四頁から一九五頁）

5、「吉田肥前カラくト笑テ、哀甘身ヤ、敵ノ種ヲバ此ニテ尽サスベシ」とあり、『太平記鈔音義』『和漢合類節用集』『反故集』等に、アサマシと付訓する。しかし、本書に出る用例はすべて意味上ヤサシと訓むべきであり、なかんずく巻七「高島及加撰集の事」の「老後の思ひ出、足に過じ、御免あれと望しかば、あゝら甘身やとて、皆感涙をぞ流しける」が、謡曲「実盛」「あらやさしやとて皆感涙をぞ流しける」；老後の思出これに過ぎじ御免あれと望みしかば」を踏むものであることからも、ヤサシに決定すべきである。なお本書の作者は、アサマシには浅問しの漢字を当てている（巻四「雛屋立圃手柄の事」等）。『滑稽太平記』（注 六五五頁）

- 参考文献
- 6、『中世辞書論考』安田章著 昭和五八年 清文堂（五から六頁参照）

- *『鶴衣』『源氏鏡』『滑稽太平記』『崑山集』『蕉門昔語』『蕉門名家句集』『新增大筑波集』『継尾集』『貞徳誹諧記』『誹諧句選』『誹諧坂東太郎』『俳諧塵塚』『俳諧難波曲』『評判之返答』『蕪村発句集』『洛陽集』（古典俳文大系 昭和四五～四七年 集英社）
- *『恨の介』（日本古典文学大系『仮名草子集』昭和五〇年九刷 岩波書店）
- *『海音集』方設編 享保八年刊（『池西言水の研究』守城由文著 二〇〇三年 和泉書院）
- *『玉海集』（近世文学資料類從』古俳諧編 41 一九七五年 勉誠社）
- *『後鳥羽院口伝』（『歌論歌学集成』第七卷 平成一八年 二、弥井書店）
- *『好色一代女』『好色一代男』『男色大鑑』『武道伝来記』『本朝二十不孝』（『新編西鶴全集』第一巻・第二巻本文篇 平成一二年一四年 勉誠社）
- *『玉造小町子状袁書の研究』（松平文庫本）平成三年 臨川書店
- *『貞徳紅梅千句』飯田正一 昭和五一年 桜楓社
- *『無刊記本 無名抄』（和泉書院影印叢刊 48 第三期 昭和六〇年 和泉書院）
- *『遊仙窟總索引』（康永二年書写）平成七年 沢古書院
- *『江戸初期遊仙窟本文と索引』蔵中進編 昭和五四年 和泉書院

第二節 『當流籠抜』における「悶る」について

近世初期俳諧集の『當流籠抜』には、次のような句が所収されている。

(本節中、句番号及び傍線は稿者が付記したものである)

鬱先に雪を残して一文字 五一 宗旦

假契買のくせ春雨閑る^{クヤシマツル} 五二 木兵

右の五二番の句に見える「閑る」は、近世初期の俳諧集において例を見ない用法であり、古辞書には「いきる」と対応する漢字として「閑」の漢字は収録されていない。それならば、何故「閑る」を「いきる」と読めるのか、そこに問題点が見出される。

そこで、本節では、この漢字「閑」と振り仮名の結び付きを、多角的な視点から検討し、「閑る」を「いきる」と読む道筋を解明していくと同時に、「いきる」の語の表記に「閑」を採用した意図を探っていくことにする。

『當流籠抜』について簡単に述べておくと、延宝六（1678）年に板行され、宗旦・木兵・百丸・鬼貫・鉄幽による五吟五百韻が収められた俳諧集である。『鬼貫全集』（岡山利兵衛／昭和五二年二訂版／角川書店）の解説には、「本書は伊丹風俳諧を公式にはじめて世にどう意欲的な書」とあり、一句あたりの漢字数は貞門俳諧の『正章千句』（約三・九）『紅梅千句』（約四・〇）に比べ、約五・〇と多くなり、使用延漢字数一五〇五字中三八九字に振り仮名が付されている。この振り仮名が付される漢字の中の一つが「閑る」である。

なお、テキストには柿衛文庫蔵本（『近世文学資料類従 古俳諧編36』所収）を使用した。

一 古辞書類における「閑」と「いきる」

最初に、古辞書類における「閑」の収載の実態を提示し、「閑」の訓について確認していく。〔本文中「熱」の漢字に関しては、下の部首が「火」で表記されるものも「」とする。また「」内は割書を示す。〕

平安末期から室町時代の『色葉字類抄』（図書寮本／観智院本）・『字鏡集』（白河本）、及び慶長十五年版の『倭玉篇』では、「閑」に対して次のような訓が与えられる。

* 「イキトホル」—『類聚名義抄』（図書寮本）

* 「イキドヲル」—『字鏡集』（白河本）・『倭玉篇』（慶長十五年版）

* 「ウレフ」「ウラム」—『色葉字類抄』（白河本）

（『色葉字類抄』三巻本）には「閑絶」とある

* 「モダユ」—『色葉字類抄』（白河本）・『字鏡集』（白河本）

* 「イキタエ」「マドフ」—『字鏡集』（白河本）・『類聚名義抄』（観智院本）

これを見ると、「イキル」と「イキ」を同根とする「イキタエ」「イキドヲル」などの訓は、『類聚名義抄』『字鏡集』『倭玉篇』に収録されているが、「イキル」の訓は見えない。

中世末期から近世の節用集『伊京集』『明応五年本節用集』『天正十八年本節用集』『饅頭屋本節用集』『黒本本節用集』『易林本節用集』『合類節用集』『書言字考節用集』においては、共通して「閑」に「モダユル」の訓が付され、『合類節用集』『書言字考節用集』では「煩も同じ」と記される。このように、近世では、それまでの多種の訓が収束され、「モダユ（ヘ）」のヨミが定着するようになる。

中国の辞書では

*『大廣益會玉篇』（卷五 寛永八年）—「閑」^{モン}（左訓・イキトホリ）・「憇」^{ボン}（煩也）（同上）

「煩」^{モソラル}（左訓・ボン）・「煩也燒」^{モソラス}（左訓・ヤク）（也）

*『字彙』（寛文二年）—「悶」（煩也）又叶、『煩』（繁不簡也）又叶、『悶』（繁不簡也）又叶

（『大廣益會玉篇』『字彙』は『和刻本辞書字典集成』を使用した）

と収録され、『字彙』『正字通』において、「煩」の下に「悶也・熱也」と注記が見える。また『大廣益會玉篇』では、「悶・・・憇」は同じであつて、「憇」の下に「煩也」と記されることから、「悶」と「煩」は通じることになる。

右のような、辞書における考察において、「悶」と「煩」が通じることは検証できたが、「悶」を「イキル」と訓する例が見えないのならば、「いきる」にどのような漢字を対応させていくかを、次に考えることにする。

●「イキル」に「熱」を対応させる辞書

『色葉字類抄』三巻本（尊經閣本）・『類聚名義抄』（視智院本）・『易林本節用集』・『合類節用集』・『明治いろは早引』・『大言海』

●「煩」を対応させる辞書

『饅頭屋本節用集』

●その他

『色葉字類抄』三巻本（尊經閣本）—「勢・疢」

『合類節用集』—「喰」

『書言字考節用集』—「悍」活法性、勇念也》—「煩」匀畧篤煙、煩暑夏・天所言

それぞれの辞書で、「イキル」には右のような漢字が対応し、『饅頭屋本節用集』で「イキル」と訓が付される「煩」が、『合類節用集』『書言字考節用集』には「悶」同、煩」と記載がある。また、前掲の中国の辞書『大廣益會

玉篇』『字彙』『正字通』でも「煩」は「悶也」と記されることから

「煩」＝「いきる」（饅頭屋本節用集）→「悶」＝「煩」（合類節用集・書言字考節用集・大廣益會玉篇・字彙・正字通）→「悶」＝「いきる」（當流籠抜）

の図式が成り立つのではないか。

以上のように、古辞書では「悶」を「イキル」と読む例は見えないけれども、中国の辞書における「煩」と「熱」との関係、及び右に提示した図式などを総合して、「悶」を「イキル」と読む可能性は考えることができる。

二 「悶」字の用法

「假契買のくせ春雨悶る（五二 木兵）」に見える「假契」は、「悶る」と同様に、これまでの近世初期俳諧の研究における対象資料一〇種の俳諧集中、『當流籠抜』にのみ出現する語である。「假契」は「端女郎」のことを言い、『當流籠抜』ではこの句以外にも、次のように、「假契」を詠む句が見える。

以下、（）内には前句を記すが、連句であつても、句意を理解することが出来る場合は、前句を省略した。

・（ゆるさるゝ夜見世は民を安んじて（一四五 宗旦）

御代の鏡は假契部屋の月

・（なぐれの秋に氣のくさる祖父

松の情五分假契

とぞ現じたり

三六五 百丸

と集中三回登場する。これら以外にも、『古典俳文学大系』所収の句には

・（手水鉢筈の水はかはれども

谷のながれをたつる假契り

・（兼言に秤をかりて妹と我

けちぎり狂ひ水莖の岡

・（湖水青ふして太布の風

金輪際より独の假契問湧出る

・（雲をつらぬく摺鉢の山

さびしさまさるけち部屋の内

三二五

『投盆』

八六八

素敷『大坂櫻林桜千句』

八六七

夕鳥

二二四

『雲喰集』

五一七

『天満千句』

五二六

利方『誹諧初学抄』

五二五

『詐諧類船集』

などと「假契」の用例が見え、假契自身や假契部屋の様相を詠むが、当該句では、前句との関係で、春雨を擬人化し、假契買を見た春雨がいきつているのであって、假契買自身の行動ではない。

さて、本題の「悶る」については、近世の俳文学作品での「悶」の用例を挙げ、使用実態を調査・検討していくことにする。

ア、茶能散^{ハナシタ}悶^{ハラハラ}といふも人事をいひ姉をそしるわざなるにや。『誹諧初学抄』に
と「悶」に「イキドヲリ」の振り仮名が付される。「茶が心の憂さを解きほぐす」という意と解し、「悶」は心の憂さを表現している。これは平安後期の『本朝無題詩』(七六四番)に「午茶散悶功猶少 宿釀破愁醉半酣」(午茶に悶りを散かんとするも功猶少なく宿釀に愁へを破らんとするも酔ひ半ば酔なり)とあるのと、類似する用法と言える。

「いきどをる」について少し考えてみると、仮書きの例では、『誹諧初学抄』に
・黎倩^{ハレセン}宋ノ胡胆^{コトナル}庵^{アム}が妾也^{セラ}。こたん庵^{シタヌム}秦檜^{シエンホウ}がまつりごとの要をいきどをり侍て、秦檜をきらんと言訴状を天子へ捧奉るによりて、海南へ十年遠流せらる。

とあり、『滑稽太平記』の「池山正式の事」では、正式と重頼の揉め事の場面に、そして「安原正章・松江重頼確執の事」では、正章が重頼に腹を立てる場面に、それぞれ漢字「憤り」が見える。これらはアの「悶」とは異なり、単なる心の憂さを表現しているのではない。「いきどをり(憤り)」は心中の不満や怒りを意味する語として用いられている。

イ、喫^{スルトキハ}茶則^{ヨリ}破^リ悶^{ハラハラ}適^シ情^ニ

『淡々文集』(巻第一 第十五 寝覚)にも、これと同じ「破悶」が見え、アの用例と類似する。

ウ、知雨亭の秋日にふかく、川崎やが酒日々に厚し。訪れむこといづれの口ぞ。又一飲に相笑ひて、二秋の悶^{ハラハラ}を解むのみ。

『鴉衣』(厚有功子書)

以上のアからウの「悶」は、何れも「心の憂さ」を意味するものである。

エ、況^{シテ}ンやその上の風^ノ流^ム。山を見て後^{タシ}むきに跨^{マダラ}り。句を鍊^{ネツ}て手^ハ悶^{ハラハラ}をなしぬ。

丈艸『本朝文選』(巻之九 詩哥誹諧弁)

この文では、手の入り乱れる動きを「悶」で表現し、アからウまでとは用法を異にする。

オ、悶^{ハラハラ}まいと背中をたたく酒のむせ

右のオの「悶」には、校注者により「せ(くまい)」と振り仮名が付される。「そんなに焦らなくともいい」と解釈するのだろうか。それであるならば、この「悶く(せく)」は「悶(いきる)」に似た雰囲気を備えていると言える。「悶」を「せ(く)」と読むのも、「イキル」と同様に古辞書では見出せないヨミである。

このように、エ・オではアからウの用例とは異なり、意味範囲が広がり、「悶」は焦る情景を表現している。これら以外には『俳諧其傘』に「悶」とあるが、「悶」を「イキル」と読む例は見出せなかつた。しかしながら、ヨミには違いがあるが、用例オの「悶(せ)く」と、当該句での「悶(いきる)」の用法と類似するところがある。「悶(せ)く」も、心情が高ぶつて興奮している情景が思い描かれるからである。

それでは、『俳諧其全』や節用集でのヨミ「もだゆ」は「いきる」の意に通じるのか、次に、仮名書き「もだゆ」について考えていくことにする。

三 仮名書き「もだゆ」の用法

『俳諧類船集』では、「かく」の付合語に「蚊もだえ」の収録がある。「もだゆ」にはどのような意義が与えられているのか、『大言海』（大槻文彦著）には

（一）思ヒワヅラフ。ワヅラヒ苦シム。

（二）閑^{キンゼツ}絶^ス。デレル。詞ニハ出サデ、底ニハ絶エ入ラムバカリニ、イキドホル。

と記載がある。

俳文学作品での仮名書き「もだへ」の用例では、俳論書『説諧初学抄』（第二卷 好色のおとこ）に・待に久しく帰らざれば、もだへかねてみづから難波の浦より舟出して、「たつにあふまで」と、爰かしこを漕渡りける。

と『竹取物語』の一節を取り挙げた文で、龍の頸の玉を、早く持ち帰ってほしいと待ちわびる場面に「もだへ」を用いる。また、

・尻もかしらも扣く蚊もだへ

柴雫『末若葉』（第二）

・起兼る蟬のもだえや石の上

冬市『陸奥衛』「むつちどり二 夏部」

や土芳著の『蓑虫庵集』（一の詞書）にも「蚊もだへ」が見え、これら以外に、「羽抜鳥」（菊句『其袋』）「夏之部」、「獅」（木導一『蕉門名家句集』）などの、生き物が焦りもがく様子を「もだへ」と詠む。

『嵐山集』には

・灰もだへするやいそげばまはり炭

良次『嵐山集』（卷十三 冬部）

と、灰は生き物ではないが、早くまはり炭をと、やきもきしている情景を拡張的な用法で「もだへ」と表す。一茶の『父の終焉日記』では、四月二十五日の記事に「もだへくるしみもがき」とあり、五月十五日の記事には「一人もだゆるとも」と、病のために苦しむ父親を描写する場面に「もだゆ」が用いられる。これらの作品の中での仮名書き「もだへ・もだゆる」は、「いきる」とは異なる用法である。

以上のように、前項では、「閑」がどのような場面で使われるかを検証した結果、「心の憂さ・思い悩む・焦る」を表す場面の表現として使用されていた。それに対して、ここでは仮名書き「もだゆ」の用法についての検討を試みた結果、「待ちわびる様」、あるいは「あがき苦しむ様」を描写する場面に用いられている。それならば、「閑」あるいは「もだゆ」と、「いきる」の用法とは相違があるのかを、次に検証していくことにする。

四 「いきる」の用例

『江戸時代語辞典』（顕原退藏著）には「いきる【熱る】」の語叢に「熱くなる。いきまく。息を荒くして怒る」とあり、『大言海』では次のように記されている。

いきる熱^{（氣ヲ）活用セシム、（忘む、蔭る、雲る）倭訓采、いきる「鬱蒸ノ氣ヲ、いきるト云フハ、氣ヲハタラカシタルモノナルベシ」}

（一）熱クナル。ホトボル。イキレル。

（二）血ヲ沸シテ、息マク。力ミタツ。噪氣

「いきる」の意味を確かめた所で、近世の俳文学作品には、当該集のようになに春雨を「いきる」と描写する例があるのか、『古典俳文学大系CD-ROM』による検索を試みた。その結果、「春雨がいきる」と詠む例は見えなか

つたが、春雨と限定するのではなく、「雨がいきる」と描写する例は一例見える。因みに、一〇俳諧集中、当該集以外の「春雨」を詠む用例を挙げてみると、『正章千句』では

・（鳶の羽うかふ谷の雪汁 八八）

魚躍る淵の春雨しよば降て 八九

・（すつきりと朝の原は雪消て 五七九）

宵よりつよく降りし春雨 五八〇

とあり、八九番は前句「雪汁」、五八〇番は前句「雪消えて」からの付合語として用いられ、春雨が降る状況を「しよば降りて」「強く降りし」と表現されるが、「いきる」とは表現されない。『宗因七百韻』では

・（うぐひすもりとなるほどゝきす 一〇三 西翁）

春雨の布留の杉枝伐すかし 一〇四 西翁

・（雲雀の声もすたく口上 五三三 以仙）

半疊を打こむ斗春雨に 五三四 旨如

などと詠まれ、五三四番では、春雨が強く降る様子を「打ち込む」と表現する。

次に「いきる」の用例を挙げて行くことにするが、その中で、「雨がいきる」が

ア、五月雨や合羽の下の雨いきり 一〇三 西翁

と『古典俳文学大系』所収の句に見える。

右の句では、雨が勢いよく降る状況を「雨いきり」と表現される。しかし、合羽の下で雨が悶えるような様は表出されていない。その点で、漢字「悶」と振り仮名「イキル」で表す、当該集の「いきる」とに差異が見られる。雨のほかには、どのような場面で「いきる」が使用されているのか、いずれも仮名表記ではあるが、次に用例を列举して「いきる」の用法を検証して行くことにする。

イ、ばか踊歌やいきといきりもの 池島成之 『時勢粋』（追加秋部）

右の『時勢粋』は寛文年間の作品集であり、当該句よりも前に「いきる」が見える。

ウ、だかれてもおのこいきる花見哉 斜嶺 『炭俵』（春之部発句 花）

エ、いきりし駒に鞍を置かね 望翠 『芭蕉集』（連句編 松茸や）

オ、番羽織きていきるくみつき

カ、益徳で寺方いきる椀の音 緑水 『二えふ集』（穂）

キ、西は尾花川よりぜゞかけて数十人、手に余りて足までくじき、にがくしき顔つき、火燧に酔たるやら何に酔たやらむせうにいきり申候。『枇杷園隨筆』

ク、靄は片の香の佛を残し、雉子はむかしなつかしき匂ひをとゞめり。瘦て小兵とはいへ共、雲雀のいきりもの、水無月の靄・「とほこりける。『篇突』

以上のイからクは、物事に熱くなつて、興奮している様子を表す「いきる」の例である。自然の風物や現象が張り切つて、威張つている様を表す用例には

ケ、よいぞ嵐幟のいきり肩の花 濫吹『泊船集』（夏 旅行）

とあり、この句は『當流籠抜』板行の翌年に、才膺により編集された作品集に収載されている。「」では、嵐の勇ましさを「いきり」と表現するが、アの用例と同様に、「悶」が持つ語義は有していない。

コ、かぶる、なけふの細道草いきり

右の句以外に、桃妖・吏全（『蕉門名家句集』）にも「草いきり」と詠まれる句がある。「草」のほかには

サ、初霜や橋杭かくす水いきり

シ、若草にかすみわたるや地のいきり

ス、青梅やくもつて出る風いきり

のようには、草・水・地・風などが擬人化されて、勢いがある様子を「いきり」と表現される。また、何かが元気よく頑張っている様子を表す例には

セ、道端にいきりたちたる馬の糞

ソ、いきりたるやり一筋に挟箱

タ、庭火たくやあめ鞘巻のいきり者

貞怒『歴代滑稽伝』
及肩『ひさご』(雑)

卓志『曠野後集』(第八)

など、他にも「鶴鳩」(『國の花』第五)、「小鳥」(杜若『蕉門名家句集』)、「井」(自笑『作者小伝』)、「兵法」(李由『宇陀法師』)、「いきり者」(後清『後の旅』)、「小坊主」(米仲『江戸廿歌仙』第七)、「蟹」(巣兆『曾波可理』)、など幅広いものを対象として「いきる」と表現する例が見える。

一八世紀初めの淨瑠璃には

チ、是日那さま上物のうらがね二千足とだなに有ふ取出しくださりませとぞいきりける

『心中刃は氷の朔口』(10ウ)

ツ、かごをとばせて西口よりおろせがいきつて旦那お出といふより家内こりやめでたいとはだしでとんで門口

迄福の神のおむかひ

と、「いきる」は大変な勢いでまくしたてる情景を描写する。

因みに、「いきる」と語根を同じとする「いきどおり」についてでは「節で触れたが、今ひとつ、語根「いき」が共通する「いきだはし」について用例を通して考えてみたい。『當流籠抜』に、「いきだはし」が変化した語「いきどし」が、次のように、息苦しそうに鳴く蛙の表現として用いられる。

・(問歩がさかりて山吹の月 四七八 宗旦)

中戸にて息どしきうに蛙鳴 四七九 鐵幽

『おくのほそ道』(六月八日) では

・冰雪を踏でのぼる事八里、更に日月行道の雲闇に入かとあやしまれ、息絶、身ごじえて頂上に疊れば、口没て月顕る

と、疲れて息苦しい状態を「いきたえ」と表現する。

また、『けいせい伝受紙子』(一の巻)には「息だはしく申ければ」とあり、『浮世風呂』(前編 卷之上)では「息がせかくといきだはしいものでござるから」と、動作において息切れがする様子を描写する場面があるが、これらは「いきる」とは異なる用法である。

以上のように、「いきる」について用例を挙げ検討してきた結果、物事に熱くなつて興奮している様子、勢いがある様子を表現するのに「いきる」が用いられていたが、いずれも「悶」の漢字が持つ意義とは相違点がある。

五 「煩」と振り仮名の関係

次に『饅頭屋本節用集』で「イキル」の訓を付す「煩」について考えてみたい。俳文学作品に

ア、哀れ小猫の瘦て煩ふ

イ、気煩ひの風いたづらにふく

ウ、露ときえむ覺悟は暦の煩に

エ、一夜ふた夜のちはたんぼも煩し

オ、星は猶腹病煩の暑サかな

カ、冷る手を煩く迄とる別れ哉

志良

『末若葉』(別恋)

などと「煩」の用例が見える。ア・イには振り仮名が付されないが「わづらふ・わづらひ」と読むと想定できる。

ウからカでは「煩」に「わづらふ」「ヤミ」「ホメ」の三種の振り仮名が付され、カの「ほめく」は『天正十八年

本節用集』に「煩」^{ボクダ}とあり、『言海』では「イキル」と同じ「熱」の漢字を当てる。また、『言海』には「火めくノ意」ホトボル。ホテル。赤クナル。熱ス。と語訛が施され、「煩く」には「いきる」と意味領域を同じとする部分がある。

このことから、「煩」を「イキル」と読む例は見出せなかつたが、「煩」が「いきる」の意味を持つことは確認できたと言えよう。

また、『天水抄』では

・賈島が、「鳥は宿す池中の樹、僧は敲く月下の門」といふ詩を作り、「敲くと云字、おすと作べきか、いかゞ」と思案し煩ひで、乗たる車の板を、たゞきてみつをしてみつ、千度百度吟じわづらひてとあり、ここでの「煩ひ・わづらひ」は「病」の意ではなく、「思い悩む」意である。『伊京集』の「悶絶」の下注に「マトウ」の記事があること、並びに『合類節用集』の「悶」の下に記される「コヽロマドヒ」と同意をするものとして、「悶」の用法に相当するものである。

さらに、「煩」と「悶」が共通する訓として、『漢和二五韻』(一六八六年刊 元69才)には、「煩ヘワツラフ イキトホル イタハル」とあり、『字鏡集』(白河本)・『倭玉篇』(慶長一五年版)の「悶」に付される「イキドヲル」の訓と一致する。時代が下るが、もう一つ加えれば、『雅言俗語 俳諧翌檜』(一七七九年刊)に掲載される、『男節用集如意宝珠大成』(一七一六年刊)との本文対照表では、前者の「悶」に対して後者では、『合類節用集』『書言字考節用集』と同様に「悶カツル（煩同し）（言語）」と記されている。

したがつて、右のような事例から「煩」は「悶」の語義とも通じ、ここでも「悶」を「イキル」と読む道筋が成立する。

ただ、これまでの考察を通して、仮名書き「もだえ」と「いきる」の用例から考へてみると、両者が用いられる場面には違いがある。例えば前掲「四 いきるの用例」ウの『炭俵』所収の句「だかれてもおのこゞいきる花なり、花見にもだえ苦しむのでは、句として内容に差異が生じ好ましくない。故に「悶る」は個々の意味を持つ漢字「悶」と、振り仮名で示す「イキル」の二語を一体とした用語であると言える。

おわりに

本節では、『當流籠抜』所収の句で、「悶」に「イキル」と振り仮名が付されることに注目して、考察を進めてきた。

考察の進め方として、第一に古辞書類や中国の辞書による「悶」のヨミと、「いきる」に対応する漢字を調査した。その結果、「悶」に「イキル」の訓が与えられる例を見出すことはできなかつたが、「悶」の漢字に「イキル」の振り仮名を付す道筋は解明できた。

第二では「悶」の用例を挙げ、第三では仮名書き「もだゆ」が、どのような場面で使用されているかを調査した。また、第四では、「いきる」が使われる場面の考察、第五では、節用集で「イキル」の訓が付される「煩」の用法を検討してきた。これらの用例から、「悶」に「せく」を表現する用法があること、そして「煩」に「悶」と同義を表す用法があることと同時に、「ホメ(く)」と振り仮名が付される例があることを見出すことが出来た。あり、当該句では文脈での表現効果を高めるために、「いきる」に「悶」を対応させたと考えられる。

俳諧では、一句の限られた字数の中で、俳諧が目標とする、滑稽や諧謔を表すための工夫が見られ、そのひとつが本節で問題とした「悶る」の用法である。当該句では、前句を「髪先を一文字にして気取つてゐる」と捉え、それに付けて春雨を擬人化し、春雨が「高が假契買のくせに」と、假契買を非難する気持を「悶」で表現し、同

時に、いきまく様相を振り仮名「イキル」で表現している。このように、仮名書き「いきる」だけでは表現できない部分を漢字「悶」で補い、「悶」の漢字と「イキル」の振り仮名により、二つの映像を取り合わせた、独創的な表現法を採用していると言える。

注
1・江戸時代末の『魁本大字類苑』には「悶死」に「イキレジニ」と振り仮名を付す例が見えるが、この「イキ

レ」と『當流籠抜』の「悶（イキ）る」には意味的にずれがある。

・中国の『孔子家語』（卷三 第子行 第十二）では「悶」の下注に「悶／憂」と記す。

・『楚辭』（九章・惜诵）には「悶瞀して」とあり、注には「悶」に「もだえわずらう」、「瞀」に「心が乱れる」と記されている。

・『文選』では「文章編二（卷十八）」や「詩騷編三」に思い悩む意として「悶」が見える。

・『菅家文草』では、校注者により「悶」に「うれふ・もだゆる・いきたゆる・うらむ」などの振り仮名が施され、何れも思い悩む、或は憂鬱な心情を意味する語として用いられ、中国の用法に倣うものである。

以上のように、漢籍及び日本の漢詩『菅家文草』での検索結果も、「いきる」の語義に相当する用例は認められなかつた。

2、『遊仙窟』（五四ウ）に「少・時眼・華耳・熱（右傍訓シハラクアリテメカ、ヤキアツクシテ、熱の左傍訓イキリ）」とあり、『日本靈異記』（中巻序文）には「睞婢忝慮 風配耳熱（睞みて婢ぢ、慮に忝ク 風配リシ耳熱し）」とある。「熱」は感情が高まって、耳がほてり熱くなる状態を表わし、これらは「煩く」と同意と捉えられる。因みに俳諧集では、「イキル」に「熱」の漢字を当てる例は見えず、「熱」は「江戸菴食して熱る栗のごとし 秋風」（『洛陽集』雜秋）で「ムセ（る）」の振り仮名が付される。

参考文献

- *『浮世風呂』（日本古典文学大系 一九八二年第二刷 岩波書店）
- *『江戸時代語辞典』（顎原退藏著 二〇〇八年 角川学芸出版）
- *『魁本大字類苑』（一八六二—一八六六年頃成立 谷口松軒著 平成六年 雄山閣）
- *『雅言俗語 俳諧翌檜』（古辞書研究資料叢刊 第十卷 一九九五年 大空社）
- *『菅家文草』（日本古典文学大系 一九八一年第十二刷 岩波書店）
- *『漢和三五韻』（木村景編 古辞書研究資料叢刊 第五卷 一九九五年 大空社）
- *『けいせい伝受紙子』（新日本古典文学大系 一九八九年 岩波書店）
- *『孔子家語』（孔子文化大全編輯部編輯 山東友誼書社 一九八九年／新積漢文大系 第五十三卷 平成八年 明治書院）
- *『古今和歌集』（新日本古典文学大系 一九八九年 岩波書店）
- *『心中刀は冰の湖口』（『近松全集』第五卷 一九八六年 岩波書店）
- *『楚辭』（新積漢文大系 昭和四五年 明治書院）
- *『當流籠抜』（日本俳書大系 7 大正一五年 日本俳書大系刊行会）
- *『日本靈異記』（日本古典文学大系 一九六七年 岩波書店）
- *『俳諧類船集』（京都大学国語学国文学研究室 昭和三〇年）
- *『本朝無題詩全注釈 三』（本間洋一 平成六年 新典社）
- *『文選（詩騷編）三』（全積漢文大系 第二十八卷 昭和六一年五刷 集英社）
- *『文選（文草編）一』（全積漢文大系 第二十七卷 昭和五一年二版 集英社）

*『山崎与次兵衛寿の門松』(『近松全集』第十巻 一九八九年 岩波書店)

*『江戸八百韻 逆仙窟本文と索引』蔵中進編 昭和五四年 和泉書院

*『徳西本 逆仙窟總索引』康永三年書写醍醐寺宝蔵本 平成七年 浚古書院

*『江戸八百韻 逆仙窟本文と索引』(『江戸八百韻』著者本) 浚古書院

雲喰ひ・滑稽太平記・嵐山集・作者小伝・蕉門名家句集・しら雄句集・炭俵・続有磯海・曾波可理・淡々文集・父の終焉日記・天水抄・天満千句・となみ山・泊船集・投盆・一えふ集・後の旅・俳諧初学抄・俳諧其傘・俳諧之註・芭蕉集(発句編・連句編)・坂東太郎・ひさご・枇杷園隨筆・篇突・本朝文選・まつのなみ・歴代滑稽伝以上『古典俳文学大系』一巻、一六巻 昭和四五年、四七年 集英社

(検索は『古典俳文学大系 CD-ROM』集英社による。)

第三節 『江戸八百韻』に見える「哆」の訓みについて

はじめに

第二章では漢字とヨミとの関係など特殊な漢字を取り上げて、第一節では『江戸八百韻』の「婀娜・艶」について、第二節では『當流籠抜』の「悶る」について用字考証を行つてきた。本節では、一節と同じ『江戸八百韻』の中に、前句「爰に鳥おどし強弓ツヨを引(幽山 五八八)」に続けて

哆ツヅの中もはなれし庵の月(言水 五八九) 懸のかゝも世をうらむ露(如流 五九〇)と「哆」を「アツカヒ」と読む句が見えることに注目して、考察を加えていきたい。

右の句は、仲直りをさせようと取成している間に庵に差し込む月影はどこかに行つてしまつたと、「哆」は仲裁

されることがないからである。

今回資料とした『江戸八百韻』は『俳諧大辞典』や『日本俳書大系』の解説によると

(略)幽山編。延宝六年(一六七八)刊。幽山の発起で江戸の新しい俳諧師八人、すなわち幽山・安昌・来雪・青雲・言水・如流・一鉄・泰徳らが興行した八吟八百韻を収めて一集としたもの。既に談林調にも慊らずして更に何らかの新句境を開拓しようとする要求が表に發し、俳風革新の第一声を挙げたものとして俳諧史上注目すべき作品である。作者のうち一鉄は『談林十百韻』の一党であるが、他は宗因の直系ではない。
:(略):

貞門の無氣力にいや気がさして、談林風に同じ、それにも亦慊焉たるものがあつて、新風體にあせつてゐた時代的煩悶が、この八百韻にも反映してゐるようと思はれる。(『日本俳書大系七』日本俳書大系刊行会)と述べられ、談林派の俳諧では一節の「婀娜アツカヒ」、一節の「悶るツキ」の用法とともに、語と漢字との関係にも新句境を開拓する様相があらわれていると言えよう。

テキストには、天理図書館綿屋文庫の『江戸八百韻』を使用し、『江戸八百韻』以外の九俳諧集は、『近世文学資料類從 古俳諧編』(勉誠社)所収を使用した。なお、用例の傍線は稿者が付記したものであり、俳諧の句番号は、便宜上、その俳諧集での通し番号を示すものである。

○漢字字書

ア、新撰字鏡（天治本）「哆」
ヘ丁羅反張口也緩脣也 又丁佐反言猶脣垂也

イ、類聚名義抄（觀智院本）「哆」
ヘ陟加反 張口 又多音 又昌者反 脣下 オホクチ 禾タシ 處希反（仏中

四二・四）

ウ、白河本字鏡集（一一卷）「哆」
(左訓シ) (ヲホクチ ハタカリテ ワタヽシ)

エ、倭玉篇（夢梅本）「哆」
(左訓シヤ) (張口也 (左訓クチヲハルナリ) 脣下垂兒 (左訓クチビルシタニタル))

オ、倭玉篇（篇目次第）「哆」
(處紙切シ反 ヲホクチハタカリ 皮墮脣垂)

カ、倭玉篇（慶長一五年版）「哆」
(ハタカリテ ヲホクチ)

○国語辞書（節川集など）

キ、運歩色葉集「哆」
(一人)

ク、伊京集「哆」
(タラス)

ケ、合類節用集（卷八下）「扱」
(左訓サウ) (又押同取扱) 暖 (左訓アイ) (又哆) (左訓アツカヒ) 同

コ、書言字考節川集（第十一冊）「言辭門九」「扱・和諭・哆」
(俗用此字或用暖字於義未詳)

サ、併字節用集（上九）「哆」
(ハタカル) (口を) (節用集大系 六〇卷 大空社)

シ、漢和三五韻（坤卷 麻17才 一六八六年板）「哆」
(クチハル ヲホクチ) 上聲哿韻 口又麻韻 張口也

（古辞書研究資料叢刊 第五卷 大空社）

ス、雅言俗語 併諺翌檜（言語 一七七九年刊）「哆」
(すかすなり) (古辞書研究資料叢刊 第一〇卷 大空社)

この『雅言俗語 併諺翌檜』に掲載される『男節用集如意宝珠大成』（一七一六年刊）との本文対照表には、「[男]哆
すかす也（言語）」の収載が見られ、「哆」のヨミと意味は両者とも同じであることを示している。

また、中国の辞書では以下のような収録が見える。

○中国の辞書

セ、說文解字注「哆」
張口也 (小雅哆兮侈兮毛曰哆大兒) (中華民國六五年 全國各大書局)

ソ、字彙「哆」
(馬昌者切車上声張レ) (詩小雅哆) (兮侈兮又大) (口貌又唇下垂貌又衆意) [左傳] (足哆) (然外齋

侯) 也又紙 (尺切音恥義) 同又禡 (正亞切音咤義) 同又哿 (丁可切多上聲義) 同又叶語敵 (凸切音杵) 韓昌黎元和聖德詩

焰噓呵高蓋下墮 (星徒坐錯落侈哆) (墮音吐) (和刻本辭書字典集成 第三卷 汲古書院)

タ、大廣益会玉篇「哆」
(左訓シヤ) (處紙尺寫) (一切張口) (和刻本辭書字典集成 第二卷 汲古書院)

これらに『異体字研究資料集成』所収の『古俗字略』（二期八卷 卷三・三七）と『五經文字』（別卷一 下三

六）を付け加えておくと

哆（大口） 離參（並同上） 『古俗字略』

哆（昌志反昌也反大也見詩大雅） 『五經文字』

と収録がある。

以上のようにセからタの中国の辞書では口を張る、唇下がり垂れる、大口の貌という義であり、右の『古俗字略』『五經文字』と共に、いざれにも「アツカヒ（フ）」に対応する義は見られない。『江戸八百韻』五八九番の「哆」は、同じ字形であっても中国の字義とは対応しない日本独自の用法であると考えられる。

日本においても、アからカの辞書とシ『漢和三五韻』の「哆」に対する義では中国の辞書と一致する。「哆」を「アツカヒ（ヒ）」と読むのは、近世期に入つてからであり、一六八〇年成立の『合類節用集』と一七一七年成立の『書言字考節川集』に「哆」に「アツカヒ」の訓が見え、当該集の成立が一六七八年であるので、それ以後の辞書ということになる。

それならば「アツカヒ（フ）」に対して、辞書ではどのような漢字が当てられているかを次に示してみたい。

チ、新撰字鏡（天治本）「喝」
(月反)

傷熱也阿豆加布

ツ、類聚名義抄（観智院本）・徳（多勤反）ノリ サイハイ メクム トル ヲクル アツシノホル アツカフ

テ、色葉字類抄・育（アツカフ）・暁（同）（前田本 下三〇ウ／黒川本 下一五オ・ウ）

念熱（アツカフ）敦養（同）（前田本 下四〇オ／黒川本 下二二才）

ト、温故知新書・機・熱・暁・・馮仙・・曖・暎・礼（以上態藝門）

念熱（複用門）

ナ、蓮歩色葉集・扱・曖・操・大事・念熱

ニ、倭玉篇（篇目次第）・熱（如折切 セチ反ネチ反 アツシ アツカフ アタ・カ タクマシ 温盛也）・熱

（在火見 如雪切 トモス アツカフ）（イユフ ヨテ アツカフ イ 馮同共）

ヌ、倭玉篇（慶長一五年版）・扱（左訓サツ）ヘトル アグル ヒク ヲサム ウルサンハサム アツカウ）

ネ、伊京集・扱・擣・禪・宰・捗

ノ、明応五年本・易林本・扱

ハ、天正十八年本節用集・扱・宰・捗

ヒ、饅頭屋本節川集・扱・曖

フ、黒木本節用集・扱・宰・捗

ヘ、俳字節用集・和諭（曖／扱）

「チ・ツ・テ・ニ」の漢字辞書以外では共通して「アツカヒ（フ）」に「扱」の漢字の収録が見え、「ツ・テ・ト・ナ」などに収録される「念熱」または「チ・ト・ニ」の「熱・暁」などは熱くて苦しむ様を表し「仲裁する」とは意味が異なる。しかし、次の『日本国語大辞典』の「あつかい」の語訳には以下のようない記事があり、『角川古語大辞典』にも「熱かふ」と「扱ふ」の関係の記事が見える。また、『大言海』でも「悶熱」から他動詞に転じ

たのが「扱ふ」であると記す。

古辞書での「喰」の収録状況や「アツカヒ」の漢字表記を見たところで、国語辞典での「あつかい」に対する語訳、また、古文書辞典などの記事を、次に紹介しておくことにする。

ホ、日本国語大辞典（第二版二〇〇一年 小学館）

あつかい【扱・曖】（名）

（一）あれこれと世話をすること。（二）あれこれとうわさをすること。（三）両者の間に立つて争いをとりなすこと。訴訟や紛争の仲裁。調停。示談。（四）かしらとして人々を取り締ること。（五）人の相手になつて話したり、もつなげたりすること。（六）あれこれと操作して動かすこと。（名詞の下に付けて接尾語的に用いる）事物の取扱い方。（七）あておこなうこと。支配すること。（八）物事の処理。：

あつかう【扱・曖・刷】（他）

右の名詞とほぼ同じ意が記され（一）から（五）を省略する。（六）両者の間に立つて争いをやめさせる。仲裁する。

【語訳】（1）もとは自動詞「あつかふ（熱・暑）で、熱・病・心痛など「事態に対しても身をもつて苦しみ煩う」ような意であったものが、「身を煩わせて事態に対処する」意に転じ、他動詞に変わつていいくのにともなつて、「身を煩わせる」ことよりも「事態に対処する」ことの方に重点が移り、やがて前者の意味特徴は忘れられ、単に「物事を処理する」意となつたものか。

（2）中古から中世前期の物語などの例では、何に対処するかによって、さまざまな文脈的な意味が見られるが、かかわりを持つ事態のためにあれこれ心を尽くして身を煩わせる点では共通している。中世後期から多く見られる（六）の用法も、他人のもめごとに對して身を挺して処理するところから生れたものと思われる。

(1) アツカフ（悶熱）が本義の病惱する意から、気づかう意に転じ、これを他動詞に用いた語。モニアツカフというのが正しいか〔大言海・日本語源〔賀茂百樹〕〕。(2) アテツガフ（宛番）の約転〔言元梯〕。

(3) アシツカフ（足使）か〔和句解〕。(4) アツマリクハフ（集加）の略〔紫門和語類集〕、(5) アヅカ

リオフ〔預負〕の義〔日本語原学〔林龜臣〕〕。(6) アヤツル、カナハムの反〔名語記〕

マ、角川古語大辞典（一九八二—一九九九年 角川書店）

あつかひアツカイ【扱】名①世話をすること。②協定・裁判。また、仲裁示談。

あつかふアツカウ【扱・繕】一動ハ四 その場その場の状況に即応しながら対象を処理する意。①あれこれと面倒を見る。②看病する。③取り沙汰する。④お相手をする。⑤処置に困る。⑥物品を操る。⑦中に立つて争いの調停に当る。仲裁する。二補動ハ四 動詞の連用形に接し、上の動作を苦心しながら行う意や、重荷に思いながら事をなす意を添える。平安時代にはこの用い方が多い。

あつかふアツカウ【熱かふ】動ハ四 「あつし（熱）」の語幹からの派生。熱さに苦しむ。熱がる。暑さのために悩み煩うところから、処置に窮する意に転じうる契機を持ち、てこずる、もてあます意の他動詞「扱ふ」との交渉が考えられる。

ミ、時代別国語大辞典室町時代編（一九八五年 三省堂）

あつかひ【扱】「扱・宰・搾」（黒木節用）「取り扱うこと。または、交渉すること」（日葡）○人や事物を対象としてあれこれ働き、何らかの処理をすること、また、その処理。①人の相手になつて、その人に対する評価に応じた対応、取扱いをすること、もてなし。「あひしらひ」。②ある人や事柄を話題としてあれこれと各自の意見を述べること。③特に、世間を騒すいたずらな取沙汰。④めんどうな事柄や複雑な事態をとりさばいて処理すること、⑤意見や立場を異にするものの間に立つて事態をとりまとめ、また、妥協・和解するようになりなすこと。調停。仲裁。⑥一群の人々の長として監督し、物事を取締ること。または、その役、使つたり、働くせたりすること。また、そのやり方。「搾手にて物をなおす也」（和漢通用）②多く「～あつかひ」の形で、そのものにふさわしい、しかるべき使い方、取扱い方をいう。

あつかふ【扱ふ】（動四）「扱」（易林節用）「扱・搾」（正宗節用）「扱・曖」（饅頭節用）「宰・扱・搾」（天正節用）「手、言葉などで処理する。口、手、足などで処理する」（日葡）語訳は名詞とほぼ同じ。

ム、大言海（昭和七年 富山房）

あつかひ（名）一扱一（一）アツカフコト。アツカフ仕方。待遇（二）戦争、争論、訴訟ナドノ仲裁。和解。調停

あつかふ（他動、四）一扱一（一）モテアツカフ。（二）計ラヒ行フ。取りサバク。（三）モテナス。（四）戦争、争論ノ問ニ入りテ、中直リセシム。仲裁ス。媾和 和解 調停 〔〕。

右の『大言海』の「扱」の語源には

「あつかふ」（白動四）一扱一（一）火ノ熱キニ皆シミ惱ム。（二）思ヒヲ焦ス意ニ転ジテ、悶ニ。焦慮（三）轉ジテ、心シラヒス。氣ツカフ。懸念ス。ノ（二）ノ意ノ、他動に轉ジタルナリ、もてあつかふト云フガ正シキナルベシ」とある。

メ、古語大辞典（一九八三年 小学館）

あつかひ【扱ひ】アツカイ（名）①世話をすること。②交渉や訴訟などの斡旋・調停をすること。

あつかふ【扱ふ】アツカ（コ）フ（他ハ四）①世話をやく。②取り扱う。③もてなす。④噂する。⑤処理に苦

しむ。⑥中に立つて事を治める。調停する。仲裁する。

以上のホからメの国語辞典の用例では、「アツカヒ」に「扱・曇・刷・縫・捲」の漢字は見えるが、「哆」を用いる例は示されない。

○古文書辞典

モ、古文書古記録語辞典・曇　あつかい　哆、扱とも書く。①世間のうわき、評判。②支配、領知。③紛争解決のための仲裁、調停。紛争当事者がその解決を第三者に委ね和解する制度（中人制）。貸借、売買、土地争いなどの民事と、刃傷、殺人などの刑事、また合戦などの仲裁にも及んだ。その裁決は折中の法、中分の法により、両者に不満や遺恨を残さないようにする点に眼目があつた。（東京堂出版　二二一頁）

ヤ、古文書大辞典・あつかい　曇・哆・扱・刷　①扱いと同じ。あれこれと世話をすること。紛争などの調停をすること。②近世用語では仲裁、調停人などをさし、訴訟などを内済し和解させること、また、その人の意。

取扱ともいう。（柏書房　八貢）

ユ、国史大辞典（一・二・一〇・一二巻）（吉川弘文館）

・「扱」（あつかい）・江戸時代における内済（ないさい）、すなわち第三者たる私人が介入して争いの当事者間に和解を成立させること。曇とも書き、取扱ともいう。：

・「曇」（あつかい）・鹿児島藩の地方職制の一つ。外城における最高の郷役人：（略）：合議によつて事を決し、地頭の指揮を仰ぐ。：

などとあり、「鹿児島藩」及び「麓」の項にも「外城内行政には衆中から曇（あつかい、郷土年寄）・組織・横日の所（ところ）三役以下の役職を地頭が任命し」など、職名として「曇」が登場する。

ヨ、日本難訓難語大辞典（井上辰雄監修　雄子館）

哆　あつかい・あつかう・たらす

二 「哆」の用例とヨミ

前掲の古文書辞典での「あつかい」の項では、「曇・哆・扱・刷」などの漢字が見出字として当てられている。

そこで、古文書における「哆」の用例を探すこと試みたが、「哆」の用例は見出せず、「曇」と「刷」の漢字表記による用例のみである。「哆」の用例では、時代が遡るが『本朝統文粹』（巻第一　雜詩）に

門熟安木梗　挟箭共哆爲（門熟木梗を安んず箭を挟み共に哆爲たり）

と見える。「哆爲」は『文選』にも「哆爲頗頰」と見え、脣の垂れ下がつて正しくない様を意味し「仲裁」の意味ではない。それならば、近世初期の俳文学作品では「哆」が見られるか、『古典俳文学大系CD-ROM』により、「哆」と同時に『節用集』に収録がある「アツカフ」に対応する漢字を検索してみることにした。その結果「捲・観・宰・捲・撲・和諭」などの漢字は「アツカフ」としての使用が見えず、「曇」または「扱」が当てられている。

『古典俳文学大系』所収の句では、ただ一例次のように「哆」の漢字表記が見えるが、「哆」に付される振り仮名は、「アツカフ」ではなく「タラス」と記される。

①あたゝかに哆タラスといふが小春哉 白雪『燕門名家句集』

右の句意は、暖かいので春のようだと騙されそうであるが、季節は小春（十月）である、と解釈するのだろう。

「哆」に付された「タラス」のヨミは、第一項に掲載した『運歩色葉集』に「哆タラス（一人）」、「伊京集」に「哆タラス」と見え、少し時代が下り、一七七九年刊の『雅言俗語 俳諧翌檜』（言語）にも、上述の『運歩色葉集』『伊京集』と同じ訓が記され「哆タラス（すかすなり）」とある。

「哆」は中国での字義、或は古辞書での「哆」の注に記される「脣が垂れ下がる」の「垂れる」から、「垂らす」と「誑す」が混同して、たぶらかす・子どもをすかしなだめるなどの義を表すようになつたのではないかと推測する。これまでの調査結果では、「哆」は「哆爲」と①の「哆（タラス）」の用例しか見ることが出来ず、「アツカヒ」に「哆」を当てる例がない。前掲の用例「モ」「ヤ」の古文書辞典では「あつかい」の見出し語の漢字に「哆」が当てられ、その記事中「哆」以外の用例は見えるのに、何故「哆」の用例が示されないのか、そこに疑問点が指摘される。そこで、少々付会の感を免れないが、「哆」を何故「アツカヒ」と読めるのか、以下のように分析を試み、推測してみることにする。

一つには「曖」の崩し字からの誤用ではないか。一つには『大言海』に「扱ハ、手及ノ合字、手ノ及ブ意、古写本節用「扱」曖ノ字ハ、親愛ノ口入ノ合字、玉篇「曖、曖氣也」ノ義ニハアラズ」とあるのに倣えば、「哆」は多くの口入の合字となる。「モ」の「曖」の項に「合議によつて事を決し」とあり、調停はことばで処理するから口偏を用い、複数の人が関与するから旁には「多」を付け、意味を考慮した「哆」の漢字が選択されたとも捉えられる。二つ目には「多口」という漢語があり、『大漢和辞典』での訓義には「口数が多い。多言。」などと記される。また『唐話辞書類集 第二集』（唐話爲文箋）には「多口タラス（ヲウモノイフ）」、同書第三集（忠義水滸伝

鈔譯）には「多口人（クチマメナル人）」とある。この「多口」の一字の合字として「哆」を転用したのかと様々な仮説を立ててみたが、いずれも確信をもつて、その傍証を固めることができない。

そのような中で、「哆」は『白河本字鏡集』『倭玉篇』（慶長一五年版）の下注に記される「ハタカリテ」の意味を持つことに注目してみた。『日本国語大辞典』での「はだから」の語義には、「聞き広がる。相手の前をふさぐようにして立つ。立ちはだから。騒動が起きる。」などと記されるのが見える。五八九番の句を争いの当事者の間に立ちはだからて、揉め事を解決すると解釈し、「哆」を「立ちはだから」と「あつかふ」の情景描写の表現に用いたとするのが、最も妥当であると考える。

参考までに『唐話辞書類集 第九集』（徒杠字彙）に見える「哆」の用例を記しておくことにする。

那哆タラス（船ノ主）（卷之二） 哆口横議（大言ヲ吐コト）（卷之五）

以上のように、現段階では、「哆」を「アツカヒ」と読む事例を見出す事が出来ず、『江戸八百韻』での用法は、個人的な用法なのか、今後も用例を探し出し検討する必要があり、なお究明するには至っていない。

齋木一馬氏の『古記録の研究』（上 齋木一馬著作集1）には、既存の辞書は「収録されている語辞についても、訓みと語義どが必ずしも明瞭・的確には示されていないものが多いこと」、また「語辞の実際の用例に接し得なかつたこと」に基因する不備があると指摘がある。さらに既存の辞書が「古文書・古記録を解説する上に十分に用を使じないとすれば、どうしてもわれわれ自身が直接に採集し」「訓みと語義とを解明する努力を払わなければならぬ」と述べる（二四二頁）。斎木氏が近世初期の武家記録の特殊な語辞を『上井党兼日記』に見える語と他の古文書・古記録から若干援用して例解が示されている中に、「アツカヒ アツカフ」があるのでここに示しておきたい。

曖（扱）アツカヒ アツカフ うわさ、評判、支配、領知、調停、仲裁、和議、講和、
もあり、次のような用例が挙げられている。（例文は省略した）

『上井覚兼日記』（天正一・八・十六）〔天正三・四・九〕〔天正十・十一・廿〕〔天正十二・十一・十五〕〔天正十四・八・廿四〕、『細川両家記』〔天文廿四・九・廿七〕〔弘治元・正・十三〕、『大友史料』〔永禄十一・正・十三・久我晴通書状〕〔天正八・二・十六・立花道雪書状〕、『上杉家文書』〔元龜三・六・十八・直江景綱書状〕〔元龜三・十・六・上杉謙信書状〕、『家忠口記』〔天正十六・閏六・十〕、『和良家文書』〔文禄一・九・七・十九・小西末郷書状〕、『慶長日件録』〔慶長十一・十一・十一〕（『古記録の研究』一四九・一五〇頁）但し、これらに使われている「アツカヒ アツカフ」に対する用字はすべて「曖」である。

三 「曖」について

齋木一馬氏の前掲の書では、「記録・文書の大部分は、その全文を真字書きにすることを原則としているために」「和製漢字・和製漢語の類が少なからず混在する」（二三〇頁）と述べ、原義と異なる特殊な用い方をした漢字の中に「曖〈アツカイ〉」がある。

前項での『古典俳文学大系CD-ROM』の検索結果で、俳文学作品に「アツカヒ」に対応する「曖」の用字が見えることから、ここでは「曖」について考えていただきたい。

節用集では『合類節用集』に「曖」と収録が見え、『異体字研究資料集成』所収の『和字正俗通』（九卷 4才言詞）にも「曖・拔」と見える。しかし、『色葉字類抄』（黒川本）では「曖ナクサム」、「白河本字鏡集」「曖〈ナクサム ヲウ〉」、『異体字研究資料集成』所収の『倭字攷』（九卷 15才口部）にも「曖 今昔物語廿六第五條」とあり、これらには共通して「ナクサム」のヨミが与えられる。また『倭玉篇（篇目次第）』には「曖〈烏蓋切 イ反 氣也〉や『大漢和辞典』には【曖】アイ・ガイ いき。あたたかい氣。おくび。歎詞。いたみをしむ情を表はず。」とあり、「あつかふ・なぐさむ」の訓義は見えない。中国の辞書では

『字彙』曖〈泰於蓋切音愛曖氣也〉

『大廣益會玉篇』（第五）曖〈烏蓋切曖氣也〉

と収録があり、どちらにも「曖氣」の注が記される。ちなみに『説文解字注』には「曖」の漢字の収録が見られない。

辞書類での収録状況に統いて、次に「哆」と同様に「曖」についても『古典俳文学大系』で用例を検索した結果を以下に示しておきたい。

②此曖は浪の声々（一一六）とても損人かたにして捨小舟（一一七） 『俳諧大句数』（第三）

前句「八百日ゆく浜つたひにも牛に乘」の浜から浪を付け、「紛争を仲裁する声は波の打ち寄せる音のようである。」と詠む。

③町中をよべばこそ爰に來りたれ（均朋 八七一）よい曖のかかる公事宿（西鶴 八七一）『大坂櫻林桜千句』右の「曖」の語注には「仲裁」と記される。句意は「訴訟事件で地方から出て来た人たちが泊る宿では、よい和解策が示される。」と解する。

④談合して曖やうがあらふ物（一一七七）欲をはなした京中の医者（一一七七）『一葉集』右の句は「話し合えば仲直りの方法があるだろうに。」の意と捉え、③と同様に「曖」は「仲裁」を意味する。

⑤曖衆綱碇にてかかる露（五一六）無常の敵はよせつけぬ床（五一七）『阿蘭陀丸二番船』（梅翁独吟）これらの句以外に俳諧論書『ふたつゑ』では、高政と随流の論争を奉行所に差し出した訴状の形式で両者の主張を述べさせ、それに判を下すという趣向の中に、⑥のような例が見える。

⑥・曖を仕りまして、占風を畏敬する處の辟をやぶらせ

・前句何様のうつりにても、ひくりかへさず。「さゝめごとの山」「曖」の山、高政きこゆるか。（「曖」の振り仮名「ア」は校注者が底本の脱字を補つたものである。）

・ 暖に入て真中に真直に立、「此様にめされよ」といふたれば

『和漢文操』(△『文選』「冊類二」)

右の⑦の引用文献である『和漢文藻』は、②から⑥の作品集より時代が下り一七一二年に成立した詩文を集めを加えたものである。⑦では前の②から⑥の用例とは「暖」の用法が異なり、これまでのような調停や仲裁を意味するものではない。ここでは「口」には関係なく、言葉を表す文字をうまく工夫している様を表現している。

今ひとつ『古典俳文学大系』に所収されない西鶴の『大矢数』での用例を次に挙げておくことにする。

⑧秋の風あらぐな吹そ暖に

第二卷・一二

⑨此暖はのけて置しやれ

第一卷・一九

⑩暖きかすにいかなるか末

第二卷・一一

⑪暖ふからは爰をせにせよ

第三卷・三一

『大矢数』では「アツカヒ」の漢字表記には「暖」のみが与えられ、すべて「仲裁する。調停する」の語義として使用され、調査資料とした俳諧作品集では、「暖」を「ナグサム」と読む例は見えなかつた。俳諧以外の例として、西鶴の浮世草子での「暖」の用例を次に挙げ、その用法を検討していただきたい。

(解釈は『新編日本古典文学全集』『新日本古典文学大系』などを参照した)

⑫藤六申は、ふたつに分たる家を、皆藤七にとらすべしと申せば、やうやう暖ひ済て、藤六は刀ばかりとつて家を出、向後百姓をやめると、都にのぼり

『西鶴諸国はなし』卷一 神鳴の病中

⑬両町きゝつけさまべくに暖へどもきかざれば、やうく四人につくり髪をさせ

注「暖へ」=和解させるために仲裁を試みること

『西鶴諸国はなし』卷三 お霜月の作り髪

⑭いかにしても、女郎の裸はと尻からげに暖ひ、作り髪のかはりに眉墨を一方おとさせ

⑮金銀の欲にふけて暖にして済し手ぬるく命をたすくるがゆへに

『好色五人女』卷二 こけらは胸の焼付さら世帶

⑯は、長男と次男の刀の相続をめぐる争いに対する親戚の人たちの調停、⑰は、いたずらをされた男が住む町の人たちと、いたずらをした男達が住む両町の者が間に入り、和解させること、⑱は、女郎の裸はと仲裁して許すこと、⑲は、金銀で示談にすること、などを「あつかひ」と表現し、「暖」の漢字を用い、「暖」以外の漢字表記は見られない。右の②から⑤と⑧から⑯の用例は西鶴作、或は西鶴編など西鶴に関する作品での用字であることは注意される。

古文書においては、「哆」の用例は探し得なかつたが、古文書辞典の見出し語に対する漢字表記の中に「暖・刷」も見えるので、両者の用例を提示しておきたい。

⑳十月十六日、當地江戸罷立、中途へ打出候處、御同名新五郎方藤田右衛門佐、小幡其外和談取刷由申来候(略)

遂對談候間、定當座之刷計儀与存之候處

(北条氏綱書状・上杉家文書 大永四年)

㉑一塚原陣之時、以駿河之暖無事、既驚神慮、以誓詞申合、翻翌日事

(上杉家文書 永禄七年)

上杉家文書にはこれら以外にも「暖」(永禄十年十月六日など)や「刷」が使用されている。「刷」は必ずしも「仲裁」の意として見えるのではなく、「所々御料所へ御年貢御催促候、御刷之御年貢義も」と年貢の催促の場面で「取り計らう」の意味を表している。

㉒今度秀吉其國鉢桶之段、無心元候、然者、和睦儀是非共暖度候(足利義昭御内書・島津家文書 天正十四年)など義久・義弘に秀吉との和睦を促す「足利義昭後内書」や、伊集院忠棟に宛てて使者を薩摩に下す「足利義昭後内書」などに「暖」の用例が見える。

㉓御折岳披見申候、仍源一郎暖之儀、表裏之由曲言候、委細從兵庫頭殿可被仰候之間、令省略候、恐々謹言

⑯の用例では、源二郎（忠眞）による和睦の仲裁に關し表裏があると、仲裁に「曖」の漢字を當てる。これら以外に『近世古文書辞典』に挙げられている用例でも「あつかい」に対する漢字は「曖」或は「刷」であり、「哆」が用いられる例を見ることができない。一〇俳諧集中「刷」は『當流籠抜』では「ハケ」と読み、『軒端の独活』では

繡 ^ウ 霞を刷 ^{シラフ} ゼイ婦人多 ^{シテ} 晓夕寥 五一四

と「ツクロフ」と振り仮名が付され、身なりを整える意を表し、仲裁する意ではない。

以上のように「曖」が西鶴の浮世草子や古文書に多用されていることから考えて、「アツカヒ」に「曖」を対応させるのは特殊ではなく、近世の用字の一般的傾向を示していると考えられる。但し、文学作品の用例のうち、②から⑤と⑧から⑯は西鶴が関与する作品であり、一節の「姫娜」も西鶴の浮世草子にいくつかの用例が見え、「姫娜・曖」の内語は西鶴が好んで用いた漢字であるとも言える。

四 「扱」について

前項に引き続き俳文学作品に「扱」の用例も見えることから、ここでは「扱」の意味用法を考えていきたい。現在の「あつかい」に當てられる常用漢字は「扱い」である。『古典俳文学大系』所収の句のみでの「扱」の使用状況を調査してみると

㉚芭蕉葉の破れし喧嘩扱 ^{ハサフ}	利方	『天満千句』六一
㉛いさかひは扱ひすとも心あれな	宗因	『宗因七百韻』一〇〇
㉜其中に三羽扱ひしほらしき	千石	『金龍山』一一五一

㉝扱ふて花ぬす人に負渡し	梅房	『其角十七回』五八八
㉞本閉じるごとく扱跡もどり	大圭	『草むすび』四五
㉟なま醉の取扱ひもところてん	黒己	『梨園』二一九
㉟旅人の箸で扱ふかやりかな		『蒼虹翁句集』四〇六

などが「あつかふ(ひ)」と読むと推定できる例である。㉚㉛㉜㉝は当該句の「哆」と同じ意として用いられる。このほかにも「うきつしづみつ石仏で扱」(其角十七回・七七四)や「そら豆の花にせかるる扱茶かな」(薦本集・一八〇)のよう、「扱」の漢字が見えるが、これらは校注者により「こぐ・こき茶」と振り仮名が付され、手でこする、或はむしりとることを「こぐ」と云い、仲裁・調停を意味する「あつかう」とは意味の相違がある。

㉚㉝は取り計らう・取り扱うの意であり、これらも「仲裁・調停」の意味を表すものではない。

西鶴の『大矢数』では、前掲のように「アツカフ」を漢字で表記する場合は、すべて「曖」であり「扱」は使用されない。その結果、『古典俳文学大系』所収の句と同書に所収されない『江戸八百韻』に『大矢数』を合わせると、「アツカヒ」に「曖」を当てるのが、俳文学作品では一〇例(浮世草子は除外)、「扱」は、ヨミの異なる「こぐ・こき」は除外して、仲裁・調停以外の義を含めると七例の用例が見える。

同じく『古典俳文学大系』所収の句における、仮名書き「あつかふ」を検索した結果、一二件の用例があり、仲裁して仲直りさせる意では、例えば次の㉗のような用例が見える。

㉗酒の喧嘩を洒であつかふ

餅夢 『渭江話』五二

また

㉘隙くれし妹をあつかふ人も来ず

㉙ひぢにすへすねであつかふやたか檀紙

長頭丸

『嵐山集』七四六二

㉚じねんごにもてあつかふや今年竹

作者不知 『続境海草』二六七

芭蕉 『芭蕉連句編』ためつけて(歌仙)一二二

芭蕉 『芭蕉連句編』ためつけて(歌仙)一二二

芭蕉 『芭蕉連句編』ためつけて(歌仙)一二二

芭蕉 『芭蕉連句編』ためつけて(歌仙)一二二

①五月雨にもてあつかふははしご哉

里東 「ありそ海となみ山」（ありそ海）四〇七

などとあり、これらの「あつかふ」は、②は面倒を見る、③大切に取り扱う、④もてあます・取り扱うなどを表現し、⑤から⑥における「扱」の用字、或は仮名書き「あつかふ」は「哆」や「曖」より幅広い場面の表現に使用される。

おわりに

以上のように、「哆」を「アツカヒ」と読むことについて検討してきたが、『合類節用集』と『書言字考節用集』の辞書以外では「哆」に「アツカヒ」のヨミが与えられる例を探し出す事が出来なかつた。「アツカヒ」は、当該句の「哆」、或は同じ「アツカヒ」に当たられる「曖」などは、中国に漢字が存在するけれども、その字義と異なる特殊な用法によるものであり、中国の字義とは対応しない日本で与えられた訓である。これは、第一節での『江戸八百韻』の「婀娜」^{アラタ}に類似する用法といえる。「婀娜」も調査した限りでは、中国では容姿の美しさの表現に使われていたものが、日本では心のやさしさの表現にまで汎用される実態が認められた。本節の「哆」に関しては、当該集以降でも「哆」を「アツカヒ（フ）」と読む例が見出せない。このことから、漢字「哆」とヨミ「アツカヒ」との結び付きが特異であり、後の俳諧の用字に影響を与えることもなく、そして、現在の種々の国語大辞典の見出し語「あつかひ」に漢字「哆」を採用されることもないことから、一般に流布しなかつたことは確かである。『運歩色葉集』や『伊京集』に見える「哆」に与えられた「タラス」のヨミでは用例が見え、中国での「唇が垂れる」の語義を、日本では「誑す」に誤用されたのではないかと考えるが、憶測の域を出るものではない。

『江戸八百韻』では、「アツカヒ」に「哆」を対応させること、並びに「ヤサシ」に「婀娜」を対応させることなどから、用字の採択にも新句境を目指す創意工夫が窺え、新鮮味のある漢字を用いることが、新句境開拓において重要な意義を持つていたと考えられる。

これまで研究対象資料としてきた一〇俳諧集中、年代の古い順から言えば、貞門俳諧の『正章千句』・『紅梅千句』、そして談林俳諧の『宗因七百韻』があり、その次に位置するのがこの『江戸八百韻』である。当該集以前の三俳諧集では「鹿驚・驚鹿」を「かかし」と読むことのように、語の義から漢字を連想して表記する熟語や、「泉郎（あま）」のように、典拠や用例を把握できるヨミを持つ漢字は出現したものの、漢字とヨミとの関係があまり明瞭でない用法は見られなかつた。

それに比べて、当該集以降、前節の『當流籠抜』における「悶る」^{モキ}のような用字、また、談林から新風展開への作風を見せる、いわゆる談林俳諧末期の『七百五十韻』では、振り仮名がなければ、容易にその漢字のヨミを理解できないような漢字が出現する。^⑦

当該句の作者言水は、元禄俳人中卓越する一人で、芭蕉らと共に最も早く覚醒した俳諧者である（俳諧大辞典）。『江戸八百韻』は句風だけではなく、このような漢字の用法の面でも編者言水・幽山（共編）の意図するところであり、革新の兆しが現れる俳諧集である。但し、これがそのまま、後の詰屈聱牙な漢詩文調に繋がつたわけではない。後の談林末期の漢詩文調の俳諧では、俳諧師による創作された漢字を用いるのが見えるが、本節の漢字とヨミとの関係と『七百五十韻』に見えるような造字では、漢字による表記に違いがある。

今後、古文書辞典類で「あつかい」に「哆」の漢字が収録されているにもかかわらず、未だ用例を探し得ていないことを含め、さらに、多方面に亘り調査・検討する必要があると考えている。

注

(1) *相良家文書之一（『大日本古文書』家わけ第五 大正六年 東京帝国大学）

*沢氏古文書第一（続群書類從完成会 平成元年）

* 地下文書（『史料纂集 古文書編』一〇〇九年 八木書店）

* 『改編 匠材集』小林祥次郎編 平成一三年 勉誠社

* 益田家文書三（『大日本古文書』家わけ第二十二、二〇〇〇年 東京大学出版会）

* 歴代古案 第一（『史料纂集「古文書編」』平成五年 続群書類從完成会）

* 『近世の古文書』荒居英次編 昭和四六年 小宮山書店

* 『島津久光公實紀一』（續日本史籍協会叢書 昭和五一年 東京大学出版会）

(2) 齋木一馬『古記録の研究 上』齋木一馬著作集1 平成元年 吉川弘文館

(3) 第一章第四節を参照

参考文献

* 上杉家文書（『大日本古文書』家わけ十二ノ一 昭和五十六年覆刻 東京大学出版会）

* 『西鶴大矢数』（近世文学資料類從 古俳諧編31 昭和五〇年 勉誠社）

* 『西鶴諸国はなし』（新編西鶴全集 第二卷 平成一四年 勉誠出版）

* 『諸艶大鑑』（近世文学資料類從 西鶴編3 昭和四九年 勉誠社）

* 島津家文書（『大日本古文書』家わけ第十六 昭和一七年 東京帝国大学）

* 『唐話爲文箋』渡邊約郎編 唐話纂要の焼直し（『唐話辞書類集 第二集』昭和四五年 泊古書院）

* 『忠義水滸伝鉢譯』陶山本の刊本及び續稿の写本を影印（『唐話辞書類集 第三集』昭和四五年 泊古書院）

* 『徒杠字彙』安政七年刊本（『唐話辞書類集』第九集 昭和四七年 泊古書院）

* 『ありそ海となみ山』『渭江話』『大坂檀林桜千句』『阿蘭陀丸・一番船』『其角十七回』『金龍山』『草むすび』

蕉集連句編』『ふたつ盃』『一葉集』 以上『古典俳文学大系』一巻（一六巻 昭和四五年～四七年 集英社
(検索は『古典俳文学大系CD-ROM』集英社による。)

第四節 西鶴五百韻の用字考証—熟字訓と当て字—

はじめに

西鶴の浮世草子での語彙に関しては、杉本つとむ氏の『西鶴語彙管見^①』に詳しい論述があり、同書（一頁）の序章には、以下のように西鶴の人となりを記す一節がある。

西鶴の「新しがり」を指摘しておきたい。もつともそれがただちに軽佻浮薄などというのではもちろんない。むしろ進歩的で積極的ないわば進取の気性に富む大阪商人の血が五体をめぐっている。その端的なあらわれが（阿蘭陀流）西鶴の出現と存在である。

また、同書の「西鶴、ことばのスタイル」では、西鶴の文体を考える一つに「諺」があるとし、談林の俳諺について次のように記す。

文学史的にも、貞門では実現しえない諺と文学表現、すなわち緊密なことばと思想の不可分な姿が談林俳諺にあるし、西鶴文学の中に躍動している。（一四九頁）

さらに、新しいことばを使つての表現と俳諺でのヌケの方法、つまり、すばり言わないで、それと示唆するものを使う方法が、新しい表現力を作り出し、軽妙で機知滑稽に富んでいるのが談林の俳諺であるとも記されている。（一五一～一五二頁）

本章一節では、「婀娜」を「ヤサシ」と読むこと、一節では『蓄流籠抜』における「閑」を「イキ(る)」と読むことなど、俳諧での特殊な漢字の用法を論じてきた。

本節では、「いつぞや」に「日外」「たなばた」に「織姫」、「正体」に「性躰」、「明星」に「明上」、「丈夫衆」に「上夫衆」、「石(の帶)」に「胃系(の帶)」などの漢字を当てるなど、現在では使わない熟字が見えることがら、「日外」を中心にしてそれぞれの考証を行うことを目的としたい。

本文中傍線は稿者が付記し、句の番号は各俳諧集での通し番号を示す。また、へゝ内は読み下し、及び割書きを示すものである。

一 熟字訓

漢字一字と訓が対応しないが、表記された漢字列に日本語のヨミを与えるのが熟字訓であり、当該集には次のように「日外」を「イツゾヤ」と読む句が見える。

のへをまくらに戀はもみくしや (一一〇 西友) よめもせぬ御文殊に日外は (一一一 西六)

右の句では、「日外」に振り仮名が付されないので、音読みであるか、訓読みであるかには問題が残るが、杉本つとむ氏の前掲の書(一九五頁)では、西鶴作品の漢字を用法上から分類した中の「義訓」(熟字訓・当読みをふくむ)に属する語に「日外」があり、『定本西鶴全集』の注では「日外」に「イツゾヤ」と記される。

一 一 辞書における「口外」

○『大漢和辞典』には

【日外】ヒワ (一) 日の照らす外。王化の及ばない地。〔元魏、聯句〕顧從聖明、分登衡會、萬國馳誠

と記述が見えるが、(一)の意味での漢籍の用例はない。

○『日本国語大辞典』(以下第二版一〇〇一年を使用)には

いつぞや【何時】(副)(代名詞「いつ」に係助詞「ぞ」および「や」の付いてできた語)過去の時に閑して「いつであったか」の意を表わす。いつか。また、このあいだ。先日。

とあり、「日外」と表記される初出例には、当該集の三年後に成立した『好色一代男』から引用されている。

○『稿本言海 第一卷』大槻文彦著 明治二十四年完結 (昭和五四年 大修館書店)

いつぞや(副)一日外(何時ぞや、ノ意)サキツコロ。過ギシ頃。

○『大言海』(昭和七年 富山房)には、

いつぞや(副)一日外(何時ぞやノ義ニテ、やハ、不定ノ辞、過ギシ何時ノ頃ナリシカ、ノ意ヨリ転ズ)サキツコロ。過ギシ頃。

と見える。『大言海』の凡例によれば、「日外」に付された二重線は和漢通用字を示すものである。しかし、『新編大言海』(昭和五七年新編版初版発行⑥)では

いつぞや一日外(以下語注は右と同じ)じつがい一日外イツゾヤ

とあり、「日外」に付す傍線が二重から一重になり、「和漢通用字」ではなく「和ノ通用字」に変更されている。

また、古辞書類には、当該集以降成立の『合類節用集』『書言字考節用集』、一八二七年刊『大全早字引節用集』(節用集大系六四卷 平成七年 大空社)に「日外」とあり、一八一三年刊の『俳字節用集』(節用集大系六〇卷 平成六年 大空社)では「イツゾヤ」に「過日」を当てる。

○『合類節用集』ヒツヅヤ (又義昔又/向去同)(卷八上 言語部)

○『書言字考節用集』イツヅヤ (第一冊 時候門)

○『俳字節用集』・過H (上四)

○『大全字引節用集』・日外 (左傍訓 「ヒホカ」) (六)

向去 (左傍訓 「カウキヨ」) (十一) 増字

このように、辞書類では当該集成立の翌年に刊行された『合類節用集』に初めて見え、伊京集・明応五年本・天正十八年本・饅頭屋本・黒本本・易林本などの古本節用集には収録が見られない。

それならば、唐話における用例があるのか、『唐話辞書類集』での収録状況を確認してみることにした。その結果を次に示しておきたい。

日外 イツゾヤ 第四集『色香歌』(丹行藏の著と思われる)

第十二集『應氏六帖』(伊藤東涯の著作であるといわれている)

第十二集『應氏六帖』(右に同じ)

乃時 (又乃時向時)

第十二集『應氏六帖』(右に同じ)

那指日 左傍訓・イツゾヤ 第八集『両国譯通』卷上十 (享保頃の刊行)

第十九集『譯通類畧』(岡井孝祖写本)

一遭子 イツゾヤ 第十九集『譯通類畧』(異本・長澤本 明治年間写本)

前遭 イツゾヤ 右に同じ

右のようには「イツゾヤ」には「日外・乃者・乃時・那指日・一遭子・前遭」がある。右の『應氏六帖』に収録される「日外」の出典注記には「五老集」と記され、同書には次のような「日外」を用いる文が見える。

日・外郊・行見有盤・蹠草・中疑爲怪物・徐而視之則暗香・根耳:

(『五老集下』十八 柳南先生廬公小簡 送枯梅)

同書に関しては、長澤規矩也氏が『和刻本漢籍文集』(第一十輯)の解題に

上は東坡先生蘇公小簡(蘇軾)・仲益尚書孫公小簡(孫覲)、下は柳南先生盧公小簡(盧某)・秋崖先生方公小簡(方岳)・清曠先生趙公小簡(趙某)からなる。序跋が全くなく、編纂の次第未詳。古活字印本があるので、それに據つたか。:

と述べる。また、駒澤大学古典籍書誌詳細 (wwwelib.komazawa-u.ac.jp/retrieve/.../02-frame.html?tm) には、長澤氏の解説を受けて、柳南先生盧公・清曠先生趙公の二人は共に伝記は詳らかではないとし「編者は邦人の可能性があるとされる」と記される。「那指日」のように唐音が示されていれば信憑性があるが、『五老集』は『色香歌』と共に中国の書からの引用であると断言できるのか疑わしい点があり、精査を必要とする。

また「イツゾヤ」に類する語として

日外 センジツ

第十六集『學語編』(釋顕常 明和九年刊本)

外日 センジツ

第十六集『中夏俗語敷』(岡崎元軌(鶴亭)撰 天明三年刊本)

日前 先日ナリ

第二集『語錄譯義』(延享五年頃作)

曩時 昔日也

第一集『語錄譯義』(右に同じ)

があり、そのほか時を表す語には、『唐話爲文箋』(第一集 唐話纂用の焼直し)に「起先(キアイスル)・サキホド・先前(スルヘン)・同上・前日(ソヨン)・センジツ」などが見え、『譯通類畧』(第十八集・十九集)にも「口前(マヘカト)」などの語が収録されている。また「口者」では第二集『語錄譯義』(延享五年頃作)・第十五集『訓義抄録』(明治初年成立・未完成の稿本)に「コノゴロ」の和訓が記されていて、後者には「後漢」の出典注記がある。

さらに、時代が下り『明治期漢語辞書大系』(全六五巻・別巻三 平成七年 大空社)における「イツゾヤ」に対応する漢字を以下に示しておく事にする。

○『明治期漢語辞書大系』(()内の算用数字は巻数を示す)

◆ 日外 (右傍訓ニチグハイ・ニチグワイ・ジツガイ/下注:イツゾヤ)

大増補漢語解大全 191丁ウ（12） 読書自在 38丁オ（29） 初学必携大全漢語字書 24丁ウ（29） 訓訳考訂音画
両引明治伊呂波節用大全 187丁オ（35） 新撰歴史字典 21頁（48） 明治漢語字典 43頁（49） 漢語故謬熟語大

字林 1235頁（54） 新編漢語辞林 149頁（55）

日外 ひつざや いつしか 雅俗節用 3丁ウ（28）

いつぞや 日外（副）先きつ頃、過ぎし頃。作文新辞典 335頁（61）

右のように、「いつぞや」を意味する語として『明治期漢語辞書大系』所収の一四〇種の辞書中一〇種に收録が見え、右の『初学必携大全漢語字書』（土居清喜編 明治九年一月刊）の解説には「銅版印刷で収載語も多く、発売書肆も多く、全国的に売られたのではないかと思われる。」と記され、『作文新辞典』（中村菴（静齋編）明治三九年一月刊）には「作文と読書のための辞書であり、現行の国語辞典の形式である。（稿者要約）と解説がある。『明治期漢語辞書大系』には「H外」以外に「イツゾヤ」に当てる漢字表記があり、参考までに次に提示しておきたい。

◆ 目前（右傍訓・ジツゼン・ニチゼン／下注：イツゾヤ）

いつぞや じっさや 目前

『明治期漢語辞書大系』所収の辞書一四〇種中、漢語註解 49丁ウ（10）・開化新選字引 63丁オ（18）・廣益熟字典 仮名引部 190丁オ（19）など、三一種の辞書に「イツゾヤ」に対応する漢字として収録され、「イツゾヤ」以外に「サイツゴロ」で一回出現する。

◆ 日者（右傍訓・ジツシヤ・ニツシヤ／下注：イツゾヤ）

『明治期漢語解 83丁オ（6）・漢語註解 49丁ウ（10）など、約一〇種の辞書に「イツゾヤ」の訓注が見え、それ以外で

は「日者（ニツカヤ）（下注：センジツ・スギシヒ）」・「日者（サキカハ）（日猶・往日）」など約八回の記載が見える。漢語故謬熟語大辞

林 1235頁（54）では「ニツシヤとヨム。日のヨシアシをウラナフ人。」とあり、訓訳考訂音画両引明治伊呂波節用大全 187丁オ（35）では「イツゾヤ・ナウジ・ウラナインノコト」と記載がある。

◆ 畏時（右傍訓・ノウジ・ナウジ・ソウジ／下注：イツゾヤ）

当該語は、大増補漢語解大全 198丁オ（12）など、約一二種の辞書に「イツゾヤ」に対する熟字としての収録がある。それ以外では、下注「サイツゴロ・サキゴロ・サキノヒ サキノトキ」で約一一回出現する。『大漢和辞典』に「畏時（ノウジ）さきのとき。むかし。往時。畏日。」、『廣益熟字典』（一九卷）に「畏日（サキノヒ 畏時 同上）」とあり、両者の辞書から「畏時」と「畏日」は同じと捉えられるが、『明治期漢語辞書大系』では「畏日」に「イツゾヤ」と訓注を記す辞書は見えない。

一一一 「日外」の用例

「H外」の使用実態を示し、その用法を検討していきたい。以下『古典俳文学大系』（集英社）での検索はCD-ROMを使用した。

ア、『書札調法記』（○印の下は傍線を付す語に対する代替語）

① 貴人（上）に對して

・去比御出之處他出仕不_レ得_二貴意_一殘念奉_レ存候_二
○去比以前此前先度先口兼口……日外……他

② 同輩（中）に對して

内々御約束仕候通明日於_ニ下屋敷一鹿相の御食進上申度存候_二

卷一九 一留守江來人に進狀（一七丁ウ・一八丁オ）

○ 内々 …… 此間 日外 以前 最前 先日 口比 常々 他

卷一五「人を振廻書状」（一九丁オ・ウ）

③下の人に対し

・ 小之通 日外は初面參会申如「年來名染一存候」：

○ 日外 先頃 先度

右の書簡の手本では、貴人・同輩・下輩に用いられ、上・中・下により差別される語ではない。『書札調法記』は元禄八（1695）年初版によるものであり、『西鶴五百韻』の一六年後、『合類節用集』の一五年後の刊行となる。いまひとつ、手紙・文章の手引書である『新撰用文章明鑑』には次のように手紙に用いることばの意味や用法を解説する記事がある。

イ、口外 大方用るといへども是も女文章也。尊貴の方公界之は出されずにやく也先日或去比など有べし先度右に同じ 日外とは程近をいふべし一月一月又は百日斗前をもいふべし。年数へたりをいふは僻事也

『新撰用文章明鑑』（卷中五丁ウ六丁オ）

右の書は前掲の『書札調法記』と同年（元禄八年）に刊行されているが、ここでは貴人には適さないと言い、『書札調法記』とは違がある。

ウ、先以、貴老弥御無事ニ御座候哉、承度存候。然は、日外ハ貴札、殊更西行谷・愚亭興行之連歌之懐紙、清書被成被下、誠御事繁候ハん処ニ、忝存候。

「新編宗因書簡集」（延宝一年四月二一日 内官長官荒木田氏富から宗因宛）

〔ウ〕の書状は、前年の一二月一九日に宗因が発した書簡に対する返書であり、四ヶ月前の日を「日外」と表現する。一方、宗因が荒木田氏富に宛てた寛文二三年七月四日付の書簡に対する八月四日の返書では、「先日ハ御發句早々被下、過分至極候。」と一ヶ月前の日を「先日」と言い、今日に近い日では「一昨日者八禰宜方迄之御状、

忝存候。」（寛文二三年 八月一四日 荒木田氏富から宗因への書簡）と「一昨日」を用いる。

エ、十日斗有て、両巻を持参し、玄札に向て云、「日外両度御無心忝存候。然れば、以前御添削被下候巻、反古に紛れて候を見出、引合候に、御添削相違し侍る。：（以下略）

『滑稽太平記』（卷之四 高島玄札出来口の事 延宝八（1680）年頃成立）

オ、日外、此歌ども、御状被下候へ共、疾したゝめ憚ながら、此方より便無之、御報延引、背本意候。

『滑稽太平記』（卷之七 蝶々子・季吟子贈答歌の事 延宝八（1680）年頃成立）

カ、先以、口外於御山御懇情之事共、難忘奉^レ存候。

『芭蕉集 全』（書簡編 九九 曲水宛 元禄五（1692）年一月十八日付）

キ、將又日外御申被^シ成候絵、御心隙に彼^シ遊可^シ彼^シ下候。

『芭蕉集 全』（書簡編 一二 木節書簡 元禄七（1694）年七月二十二日付）

ク、予、日外かた田舎の老夫の語りしを聞に、「わさびうへ置かしこに、必蟹来てこれを喰ふ」と。

『芭蕉集 全』（句合・評語編）「常盤屋之句合」（第五番 詞書）

ケ、日外の鮫でも醉はず老の春

『芭蕉集 全』「作者小伝」自笑（宝永六年歿）

コ、日外は御状被下候處、御答も不申上無頼之至、御免可被下候。

『芭蕉集 全』（書簡編一七〇 安永七（1778）年九月二十一日付）

サ、日外（左訓・コノゴロ）『五老集盧一柳一南小一簡日外郊一行レ見レ有^ヲ盤一踞^{スル}草一中一又外一日入一下圃一』

シ、然ば日外噂致候通、恵勝様廿七回忌、来る十月取越相勤申候

〔シ〕の「本居宣長書簡」の用例は『日本国語大辞典』では「いつぞや」の用例として掲載があり、次の〔ス〕

『本居宣長翁書簡集』（二七九 寛政五（1793）年九月二十六日小西春村宛）

は「じつがい」の項での用例である。

ス、十四日、一條殿使菅秀長をして一緘を送り来らしむ。其の詩叙に曰く、謹んで來韻に依り、建仁義堂和尚の座右に奉答し、
（二條殿菅秀長をして一緘を送り来らしむ。其の詩叙に曰く、謹んで來韻に依り、建仁義堂和尚の座右に奉答し、
日外垂訪の謝を致して云ふ、）

* 日外 || 先日。八日をさす。『訓注 空華日用工夫略集』

『空華日用工夫略集』康暦二（1380）年八月一四日

右に提示した用例の中で、書簡では「いつぞや・先日」の意味で多く用いられているが、振り仮名が付されない句のヨミは不明であり、「日外」は必ずしも「イツヅヤ」のヨミではなく、「ニチガイ」あるいは「ジツガイ」のヨミである可能性は考えられる。蕪村は「ヨ」の安永七年の書簡では「日外」を用い、安永末・天明頃と推定される「書簡編（三〇〇）金筆宛 一月二七日付」では「日外」ではなく

・まことに過日は御馳走に罷成辱奉存候。
と「過日」を用いる。その後の一茶の書簡でも

・秋冷候へども、弥御安清被成候や、奉賀候。されば、過日は別してありがたく、御蔭にて天窓の寒さを助かり申候。

・陽炎ぱづぱ立、片道かたまり、漸心暖ニ うつり申候。弥安清被成（候）哉、奉賀、されば過日は参り、長々御坐敷ふさげ、ありがたく奉存候。

・過日、御見廻の品ありがたく、御礼申上度、外は春迄と。

（一〇六補遺 凸芳宛 文政三年一月）

と見え、蕪村を境にして「日外」から「過日」に推移する様子が窺える。

統いて、『日本国語大辞典』の「日外」で表記する初出例が『好色一代男』から引用されていてことから、西鶴に於ける作品の中での「日外」の用法を提示してみたい。

セ、同じ心の水のみなかみ清水八坂にさし懸り此あたりの事ではないか。日外物がたりせし歌よくうたふて酒飲て

（一八 文虎宛 文化一〇年九月）

（一〇六補遺 凸芳宛 文政三年一月）

（四八 希杖宛 文政元年二月）

（一〇六補遺 凸芳宛 文政三年一月）

タ、濁水大かたかすりて真砂のあがるにまじり日外見えぬとて人うたがひし薄刃も出昆布に針さしたるもあらはれしが是は何事にかいたしけるぞや

『好色一代男』卷一の七（19文）

チ、空寝入をして見るに大吉が手をしめて日外の所は今に痛ますかといふ。『男色大鑑』卷一の八（18文）

ツ、奥右衛門飛出るを兵之助引とめ宇右衛門片手なき者をそなたの御手にかけらるゝもおとなけなし。爰は私

に給はれとはしり寄奥右衛門打せらるゝ汝なれ共日外の遺恨あれば命を我ら申請て打事なり。

『諸艶大鑑』卷一の二（11才）

テ、今一たびの命を諸神に立願せしに不思議に快氣して手もはたらき足も立程になりぬ。時に日外の遺恨やめが

たく段々筆に残し具足甲を着ながら鎧取まはして

『好色五人女』卷二の一（3才）

ト、そののちまた此宿へ通りがけに立よりけるに入うつけたりとて驕まじき事とて亭主のかたりけるは日外女房

よびし男は中世古といふ所に松坂屋清藏とて身過にかしこき世間思なる男なりしが

『武道伝来記』卷二の一（12才）

『武家義理物語』卷三の一（9文）

テ、今一たびの命を諸神に立願せしに不思議に快氣して手もはたらき足も立程になりぬ。時に日外の遺恨やめが

たく段々筆に残し具足甲を着ながら鎧取まはして

『好色五人女』卷二の一（3才）

ナ、さても臆病なる大臣かな太夫本の湯の子くはれた物てあらう日外長町の若き者共今宮の神前にて百物語した
れは少人か出たといふ

『難波の児は伊勢の白粉』卷一「松玉小大夫若女方」（16文）

ニ、日外茨木屋の茶づけめし勝手のいそくにやすくし茶のぬるきやうにおもはれて今一はいといふ時。其盆に小判十両入て内證へおくられしも此道の肺めきておかし。

『西鶴俗つれづれ』卷二の二（9才）

ヌ、日外の生加賀のひとへ羽織すこし長く候。小男のおかしく候。武寸四五分切申度候

右のほかに、『好色一代男』卷三の一（8ウ）卷八の一（5オ）、『諸艶大鑑』卷六の四（16オ）卷七の三・五（13オ・19オ）、『好色五人女』卷四の四（15ウ）卷五の一（7オ）、『男色大鑑』卷一の五（24ウ）、『武道伝来記』卷四の二（9ウ）卷八の一（6オ）、『武家義理物語』卷三の一（8ウ）にも用例があり「いつぞや」と振り仮名が付される。この振り仮名に関して、杉本氏は前掲の書で

難読のためのふりがなは、おそらく西鶴個人というよりも、書肆が主体的に付したと思う……（）内省略……。
ともあれ、西鶴がふりがな（大和詞）を与えた漢語は、多分に意図的であるといえよう。（一七九頁）

と記す。その漢語の中に、一節の「嫋娜」などとともに今回の「日外」があり

右はいわゆる宛字と区別して、私は宛読みと呼ぶ。……（略）：日本語に不足している部分を、漢字を素材におくことによつて幅と奥行をもたせるのである。（一七九頁）

と、西鶴の漢字による表記には漢語と読みがなの独特な用法があることを述べている。「日外」を何故「イツゾヤ」と読めるかを考えたときに、「今日以外の日」と解釈するならば、今日を軸として過去の日のみではなく前後の日を意味する事になり、義訓とするには理に適わない点がある。しかし、文脈上過去の事象と併用されることにより「イツゾヤ」の熟字訓が成立する。西鶴に関する作品の「いつぞや」に対する表記には仮名書きと漢字の二種があり、漢字では「日外」のみが用いられ、それ以外の漢字は使用されない。西鶴が「いつぞや」を漢語化しようとしたときに、筆にのぼつたのが「日外」であり、西鶴の中では「いつぞや」の漢語として定着するようになつたと言える。これらの「日外」は昨日や一昨日ではなく、それより少し前の日を意味し、いずれも漠然とした表現法を採用し、そのHがいつであつたかよりは、下接される事柄に重点が置かれる。この漢字表記は、一連の研究対象とする一〇俳諧集には出現せず、ここに挙げた用例の中で、「ス」以外は、延宝二年（1674）を初めて近世での作品である。しかし、「ス」の『空華日用工大略集』のような例があるのなら、すでに近世以前に用いられていて近世へ引き継がれた語であることは言うまでもない。

当該集では、以上のような熟字訓に、いまひとつ、「織姫」に「タナハタ」と振り仮名を付す例がある。

腰もとの龜がとゝじやと夕月に（三六三・西六）のつてまいつた織姫の牛（二六四 西鶴）

右の三六四番の句は牛を牽牛と見立て、それに「織女」を対応させて「たなばた」の漢字表記に「織姫」が選択されたと見る。『大言海』には「たなばた 一棚機」に「機織ル女。転ジテ、七夕ニ祭ル織女ト云フ星ノ稱。又、オリヒメ。」などの語釈が施され、『日本国語大辞典』でも「特に、織女星をいう。」とある。『節用集』では、明応五年本・天正十八年本・饅頭屋本・黒本本・易林本・合類節用集・書言字考節用集に「織女」の収録があり、『書言字考節用集』の「ヲ」の項（第一冊36）では「織女」と見える。これらを考え合わせて、「たなばた」に当てる「織姫」の表記は、語の本義から大きく外れてはいない熟字訓であると言える。

二 当て字

さらに、熟字訓以外に、当て字では、「正体」に「性躰」、「明星」に「明上」、「丈夫」に「上夫」、「石（の帶）」に「胃糸（の帶）」のような用字が出現する。前項の熟字訓は漢字一字にヨミが対応することなく、表記された漢字の義によりヨミが与えられるが、当て字は義に直接的には関係なく、漢字の音訓を利用して構成された表記を言う。上記の四語の漢字表記は節用集に収録がなく、『古典俳文学大系』、あるいは西鶴の作品でも用例を探し出す事が出来ない。

◆ 「性躰」 （セイティ）

月の影落て行とものかすまい（一六二 西鶴） 痘の性躰風の夕露（一六四 西花）
と当該集に見え、前句の「落て」は瘡が治ることを意味し、「落て」から瘡（マラリア）の正体が「風に吹かれた瘡露」のように消えたと付ける。表記する漢字は異なるが、「正躰」では次のような用例が見える。

・正軸もならもろはくのやよひ哉

親重

『犬子集』卷第二 六一七

『西鶴大矢数』第三八・横何（31才）

・いざ正軸見せ給へと。蒲團をまぐれば

これらのはかに「正軸」の用字は、俳諧では『鷹筑波』（三八八四番）、『犬子集』（一一〇〇・一九八六番）、『金山集』（一二〇〇二・六四〇二番）、『玉海集』（一八四一一番）、『ゆめみ草』（一五四〇番）、『投盃』（四一六番）、『金龍山』（一五七〇番）などに出現する。また、俳諧以外の西鶴に関する作品では、『武道伝来記』卷三の三（13才）、『金山集』（一五七〇番）などに出現する。また、俳諧以外の西鶴に関する作品では、『武道伝来記』卷三の三（13才）、『金龍山』（一五七〇番）などに出現する。また、俳諧以外の西鶴に関する作品では、『武道伝来記』卷三の三（13才）、『金

巻一の四（24ウ）、『新可笑記』巻一の六（24ウ）・巻四の一（11ウ）などにも見えるが、「性軸」の用字を見出すことはできない。『大漢和辞典』には「性體」の漢語の収録があり、「性體」心の本體」とあり、北史『杜弼傳』から「若論性體、非懶非寬」の用例が示されている。「正體」では「正體」正しい姿。本體。正しい血すぢのもの。太子。たらしい書体。などの語釈が見える。「シヤウタイ」は日本特有のヨミであり、語意には「ころ。正氣。本当の姿」などと記され、『日本国語大辞典』でも「そのものの実際の姿。本体。実体。正氣」などとある。『大漢和辞典』の「性體」の意とする「心の本體」と、『大漢和辞典』『日本国語大辞典』での「正體」の意にある「正氣」とは無関係ではなく、右の『犬子集』六一七番の句を例にとって見ると、お酒を飲みすぎて正気を失った状態を「正体」から「性軸」に置き換えて、あながち間違いとは言えないだろう。当該集一六四番の句では、「癪の性軸」を比喩的に用いていると考えられなくもないが、真意は不明であり憶測に過ぎない。

◆「明上」

当該集には次のように詠む句が見える。

明日や石火の影の貢磬盆（一九五 西友）局のそけは玉津ひめ（一九六 西六）

右の一九五・一九六番の句では、明星の輝きでタバコ盆が見え、端女郎の部屋をのぞくと美しい女郎の姿が見えたと、空が明るくなりかけた明け方の情景の描写に「明上」と表現している。これは新しい表現を指向した結果

果の「明星」の当て字である。したがって、意図的な文字遣いであり、誤用ではない。

・明星か市立跡のあれ屋敷

・作り声阿漕か浦へ廻つたか月に鼠鳴明星か茶屋

・そのまま腰より矢立の筆染て明星が茶屋のびくに七八丁もつきてさまさま口をたたき

『西鶴織留』巻四の一（18ウ）

「明星」では以上のような用例があるが、これら三例はいずれも地名を表すものである。

◆「上夫衆」

是は又旅行の暮の自身番（八三 西花）都へのほりたまふ上夫衆（八四 西友）

『定本西鶴全集』の注釈によると、八四番の「都へのほりたまふ」は諺曲「松風」の「行平都にのぼりたまひ」を典拠としていると記され、「上夫衆」には「用例を見かけない。身分の高い人の意であらう」と注が施される。辞書には「上夫」はないが「丈夫」には名詞と形容動詞の一通りがあり、当該句の意と名詞の意が一致する。

○『日本国語大辞典』

じょうぶ【丈夫】〔名〕（じょうぶ）とも、昔、中国の周の制で、八寸を一尺とし、一〇尺を一大とし、

一丈を男子の身長としたところからいう（1）一人前の男子。（2）心身ともにすぐれた男子。勇氣ある立派な男子。大丈夫。ますらお。（3）夫。良人。

じょうぶ【丈夫】〔形動〕（1）身に少しの疾患、損傷もなく、元氣であるさま。すこやかなさま。壯健。達者。（2）しつかりしていてこわれにくいさま。堅固。（3）たしかなさま。確實なさま。

○『大漢和辞典』

【丈夫】〔ザヤウ〕（一）をとこ。ますらを。（二）才能の衆に過ぎた人。（三）をつと。夫。（四）ザヤウの健康。壮しいこと。◎堅固。かたいこと。

「丈夫」には以上のような意味があり、「松風」に登場する在原行平を「心身ともにすぐれた男子」と見て、四番では、都へ「上る」との関連から、「上る」と「普通の人よりも上の尊貴な人」という意を懸けて、或は形容動詞の「丈夫」と区別するために「丈」に「上」が選択されたと解釈できる。

- 『文明本節用集』(1475頃)・丈夫(「丈」の左訓「ハガル」、「夫」の左訓「ソレ・ヲツト」)(173態藝門)
○『合類節用集』(1680)・丈夫(卷三・95人物部)
○『書言字考節用集』(1712)・四・15・丈夫(句會周制八寸為尺十尺為丈人長八尺故曰丈夫論衡人形以一丈為正故名男子為丈夫尊翁嫗為丈人出未)

「丈夫」は中国本来の漢語であり、古くには『寧樂遺文』(文学編・人々傳・家伝上)に「或語云、雄壯丈夫二人、恒從公行也」と見え、『太平記』(卷一八越前府軍)には「此人丈夫ノ心ネヲハシテ、加様ニ思ヒ給ケルコソ憑シケレ」と、雄々しく才能の衆に過ぎた立派な男子を表現する一文が見える。形容動詞「ヂヤウブ」は名詞形から派生した日本での用法であり、現在での通用語となっている。名詞での近世以降の用例を次に提示しておきたい。

・富家喰^{ハグド}肌^ヒ肉^ラ丈夫喫^{ハガク}菜^{サイ}根^ル予^ハ乏^シし。

『芭蕉集』発句編(一六八一年)(一一三番前詞書)

・ひとりの丈夫の語りつるは爰にもめづらしき人こそ出来り侍る『近代艶隱者』三・五(一六八六年)・されど此詞の過当にして、他門の宗匠にもはゞかるべければ、いつかは我門に丈夫の人ありて、此詞を百世に伝へん、是さらに家訓の密語ならんとぞ。

『十論為弁抄』(俳諧古人)(一七二五年)

・大根のからみのすみやかなるに、山葵のからみのへつらひたる匂さへ例の似^ア而非ならん。此後に丈夫の人ありて心のねばりを洗ひつくし、剛からず柔ならず、俳諧は今日の平話なる事をしらば、はじめて落柿舎の講中となりて箸一箱の名録に入べしとぞ。

『十論為弁抄』(洛陽風土)(一七二五年)

・然るにあるじかつてある先生の門に乞て、号を指峯と定けるとぞ。其意いかならむ。あるじもおぼろくと

して、予に此記を書いてと求む。されば思ふに、高きを望む丈夫の志を表せるもの歟。

『鶴衣』(指峯堂記)(一七八七・八八年)

・病人は眠るが如くに身^ヒまかりぬ。朝露夕電^{トモ}危^カきは人の命^{ヒト}なり。恭輔のかなしみはいかばかりなりけん。目になかぬ丈夫の死別^{レバ}は。思ひやるさへにいと痛^{ハタ}まし。『内地雜居未來之夢』第一回(坪内逍遙)(一八八六年)

◆胃糸(の帯)

醜ふなられた貴妃の面影(二七二西花)妊まして腹をかゝゆる胃糸の帯(三七三西花)

「胃糸の帯」は『定本西鶴全集』の語訛に「石帶。束帶の時、袍の腰をつかねる革帶」とある。胃は腰の近くに位置すること、糸は帯との縁語でこの當て字を用いたのではないか。「胃糸」は辞書類に収録がなく、用例も見出すことができない。辞書類では『書言字考節用集』に「石帶(第七冊・1服食門)」と収録がある。

用例

- ・谷^ハごしにとけぬ氷や石の帯(八七六正吉)・きそ始なつともつきじ石の帯(六九〇令徳)

『崑山集』(卷一・春部・春冰)(一六五一年刊)

『金龍山』(一七一二年刊)

以上の本項での當て字四語は、語の本義と何らかのつながりを持ちながら視覚的な新しさや面白さを出すために採用された戯書の一種であると言える。

おわりに

これまでの考察の結果、次のようなことが認められた。

第一には、「日外」は中国本来の漢語の意味から離れ、『新編大言海』（昭和五七年新編版初版発行◎）では『大言海』の和漢通用字から、和製漢語に転じていて。とすれば、『唐話辞書類集』（應氏六帖）の出典注記並びに「サ」の用例『名物六帖』に掲載される『五老集』の「口外」、「色香歌」での「口外」に問題が生じ、これらは中国の書であるのか、両者の著者についてなど再考を要する。

第二には、一項で取り上げた「明上・性軀・上夫・胃糸」などの当て字では、元來ある漢語の文字を入れ替えて、遊戯的な文字遣いを行い、読み手の意表に出る漢字の用法を採用している。

当該集は西鶴編で、板下は水田西吟である。本節で扱った六語の句の作者は、「日外」（西六）、「織姫」（西鶴）、「性軀」（西花）、「明上」（西友）、「上夫衆」（西友）、「胃糸」（西花）というようにそれぞれ異なり、句の作者個人の表記によるものではない。且つ誤字でもない。新しがりの西鶴が目新しい当読みを採用する事により、或は有意的に和製漢語を創作する事により、堅妙で機知滑稽に富む効果を表出しようとしたことは明白である。

注

- 1、『西鶴語彙管見』杉本つとむ 昭和五七年 ひたく書房
- 2、『五老集』慶安三年（一六五〇）正月 京都村上平楽寺刊本（『和刻本漢籍文集第一十輯』長澤規矩也編 昭和五四年 沢古書院）

参考文献

- 『一茶集』古典俳文学大系一五巻 昭和四五年 集英社
- 『鶴衣』（『中興俳論俳文集』古典俳文学大系一四巻 昭和四六年 集英社）
- 『大坂独吟集』近世文学資料類従 古俳諧編29 昭和五一年 勉誠社
- 『近世漢字文化と日本語』村上雅孝著 二〇〇五年 おうふう
- 『近代艶隠者』近世文学資料類従 西鶴編23 昭和五〇年 勉誠社
- 『金龍山』（『享保俳諧集』古典俳文学大系一一巻 昭和四七年 集英社）
- 『空華日用工夫略集』義堂周信著（辻善之助編兼著 昭和一四年 太洋社）
- 『訓注 空華日用工夫略集』藤木英雄著 昭和五七年 思文閣
- 『好色一代男』（大坂版）近世文学資料類従 西鶴編1 昭和五六六年 勉誠社
- 『好色五人女』『諸艶大鑑』近世文学資料類従 西鶴編3 昭和四九年 勉誠社
- 『滑稽太平記』『歲旦発句集』（『貞門俳諧集』二）古典俳文学大系二巻 昭和四六年 集英社
- 『嵐山集』近世文学資料類従 古俳諧編31 昭和五〇年 勉誠社
- 『西鶴大矢数』近世文学資料類従 古俳諧編31 昭和五〇年 勉誠社
- 『諸艶大鑑』近世文学資料類従 西鶴編3 昭和四九年 勉誠社
- 『書札調法記』『新撰用文章明鑑』近世文学資料類従 参考文献編5・6 昭和五一年 勉誠社
- 『新可笑記』近世文学資料類従 西鶴編11 昭和四九年 勉誠社
- 『新編宗因書簡集』（『談林叢談』野間光辰著 一九八七年 岩波書店）
- 『太平記』日本古典文学大系 一九八二年第一刷 岩波書店

『定本西鶴全集』 頼原退藏・岬嶺康隆・野間光辰編 昭和四七年 中央公論社

『唐話辞書類集』 第一集から第二〇集 古典研究會 昭和四年・四五年 汲古書院

『内地雜居未來之夢』 坪内逍遙 大正一五年 明治文化研究会

『中村幸彦著述集 第七卷』 中村幸彦著 昭和五九年 中央公論社

『難波の児は伊勢の白粉』 近世文学資料類從 西鶴編 20 昭和五一年 勉誠社

『寧樂遺文』 下巻 竹内理三編 昭和四七年 東京堂

『男色大鑑』 近世文学資料類從 西鶴編 7 昭和五〇年 勉誠社

『芭蕉集 全』 古典俳文学大系五巻 昭和四五 年 集英社

『懷覩』 (『新編西鶴全集 第三巻・本文篇』 平成一五年 勉誠社)

『蕪村集 全』 古典俳文学大系一二巻 昭和四七年 集英社

『本居宣長翁書箇集』 昭和九年 啓文社

『万の文反古』 近世文学資料類從 西鶴編 18 昭和四九年 勉誠社

『名物六帖』 伊藤東涯著 一七一四年自序 (昭和五四年 朋友書店)

『和刻本漢籍文集』 第二十輯 長澤規矩也編 昭和五四年 浚古書院

*「正體」の用例に挙げた『鷺筑波』『崑山集』『玉海集』『ゆめみ草』『投盃』は『古典俳文学大系 C D - R O M』(集英社)による。

結語

本章に挙げた語以外にも、もつと多くの用字考証を必要とする語があるけれども、とりあえず、『江戸八百韻』から「嫋娜・艶・哆」の二語、『當流籠抜』から「悶る」の一語、『西鶴五百韻』から「日外・織姫・明上・性躰・上夫衆・冑糸の帶」の六語を取り上げて、考証を試みてきた。

第一節の「嫋娜・艶」を「ヤサシ」と読むことは、節用集に収録が見え、また、後の西鶴の浮世草子でも用いられる例が見える。『江戸八百韻』のこれらの二語は、同じ「ヤサシ」でも使われる場面に違いがあり、漢字を使い分けることによって、それぞれの情景に適した表現法を採用している。

第二節では、「悶」を「イキ（る）」と読む例は、文芸作品・辞書類において探すことは出来なかつたが、古辞書を通して、「悶」が「いきる」のヨミに至つた過程は明らかにすることができた。この漢字と振り仮名の表現法は、杉本つとむ氏の言葉を借りれば、「日本語に不足している部分を、漢字を素材におくことによつて幅と奥行を持たせ」た用法であり (『西鶴語彙管見』一七九頁)、一語で二重の効果をねらう趣向を凝らした用法であると言える。

第三節では、有意的に熟語の一宇を置き換え、読み手に視覚的な印象を与える漢字の用法、あるいは中国での本義と対応しない熟字訓を対象に考査を重ねてきた。そこには、「明星・正体・丈夫・石帶」などの和製漢語も含めた漢語を「明上・性躰・上夫・冑糸の帶」のように、漢字列の一宇を置き換え、斬新さを志向する意図がうかる。今後も検討して行く必要があると考える。

第四節では、有意的に熟語の一宇を置き換え、読み手に視覚的な印象を与える漢字の用法、あるいは中国での本義と対応しない熟字訓を対象に考査を重ねてきた。そこには、「明星・正体・丈夫・石帶」などの和製漢語も含めた漢語を「明上・性躰・上夫・冑糸の帶」のように、漢字列の一宇を置き換え、斬新さを志向する意図がうかる。

がわれた。

以上の本章で取り上げた語の中には、証例が見つからない語もあり、証例が見られる語についても、用例はそれほど多くはない。「閑る・喩アソカ」などは、二重イメージの機能を持つ振り仮名であり、俳諧者の自由な発想による独自的な用法である。そこには、俳諧特有の面白さや新しさが託されていると言えよう。

第三章 仮名遣から見た近世初期俳諧集

—語頭に「お（オ）」「を（ヲ）」が付く語について—

導　　言

第一章と第二章では、近世初期俳諧集の表記の研究において、漢字を中心とした問題を取り上げてみた。本章では、視点を転じて仮名遣の観点から考察を加えていきたい。

本文中の仮名表記の語頭に「お・を」が付く語と振り仮名の語頭に「オ・ヲ」が付く語を取り上げてみると、両者には同語において「お→ヲ」「を→オ」の相違があること、また、本文中の仮名表記の同一の語において、俳諧集による仮名遣の相違・同じ俳諧集中での相違があることなど仮名遣が統一されているわけではない。

そこで、第一節では、本文中の語頭に「お・を」が付く語と定家仮名遣を比較し、定家仮名遣を規範としているか、仮名遣の様相を開拓して行きたい。俳諧は、和歌や連歌の線上に位置するけれども、雅語ではなく日常語が用いられ、定家仮名遣を規範とする前時代の韻文とは、仮名遣に相違があると考えられるからである。

第二節では、振り仮名の語頭に「オ・ヲ」が付く語について、本文中の仮名表記語との比較と同時に、定家仮名遣・節用集と比較して検討していく。蕉風に入る前の近世初期の俳諧を一つの文字領域として、それぞれの俳諧集での仮名遣の傾向を示すことを目的としたい。

なお考察に際しては、語中語尾は問題とせず、本文中の仮名表記と振り仮名の語頭の「お（オ）・を（ヲ）」のみに焦点をおき、定家仮名遣に準拠しているか、あるいは節用集と共にしているかなど、定家仮名遣を基にする仮名遣書、及び節用集を参照しながら、検討を進めて行く。

仮名遣書は、天文・十一年本『仮名文字遣』・『定家卿仮名遣』（文明本仮名文字遣所収）・不忍文庫旧蔵写本を底本とする『下官集』（以上『国語学大系』第六巻 昭和五六年 国書刊行会）、並びに文明十一年本『仮名文字遣』（東大本 駒沢大学国語研究 資料第一 昭和五五年 浚古書院）を参照し、本文中「定家仮名遣」と表現するのは、上記の四種の仮名遣書によるものである。今回テキストとする俳諧集は、歴史的仮名遣を主張する『和字正濫鈔』（一六九五年刊）刊行以前の一六四八年から一六八一年成立の一〇作品集であるので、『和字正濫鈔』を参照の対象からは除外した。また、『節用集』は伊京集（伊）・明応五年本（明）・天正十八年本（天）・饅頭屋本（饅）・黒木本（黒）・易林本（易）・合類節用集（合）の七種と適宜他の古辞書を使用する。

以下、本章中「仮名表記語」は本行に平仮名で書かれた語を表すものであり、「」内は節用集・俳諧集の略称、及び割書きを示し、「」内の「」は改行を示す。また、『古典俳文学大系』での用例の検索には『古典俳文学大系 C D · R O M』（集英社）を使用し、傍線、及び句番号（各作品集での通し番号）は『古典俳文学大系 C D · R O M』（集英社）を参考に稿者が付記したものである。

第一節 本文中の語頭に「お・を」が付く仮名表記語—定家仮名遣を通して—

はじめに

近世の戯作における仮名遣では、屋名池誠氏（一〇一^①）が、仮名遣に秩序がないとする否定的な評価に対して、正確に音形を示しているから、それが秩序であるとする（「近世通行仮名表記」—「濫れた表記」の冤を雪ぐ』『近世語研究のペースペクティブ』一七一頁）。

それならば、近世初期俳諧集ではどうであるか、本節では、俳諧集により仮名表記に差異がある語があること

を問題点の一つとして、本文中の仮名表記語の仮名遣について考察を進めていきたい。

定家仮名遣に関しては、大野晋氏（一九七七^②）が

仮名遣という、伊呂波の仮名の使い分けに関する規範の設定と、その実行という問題は（略）藤原定家に始まり、その学問につらなる行阿の『仮名文字遣』などによって中世の歌文の世界の常識となつた。しかしながら、すでに見たように定家自身は世間にこれを強いるつもりはなかつたらしい。ことに「お」「を」に関してはアクセントによることであつたから、文字化することが困難でもあり、伝達には口伝という形式に頼らざるを得なかつた。（『^{注解}日本語8』二二〇頁）

と述べる。

一方、小松英雄氏（一九九八^③）は、定家は証本テクストを整定するためには「仮名の綴りを折一的に決定する必要があつた」（『日本語書記史原論』一七五頁）と述べ、「定家はみずから開発した文字運用の規範を子息の爲家にすら伝授した形跡が認められない」（同書一八三頁）とも記し、前掲の大野氏とは異なる見解を示す。

中世の仮名遣の実態では、安田章氏（一〇〇九^④）が「表記の分野は個人の自由になる領域を多く持つ」（『仮名文字遣と国語史研究』三頁）とし、中世の様々な仮名資料を取り上げて、「お」から「を」への書き替えによる現象など、仮名遣と同時に仮名文字遣について詳しく論述されている（同書第一章 仮名文字遣原論）。

また、近世的具体的な例では、酒井憲一氏（一〇〇〇^⑤）が『寛永諸家系図伝』（一六四三年完成）の仮名本を取り上げ、当時通行の仮名遣の根幹は、「定家仮名遣」（行阿の『仮名文字遣』の源流としての）にあつたとすべき」とし、「契沖の『和字正濫鈔』によつて復古訂正される以前の姿を留め」「本書に見られる仮名遣いは幕末明初まで影響を与えた可能性が濃厚である」（『国語と国文学』77—3—1頁）と記す。そこには、定家仮名遣とは一致しないが、俳諧の仮名遣と共通する語が見え、幕府編纂の武家系譜集であり、その影響を看過することはできないだろう。

本節と同じ俳諧の仮名遣の先行研究では、今野真一氏（一〇〇^⑥）が荒木田守武の独吟千句の仮名文字遣を中心として

注目すべきは守武という、「和歌・連歌世界」という一つの「文字社会」に身をおいていたであろう人物の表記に統一的と見なし得るだけのかなづかい並びに「仮名文字遣」がみられるということである。

『仮名表記論攷』清文堂（二八五頁）

と守武個人としての文字遣の実態とし、今回の調査結果と重なる部分が予想される。

さらに、寺島徹氏（二〇〇六・二〇〇^⑦）は、江戸中期の俳諧の仮名遣について、藤村・曉台・也有・士朗を対象に、定家仮名遣・歴史的仮名遣・近世通行の仮名遣の観点から、それぞれを比較分析し、ここでも、個人により仮名遣の傾向が異なることを明らかにされている。

以上のような先行研究を踏まえ、俳諧集による特徴が見られるか、定家仮名遣・節用集との関係はどうであるかなど、近世初期俳諧における仮名遣の実態を提示して行くことにする。

一 仮名表記語と定家仮名遣の関係

定家の仮名遣では最も重要な項目であるとされている語頭の「お・を」のみに焦点を置き、一〇俳諧集の本文中に見える「お・を」が語頭に付く仮名表記語を取り上げ、俳諧集別に定家仮名遣と照合した結果を提示したのが【表一】である。

【表一】の仮名表記語は、一つの俳諧集の中では異なり語数であるが、他の俳諧集にも出現する語は重複することになる。また、定家仮名遣と一致しない語の中に、『正章千句』では「おどり」が一回、『紅梅千句』では「おどし」が二回、『當流籠抜』では「おく」が一回、『江戸八百韻』では「おゐて」が二回出現するので、不一致の

延べ数は一六語となる。仮名表記の異なり語一二〇語中、定家仮名遣と一致する語には、定家仮名遣に準じるとした語、例えば、接頭辞「お」を用いる約三一語なども含めると一八九語があり、一致する割合が約八五・九%を占め、俳諧では概ね定家仮名遣に準拠していると言える。

大野晋氏によれば、定家仮名遣の「お・を」の分類は『色葉字類抄^⑨』のアクセントに基づくものである（前掲の書三一五頁）。よって、定家仮名遣に収録がない語を『色葉字類抄』（前田本・黒川本）の訓と照合してみると、次の語が収録されているのが確認できた。（一の下は『色葉字類抄』での収録状況）

- ・「おぢぬ」（正）——「ヲツ（惶・怖：）」（前田本 上八一ウ・黒川本 上六五オ）
- ・「おひたゝし」（紅）——「オヒタヽシ（夥）」（黒川本 中六七オ）
- ・「おもて」（紅・宗・西）——「オモテ（面）」（黒川本 中六四ウ）
- ・「おんぼう」（江戸・七）——「オンス（隠首）」（黒川本 中六九ウ）の「隠」のみを照合。

右の四語の中には複数の俳諧集に出現する語もあり、『紅梅千句』「おひたゝし・おもて」、『宗因七百韻』「おもて」、『西鶴五百韻』「おもて」、『江戸宮寄』「おんぼう」、『七百五十韻』「おんぼう」の六語を定家仮名遣と一致すると見做せば、異なり語一九五語が一致し、不一致数は『正章千句』の「おぢぬ」を加えれば延一七語となる。【表一】の定家仮名遣との一致度を俳諧集別に見た場合、『七百五十韻』では、定家仮名遣に収録がない語を除くとすべて定家仮名遣と一致し、『當流籠抜』は基礎となる語数が少ないが最も一致度が高い。

次に、一つは定家仮名遣に準じとした語について、もう一つは【表一】の中で、定家仮名遣と一致しない「お」（〇語（延一四語）に定家仮名遣に収録がなく、『色葉字類抄』と一致しない『正章千句』の「おぢぬ」を加えた一五語と、定家仮名遣と一致しない「を」を用いる一語の延一七語を以下①から⑯に示し、それらが他の俳諧集での使用状況はどうであるか、用例を挙げ検討していくことにする。

- 定家仮名遣「を」に対して「お」を用いる語（延一五語）

正章千句・おそひ・おとゝ・おどれ（二句）・おぢぬ／紅梅千句・おそはれ・おどす（二句）／江戸八百韻・おゐて（二句）／當流籠抜・おく（二句）／西鶴五百韻・おのれ／江戸蛇之鮈・およぶ／江戸宮箭・おつ立られ

○定家仮名遣「お」に対して「を」を用いる（二語）

宗因七百韻・をもき／軒端の独活・をよぐ

【表一】（俳諧集は上から成立年代順）

定家仮名遣との関係		仮名表記語			
収録なし	不一致数	一致数			
を	お	を	お	を	お
1	2	0	3	10	38
1	4	0	2	10	28
0	3	1	0	2	22
0	0	0	1	3	14
0	1	0	1	0	5
0	2	0	1	1	13
0	0	0	1	3	8
0	1	0	1	1	5
0	3	1	0	2	9
0	1	0	0	3	12
2	17	2	10	35	154
				39	181
					合計

なお、用例はテキストの一〇俳諧集と、今ひとつは、『古典俳文学大系CD-ROM』の一巻から四巻と一七巻の『鷹筑波』『玉海集』『毛吹草』『山の井』の、いわゆる貞門と談林の俳諧集の句のみを対象とした。但し、動詞・形容詞ではすべての活用形を検索していないこと、同じ句が異なる作品集に重複して収録されていること、濁点の有無による識別、掛詞など、不確かな面があるので用例数は流动的であり、大よその数字である。また、ウンスンカルタの札の名（ポルトガル語）を表す「おほる」（『軒端の独活』一二一番）や、「飴（＝米偏）おこし・産おとし・鳥おどし・山複合語の後部構成素となる語を加えなかつた。

二 定家仮名遣に準じると見做した語

語頭に「お・を」が付く語を仮名遣書と照合した結果、ここでは、定家仮名遣に準じると見做した語について言及していきたい。

◆語頭に接頭辞「お」が付く語

○おぐしーあたらおぐしをはさまれにけり

五六六

『正章千句』

拾遺をやおぐしすまして読ぬらん

七一 正章

『紅梅千句』

両句の「おぐし」は「小櫛」ではなく髪の敬語と解し、定家仮名遣に「おくしけつり 御頭梳」の収録があるので一致するとした。

○おかべーと、におかべは露も及ばず

四三〇 一鐵

『江戸八百韻』

前句の「田楽」からの付合で豆腐を意味する「御壁」と解する。「御壁」は定家仮名遣には収録されていないが、定家仮名遣での「御」は「おん」「おほん」の収録と同時に、「おはします（御坐）」「おぐし（御櫛）」とあるので、定家仮名遣では「御」に対する仮名遣は「お」であるとする。

○おりやるー老人夫婦ようおりやつたの

四五七

『正章千句』

「おりやる」は「お入りある」の変化した語で、「お」は尊敬を表す接頭辞である。よつて「おかげ・おぐし」と同じく定家仮名遣に準じるとした。

○接頭辞「お」が付く語には、ここに挙げた二語以外にも、「おつかへ人・おねむ・おふくろ・おなつかし・おなびき・おまへ・おより・おかた・おききやれ：」など、全体で約二語があり、これらは定家仮名遣に収録がな

いが、定家仮名遣に準じるとした。

◆その他（二通りの意味に取れる語・定家仮名遣に複数の収録がある語）

○おとす—請人の舅ヲヂぼんおとす袖の花

三二一 鬼貫『當流籠抜』

柩戸はおとしもあへぬ風情にて

五六五 『正章千句』

前者の「袖の花」は「くすだま」のことであり、「くす玉を落す」と解釈した。後者の「おとし」も戸の樞をひとす意であり、「おどす」ではない。よつて、定家仮名遣に「おつ／＼おつる／とも／零落」とあるので準じるとした。

○おくれじ—かる業の子ともは蝶におくれじと

九七 泰徳『江戸八百韻』

『仮名文字遣』には「をくれて 後 終」の収録のみであるが、『下官集』に「をくる・おくる」両者の収録があり、対応する漢字は表記されていないが一致すると見做した。

○おはる—終には命おはるまさかど

三八四 西鶴『西鶴五百韻』

『仮名文字遣』に「をはるりとも 終 了 單 訣」（五ウ）「おはつて 巳」（12オ）の収録があるので「おはる」は一致するとした。

○おしとどめ—土車わりなく道におしとどめ

一〇八三

『正章千句』

定家仮名遣には「おしとどめ」の収録は見えない。「をし明かた・をしなへて…」など、複合語の前部構成素は「をし」と表記される。右の句と同じ『正章千句』の中での、「をしまづき（一〇七番）をしはかり（三九五番）をしやり（六八八番）」や、同じ正章が清書した『紅梅千句』でも「をしひたし（一七一番）とある。但し、同じく正章が注を施した『俳諧の註』（一〇一番の自注）には、「おしとどめ」の用例が見え、正章個人に「おし」と「をし」のゆれが窺える。単純語「押す」では、『仮名文字遣』に「をす」（文明十一年 東大本）「をさへて 押

抑」と収録されていると同時に、「おして春雨」「むまをおさへて」も収録があるので、『西鶴五百韻』での「おさえ・おせば」、『軒端の独活』の「おさへ・おされ」も一致するとした。

三 定家仮名遣と一致しない語

◆語頭の「お」に対し、定家仮名遣では「を」である語
○おそひ「をそしきそき 遅 晚」

①なぜに今夜の月はおそひぞ

七七四

『正章千句』

用例では、「お（を）そし・お（を）そき・お（を）そう」を含め、「お」が約四例、「を」が約一一例見えるが、『古典俳文学大系』五巻以降を含めると、「お」が約一一例、「を」が約一二例と「お」の方が多くなる。

○おとと草「をとゝ／おとゝひの時はお也／おとうとの時もお也」弟

②菊の名もおとゝ草とてむしり捨 一〇三七 『正章千句』

「おとと草」は梅を花の兄として、菊は遅く咲くところから「弟草」と異名がつけられたものである。定家仮名遣に「おとと草」は収録されていないが、「をとゝ弟」と収録があるので不一致とした。用例では「おとと」が二例、「を」では「をとと・をとと草・花のをとと」など六例が見える。但し、蕉風の俳諧以降は「をとと」が見えず、『古典俳文学大系』全体では「おとと」六例、「をとと」六例となる。

○おく「をく露 置露／露をきて／とも／」「をく 置措鷹呼／鷹ヨフトヨム」

③ 夕暮は蔵無の濱さいておけ

三一五 百丸 『當流籠抜』

④ 角かけておく御アシテしら露

二七六 鬼貫 『當流籠抜』

「お（を）く・お（を）け・お（を）いて」の用例では、「お」が約二二例、「を」が約一五八例出現し、定家仮名遣と一致する「を」が優勢である。但し、用例における「慣いて・於いて」などの判別が難しく、用例数は大よその数字である。

○おのれ「をのれ 己】

⑤ おのれつかえ巴年のよる浪

四四四 西六 『西鶴五百韻』

・草履賣アシスルをのれとも云へ子規

一一七 猶水『軒端の独活』

一〇 佛諦集中、右の二句には「お・を」の差異があり、用例には、「をのれ」が一五例、「おのれ」が一三例で「を」が優勢であるが、蕉風以降も含めた『古典佛文学大系』全体では、「をのれ」が約五三例、「おのれ」が約八〇例で、①②と同様に「お」の使用頻度が高くなる。

○おどれ「をとる 踊躍】

⑥ おどれくといふかわりなき

六一六

『正章千句』

⑦ 名残や惜き盆のおどり子

四三二

『正章千句』

「お（を）どり・お（を）どる・お（を）どれ」の用例では、「お」が約二二例、「を」が約三〇例見え、「くお（を）どり」のような複合語でも三五対一〇で「お」が優勢である。

○おそはれ「をそふ 襲】

⑧ 楽寝ラクネにはおそはれまじや小夜枕

八八一 政信 『紅梅千句』

用例では「おそはれ」が四例、「をそはれ」が一例、「をそふ・をそひ」では「お」は用いられず、「をそふ」が一例だけ見える。

○おゐて「をいて 於」「をひて 於】

七五八 長頭丸 『紅梅千句』

九七九 長頭丸 『紅梅千句』

⑩ ほう引のわらはべおどす元興ムハヤクじ
「鳥おどし・小桜おどし」などの複合語では、「お」を用いる用例が多数を占め、単純語「おどす・おどし」では約一八例、「をどす・をどし」が約五例出現する。

○おゐて「をいて 於」「をひて 於】

五四三 一鐵 『江戸八百韻』

一三四 青雲 『江戸八百韻』

⑪ 山陰の大津におゐて喧嘩たて

四〇一 言水 『江戸蛇之鮈』

⑫ 一野におゐてかゝる白雲

二八三 幽山 『江戸宮筋』

用例では「おゐて」約一例、「おいて」一例、「をゐて」二例、「をいて」が二例出現する。

○およぶ「およはぬ／をよふ時は／を也」不及】

四〇一 言水 『江戸蛇之鮈』

用例では、およぶ六例・およばぬ四例・をよぶ一例・をよばぬ二例が見え、いずれの語形も語頭は「お」を用いることが多い。

○おつ立られ「をひ風 をひかせ 追風 逐風／をふ／をひてとも」 追 逐】

⑯ 山公事にのほれくとおつ立られ

二八三 幽山 『江戸宮筋』

定家仮名遣に「おつ立られ」の収録はないが、「おつたつ」は「追い立てる」の変化した語であり、「追い」だけを定家仮名遣と照合し不一致とした。用例でも当該語句は見えず、「をふ（う）・をひ（い）・をはれ」約二二例、「おふ（う）・おひ（い）」約二二例出現する。

○おぢぬ「『色葉字類抄』（前田本・黒川本）に「ヲツ（惶・怖：）」

⑯ 鍾馗の影もおぢぬ 疫病

八三四

『正章千句』

「おづ」は定家仮名遣には収録がなく、『色葉字類抄』（前山本・黒川本）の訓により不一致とした。用例では右の句を除くと、「おぢぬ・おづ・おづる」が七例、「おぢぬ・をづ・をづる」では二例の用例が見える。

◆語頭に定家仮名遣と一致しない「を」を用いる語

○をよぐ「よく 游泳」

⑯ 唐粂や柄鮫をよくなたほ浪
・中といへば大盃をおよぐ也

一一八 立見 『軒端の独活』
三五五 如流 『江戸八百韻』

右の両句には「お」と「を」の差異があり、後者の「およぐ」が定家仮名遣と一致する。用例では、「およぐ・およぎ」が八例、「をよぐ・をよぎ」が右の『軒端の独活』を除くと二例の用例が見える。

○をもき「をもし／おもみの／時はお也」重輕重也」「露おもみ／おもきの時もお也／をもしの時はを也」露重

⑰ 笠に木葉のをもき跡付

六 幽山 『宗因七百韻』

右の句以外に『江戸蛇之酢』（一二二番）『紅梅千句』（八八二番）『江戸宮筈』（四三一番）に「おもく」、『五十韻』（四二〇番）に「おもげ」が出現する。定家仮名遣には「おもき」とあるので、⑰の「をもき」は一致しない。「おもき」は約三〇例、「をもき」は右の句を除くと一例が『毛吹草』（巻六・五ノ四）に

露草やをもきが上の小夜時雨

一五五三 康甘

と見える。この句は、『嵐山集』（四七三一番）『山の井』（四一一番）にも収載されるが、「をもき」は「おもき」と記され、定家仮名遣と一致する。

以上のように、定家仮名遣と一致しない語頭が「お」の仮名遣である①から⑯の語の中で、①から⑤の五語は、定家仮名遣と一致する「を」の用例数が優勢であるが、「お」の用例がないわけではない。したがって、定家仮名遣と一致しない「お」で記されるのは、一〇俳諧集中の特殊な現象ではなく、俳諧の中では通行していた仮名遣

と見る。また、「を」の使用が優勢である語の中で、①「おそひ（遅）」②「おとと」⑤「おのれ」では、蕉風確立後も含めた『古典俳文学大系』全体では定家仮名遣と一致しない「お」の使用例が多くなる。この三語は『和字正濫鈔』卷三に

遅 おそし 万葉和名。をの字用へからす

弟 おとゝ 和名。おとうと同し。共にをゝ用へからず。兄より年のおとれは劣人のこゝろに名付たる歟

己 おのれ 万葉におほし。をの字不可用

とあり、歴史的仮名遣への推移を示すものとして注意したい。同じ俳諧集中で、同語に対する「お・を」の仮名遣が相違することは稀であり、それぞれの作品集の筆者により仮名遣に相違が見え、近世初期俳諧では、必ずしも和歌や連歌のように、定家仮名遣を規範とするのではない。

築島裕氏は『歴史的仮名遣 その成立と特徴』において

社会一般で統一的に仮名遣が行われるようになつたのは、明治以来、近々百年ぐらいのことには過ぎない。それまでは、世間に広く通用する仮名遣といふものは存在していなかつた。（七〇八頁）

と述べる。ここでの仮名遣は、今で言えば「現代仮名遣」「旧仮名遣」などの規則としての仮名遣を意味し、仮名遣が正しいか、誤りかという現代のような規定ではなく、韻文や和文文体において定家仮名遣を規範としていても、それぞれ書く人により使い分けがあつたと捉えられる。

おわりに

これまで検討を重ねてきた結果、仮名表記の語頭では「お」の使用頻度が高く、それらの多くは定家仮名遣と一致する。定家仮名遣に一致しない語の用例では、「お・を」両者の仮名遣が出現し、その仮名遣の差異は、俳諧

集の筆者が異なることによる。定家仮名遣と一致しない⑪⑫の「おゐて」に関して云うならば、『信徳一百韻』『天満千句』『江戸八百韻』『江戸広小路』などの談林俳諧集で、この表記が用いられていること、あるいは、前掲の酒井氏（二〇〇〇）の『寛永諸家系図伝』に関する考察では、「おゐて」が第一冊に九一例見え、序文以外では異例が見えない（三頁）、とあることから、当時「おゐて」の表記は通行していたと捉えられる。また、清書者が同じ『正章千句』と『紅梅千句』の定家仮名遣と一致しない語では、前者が定家仮名遣に収録がないけれども、色々字類抄と一致しない「おぢぬ」を加えると、異なり語で四語（延五語）があり、後者では異なり語で「語（延三語）」がある。この清書者が同じ二つの俳諧集を合せると異なり語六語が定家仮名遣に適合しないことになる。この事象は他の俳諧集では、異なり語一語、または一致しない語が出現しないことと比較して大きい数字を示し、清書者正章の文字意識を窺い知る事が出来る。つまり、筆者個人が慣例的に用いていた仮名遣であり、近世初期の俳諧では、習慣として定家仮名遣の權威は保持されるものの、定家仮名遣を意識的には行つていなかつたと考えられる。

注

- 1、屋名池誠「近世通行仮名表記」—「濡れた表記」の冤を雪ぐ（『近世語研究のバースペクティブ』・〇一年 笠間書院）
- 2、大野晋「仮名づかいの歴史」（『岩波講座 日本語8』一九七七年 岩波書店 改訂新版）
- 3、小松英雄『日本語書記史原論』一九九八年 笠間書院
- 4、安田章『仮名文字遣と国語史研究』一〇〇九年 清文堂
- 5、酒井憲一「近世初期通行の仮名遣いについて」『寛永諸家系図伝』（『国語と国文学』77-3 一〇〇〇年 東京大学国語国文学会）

- 6、今野真一『仮名表記論考』一〇〇一年 清文堂
- 7、寺島徹「江戸中期における俳諧の仮名遣いについて」桜花学園大学人文学部 研究紀要第8号 一〇〇六年
- 8、寺島徹「江戸中期の俳諧句集における仮名遣いの用法について」桜花学園大学人文学部 研究紀要第10号 二〇〇八年
- 9、『色葉字類抄 研究並びに索引』昭和三九年 風間書房
- 10、築島裕『歴史的仮名遣 その成立と特徴』昭和六一年 中央公論社

参考文献

- 『和字正濫鈔』（『契沖全集 第七卷』昭和二年 朝日新聞社）
『古典俳文学大系』一巻（一六巻 昭和四五年（四七年）集英社
(『古典俳文学大系』での検索には「C D - R O M（集英社）」を使用した)

第二節 振り仮名の語頭の「オ・ヲ」の仮名遣

はじめに

前節では、語頭に「お・を」が付く本文中の仮名表記の仮名遣に焦点をおいて考察してきた。そこでは、語中語尾は問題としないので正確な数字ではないが、定家仮名遣と約八六%の一致を見た。本節では振り仮名の語中に「オ・ヲ」が付く語の仮名遣において検討を加えていきたい。なぜならば

(一) 仮名表記語の語頭は「お」が多用されるが、振り仮名では片仮名の「ヲ」が多用される。

(一) 振り仮名と本文中の仮名表記語の同語の語頭の間に、振り仮名の「ヲ」に対して仮名表記の「お」、振り

仮名の「オ」に対して仮名表記では「を」を用いる語があり、両者に相違がある。

(二) 振り仮名の仮名遣で、同語において俳諧集による「オ」と「ヲ」の相違がある。

そこで、振り仮名の語頭の「オ・ヲ」と同語の仮名表記語の語頭の仮名遣の比較、併せて定家仮名遣・節用集

と照合しながら、振り仮名の仮名遣の基盤となるものを考へることを目的とした。

但し、一〇俳諧集中『江戸宮箋』は総漢字数三四三〇に対して、振り仮名が付されるのが七七字で約一・二%という低い割合であり、語頭に「オ・ヲ」が付く振り仮名は出現しない。よつて、『江戸宮箋』を除く九俳諧集での語を取り上げることになる。参考する節用集・仮名遣書は前節と同じである。

一 同語における振り仮名と仮名表記の語頭の仮名遣が一致する語

本文中の仮名表記語と同語で振り仮名を付す漢字表記語に九語があり、それを次の【表一】に示してみた。

【表一】の振り仮名と定家仮名遣との関係では、振り仮名・仮名表記とも定家仮名遣に収録がない「女子」「夥」を除くと、定家仮名遣に複数の仮名遣がある中でいずれかと一致し、節用集とは「折る」「跳／おどれ」を除いた七語が、振り仮名・仮名表記の両者の仮名遣と一致する。

表中「帶」は、『易林本』に「於」の項で「オビ」と収録があると同時に、「波」の項では「膚袴」の下注に「ソビ帶」とあり、「置く」は「遠」の項で「ヲク」とあると同時に、「淨地」の下注では「シャフチ置シタク塩噌シタク處也」と記されるので、これら二語は『易林本』に「オ・ヲ」両者の収録があるとした。

【表一】(表中「卿」は『定家卿仮名遣』による。また、複数の振り仮名(オドリ・ヲドリ／跳・躍)・仮名表記で複数ある語(おく・をく)も一致する語とした。)

	振り仮名	仮名表記	定家仮名遣	節用集
跳 <small>オドリ</small> (マダラモ)	おどれ <small>(正)</small>		をとる	ヲドル <small>(明・天・饅・黒・易・合)</small>
躍 <small>オドリ</small> (マダラモ)		おび <small>(江八)</small>	おひ	オビ <small>(易・ヲビ)</small>
帶 <small>オビ</small> (シ)	おびた <small>(正)</small> し <small>(紅)</small>	おる <small>(正・紅・七)</small>	おる	オビタタシ <small>(易・ヲビタタシ)</small>
折 <small>オビ</small> (シ)	おく <small>(當)</small> をく <small>(正・紅)</small>	おく <small>(當)</small> をく <small>(正・紅)</small>	をく	ヲル <small>(明・饅・黒・合)</small>
置 <small>オビ</small> (シ)	おく <small>(當)</small> をく <small>(正・紅)</small>	おく <small>(當)</small> をく <small>(正・紅)</small>		オク <small>(易・ヲク)</small>
（七）	音 <small>オノ</small> (紅)	をと <small>(正・紅)</small>	をと <small>(卿)</small>	ヲト <small>(黒・合)</small>
女子 <small>オノナ</small> (衆)	をと <small>(正・紅)</small>			ヲホナゴ <small>(女郎)</small>
（七）				
鬼 <small>オニ</small> (紅)				オニ <small>(易)</small>
女 <small>オノ</small> (仲)				ヲンナ <small>(易)</small>
をんな <small>(正・紅)</small>	をに <small>(正)</small>	おに・をに		
をんな				

「鬼」は『仮名文字遣』では、「お」「を」の両方に立項されていて「をにとも」「おにとも」と注記がある。この「とも」の注記は、大野晋氏（一九七七^{〔1〕}三一八頁）や坂本清恵氏（二〇一〇）が鎌倉時代後半に、アクセントが変化したことによるものと述べている。

藤原定家自筆本を忠実に臨摸したとされる『拾遺和歌集』（雜下五五九）では、みちのくの人たちのはらのくろつかにおにこもれりときくはまことかと「おに」の表記が見え、『伊勢物語』五八段の

むくらおひてあれたるやとのうれたきはかりにもおにのすたくなりけり

に対する注釈書でも、室町末期書写の『伊勢物語秘用抄』『伊勢物語宗長聞書』『伊勢物語山口記』は「おに」である。しかし、一四六〇年成立『伊勢物語愚見抄』では「をに」と表記され、室町期では、「鬼」の仮名遣に「おに」と「をに」が混用されている。『古典俳文学大系』所収の句でも両者の仮名遣が見え、『正章千句』の仮名表記「をに」は、混用の時代を反映したものであると言える。

以上、漢字表記語に付される振り仮名と同語の仮名表記で、語頭の仮名遣が「ヲ」であるのに對して、仮名表記の語頭は「お」で記された。その結果、振り仮名と仮名表記の語頭の仮名遣が一致する語には【表一】の九語があり、それらは、定家の語頭に相違がある語を、定家仮名遣・節用集と照合した結果を示してみた。

二 振り仮名と仮名表記の仮名遣が異なる語

次の【表二】に、同語において振り仮名の語頭が「ヲ」であるのに對して、仮名表記の語頭は「お」で記された者の語頭に相違がある語を、定家仮名遣・節用集と照合した結果を示してみた。

【表二】（表中「隱坊」の「オン」は色葉字類抄による。）

振り仮名	仮名表記	定家仮名	節用集
老婆（ヲヒウバ） （紅）*	おひ（正・紅）	おひ・おい	オイ（易）オヒ（伊）ヲイ（天・饅）ヲ
負（ヲヒシキ） （軒） 七・西	おへる（正・紅・宗）	おふ	オフ（易）ヲウ（天・饅・黒・合）
吁笑（ヲカシキ） （軒）	おこす（正・宗・江）	おき	ヲカシ（合）
起（ヲキテ） （七）	蛇（蛇）		
奥（ヲク） （紅）	おく（正）		
御傍（ヲツバ） （宗）*	おそば（七）		
恐（ヲシテ） （江蛇）	おそれ（紅・宗）		
おとがひ（宗）	おそば（七）	御（ヲ）お	オヘ（易）ヲク（天・饅・黒・合）
おとかい	そる	おそれ・お	オク（易）ヲク（天・饅・黒・合）
眞（オトガイ） （紅）	合（合）	合（合）	オク（易）ヲク（天・饅・黒・合）

表中*印を付す「老婆・御傍・隱坊」は、節用集・定家仮名遣に熟語として収録が見えないので、「老・御・隱」のみを次のような語が収録されていることからの類推とする。

○「老婆」=節用集（易）「老」（オイ）のみの訓、「伊」、「老悖」（オヒボレ）、（天・饅）、「老悖」（ヲイボレ）、（合）、「老坂」（ヲヒザカ）/仮名文字遣
ひうと（おいうと）/共（同上）（老人）
○「御傍」=節用集（易・伊）「御成」（オナリ）、（明・天・黒・饅）、「御成」（ヲナリ）、（合）、「御末」（ヲスヘ）/○「眞」=節用集（伊・明・天・黒・易）、「眞密」（ヲノミツ）/（色葉字類抄）

威 <small>(イシ)</small> （軒）	おどし <small>（紅・宗・</small>	をとす	ヲドス <small>（伊・明・天・饅・黒・易・合）</small>
江八	おとろかす <small>（西）</small>	おとろく	オドロク・ヲドロカス <small>（易）</small> ヲドロク <small>（天・饅・黒・</small>
驚 <small>(ヤク)</small> （七）	おとし <small>（正）</small>	おつ・おこる	明・合）
大臣 <small>(チントウ)</small> （七）	おとゞ <small>（紅）</small>	おとゞ	オトド <small>（易）</small> ヲトト <small>（伊・明・黒・易）</small>
一昨日 <small>(ツトモヒ)</small> （江八）	おとゝひ <small>（正）</small>	おとゝひ	ヲト・ヒ <small>（易・合）</small> ヲトトイ <small>（伊・天）</small>
佛 <small>(ボソラブ)</small> （紅・宗・	おもかけ <small>（江宮）</small>	おもかけ	オモカゲ <small>（伊・易）</small> ヲモカゲ <small>（伊・明・天・饅・黒・合）</small>
隱坊 <small>(ヨンボウ)</small> （宗）*	おんぼう <small>（江宮・</small>	隠 <small>（オノ）</small>	ヲン <small>（伊・明・天・饅・黒・易・合）</small>
隱房 <small>(ヨンボウ)</small> （西）*	七	黒・合）	

同じ俳諧集中で、振り仮名と仮名表記に差異が生じているのが見て取れる。

この同語における片仮名で記す振り仮名と、半仮名で書かれた本文での仮名遣の差異は、築島裕氏（一九八六^{〔8〕}）が「定家自身の『源氏物語奥入』、『奥儀抄』などの片仮名の部分には、この「ヲ」と「オ」の区別は見られない」（『歴史的仮名遣 その成立と特徴』三四頁）と記していることから、片仮名表記には定家仮名遣が反映されているないと捉え、本文中の平仮名表記と振り仮名の片仮名表記の間では、「お（オ）」と「を（ヲ）」の仮名遣が統一さ

「驚す」は『七百五十韻』で
君驚す春の奥なる陰よりも

常之 七九番

「驚す」は『七百五十韻』で
君驚す春の奥なる陰よりも

と詠まれ、節用集では「驚」に「ヲドス」の訓は見えない。定家仮名遣には「お

とろく」、節用集には「オ（ヲ）ドロク・ヲ

ドロカス」と収録があり、当該句では

「おとろかす」意と捉えるが、「威す」と同じ意と取れば、定家仮名遣・節用

集に「ヲドス」とあり一致する。

また【表一】から『紅梅千句』では、「老婆」に対して仮名表記では「老」に「おひ」、『宗因七百韻』では「負」に対

して仮名表記では「おへる」のように、

れていかない根拠の一つであると考えられる。同時に、片仮名で記す振り仮名について、矢田勉氏（一〇〇五^{〔9〕}）が次のように述べていることが、振り仮名の片仮名表記と本文中の平仮名表記に差異が生じる要因の一つとなる。

振り仮名の由来が訓点の仮名点にあつた以上、本来、振り仮名の用字は片仮名であるのが理の当然であった。振り仮名の主たる機能が、対応する漢字の音形の表示であることからしても、より表音性の傾向が強い文字である片仮名が選択されるのが自然である。（『漢字と日本語』朝倉漢字講座1 一七三頁）

【表二】の振り仮名と仮名表記に相違がある語では、振り仮名一五語中、一語が定家仮名遣と一致し節用集のいづれかとはすべて一致する。但し、節用集の中で『伊京集』に限っては振り仮名の仮名遣とは一致度が低く「老・負・起・奥・御・頤・大臣・佛」の八語の訓の仮名遣は、振り仮名とは一致しないが定家仮名遣とは一致する。このように『仮名文字遣』と『易林本節用集』が密接な関係にあることについては、『易林本節用集』の巻末に「惟取定家卿、假名遣分書伊為越於江惠之六隔段以返レト之云」と易林の識語があり、橋本進吉氏（一九六八^{〔10〕}）は、易林本類において「ゐ・お・ゑ」と「い・を・え」が分けられているのは、「易林が仮名文字遣に依つて改めたもので、その原づく所の本には、他の諸本の如く之を併せてあつたものと思はれる」（『古本節用集の研究』一二八頁）と両者の関係を述べる。

また、築島裕氏（一九八六）が『連歩色葉集』と『易林本節用集』は定家仮名遣を使用していると述べ（前掲の書 五九頁）、今西浩子氏（一九九六^{〔11〕}）は、『仮名文字遣』は「易林本節用集の採録語の出典の一つであつたことは別に、仮名遣の参考資料として利用されることはなかつたであろうか」（『国語文字史の研究二』一二七頁）と両者の関係を述べる。

これまで、本文中の仮名表記と振り仮名の両者の語頭に「お（オ）・を（ヲ）」が付く語を取り上げ、同語において比較考察することを試みてきた。一節では、本文中の仮名表記語での語頭は「お」が多用され、定家仮名遣との一致度が高く、それに対しても本節【表二】での振り仮名の語頭は「ヲ」で記され節用集との一致度が高いことが認められた。しかし、振り仮名の中には語頭に「オ」を用いる俳諧集も出現する。

【表一】【表二】では本文中の仮名表記の語と共通する振り仮名二四語に限って考察してきたが、ここでは一〇俳諧集の振り仮名の語頭に「オ・ヲ」がつく延一〇一語を取り上げ、定家仮名遣との関係、或は俳諧集による特徴が見られるかを検討していくことにする。この延一〇一語の中には、振り仮名付きで同じ俳諧集で二回出現する語に「大臣（セイジン）・飲食（エイシキ）」がある。また、一種以上の俳諧集に亘って出現する漢字表記語には「甥（一回）・負（三回）・覆（一回）・龜（五回）・驕（一回）・伯父（二回）・跳（二回）・悌（三回）・御（二回）」があり、「御」は『當流籠抜』に「御日（ヨウニチ）」、『軒端の独活』に「御しら露（ヨウシリラス）」のように、「御」の振り仮名に語頭の「オ・ヲ」の違いがある。このように複合語として同じ語ではないけれど接頭辞「御」のみを対象とした。「御」以外にも、「驕」が『正章千句』に

幾春か^{オドリ}驕^ヲはめし平家方^ヲ
と「オゴリ」と振り仮名が付され、『七百五十韻』には次の句で「ヲゴリ」と振り仮名が付される。

春の夢^ヲ驕^ヲ大臣^ヲとだへして^ヲ
政定^ヲ一七九番^ヲ

また、用字に違いがあるが、『軒端の独活』での「奢る」の振り仮名の語頭は「ヲ」である。これら三句の振り仮名の語頭の仮名遣に、『正章千句』と『七百五十韻』『軒端の独活』では「オ」と「ヲ」の差異が見え、『正章千句』での「オゴリ」は節用集・定家仮名遣とは一致しないが、『七百五十韻』『軒端の独活』の「ヲゴリ」は節用集・定家仮名遣との一致を見る。

「跳」^{オドリ}に関しては、『正章千句』では

【表二】

跳^ヲ法度と觸る猪熊^ヲ
と振り仮名の語頭は「オ」であるが、『紅梅千句』では

春の夢^ヲ驕^ヲ大臣^ヲとだへして^ヲ
正章^ヲ八一八番^ヲ

とあり、「オ」と「ヲ」の違いがある。この『正章千句』二一四番と『紅梅千句』八一八番の作者は同じ正章であり、両句が所収されている『正章千句』と『紅梅千句』の清書者もまた同じ正章であるという共通点がある。しかし、両者は清書する人が同じであるにもかかわらず、振り仮名の語頭の仮名遣には相違があり、清書する人が同じでも、振り仮名を付す人は異なることが認められる。ちなみに『西鶴五百韻』では

跳^ヲ九十百に^ヲなりても躍出^ヲ西鶴^ヲ四一五番^ヲ

と「躍」に対する振り仮名は「ヲトリ」である。「跳」の振り仮名「オ」は、節用集とは一致しないが、『紅梅千句』『西鶴五百韻』の「ヲ」は、収録がある節用集七種と一致し、「驕」「跳」は、定家仮名遣と節用集とは「ヲ」で一致することになる。

このように『正章千句』では、振り仮名において多少の混乱が見え、「驕・跳」の振り仮名「オ」は、他の俳諧集や定家仮名遣・節用集では「ヲ」を用い一致しない。「夥^{オダク}し」の振り仮名の語頭「オ」も『易林本節用集』以外の節用集とは不一致を示す。これらのわずか二語からの判断では早計すぎるかもしれないが、『正章千句』の振り仮名の一部は、清書者正章自身が恣意的に施したもののが可能性が考えられる。

合計	七百	軒端	江宮	江蛇	西鶴	當流	江八	宗因	紅梅	正章	俳諧集		定家仮名遣
											延語数	振り仮名の語頭	
101	20	14	0	3	7	5	9	15	21	7	ヲ	振	
89	20	11	0	3	7	5	8	14	18	3	ヲ	振	り仮名
12	0	3	0	0	0	0	1	1	3	4	オ	の語頭	
37	6	6	/	/	1	2	3	4	5	7	3	一致数	
27	5	3	/	/	0	3	2	2	2	8	2	不一致数	
37	9	5	/	/	2	2	0	3	8	6	2	収録なし	
37%	35%	43%	/	/	33%	29%	60%	44%	33%	33%	43%	一致度・約	

以上のような考察から、定家仮名遣とそれぞれの俳諧集の振り仮名の一一致度を前掲の【表三】にまとめてみた。

【表二】の延語数は振り仮名の語頭に「オ・ヲ」が付く語数である。【表三】では、延一〇一語中定家仮名遣と三七語が一致し、約三六・六%を占める。定家仮名遣に収録がない語の中で、「大なみ・大柄」の「大」、「老婆」の「老」、「落武者・落瀧」の「落」、「追剥」の「追」、「御傍・御乳・御祓・御卒曾離」の「御」、「親父・親仁」の「親」、「重日」の「重」のみを定家仮名遣と照合すると次のようになる。()内には定家仮名遣書での事例を示す。(「定」は定家仮名遣)

○一致する振り仮名

「大」(オホ)「紅・軒」(オホ)「定」(オホ)人(オホ)江(エヌ)山(ヤマ)・大(オホ)鹿(シカ)・大(オホ)方(カタ)

「追」(オホ)「宗」(オホ)「定」(オホ)追(オホ)風(カキ)・追(オホ)

「御」(ヲ)「軒・七」(ヲ)「定」(ヲ)御(オホ)頭(カツ)梳(カス)・御(オホ)座(カサ)

「親」(ヲ)「江八」(ヲ)「定」(ヲ)を(オホ)ニ

○一致しない振り仮名

「老」(オホ)「紅」(オホ)「定」(オホ)老(オホ)曾(オホ)森(オホ)・老(オホ)人(オホ)

「御」(ヲ)「宗」(ヲ)「定」(ヲ)右(オホ)に(オホ)既(オホ)述(オホ)

「落」(ヲ)「宗」(ヲ)「定」(ヲ)落(オホ)魄(オホ)・落(オホ)葉(オホ)

「重」(ヲ)「七」(ヲ)「定」(ヲ)お(オホ)も(オホ)み(オホ)・お(オホ)も(オホ)き(オホ)「を(オホ)もし(オホ)」と(オホ)あり、『七百五十韻』では「重日」なので不一致とした)

右に『色葉字類抄』にある「夥(オホ)し」(正)を一致する語に加えれば、一致する語が四四語となり、約四三・六%の一一致度となる。意外に高い数字ではあるが、定家仮名遣に収録がない語に三七語があることは問題であり、漢字に付す片仮名の「ヲ」の振り仮名と定家仮名遣の「を」が偶発的に一致したまでのことで、定家仮名遣を意識しているのではない。清書者・板下が一座の一員である俳諧集、例えば正草千句・紅梅千句・軒端の独活(推定)では、振り仮名に個人の仮名遣が反映していると考えられる。

次に、各俳諧集の振り仮名の仮名遣と定家仮名遣の関係を「ア、振り仮名と定家仮名遣が一致する」「イ、振り仮名と定家仮名遣が不一致」「ウ、定家仮名遣に収録がない語」に分類して具体的に示しておくことにする。

ア、定家仮名遣と一致

【正草千句】	大原(オホバラ) (ガシ) 伯父(オホジヤ) 者(オホザヤ) 愛(オホア) 石(オホシギ)
【紅梅千句】	帶(オホタ) 怨(オホタ) 懈(オホタ) 行(オホタ) 跳(オホタ) 驚(オホタ)
【宗因七百韻】	及(オホシ) 納(オホシ) 伯(オホシ) 父(オホシ) 者(オホザヤ) 愛(オホア) 石(オホシギ)
【江戸八百韻】	折(オホシ) 剥(オホシ) 剥(オホシ) 菊(オホシ) 菊(オホシ) 嫁(オホシ)
【當流籠抜】	罷(オホシ) 部(オホシ) 罷(オホシ) 見(オホシ) 遠(オホシ) 跳(オホシ)
【西鶴五百韻】	遲(オホシ) ひ(オホシ) 躍(オホシ)
【江戸蛇之鮐】	恐(オホシ)

イ、不一致

【正草千句】	大原(オホバラ) (ガシ) 伯父(オホジヤ) 者(オホザヤ) 愛(オホア) 石(オホシギ)
【紅梅千句】	帶(オホタ) 怨(オホタ) 懈(オホタ) 行(オホタ) 跳(オホタ) 驚(オホタ)
【宗因七百韻】	及(オホシ) 納(オホシ) 伯(オホシ) 父(オホシ) 者(オホザヤ) 愛(オホア) 石(オホシギ)
【江戸八百韻】	折(オホシ) 剥(オホシ) 剥(オホシ) 菊(オホシ) 菊(オホシ) 嫁(オホシ)
【當流籠抜】	罷(オホシ) 部(オホシ) 罷(オホシ) 見(オホシ) 遠(オホシ) 跳(オホシ)
【西鶴五百韻】	遲(オホシ) ひ(オホシ) 躍(オホシ)
【江戸蛇之鮐】	恐(オホシ)

ウ、定家仮名遣に収録なし

【正草千句】	夥(オホシ) 肪(オホシ) 脰(オホシ) 腹(オホシ) 腹(オホシ) 腹(オホシ)
【紅梅千句】	夥(オホシ) 肪(オホシ) 脰(オホシ) 腹(オホシ) 腹(オホシ) 腹(オホシ)
【宗因七百韻】	夥(オホシ) 肪(オホシ) 脰(オホシ) 腹(オホシ) 腹(オホシ) 腹(オホシ)
【江戸八百韻】	夥(オホシ) 肪(オホシ) 脰(オホシ) 腹(オホシ) 腹(オホシ) 腹(オホシ)
【當流籠抜】	夥(オホシ) 肪(オホシ) 脰(オホシ) 腹(オホシ) 腹(オホシ) 腹(オホシ)
【西鶴五百韻】	夥(オホシ) 肪(オホシ) 脰(オホシ) 腹(オホシ) 腹(オホシ) 腹(オホシ)
【江戸蛇之鮐】	夥(オホシ) 肪(オホシ) 脰(オホシ) 腹(オホシ) 腹(オホシ) 腹(オホシ)

*当該集九九番の「斧」に付された振り仮名が「ヲキ」のように見えるが、「ヲ」の二画目の横線が

一重になつていることから、訂正が不明瞭ではあるが、誤刻と判断し除外した。

右の語の中で、アの定家仮名遣と一致する語で節用集と一致しない語には「及(オホシ)ぬ(オホシ)宗(オホシ)」・「折(オホシ)る(江八)」・「御(オホシ)(軒)」

があり、「帶^{ナビ}／紅^{ナビ}」は古本節用集六種と合類節用集のうち『易林本』とのみ一致し、他の節用集とは一致しない。イの振り仮名と定家仮名遣が不一致の語で、節用集とも一致しない語には「驕^{ナギ}／正^{ナガ}」跳^{ナギ}／正^{ナガ}」がある。「御^{ヲホ}／當^{ナヒ}」は『易林本』にのみ「オホン」と収録があり、『軒端の獨活』では一致するが『當流籠抜』では一致しない。「御^{ヲホン}」ではなく「御乳^{ヲホル}」御祓^{ヲホリ}／宗^{ノミコト}」のように「ヲ」と読むときは、『明応五年本』などと一致する。ウの定家仮名遣に収録がない語で節用集に収録があるが、振り仮名の仮名遣が異なる語には「恩徳^{ヲシンドク}／紅^{ナビ}」がある。『正章千句』の「夥^{サタカ}」は参考した節用集のうち、『易林本』とは一致するが他の節用集とは一致しない。ちなみに節用集に収録がない語には、

紅梅千句	落武者
宗因七百韻	ヲヒハギ
江戸八百韻	追剥 ^{ヲツバ}
西鶴五百韻	御傍 ^{ヲツバ}
軒端の獨活	隱房 ^{ヲシムボウ}
大柄	親仁 ^{ヲヤシ}
七百五十韻	御卒曾 ^{ヲツバ} 離 ^{モリ}
乙甲	臚辱 ^{ヲルヨク}
	飲食 ^{ヲシシキ} ②
	重目

がある。

こうして見てみると、以上の中で『正章千句』では、定家仮名遣・節用集の両者と一致しない「驕^{ナギ}」跳^{ナギ}」の二語があることは注意されると言えるだろう。

おわりに

振り仮名の語頭の多くは「ヲ」で表記され、同語において本文中の仮名遣と振り仮名を比較した結果では、定家仮名遣とは【表一】と【表二】の二四語中七語が一致し、一致度が低く、節用集とは一致度が高い。この事象は、振り仮名を付す人が振り仮名を付すに当たり、節用集と同様に片仮名で記されていることも考え合わせて、参考する仮名遣の基盤となるものが、節用集と同じであることが推測される。

さらに、振り仮名二四語のみでなく、語頭に「オ・ヲ」が付く延一〇一語において定家仮名遣との一致度を調査してみると約三七%の一一致を見た。そこに定家仮名遣に収録がある語とは差異があるが、熟語の上部の漢字の振り仮名のみ、或は『色葉字類抄』に収録がある「夥^{サタカ}」も含めると、約四三・六%が一致することになる。その中で『正章千句』では、「驕^{ナギ}」跳^{ナギ}」のように節用集・定家仮名遣とも一致しない振り仮名が出現すると同時に、同俳諧集では、前節で述べたように本文中の仮名表記に、複合語の前部構成要素「おし・をし」の混用、語頭では同じ正章が書きした『紅梅千句』を含めると、定家仮名遣「を」に対する「お」の使用が多いことなど、正章個人の自由な文字領域を窺い知ることが出来る。

注

- 1、大野晋「仮名づかいの歴史」（『岩波講座 日本語8』一九七七年 岩波書店 改訂新版）
- 2、坂本清忠「ゆれる（をのこ）とゆれない（おとこ）——『仮名文字遣』の諸本とアクセントの体系変化——」（『古典語研究の焦点』一〇一〇年 武藏野書院 八三一頁）
- 3、『拾遺和歌集の研究』片桐洋一著 昭和五五年 大学堂書店
- 4、『伊勢物語秘川抄』三条西家流の立場にたつ注釈書（鉄心斎文庫 伊勢物語古注釈叢刊第五卷 平成元年 八木書店）
- 5、『伊勢物語宗長聞書』武田本系統本（陽明叢書国書篇 第九輯 昭和五一年 思文閣）
- 6、『伊勢物語山口記』宗祇著（冷泉家時雨亭叢書 第八〇巻 一〇〇八年 朝日新聞社）

- 7、『伊勢物語愚見抄』一条兼良筆（治泉家時雨亭叢書 第四一巻 一九九八年 朝日新聞社）
8、築島裕『歴史的仮名遣 その成立と特徴』一九八六年 中央公論社

9、矢田勉「振り仮名」（『朝倉漢字講座1』漢字と日本語 二〇〇五年 朝倉書店）
10、橋本進吉『古本節用集の研究』一九六八年 勉誠社

11、今西浩子『国語文字史の研究』三』一九九六年 和泉書院

12、「隱坊」と「隱房」、「躍」と「跳」、「驕」と「奢」は漢字の違いから異なり語とした。

13、『色葉字類抄 研究並びに索引』昭和三九年 風間書房

参考文献

『古典俳文学大系』一巻（一六巻 昭和四五年～四七年 集英社）

結語

俳諧は和歌や連歌の線上に位置する韻文の一つである。それならば、仮名遣において、どのような様相を呈しているか、本草では、語頭の「お（オ）・を（ヲ）」のみであるが、本文中の仮名表記語と振り仮名の語頭に「お（オ）・を（ヲ）」がつく語を取り上げて考察を試みてきた。考察の対象とする一〇俳諧集中、同語の語頭の「お（オ）・を（ヲ）」において、俳諧集により仮名表記の語頭や振り仮名の語頭の仮名遣に差異がある語が見えること、本文中の仮名表記語と振り仮名の仮名遣には相違があることなどの問題点があるからである。

一節では、語頭に「お・を」が付く本文中の仮名表記語と、定家仮名遣との一致度を調査した結果を示した。

そこでは、仮名表記の語頭は、「お」の使用頻度が高く、それらは概ね定家仮名遣に準拠しているが、一致しない例もあることを報告した。一致しない語を一〇俳諧集以外での使用状況を見ると、一〇俳諧集と同様に定家仮名遣では「を」であるのに反して「お」を用いる例、或は定家仮名遣では「お」であるのに俳諧集では「を」を用いる例もあり、一〇俳諧集での特殊な現象ではないことが認められた。近世初期に限ることなく、天保の時代頃まで調査を進めると、時代が下るにつれて定家仮名遣で語頭に「を」を用いる語は、「お」で表記される例が多くなり、「を」から「お」の多用へと推移する様相も同時に窺うことができた。

二節では、振り仮名の仮名遣を中心にして、本文中の仮名表記語・定家仮名遣・節用集と比較して検討を進めていった結果では、振り仮名の語頭では「ヲ」が多用され、それらは節用集との一致度が高い。振り仮名の仮名遣は、節用集と同様に片仮名で記されていることも考え合わせて、定家仮名遣は反映されず、参照する仮名遣の基盤となるものが、節用集と同じであることが推測される。また、本文中の平仮名表記と振り仮名の片仮名表記では、「ことば」と「ヨミ」を示す「質の違い」により仮名遣に違いが生じているとする。

以上のような考察を通して、一つには、本文中に見える仮名表記は、筆者個人の常用仮名遣によるものであり、近世初期の俳諧では、定家仮名遣を意識的には行っていなかつたと結論づける。いま一つには、同じ俳諧集の中で本文中の複合語の前部要素の語頭の仮名遣に「おしー」と「をしー」のように「お・を」両者を用いること、振り仮名の仮名遣が節用集と一致しない例があることなどの異例が見え、中には個人による自由な文字領域が窺えることを明らかにした。

終 章 本稿の結論と今後の課題

日本語書記の史的研究に於いて、通時的に論を展開して行くには、まずそれぞれの時代における共時的な調査検討がなければ論じることはできない。

そこで本稿では、江戸時代初期という時代設定をし、今まで国語学的研究において、殆んど取り上げられなかつた俳諧集を資料として、表記の面からの考察を重ねてきた。その結果、振り仮名に関して振り仮名を付す場面・機能などの諸問題、或は漢字表記における当て字など、内蔵されている多くの問題の、ごく一斑ではあるが明らかにすることが出来たのではないかと思う。

第一章では、振り仮名に関する諸問題を中心に、どのような場合に振り仮名が付されるか、振り仮名の機能などを検討し、同時に振り仮名の形式にも触れた。そこでは難読字に付す振り仮名を基本として、次のようなことが認められた。

- (一) 振り仮名には意味を弁別する機能がある。
- (二) 易しい漢字でも語形を示す振り仮名がある。
- (三) 同じ漢字でも用法が異なる場合は、出現頻度が低い用法に振り仮名が付される。
- (四) 振り仮名の文字種には片仮名が用いられる。
- (五) 読本（よみほん）のように左右両側に付ける振り仮名は希である。

第二章では、談林の文字世界における特異な表記・ヨミなどについて言及していく。第一節では「やさし」に当てる「婀娜」「艶し」の二種の漢字表記は、『江戸八百韻』と同様に西鶴の浮世草子でも使い分けが見られ、文脈における表現性を重視したものとする。二節での「悶る」^{「イキ」}は、漢字「悶」と振り仮名「イキ（る）」により、二

つの映像を合わせた新しい表現法を採用しているとする。二節の「哆」に關しては、現段階では『合類節用集』と『書言字考節用集』以外では、辞書・用例ともに「あつかひ」と読む事例が見出せない。「哆」に「アツカヒ」と振り仮名が付されることについて、いくつかの仮説を立て、その中で「哆」が持つ「はだかる」の義を含ませた情景描写のために「哆」を採用したとする。これは「悶る」と類似する二重表現法であり、表現としての振り仮名と捉えられる。四節の熟字訓「口外」^{（ロウガイ）}については、『空華日用工夫略集』以前、或は同書と近世との間の事例など、通時的な調査の必要性が課題として残された。當て字に関しては、遊戯的に漢字を変えることにより、新しい表現を志向する結果であるとする。

このような考察の結果、第二章では第一章の（一）から（五）の振り仮名の機能に加え、新たに

（六）二重イメージのよう表現性を重視した振り仮名

があることを報告した。

第三章では、これまでの漢字を主とした考察から離れ、仮名遣から俳諧集を見る事にした。

第二章一節では、本文中に見える語頭に「お・を」が付く仮名表記語を定家仮名遣と比較して見ると、概ね定家仮名遣に準拠している。一致しない語を一〇俳諧集以外の俳文學作品で見ると一〇俳諧集と同じ仮名遣が見られる作品集もあり、近世初期の俳諧では、定家仮名遣の権威は保持されるものの、意識的には定家仮名遣を行っていないことを報告した。二節では振り仮名の語頭では「ヲ」が多用され、それらは節用集との一致度が高い。この事象は、節用集と同様に振り仮名は片仮名で記されることも考え合わせて、参照する仮名遣の基盤となるものが節用集と同じであることが推測されるとする。

以上、今回は近世初期俳諧集の中で、一〇俳諧集しか調査の対象としなかつたが、第一には、振り仮名に関して言うならば、前掲の（一）から（六）のような結果を得たこと、第二には、漢字と振り仮名による二重の表現節の「哆」について、あるいは同章四節の「口外」のヨミなどでは、史的な調査などが必要であると考えている。また、考察の対象とする資料では、一〇俳諧集中、貞門の俳諧集が二集、談林の俳諧集が八集で談林に偏りすぎていることから、今後貞門の俳諧集をもう少し取り上げ検討していきたい。同時に以上に加えて、用語の問題を整理することも必要であり、多くの課題が残されている。

最後に、本稿では九本の論文をもとに、全体にわたって加筆訂正したもので成り立っているが、その中で既发表の論文との関係を示しておく事にする。

第一章 振り仮名が付される漢字表記語と表記形態

第一節 『紅梅千句』における振り仮名

（『紅梅千句』における振り仮名の一考察 大阪府立大学『上方文化研究センター 研究年報第九号』二〇〇八年二月）

第二節 『軒端の独活』『江戸宮箋』の表記

（『軒端の独活』『江戸宮箋』を中心とした表記の考察 大阪府立大学『上方文化研究センター 研究年報第一〇号』二〇〇九年三月）

第二節 『正章千句』の振り仮名

（『正章千句』の振り仮名に関する一試論』『国語文字史の研究十二』二〇一一年二月 和泉書院）

第四節 『宗因七百韻』と『七百五十韻』の表記—振り仮名の機能と表記形態の特徴—

（『国文学』九四号 関西大学国文学会 一〇一〇年）

第二章 近世初期俳諧の用字考証

第一節 近世初期俳諧における「やさし」の用法—『江戸八百韻』に見える「婀娜」^{ヤドリ}「艶し」^{ヤヂ}について—

(『国文学』九五号 関西大学国文学会 二〇一一年)

第二節 『當流籠抜』における「悶る」^{イキ}について

(「近世初期俳諧の用字考証—『當流籠抜』における「悶る」^{イキ}について—」『国文学』九六号 関西大学国文

学会 二〇一一年)

第三節 『江戸八百韻』に見える「哆」の訓みについて（未発表）

第四節 『西鶴五百韻』の用字考証—熟字訓と当て字—（未発表）

第三章 仮名遣から見た近世初期俳諧集—語頭に「お（オ）」「を（ヲ）」が付く語について—

第一節 本文中の語頭に「お・を」が付く仮名表記語—定家仮名遣を通して—

(「仮名遣から見た近世初期俳諧集」『国文学』九七号 関西大学国文学会 二〇一二年三月の前半部を独立させて補訂したもの)

第二節 振り仮名の語頭の「オ・ヲ」の仮名遣

(右の論文の後半部を独立させて補訂したもの)

本稿では、俳諧を取り上げ、表記の視点から考察を重ねてきた。今回は一片の報告に過ぎないけれども、つとに指摘されている表現としての振り仮名に、少しは触れることができたなど、俳諧の表記における特質を実証できたのではないかと思う。今後、さらに多くの語を取り上げて用字考証を行うなど、残された課題に取り組んでいきたいと考えている。

資料編

- 資料一 紅梅千句振り仮名付き語と付合指導書との関係
- 資料二 振り仮名を付す語と条件との関係
- 資料三 一〇俳諧集における振り仮名付き語

【資料一】 紅梅千句振り仮名付き語と付合指導書との関係

漢字	振り仮名	はなひ草	俳諧御車	俳諧類叢集
1 堀	アカ			○
2 灰汁	アク			○
3 蘆	アン	○	○	○
4 豈	アゼ	あぜ	○	○
5 熟田	アツタ			○
6 敷盛	アツモリ			○
7 塵	アハ	○	○	○
8 鮎	アハビ			○
9 蓼上	アフヒノウヘ			○
10 篠	アブミ	○		○
11 泉郎	アマ	蟹・海士・海人	海士	海士・蟹
12 鮎	アユ	○	○	○
13 荒波	アラ波			荒浪
14 静ふ	アラゾ(ふ)	あらそひ		
15 嬢	アリ			○
16 役く	アリ(く)		ありく	ありき道
17 衣桁	イカウ			○
18 芦鶴	イカキ		いがき	○
19 軍	イクサ	いくさ		○
20 威勢	イセイ			○
21 石上	イソノカミ			○
22 鳴	イタチ			○
23 一揆	一キ			○
24 一口	一ジツ		○	○
25 臭	イズミ	○	○	○
26 電	イナヒカリ	いなびかり	○	稻光
27 守宮	イチリ		○	守宮
28 鶴舟	ウ舟	○		○
29 土龍	ウグロモチ			○
30 諾ふ	ウタ(ふ)	○		○
31 温飼	ウドン			うどん
32 飢	ウヘ			○
33 運	ウン			○
34 酔たる	エイ(たる)	○	○	○
35 誰	エイ		○	
36 條	エタ		枝	枝
37 痢多	エタ	○		○
38 恵比須講	エビスカウ			恵比酒講
39 脱	エビラ	えびら		
40 鳥帽子	エボシ	○	○	○
41 縁	エン	えん		
42 猿猴	エンコウ	ゑんこう	○(猿猴の手)	○(猿猴の手)
43 縁付	エンヅキ			○
44 帽	オビ		○	○
45 漢	ヲキ	沖	沖	沖
46 蕁草	ヲキナ草			翁草
47 奥	ヲク		○	奥国
48 行ひ	ヲコ(ひ)	をこなひ		○
49 雄	ヲコリ			○
50 小手巻	ヲダマキ		をだまさ	○
51 落武者	ヲチ武者			○
52 骨	ヲト	○	○	
53 跳る	ヲド(る)	躍	おどる	
54 頤	ヲトカイ			○
55 鬼	ヲニ	○	○	○
56 佛	ヲモカゲ	おもかげ	面影	○
57 狼	ヲカミ			○
58 甲斐	カイ			○
59 薙	カイコ			○
60 海草	カイサウ		○	海藻
61 麋	カウジ			○
62 麋鹿	カバシ	かし	かべし	奈山子
63 香久山	カク山			○(天香久山)
64 薙乱	クハクラン	くわくらん	○	○

65	籠	カゴ		○	○
66	粗枕	カヂ枕			梶枕
67	首途	カトデ	○	○	○
68	貢もの	カヒ(もの)			貢物
69	哥舞妓	カブキ		かぶき	○
70	華	カブラ			○
71	壁	カベ	○		○
72	鎌倉	カマクラ			○
73	上	カミ	○	○	
74	瓶	カメ			○
75	萱草	カヤブキ		萱ぶき	
76	鴨	カニ			○
77	荷葉	カヨウ		○	
78	碓	カラウス			○
79	鳥爪	カラスクリ			からす瓜
80	河狩	河ガリ	川がり・河がり		○
81	元興寺	グハンゴウ(じ)			元興寺
82	寒坊離	カソゴリ			○
83	勧進帳	クハシジンチャウ	(勧進のみ) *	(勧進のみ) *	○(勧進／帳)
84	勧進坊主	クハシジンバウス	○	○	○(勧進／坊主)
85	黄	キ	○	○	
86	鬼界が嶋	キカイ(が嶋)			○
87	牙	キバ			○
88	貴布祢	キブネ	○		○
89	花車	キヤシヤ		(訓ナシ: 吾義) *	
90	脚伍	キヤフ			きやふ
91	玉殿	ギヨケン			○
92	玉兎	ギヨクト		○	
93	桐	キリ	○	○	○
94	琴	キン	訓(こと)		訓(こと)
95	櫻花	キンクハ			○
96	鯨	クジラ			○
97	鮫	クジラ			○
98	葉玉	クスタマ	○	○	○
99	櫛	クスノキ			○
100	具足	グソク			○
101	噸	グヒ	くふ		
102	組	グミ			○
103	穢	グラ	○		○
104	栗	クリ	くり		○
105	景	ケイ	訓(かけ)		○
106	稽古	ケイコ	○		○
107	喧嘩	ケンクハ			○
108	甚	ゴ	○	○	○
109	濃茶	ゴイチャ			○
110	格子	カウン	○		○
111	氷砂糖	氷サタウ		○	○
112	漕ぐ	コぐ		こく	漕舟
113	国阿	コクア			○(国阿上人)
114	五月五日	ゴグハチゴニチ		訓ナシ	
115	昔	コケ	○	○	○
116	奥	コシ			○
117	乞食	コジキ	こつじき		訓(コツジキ) / 付合語訓ナシ
118	牛頭	ゴヅ		○(牛頭馬頭)	
119	鈎簾	コス	○	○	
120	胡椒	コセウ			○
121	木闇	コノマ		○(木の間)	○(木の間)
122	碁盤	碁バン			○
123	五百羅漢	五百ラカン			○
124	脣	コヨミ		こよみ	○
125	垢離	コリ			○
126	衣	コロモ	○	○	○
127	牛王	ゴワウ			○
128	菜	サイ		さい	
129	催馬糞	サイバラ	○	○	○
130	宰府	サイフ			○
131	材木	ザイモク		○	○

132	薄遙	サヘカヘ(る)	さゑかへる	寒局	
133	倭	サクラ	○	○	○
134	雛喉	ザコ			○
135	天角豆	サハゲ	さげ		小角豆
136	桟敷	サジキ	○		○
137	指身	サシミ			さしみ
138	摩頭	サト	○	○	○
139	砂糖	サタウ	○		○
140	貞盛	サネモリ			安盛
141	鰐	サバ			○
142	金精	サビ		さび	渢(サビル) / さびリ
143	三味線	サミセン		○	
144	三途河	サンヅ河		○(三途川)	
145	主	シウ	○		
146	從者	ジワザ	○		
147	塗子	シホヒ		○	○
148	敷	シキ	○		
149	塙	シキミ		○	○
150	侍従	シヅウ			○
151	獅笛	シハブエ	しふえ		獅子／笛
152	時守	ジシユ			時宗
153	時守寺	ジシユデラ			時宗寺
154	時正	ジシヤウ		○	
155	齋聚	シダ	しだ		○
156	濕氣	シヅケ			○
157	渡師	シブガキ			○
158	汪連	シメ			○
159	麝香	ジヤカウ			○
160	婆娑	シヤバ			○
161	深救	ジユズ	○		○
162	書院	ショエン	○		○
163	鑑壇	セウキ			○
164	精進	サウジ	○		○
165	虱	シラミ			○
166	白髮	シロカミ	しらが	しらかみ・白かみ	訓(シラガ)
167	城責	シロセメ			○
168	新発意	シンボチ			○
169	神泉苑	シンゼンエン		○	○
170	神農	神ノウ			○
171	神輿	シンヨ			訓(ミコシ)
172	裏	ス	○	○	○
173	水晶	スイシヤウ		水精	○
174	透	スキ			○
175	透間・すき間	スキマ・(すき)マ		すきま	すきまの風
176	餚	スジ	○		○
177	撲	ス			○
178	錫	スハ			○
179	癡かぜ	スマ(かぜ)			涼風
180	薄	スマキ	○		○
181	硯	スマリ		○	
182	諫訪	スマハ	○		○
183	施行	セギヤウ			○
184	節	セヂ			○
185	節分	セヂブ	○	○	○
186	雪隱	セツチン			○
187	錢湯	セントウ			洗湯
188	善導大師	ゼンダウ大师			○
189	洗濯	ゼンダク			○
190	雜煮	ザウニ	○		○
191	草履	ザウリ		さうり	○
192	蘇民	ゾミン			○(蘇民将来)
193	候	ゾロ	○		
194	誰	タ		訓(たれ)	
195	手折	手ヲル	○		手折夕かほ
196	高養齒	高ヤウシ			高揚伎
197	鷹飾	鷹ジヤウ		鷹阮	○
198	帳幘	ダイゴ	だいご		○

199	薪	タキ	○	○	○
200	卓散	タクサン		沢山	
201	尋	タヅネ	○	○	
202	蓼	タテ	たで		○
203	珠	タマ	玉	玉	○
204	團子	ダンゴ			○
205	調葉	テウサイ		○	
206	挑燈	テウチン		○	
207	墜要	ツイリ	墜粟花(ついくわつ)		
208	杖	ツエ		○	
209	頭巾	ツキン	○	○	
210	鍼	ツボミ		○	
211	蕪	ツバメ	つぼめ		○
212	礫	ツブテ		○	
213	詰る	ツム(る)		結(ツメル)	
214	摘る	ツメ(る)	○	つむ	○
215	釣針	ツリ針		つりばり	○
216	鉢	ツルギ		劍	
217	軀	ティ	体		
218	亭主	ティイヌ		○	
219	手形	手ガタ		○	
220	敵	テキ	○	○	
221	出来て	デキ(て)		○	
222	鍔炮	デツハウ	○	○	
223	照	テル		○	
224	田菜	デンガク		○	
225	道場	タウジヤウ		○	
226	納涼	タクリヤウ	○	○	
227	籠籠	トウロ		○	
228	科	トカ		○	
229	肴	トキ		○	
230	とし越	(とし)越		年越	
231	杜子美	トシミ		○	
232	屠蘇散	トソビヤクサン		屠蘇散	
233	土礫	トチャウ			
234	十津川	トヅカハ		○	
235	瞬鈴	トンハウ		○	
236	菜	ナ		○	
237	直寸	ナヲ(ナ)		○	
238	仲歎	ナカマロ		○	
239	諸	ナギサ	○	○	○
240	茄	ナスピ	なすび	○	
241	那智	ナチ		○	
242	納豆	ナツトウ		○	
243	菜畑	ナバタ		菜畠	
244	麿く	ナビ(く)		なびく	○
245	鉢	ナマリ		○	
246	逃て	ニゲ(て)	にぐる		
247	新枕	ニキ枕		○	
248	尼公	ニコウ	○	○	
249	入部	ニウブ		○	
250	場	ニハ	○	○	庭
251	人形	ニンゲウ	○		○
252	縫	ヌイ	ぬふ		○
253	盃み	ヌスミ(み・ママ)		○	
254	獻る	ナ(る)	○	○	
255	農人	ノウニン		○	
256	軒	ノキ	○	○	
257	臥(ふ)	ノゴ(ふ)		○	
258	乗	ノル		○	
259	歯	ハ		○	
260	這	ハヒ		○	
261	嘗	ハカ		○	
262	博士	ハカセ		○	
263	課	ハカリコト	○	○	
264	化物	バケ物		○	
265	運ぶ	ハコ(ぶ)	はこぶ		

266	蜂	ハチ			○
267	咄す	ハナ(ナ)			○
268	濱	ハマ	○	○	○
269	蛤	ハマクリ	はまぐり貝		○
270	拂ふ	ハラ(ふ)	○		○
271	張子	ハリコ		○	
272	板木	ハシギ		○	
273	蝶女	ハシジョ		○	
274	火事	ヒ事		○	訓ナシ
275	僻言	ヒガコト		僻事	
276	萎	ヒシ	○		○
277	左り	ヒダ(り)	○		
278	齧	ヒヂ		肱	
279	人	ヒト		○	○
280	人香	人ガ	○	人か	
281	百草	ヒヤクサウ		○	
282	百人一首	ヒヤクニン一シユ		○	
283	琵琶	ヒハ		○	
284	束拂	ヒンボツ		○	
285	鶴	フ		○	
286	二女狂ひ	フタメクル(ひ)		二女狂	
287	蓋	フタ		○	
288	踏	フミ	ふむ	○	
289	釐寺	フモト寺	釐／寺	釐／寺	○(釐の寺)
290	風爐釜	フロ釜			風呂釜
291	艸の森	ヘ(の森)			○
292	暨	ハイ			○
293	臍	ハゾ		○	
294	別当	別タウ			○
295	紅粉	ベニ	○	○	○
296	蛇	ヘビ		○	
297	部や	ヘ(や)	部屋		部屋
298	邊	ヘン	○	○	
299	法	ホウ	訓(のり)	訓(のり)	訓(ノリ／訓ナシ)
300	坊	ハウ	○	○	○
301	蓬萊	ホウライ		○	
302	丁菜	ホシナ		○	
303	骨	ホネ		○	
304	法論味噌	ホロミン		○	
305	櫛尾	マキノフ		○	
306	大蓼	マタハビ		○	
307	前	マヘ	○		
308	三寸	ミキ		○	○
309	三木	ミキ	○	○	
310	親王	ミコ	みこ	御子	御子生
311	溝	ミゾ		○	
312	乱じ髪	ミダ(し髪)			乱(ミダレ)髪
313	御田植	ミタウヘ			訓(オンタウヘ)
314	澗	ミヅウミ			○
315	袞等	ミノカサ		○	○
316	宮筈	ミヤゲ		○	上産・置宮筈
317	行幸	ミヨキ	みゆき	御幸	○
318	麦秋	ムキ秋			○
319	麥飯	ムキ飯	○		
320	虫氣	ムケ			○
321	蒸竹	ムンタケ			
322	鶴	ムチ	訓(ふち)	○	
323	胸	ムネ		○	
324	殿	ムマヤ		○	馬屋
325	妻敵	メカタキ		○	
326	眠 藏	メンゾウ	○		
327	頃類	メンルイ		○	
328	毛毬	モウセン			○
329	最上	モガミ		○	最上(モガミ)川
330	文字余り	モジアマ(り)	文字あまり	文字あまり	(文字のみ)
331	餅躊躇	モチツッジ	(「つゝじ」のみ)	(「躊躇」のみ)	餅／躊躇
332	餅突	モツキ	もちつき		餅つき

333	持	モツ	もつ	もつ	
334	海雲	モヅク	もづく		○
335	戻る	モド(る)	もどる		○
336	百の船	モヘ(の)コビ			○
337	森	モリ	○	○	○
338	紋	モン			○
339	厄	ヤク			○
340	度て	ヤセ(て)			○
341	雇はれ	ヤト(はれ)		傭	
342	矢橋	ヤバセ			○
343	仙びと	ヤマ(びと)		仙人	
344	山科	ヤンカ	○	○	
345	焼めし	ヤキ(めし)		○(焼飯)	
346	湯	ヨ	○	○	
347	謙る	ヨヅ(る)			○
348	指	ヨビ		○	○
349	瓔珞	ヤウラク		やうらく	○
350	互謝	ヨサ			○
351	夕立	ヨダチ	訓(ゆふだち)	訓(ゆふだち)	訓(ゆふだち)
352	夜遣	夜バイ	夜ばひ		○
353	讀	ヨム			○
354	嫂入	ヨメリ		婦(姫)入(ヨメイリ)	
355	落葉	ヨクエウ	○	訓(オチバ)	
356	琉球	リウキウ		○	
357	龍脳	リウナウ			○
358	律(にしらぶる)	リツ(にしらぶる)	○(律のしらべ)	りちのしらべ	
359	格氣	リンキ	りんき		○
360	例	レイ		○	訓(タメシ)／例(レイ)ならぬ身
361	礼	レイ		○	
362	恋慕	レンボ	れんぼ	○	
363	廬路	ロヂ	○	廬次	路地
364	廬地口	ロヂ(ロ)			路地口
365	輪	ワ			○
366	脇	ワキ			○
367	簪	ワシ			○
368	忘れ	ワス(れ)		○	
369	酔口	ワニ(ロ)	わに口		○
370	佗言	ワビコト		佗こと	○
371	癪や	ワラヤ		わらや	○(葦屋／わらや)
372	破竈	ワリゴ			○

合計

135

130

328

○「襷」(ムチ)に対する『はなひ草』での訓「ふち」については、倭玉篇(慶長15年版)・『合類節用集』・『易林本節用集』に「ブチ・ムチ」両訓の収載がある。

○「はなひ草・俳諧御傘」は見出し語と本文中に出現する俳諧用語を対象とし、俳諧類駆集からは見出し語と付合語を対象とした。

○字体は現行の字体を用いたものもある。

○俳諧御傘の「花車」は異義により不適合とした。

○(へのみ)は不適合とした。

○「墜栗(ついくわつ)花」は注に「墜栗(ついくわつ):底本ルビ「ついくわつ」とよめる字体ははなひ大全綱目「ついり花」により改む」とある。

○A/BはAとBの別々に収載されていることを示す。

【資料二】 振り仮名を付す語と条件との関係

	語	振り 假 名	句 番 号	文 頭	付 合 語	字 音 語	初 出	節用集との関係		
								状 況 収 載	異 表 記	異 訓
1	愛敬	アイキヤウ	612	○	○	○	○	○	○	
2	挨拶*	アイサツ	76			○	○	○	○	
3	垢	アカ	527					○		
4	祟め	アガ(め)	517					○		
5	灰汁	アク	253					○		
6	懃行	アクギヤウ	817	○	○	○	○	○		
7	明六つ	アケベツ	303	○	○			×		
8	淺からぬ	アサ(からぬ)	82		○		○			
9	浅沢	アサハ	478				○			
10	蘆	アシ	267	○	○		○			
11	畔	アゼ	483				○			
12	價	アタヒ	847				○			
13	熟田	アツタ	900	○	○		○			
14	敦盛	アツモリ	415				×			
15	栗	アハ	198	○	○		○			
16	鰐	アハビ	721	○			△	鰐・石決		
17	蠶	アブミ	362		○		○			
18	葵上	アフヒノウヘ	689		○		×			
19	泉郎人	アマ人	356	○	○		△	笛人		
20	天山	アメ山	982				○			
21	鮎	アユ	673	○	○		○			
22	歩み	アユ(み)	652		○		○			
23	荒薙	アラコモ	267		○		×			
24	詳ふ	アラソ(ふ)	251				○			
25	あら寒	(あら)サム	742				×			
26	荒波	アラ波	736				×			
27	養酒	アラレ酒	901				×			
28	蟻	アリ	97		○		○			
29	歩き	アリ(き)	863				△	行		
30	畏れ*	アハレ(れー・ママ)	165				○			
31	衣桁	イカウ	504	○	○	○	○			
32	笊離	イカキ	131		○		○			
33	生別れ	イキ(別れ)	855				×			
34	軍	イクサ	179				○			
35	牛つ	イケ(つ)	839				○			
36	射さす	イ(さす)	943				○			
37	急かせ	イソ(かせ)	487				○			
38	石上	イソノカミ	518	○	○		○			
39	戴け	イタダ(け)	330・875	○(875)	○(875)		○			
40	躰	イタチ	127・788	○(127)	○(2)		○			
41	一揆	一キ	754	○	○		○			
42	一合	イチナミ	333	○	○		○			
43	一口	一世ツ	840	○	○		×			
44	泉	イツミ	474		○		○			
45	當み	イトナ(み)	567	○			○			
46	電	イナヒカリ	709	○	○		○			
47	守宮	イモリ	732	○			○			
48	鳩舟	ウ舟	258				×			
49	土龍	ウグロモチ	481		○		○			
50	右近	ウコン	466		○	○	●			無訓
51	宇治香	宇治カウ	70		○		×			
52	良角	ウントラズミ	619		○		×			
53	謎ふ	ウタ(ふ)	227				○			
54	有得	ウトク	574		○		○			
55	有得者	ウトク者	880		○	○	×			
56	温飼	ウドン	235		○	○	○			
57	産湯	ウズユ	245		○			△	初湯	
58	飢し	ウヘ(し)	182				○			
59	瓜種	ウリタネ	739	○	○		×			
60	運	ウン	398		○		○			

61	雲龍	ウンレウ	802		○	○		×		
62	醉*	エイ	155			○	○			
63	詠	エイ	949			○	○			
64	麿多	エタ	709		○	○		○		
65	條	エタ	609					○		
66	恵比須講	エビスカウ	903	○		○		×		
67	籠	エビラ	206	○				○		
68	縄	エン	277	○		○	○			
69	縁付	エンヅキ	761・930	○(761)	○(761)			×		
70	猿猴	エンコウ	915	○	○	○	○			
71	燕尾	エンビ	940		○	○		○		
72	老婆	エビワバ	790				▲	ウバ		
73	大ぬみ	オホ(なぬ)	396		○			×		
74	狼	ヲガミ	672		○		○			
75	漢	ヲキ	151		○		○			
76	蓼草	ヲキナ草	701				△	白頭草		
77	奥*	ヲク	256			○	○			
78	臆病風	ヲクベウ風	18	○	○			×		
79	怠らす	ヲコタ(らす)	562					○		
80	行ひ*	ヲコナ(ひ)	444		○		○	○		
81	癡	ヲコリ	753	○	○		○			
82	小手巻	ヲダマキ	382	○	○		○			
83	落武者	ヲチ武者	662		○			×		
84	音	ヲト	766					○		
85	廕	ヲトカイ	603		○		○			
86	落す*	ヲト(オ)	868	○	○		○	○		
87	跳る	ヲド(る)	818				○			
88	袴ふ	ヲトロ(ふ)	596				○			
89	鬼	ヲニ	919				○			
90	芳	オビ	757				○			
91	佛	ヲモカゲ	410					△	面影	
92	折鳥帽子	折エボン	948	○	○			×		
93	恩徳	オンドク	346		○	○		○		
94	蛾	ガ	409		○	○		○		
95	甲斐	カイ	470				○			
96	葛	カイコ	207		○		○			
97	海草	カイサウ	605	○	○	○		△	海藻	
98	害せぬ	カイ(せぬ)	670			○		▲	コロス	
99	かい橋	(かい)ダテ	485					○		
100	海童	カイドウ	163	○	○	○		×		
101	賀もの	カヒ(もの)	796					△		
102	薫らし	カヲ(らし)	615		○		○			
103	抱へし	カハ(へし)	967			▲			イダク	
104	驚鹿	カダシ	906	○	○		△	栗山子		
105	簾	カドリ	257					○		
106	香久山	カク山	952		○		△	餘香久山		
107	搔合せ	カキ(合せ)	581					×		
108	垣杭	カグキ	739					×		
109	癌す	カク(す)	928					○		
110	隔やみ	カク(やみ)	173	○	○	○		×		
111	竈乱	クハクラン	311	○	○	○		○		
112	隠れなし	カク(れなし)	941	○				△	(無レ隠)	
113	菴	カゴ	756	○	○		○			
114	かさね疊	(かさね)ダヘミ	287		○			×		
115	嫁せざる	カセザル	652	○	○	○	○			
116	堅かめし	カタ(かめし)	511	○				○		
117	方違へ	カタタガ(へ)	897		○			×		
118	擺	カヂ	809		○		○			
119	笛枕	カヂ枕	835					×		
120	徒若党	カチワカタウ	222	○	○			×		
121	化狄	カハデキ	599			○		×		
122	首途*	カトデ	154				○	○		
123	兼	カネ	749・926					○		
124	下坏	カヒ	399		○	○		×		
125	哥舞妓	カブキ	800	○		○	○	○		

126	蕪	カブラ	261			○				
127	壁	カベ	770			○				
128	鎌倉	カマクラ	533							
129	上*	カミ	444	○		○				
130	瓶	カメ	245			○				
131	龜が谷	(亀が)ヤツ	321			○			▲	カメガヘ
132	音葺	カヤブキ	283	○				○		
133	粥	カユ	842	○		○				
134	荷葉	カヨウ	208				○		▲	ハスノハ
135	莘き	カラ(ま)	640				○			
136	碓	カラウス	895	○		○				
137	島瓜	カラスウリ	828	○		○			△	
138	河狩	河ガリ	816							
139	元興じ	グハンゴウ(じ)	979			○				
140	塞塙離	カンゴリ	340	○					×	
141	覩じ	クベン(じ)	51			○			×	
142	感じ入	カソ(じむ)	553						×	
143	閑所	カソジョ	302			○				
144	勧請	クハンジヤウ	900							
145	勸進帳	クハントヤウ	520	○					×	
146	勸進坊主	クハンジンハバウス	217	○					×	
147	黄	キ	467			○				
148	綺	キ	27	○		○				
149	紀の路	(紀の)チ	644							
150	鬼界が嶋	キガイ(が嶋)	767							
151	后	キサキ	857							
152	牙	キバ	182							
153	貴布祢	キブネ	918	○		○				
154	禰	キヨ	81	○		○				
155	堯	ギヨウ	718	○		○			●	無訓
156	菜々し	ギヤウ(々し)	353				○		△	凝濁
157	花車*	キヤシヤ	574	○		○	○			
158	脚布	キヤフ	812・634				○			
159	狂乱	キヤウ乱	430							
160	玉殿	ギヨクデン	942	○						
161	玉兎	ギヨクト	407							
162	桐	キリ	678	○						
163	器量	キリヤウ	587	○						
164	奇麗*	キレイ	509							
165	琴	キン	295							
166	吟	ギン	124							
167	槿花	キンクハ	839	○		○			▲	ムクゲ・ア サカホ
168	鶴公	キンコウ	1				○			
169	欽明	キンメイ	387	○						
170	公宴	クエン	777							
171	葦	クキ	922							
172	草薙	クサナギ	426	○						
173	鯨	クジラ	262							
174	粟玉	クスタマ	690			○				
175	楠	クスノキ	485	○						
176	具足	グソク	669	○						
177	国人	クニウツ	846						×	
178	喰くらべ	クビ(くらべ)	831						×	
179	狗品	グビン	495				○			
180	粗いれ	クミ(いれ)	715							
181	藏	クラ	725	○						
182	栗	クリ	193							
183	景*	ケイ	830	○						
184	稽古	ケイコ	551							
185	化生	ケンヤウ	943							
186	解忘	ケダイ	341	○						
187	結構	ケツコウ	951							
188	慰る	ケ(る)	869							

189	元亨	ゲンカウ	596		○	×		
190	喧嘩(=口+花)	ケンカハ	886	○	○	○	○(喧嘩)	
191	建水	ケンスイ	543	○	○	△	硯水	ミズコボン
192	基	ゴ	834		○	○	○	
193	御威勢	御イセイ	744		○	×		
194	濃茶	コイチャ・コヒ	413・555			×		
195	棟	カウ	207		○	○		
196	功	コウ	291		○	○	○	
197	牛王	ゴワウ	137		○	○	○	
198	五月五日	ゴグハチゴニチ	224	○	○	●	無訓	
199	碁盤	碁バン	181		○	○	○	
200	格子	カウシ	419	○	○	○	○	
201	麴	カウジ	297	○	○	○		
202	香水	カウズイ	748	○	○	×		
203	行成	カウゼイ	695	○	○	○	×	
204	高祖	カウソ	521	○	○	○	○	
205	水砂糖	水ザタウ	667			×		
206	漕ぐ	コ(ぐ)	415			○		
207	国阿	コクア	265		○	○	×	
208	昔	コケ	838			○		
209	奥	コシ	10			○		
210	乞食*	コジキ	846	○	○	○	▲	コツジキ
211	釣簾	コス	411		○	△	簾箔	
212	胡椒	コセウ	234		○	○		
213	こせ渣	(こせ)ガサ	729		○	△	リ	
214	牛頭天皇	ゴヅ天皇	282	○	○	○	○	
215	小猫	小ネコ	190	○		×		
216	此十	此ド	386		○		×	
217	木間	コノマ	764			×		
218	五百羅漢	五百ラカン	66	○	○	×		
219	請て	コヒテ(て)	536		○		○	
220	細か	コマ(か)	665			○		
221	籠り人	(籠り)ド	141		○		×	
222	子安	コヤス	470			○		
223	暦	コヨミ	864			○		
224	迄離	コリ	266	○		○		
225	水搔て	コリカキ(て)	527・995	○(527)	○(527)	○		
226	衣*	コロモ	772	○	○	○		
227	菜	サイ	192		○	○		
228	災難	サイナン	424	○	○	○		
229	儀馬楽	サイバラ	294		○	○	○	
230	宰府	サイフ	855		○	○	○	
231	榎木	ザイモク	768		○	○	○	
232	桜*	サクラ	307		○	○	○	
233	提重箱	サゲジウバコ	715			×		
234	雑喰	ザコ	639		○	○		
235	人角豆	サハゲ	132		○	△	小角豆	
236	棧敷	サジキ	714			○		
237	指身	サシミ	509		○	○		
238	座頭*	ザト	785		○	○	○	
239	砂耕	サタウ	820	○	○	○	○	
240	実朝	サネットモ	777		○		×	
241	眞盛	サネモリ	859	○	○		×	
242	鯖	サバ	845			○		
243	金精	サビ	388			▲	カネノサビ	
244	汎還り	サヘカヘ(り)	407			△	寒返	
245	三味線	サミセン	784	○	○	○		
246	三途河	サンヅ河	539		○		×	
247	三の間	サン(の)マ	772		○		×	
248	懲悔する	サンゲ(する)	259	○	○	○	○	
249	山莊	サンザウ	970		○	○	○	
250	謡奏	サンゾウ	856	○	○	○	○	
251	塩	シホヒ	606	○	○		○	
252	色紙形	色紙ガウ	971		○		×	
253	數つめ	シキ(つめ)	220			×		

254	檻	シキミ	91				○	
255	獅笛	シ・エ	680	○			×	
256	時守	ジシユ	192		○	○	△	時宗
257	時守寺	ジシユデラ	324		○		×	
258	侍従	シジウ	615	○	○	○		
259	時正	ジシャウ	675		○	○		
260	歯朶	シダ	1002		○	○	○	
261	白堕落	ジダラク	611	○		○	△	白堕葉
262	七賢	七ゲン	227	○	○	○	○	
263	温氣*	シツケ	380		○	○		
264	品*	シナ	209		○			
265	洪柿	シブガキ	934	○	○			
266	注連	シメ	117・549・650	○(549・ 650)	○③		○	(註連)
267	下をなご	シキ(をなご)	447				×	
268	麝香	ジヤカウ	383・814	○(814)	○(383)	○	○	
269	娑婆世界	シヤバセカイ	547				×	
270	執	シウ	711			○	○	
271	主	シウ	966	○	○	○	○	
272	拾遺	シウイ	71	○	○	○	○	
273	從者	ジウザ	966		○	○	○	
274	珠歎	ジュズ	358				△	数珠
	念珠	ジユズ	160		○		○	
275	鍾馗	セウキ	880		○		○	
276	精進	サウジ	509		○		○	
277	憔悴	セウスイ	394		○		○	
278	商船	シャウゼン	512		○		○	
279	正貢	正ジン	971	○	○	○	○	
280	書院*	ショエン	510		○	○	○	
281	虱*	シラミ	813		○		○	
282	丸	シリ	933		○		○	
283	丸馬	シリムマ	540				×	
284	白髪	シロカミ	858		○		▲	白ハツ
285	城賊	城セメ	806		○		×	
286	神泉苑	シンゼンエン	281		○		○	
287	真鑑	シンヂウ	322	○	○	○		
288	神農	神ノハウ	226		○		○	
289	新発意	シンホチ	468		○		○	
290	腎臓	ジンヤク	938		○		○	
291	神輿	シンヨ	197		○		▲	ミコシ
292	新羅	シンラ	27			○	○	
293	人倫	ジンリン	525		○		●	無訓 (部)
294	単*	ス	110	○	○	○	○	
295	推	スイ	687		○		○	
296	水晶	スイシヤウ	475	○	○	○	○	
297	数百里	ス百里	776			○	○	
298	菅井草	スカキタウ	594	○	○		×	
299	透きとおり	スキ(とおり)	939				×	
300	透闇・すき間	スキマ・(すき)マ	601・742		○(742)		○	
301	鮨	スシ	639				○	
302	薄*	スハイ	972	○	○		○	
303	禊けたる	ス(けたる)	137	○			×	
304	錫	スヽ	583				○	
305	涼かぜ	スダ(かぜ)	764				×	
306	覗	スドリ	511		○		○	
307	窄て	スベ(て)	933				▲	スボム
308	墨付	スマツキ	808		○		×	
309	諏訪	スハ	741		○		○	
310	情*	セイ	275			○	○	
311	施行	セギヤウ	927	○	○	○	○	
312	筈	セチ	691		○		○	
313	筋分*	セチブ	896		○		○	
314	雪隠	セツチン	676		○		○	
315	攝津	セツツ	149		○		○	
316	錢湯	センタウ	728		○		○	×

317	善導大師	ゼンダウ大师	468	○		○	×		
318	沈灌	センタク	14			○	○		
319	臓	ザウ	452			○	○		
320	唇水	ザウスイ	172		○	○	○		
321	雑煮	ザウニ	866	○	○		○		
322	草履	ザウリ	782		○	○	○		
323	側隱[ミ+ナ]偏	ゾクイン	585	○	○	○	×		
324	卒度	ソツ度	640	○		○	○		
325	蘇民	ソミン	283	○	○	○	○	蘇民将来	
326	候*	ソロ	470			○			
327	誰	タ	232				▲	タソ・タレ	
328	帝狹犬	タイシヤクテン	244	○	○	○	○		
329	醍醐	ダイゴ	444		○	○	○		
330	大鷦	ダイヒ	492			○	×		
331	手折じ*	手ヲラ(ジ)	609	○			○		
332	高養齋	高ヤウシ	933				×		
333	鷹師	鷹ジヤウ	506				○		
334	薪	タキ	714	○	○		○		
335	卓散*	タクサン	889	○		○	○		
336	出す	ダ(す)	54-695-828				▲	イダス	
337	乱河原	タガス河原	672	○	○		×		
338	尋*	タヅネ	616			○	○		
339	蓼*	タデ	640			○	○		
340	戯れて	タハム(れで)	185-541		○(541)		○		
341	陀佛	タブツ	817		○	○	×		
342	給	タベ・タブ	252-759	○(252)	○(252)		▲	タマフ	
343	珠	タマ	703	○			○		
344	團子	ダンゴ	762		○		○		
345	知死期	チシゴ	719			○	○		
346	謂葉	テウサイ	261			○	○		
347	挑燈	テウチン	288- 656		○(288)	○	○		
348	沈香亭	チンカウティ	872	○	○	○	×		
349	鎮守	チンジュ	517	○	○		○		
350	墜栗	ツイリ	536	○	○	○	△	墜栗花	
351	杖	ツエ	789	○	○		○		
352	冢穴	ツカアナ	238				△	壙	
353	廻む	ツカ(む)	524				○		
354	付そめ	ツキ(そめ)	731				×		
355	着ぬ	ツキ(ぬ)	767				△	著	
356	頭巾	ヅキン	603			○	○		
357	盡し	ツク(し)	944				○		
358	漬ざる	ツケ(ざる)	923		○		○		
359	城	ツヅミ	941				○		
360	瓶	ツバメ	423		○		○		
361	巒	ツブテ	692		○		○		
362	詰る	ツム(る)	956				▲	ナジル	
363	摘る	ツメ(る)	171	○			○		
364	釣針	ツリ針	868				△	鉤・釣鉤	
365	出る*	ツ(る)・デ(た)	92-717-889				▲	イジル	
366	銛	ツルギ	426		○		○		
367	弦葉*	ツル葉	58	○		○	×		
368	軸*	ティ	123		○	○	○		
369	亭主*	ティシユ	839		○	○	○		
370	出来さん	デカ(さん)	305				×		
371	手廻	手ガヒ	870	○	○		×		
372	手形	手ガタ	724		○		△	契	
373	敵	テキ	661	○		○	○		
374	出来て	デキ(て)	744-807				×		
375	鉄炮*	テツハウ	766	○	○	○	○		
376	照*	テル	763				○		
377	田楽	デンガク	196	○	○		○		
378	貞淑	デンヤク	312		○	○	○		
379	道場*	タウジヤウ	818		○	○	○		
380	盜賊	タウゾク	214		○	○	○		
381	同朋	ドウボウ	957	○	○		○		

382	納涼	タウリヤウ	936			○	○		
383	燈籠*	トウロ	36	○		○	○		
384	科	トガ	861	○				△	過
385	躰石	トガ(る)	602-738			○(738)		○	
386	富擣	トガシ	316	○		○		○	
387	資	トキ	261			○		○	
388	得度	トクド	635			○		○	
389	ヒ・越	(とし)コシ	356			○		△	威・誠
390	杜子美	トシミ	984	○		○		○	
391	屠穀山散	トスピヤクサン	451			○		○	
392	閏目	トヂメ	557	○				×	
393	閏	トツ	324			○		○	
394	十津川	トツカハ	756			○		○	
395	飛次第	トビ次第	424					×	
396	十鰐筆	ドヂヤウカコ	571					×	
397	十鰐	ドヂヤウ	130			○		△	鰐・十魚
398	苦	トマ	720					○	
399	鈍漢	ドンカン	53	○		○		○	
400	蜻蛉	トンハウ	499					○	
401	貪欲	トンヨク	527			○		○	
402	薺	ナ	171			○		○	
403	直す	ナツ(す)	797					○	
404	中飲	リゾミ	542			○		×	
405	仲磨	ナカマロ	461	○		○		×	
406	泣いる	ナキ(いる)	43					×	
407	渚	ナギサ	344			○		○	
408	加	ナスピ	989	○				△	茄子
409	那智	ナチ	835	○		○		○	
410	納豆	ナツツウ	715	○		○		○	
411	撫られ	ナテ(られ)	503			○		○	
412	菜畑	ナバタ	380	○				×	
413	靡く	ナビ(ぐ)	586-705			○(705)		○	
414	鉢	ナマリ	765			○		○	
415	何歳	ナンザイ	402			○		×	
416	尼公*	ニコウ	612			○		○	
417	二条家	ニコケ	778			○		×	
418	二の町	ニ(の町)	827	○				×	
419	一幅	ニフク	582			○		×	
420	新枕	ニキ枕	797					○	
421	煮る	ニ(る)	298-493			○(493)		○	
422	入部*	ニウブ	780	○		○		○	
423	逃こむ	ニゲ(こむ)	709					×	
424	逃ご	ニゲ(ご)	886					○	
425	逃かへり	ニゲ(かへり)	919					×	
426	堀	ニハ	412					○	
427	若僧	ニヤク僧	587			○		×	
428	人形	ニンゲウ	484			○		○	
429	縫たて	ヌイ(たて)	450					×	
430	盗み*	ヌスミニ(ママ)	724			○		○	
431	熟波	ネツツン	667	○		○		×	
432	寐る	ネ(る)	931-990			○(990)		○	
433	納受	ナウジユ	211	○				○	
434	農人	ノウニン	897	○		○		○	
435	軒*	ノギ	202			○		○	
436	拭ひ	ノゴ(ひ)	552-809			○(809)		○	
437	野良猫	ノラネコ	507	○				×	
438	乘鞍	ノリクラ	725	○		○		○	
439	乗	ノル	755			○		○	
440	歯	ハ	561			○		○	
441	這まほり	ハビ(まほり)	733					×	
442	墓	ハカ	629					○	
443	博士	ハカセ	660	○		○		○	
444	謀	ハカリゴト	353	○				○	
445	動す	ハゲマ(す)	534					○	
446	化物	バケ物	710	○				△	妖化物

447	運べ	ハコ(べ)	215				○		
448	秦氏	ハダウヂ	771	○	○		×		
449	蜂	ハチ	921	○	○		○		
450	八ぢ	ハチ(ぢ)	953		○	○	×		
451	初子	ハツネ	103		○		×		
452	咄す	ハナ(す)	840	○			○		
453	羽ぶるひ	ハ(ぶるひ)	170			△	翥		
454	濱*	ハマ	644・835		○(644)		○		
455	蛤	ハマグリ	737	○			○		
456	刃物	ハ物	194	○	○	△	刃		
457	拂ふ	ハラ(ふ)	958				○		
458	娘子	ハリコ	795		○		○		
459	板木	ハンギ	697	○	○		×		
460	斑女	ハンジョ	559		○	○	×		
461	繁昌*	ハンジヤウ	964・1008	○(964)	○(964)	○	○		
462	牌	ヒ	432			○	○		
463	辟言	ヒガコト	645			△	僻事		
464	引説	ヒキスツ	730			×			
465	卑下	ヒゲ	354			○	○		
466	火事	ヒ事	426	○		▲	ケワジ		
467	姦	ヒン	805	○		○	○		
468	左り	ヒダ(り)	947		○		○		
469	暨	ヒヂ	531			○			
470	人	ヒト	755	○		○			
471	人香	人ガ	814	○		×			
472	日々記	ヒニッキ	3	○		×			
473	皮肉	ヒニク	696	○	○	○	○		
474	琵琶	ヒバ	992		○	○	○		
475	百草	ヒヤクサウ	225	○	○	○	×		
476	百人一首	ヒヤクニンーシュ	285	○	○	○	×		
477	白散	ヒヤクサン	651	○	○	○	○		
478	尾狐	ヒル狐	431			×	×		
479	便宜	ビンギ	538			○	○		
480	秉拂	ビンホツ	588		○	○	○		
481	燧	フ	493			○	○		
482	吹出す	吹ダ(す)	417	○		×			
483	覆面	フクメン	457	○	○	○	○		
484	無興	ブケウ	987		○	○	○		
485	分限	ブゲン	320		○	○	○		
486	衝	ブシ	227			○			
487	蓋	フタ	274・432	○(274)	○(274)		○		
488	二歛	フタバ	372		○		×		
489	女狂ひ	フタメクル(ひ)	946	○		×			
490	不斷香	フダンカウ	973	○		○	×		
491	扶持	フチ	595		○	○	○		
492	不図	不ト	836	○		○	○		
493	舟道遙	フナゼウヨウ	287		○		×		
494	舟鉢	フネボコ	655	○	○		×		
495	躰たて	フミ(たて)	805		○		×		
496	麓寺	フモト寺	260				×		
497	風爐釜*	フロ釜	580				×		
498	壁	ヘイ	25			○	○		
499	臍	ヘソ	382		○		○		
500	別	ベチ	795		○	○	○		
501	別当	別タウ	453			○	○		
502	紅粉	ベニ	294				○		
503	袖の袴	ヘ(の袴)	738		○		×		
504	蛇	ヘビ	238				○		
505	部や	ヘ(や)	733				○		
506	漫*	ヘン	756・898		○(756)	○	○		
507	法*	ホウ	783		○		▲	ノリ	
508	坊	ハウ	785		○	○	○		
509	蓬萊*	ホウライ	899	○	○	○	○		
510	丁菜	ホシナ	359		○		×		
511	法駄	法タイ	940	○		○	○		

512	程*	ホド	545				○		
513	骨	ホネ	364	○	○		○		
514	管る	ホム(る)	580				○		
515	補遺	ホヤク	82	○	○		○		
516	法論味噌	ホロソ	629		○	○			
517	本復	ホフク	746				○		
518	楨屋・楨の尾	マキノ・マキ(の尾)	637・993	○(637)	○	②		△	楨尾寺
519	天蓼	マタハビ	508		○		○		
520	真鶴	マナヅチ	403	○	○		○		
521	前	マヘ	825				○		
522	町若衆	マチワカ衆	390	○	○		×		
523	摩利支犬	マリシテン	859		○	○	×		
524	稀*	マレ	437				○		
525	まん巾	(まん)なか	169				○		
526	楊葦	マンマク	496		○	○	○		
527	実	ミニ	916				○		
528	三木*	ミキ	875		○		×		
529	觀王	ミコ	290				▲		シンワ
530	水梨	ミナシ	935				×		
531	溝*	ミヅ	128・789	○(128)	○		○		
532	御出植	ミタツハ	981				×		
533	御帳台	ミチヤウダイ	500	○	○		×		
534	亂し髪	ミダ(し髪)	798	○	○		▲		ミタレガミ
535	湖	ミツツミ	565	○			○		
536	翌	ミドリ	2	○	○		○		
537	蓑笠	ミゾカラサ	898		○		○		
538	蓑鷺	ミノガメ	1002	○			○		
539	身延	ミノヅ	259				△	身延山	
540	官箭物	ミヤケ物	605				○		
541	宮司	ミヤジ	786	○			△	官仕・官	
542	行幸	ミユキ	677		○		▲		ギヤウカウ
543	麥秋	ムキ秋	492	○	○		▲		ハクシウ
544	麦飯	ムギ飯	355	○	○		○		
545	無懃	ムザン	524		○		○		
546	虫気*	ムケ	269	○		○	○		
547	蒸竹	ムシ竹	445	○	○		×		
548	蠶	ムヂ	891				○		
549	胸*	ムネ	882	○			○		
550	栴	ムマヤ	453・793				○		
551	斐敵	メカタキ	532		○		×		
552	珍し*	メヅラ(L)	639				○	○	
553	眠藏	メノウ	95		○	○	○		
554	麁類	メンルイ	493	○	○		○		
555	毛毬	モウセン	937				○	○	
556	最上	モガミ	255	○	○		○		
557	文字余り	モジアマ(り)	823		○		×		
558	餅躑躅	モチツバジ	609		○		△	羊躑躅	
559	餅突	モツキ	902	○			×		
560	持*	モツ	223	○			○		
561	海雲	モツク	355		○		○		
562	戻る*	モド(る)	308・644				○		
563	者	モノ	351				○		
564	縱	モミ	159	○			○		
565	百の媚	モハ(の)コビ	560	○			×		
566	齧ふ	モラ(ふ)	544・833				○		
567	森*	モリ	764	○	○		○	○	
568	磼*	モン	678		○	○	○		
569	門徒	モント	674	○		○	○		
570	理塔	ヤウラク	385		○	○	○		
571	焼めし	ヤキ(めし)	140	○	○		×		
572	厄	ヤク	760	○	○		○		
573	瘦て	ヤセ(て)	190				○		
574	雇はれ	ヤト(はれ)	997				○		
575	柳鰐	柳バエ	349	○			×		

576	矢橋	ヤバセ	250		○		○		
577	山科	山シナ	675		○		○		
578	仙びと	ヤマ(ひと)	181	○			×		
579	止ぬ	ヤメ(ぬ)	528				○		
580	湯	ユ	395・924		○(924)		○		
581	抽味噌	ユ味噌	192		○	○	○		
582	袖べし	ユ(べし)	716	○	○	○	×		
583	雜摩経	ユイマ経	74	○	○	○	×		
584	鈎	ユキ	358	○	○	▲	イキ		
585	譲る	ユヅ(る)	249		○		○		
586	指	ユビ	968				○		
587	与謝	ユサ	975			○	○		
588	夕立*	ヨダチ	245	○	○	○	▲	ユフダチ	
589	夜這	夜バイ	786				○		
590	讀*	ヨム	563				○		
591	廻入	ヨメリ	119・796	○(796)	○		△	嫁	
592	楽寝	ラクネ	881	○	○		×		
593	落葉	ラクエウ	502			○	○		
594	琉球	リウキウ	783	○	○	○	○		
595	龍脳	リウナウ	591	○	○	○	○		
596	律	リツ	992	○		○	●	無訓	
597	盡*	リヨウ	774		○	○	▲	レイ	
598	礼	レイ	876		○	○	○		
599	例*	レイ	902	○		○	○		
600	料	レウ	241			○	×		
601	格氣	リンキ	531・988		○(988)	○	○		
602	恋慕	レンボ	653・750	○(653)	○(750)	○	○		
603	魔路	ロヂ	158	○	○		△	路次	
604	廬地口	ロヂ口	960		○		×		
605	脇*	ワキ	689		○		○		
606	脇ぐるひ	ワキ(ぐるひ)	731				×		
607	分て	ワキ(て)					×		
608	輪珠数	ワジユズ	260	○	○		×		
609	暨	ワシ	524		○		○		
610	忘れ	ワス(れ)	757				○		
611	餠口	ワニ口	978		○		○		
612	佗言	ワビゴト	945	○			○		
613	壘	ワラ	1001				○		
614	藁や	ワラ(ヌ)	649		○		△	草亭	
615	破籠	ワリゴ	630	○	○		○		
小計					239		○=394		
合計			196	317	248	24	△=41 ●=5 ×=153		

7、「分(ワキ)て」は節用集には動詞「分(ワカツ)」とあるので、異義により不一致とした。

1、*印を付す語は、振り仮名がある場合とない場合がある語である。

2、振り仮名付き語635語中いずれかの条件に適応する語に○印を記入、○の中の数字は回数を示す。

『節用集』における収載の有無は

一致するものに○、漢字が異なる語には△、訓が異なる語には▲印、漢字の収載はあるが訓がない語は●、収載がない語に×印を記入する。

3、『紅梅千句』での用字が一部平仮名表記である「かい橋・すき間・まん中・部や」と『節用集』での表記「搔掘・透間・真中・部屋」は一致するものとした。

4、『節用集』との関係では、「クジラ」に「鯨・鯢」、「ミキ」に「三寸・三木」、「ジュズ」に「念珠・珠数」の異なる漢字表記があり、異なり振り仮名付き語数615語に加え618語に対する合計数である。

5、「巣・鬼」は果が巣、鬼は点の省略、「尼」は[ニ+エ]「山」は上にノを増画、140・224の「離」は「隹」を省略した字体などを現行の字体とした。

6、『節用集』との照合には、黒本本・明応五年本・伊京集・天正十八年本・饅頭屋本・易林本・合類節用集の7種を使用した。

【資料三】 10俳諧集における振り仮名付き語

54	眞口	アス			○					
55	飛鳥河	アスカ河			○					1
56	小豆	アヅキ			○					1
57	射塚	アヅチ				○				1
58	東	アヅマ				○				1
59	畔	アゼ		○						1
60	阿蘇	阿ゾ			○					1
61	化	アダ					○2	2		
62	價	アタヒ		○						1
63	愛宕講	アタゴ講					○			1
64	化野	アタシノ・アダシ野		○	○					2
65	暖	アタハカ				○				1
66	化名	アダナ			○					1
67	化部屋	アダ部屋					○			1
68	化人	アダ人						○	1	
69	阿呼	阿タン			○					1
70	哆	アツカヒ			○					1
71	熱田	アツタ		○						1
72	厚齧	アツビン				○				1
73	敦盛	アツモリ		○						1
74	蹟	アト					○			1
75	穴	アナ						○	1	
76	穴師	アナシ				○				1
77	豈	アニ		○						1
78	兄弟子	兄デシ			○					1
79	阿尐摩尐摩々体	アニマニマハネ					○			1
80	婦女郎	姉チヤウラウ					○			1
81	並誹	アハイ					○			1
82	骨	アバラボネ						○	1	
83	鷦	アヒル			○					1
84	檜	アフチ		○						1
85	虻蜂	アフハチ			○					1
86	籠	アブミ		○						1
87	膏	アブラ						○	1	
88	油氣	油ケ						○	1	
89	岬方	アハウ						○	1	
90	泉郎	アマ		○						1
91	鶴	アマ						○	1	
92	天兒	アマガツ					○			1
93	阿麻久佐	アマクサ				○				1
94	尼衣	アマゴロモ		○						1
95	尼店	アマタナ			○					1
96	天の磐樟	アマ(の)イハクス						○	1	
97	天彦姫	アマヒコ姫						○	1	
98	泉郎人	アマ人		○						1
99	鳥柂	アマボシ						○	1	
100	網	アミ		○				○		2
101	編笠	アミ笠						○		1
102	飴	アメ			○					1
103	糖	アメ		○						1
104		アメ				○				1
105	天	アメ						○		1
106	天山	アメ山		○						1
107	綾竹	アヤ竹				○				1
108	菖蒲	アヤメ				○			○	2
109	菖蒲草	アヤメ草				○				1
110	夢み	アユ(み)		○						1

111	鮎	アユ	○						1
112	荒行	アラ行	○						1
113	荒蕪	アラコモ	○						1
114	あら寒	(あら)サム	○						1
115	譯ふ	アラソ(ふ)	○ ○						2
116	荒波	アラ波	○						1
117	荒儀	アラハタラキ			○				1
118	荒日	アラメ	○						1
119	靈酒	アラレ酒	○						1
120	頑(じ・おい)	アラハ(ル)		○ ○4					5
121	あら筵	ムシロ	○						1
122	蠟	アリ	○						1
123	歩き	アリ	○						1
124	分野	アリザマ				○			1
125	或	アル・アルイ	○			○ ○			3
126	王	アルジ		○					1
127	荒	アレ		○					1
128	淡	アハ					○		1
129	栗	アハ	○						1
130	阿波島殿	アハシマ			○				1
131	匏	アハビ	○ ○						2
	鮑	アハビ					○2		2
132	哀れ	アハレ	○						1
133	行脚	アンギヤ	○						1
134	安康	アンコウ		○					1
135	按じて	アン(じて)		○					1
136	行燈	アンドン				○2			2
137	按摩	アンマ	○ ○ ○		○				4
138	い 菌	イ	○						1
139	遺愛寺	イアヒ寺・イアイジ	○ ○						2
140	飯	イハ・イヒ	○				○		2
141	家塗	イエゾト	○						1
142	硫黄が鳴	イワウが鳴	○						1
143	衣袴	イカウ	○				○		2
144	笊離	イカキ	○				○		2
145	端籠	イガキ		○			○		2
146	雷	イカツチ				○			1
147	怒て	イカツ(て)		○					1
148	如何	イカナルカ					○		1
149	五十嵐殿	イガラン殿		○					1
150	鎧	イカリ			○				1
151	怒猪	イカリヰ					○		1
152	生鞍	生カハネ				○			1
153	園る	イキ(る)			○				1
154	生灵	イキ灵	○						1
155	生別れ	イキ別れ	○						1
156	幾	イク					○		1
157	幾億	イクヅク					○		1
158	幾日	イクカ・イツカ		○2					2
159	軍	イクサ	○						1
160	生つ	イケ(つ)	○						1
161	異香煎	異香クン				○			1
162	射さす	イ(さす)	○						1
163	砂	イサゴ		○					1
164	伊弉諾	イサナギ		○					1
165	十六夜	イザヨヒ	○						1
166	胃系	イン				○			1

167	石臼	石ウス			○		
168	礎	イシスエ・イシヅエ		○		○	2
169	石灰	石ハイ			○		1
170	放會	イシハヂキ	○				1
171	石焼	石ヤキ			○		1
172	意趣	イシユ				○	1
173	急がせ	イゾ(がせ)	○				1
174	議際	議キハ			○		1
175	五十	イソジ				○	1
176	五十年	イソジ				○	1
177	石上	イソノガミ	○				1
178	懷て	イダキ(テ)		○			1
179	戴け	イタダ(け)	○2			○2	4
180	頂	イタキ		○			1
181	馳	イタチ	○2			○	3
182	貪駄-犬	イダ犬			○		1
183	虎杖	イタドリ				○	1
184	痛や	イタ(ヤ)				○	1
185	一合	イチガウ	○				1
186	一時	イチジ			○		1
187	一ト	一ジツ	○				1
188	掲焉	イチシルク				○	1
189	一陣	一チン			○		1
190	逸物	イチニツ			○		1
191	一揆	一ギ	○			○	2
192	斎宮	イツキ/ミヤ				○	1
193	何国	イツク		○			1
194	一轍	一テツ				○	1
195	泉	イツミ	○				1
196	厭ひ	イト(ひ)	○2				2
197	嘗み	イトナ(み)	○				1
198	伊奈左	イナサ			○		1
199	電	イナヒカリ	○				1
200	古レ	イニ(レ)				○	1
201	狗	イヌ			○		1
202	祈	イノリ		○			1
203	渭濱	イハシ				○	1
204	犹	イボ	○				1
205	未	イマダ				○	1
206	妹	イミウト	○				1
207	妹皆	イミセ			○		1
208	守宮	イミリ	○				1
209	弥	イヤ				○	1
210	冕	イラカ		○			1
211	煎餃	イリイハシ				○	1
212	煎菴	イリマメ	○				1
213	入香り	(入)カハ(リ)		○			1
214	色	ユロ・イロ	○			○	1
215	色人	イロビト				○	1
216	岩城山	岩キ山				○	1
217	日	イハク		○		○	2
218	鰯	イワシ			○		1
219	岩殿	岩ドノ				○	1
220	巖	イハホ				○	2
221	所謂	イハユル				○	1
222	家主	イハラジ	○				1
223	因果	インクハ				○	1

224	姫女	イン女	○							1
225	印子	キンス						○	1	
226	院殿	院テン						○	1	
227	淫乱	インラン	○						1	
228	う鶴	ウ				○			1	
229	上	ウヘ		○					1	
230	樹屋	ウエキ屋					○	1		
231	飢し	ウヘ(し)	○			○		2		
232	上野	ウヘ野			○				1	
233	上宮	ウヘ宮	○						1	
234	浮瓢	浮フクベ				○		1		
235	黄鸝	ウグイス	○						1	
236	土雀	ウグロモチ		○					1	
237	動せ	ウゴカ(せ)			○				1	
238	右近	ウコン	○						1	
239	鬱金	ウコン					○	1		
240	宇治香	宇治カウ	○						1	
241	艮角	ウシトラズミ	○						1	
242	後	ウンコ		○					1	
243	後堂	ウンコダウ					○	1		
244	後飛	ウシコトビ					○	1		
245	薄暁	ウスカサ				○		1		
246	薄情	薄ナサケ			○				1	
247	薄縁	薄ベリ		○					1	
248	埋む	ウツ(む)			○				1	
249	埋れ	ウツモ(れ)					○	1		
250	虚	ウソ				○	○	3		
251	嘘け	ウソフ(け)	○						1	
252	疑がはで	ウタ(がはで)	○						1	
253	詰ふ	ウタ(ふ)		○					1	
254	歌脣	歌クヅ				○			1	
255	打頬て	打ウナツイ(て)			○				1	
256	撲すさむ	ウチ(すさむ)			○				1	
257	幻	ウツハ			○				1	
258	梁	ウツハリ					○	1		
259	蓑	ウツボ蓑					○	1		
260	肘	ウデ				○	2		2	
261	腕	ウデ	○	○	○				3	
262	有得	ウトク		○					1	
263	右得者	ウトク者	○						1	
264	温飴	ウドン	○		○				2	
265	蟹	ウナギ				○		1		
266	乳母	ウバ・ウバ			○	○	○	3		
267	鳥羽	ウバ					○	1		
268	蝎	ウハミ	○					1		
269	産毛	ウブケ					○	1		
270	鞠舟	ウ舟	○						1	
271	産湯	ウブユ	○						1	
272	産	ウミ		○					1	
273	海鬼燈	ウミホウヅキ				○		1		
274	生(ム)	ウ(ム)					○	1		
275	埋て	ウメ(て)			○				1	
276	恭	ウヤマシク				○		1		
277	裏屋	ウラ屋					○	1		
278	瓜種	ウリタネ	○					1		
279	湊ひて	ウルホ(ひて)				○		1		
280	漆	ウルシ			○				1	

281	漆紋	ウルシ紋					○			1
282	上氣	ウハキ						○	1	
283	上氣人	ウハキビト						○	1	
284	上棧敷	ウハサジキ						○	1	
285	後妻	ウハナリ			○				1	
286	上塗	ウワヌリ				○			1	
287	運	ウン				○			1	
288	溫暖	ウンダン				○			1	
289	雲龍	ウンレウ				○			1	
290	元柄	エ						○	4	
291	餌	エ						○	1	
292	詠	エイ			○				1	
293	映して	エイ(して)						○	1	
294	酔たる	エイ(たる)			○				1	
295	永平寺	エイヘイシ				○			1	
296	恵心	エシン						○	1	
297	夷	エゾ			○				1	
298	蝦夷	エゾ				○			1	
299	餌釣	エゾリ						○	1	
300	肢	エダ						○	1	
301	穢多	エタ・エツタ	○	○	○				3	
302	條	エタ				○			1	
303	恵比須講	エビスカウ				○			1	
304	恵比須殿	エビス殿							1	
305	籠	エビラ				○			2	
306	嵬	エヘン						○	1	
307	榮耀	エヨウ・エエウ				○		○	2	
308	えり裏	(エリ)ウラ				○			1	
309	櫛掛	エリ挂						○	1	
310	襟山	エリサン						○	1	
311	縁	エン	○	○	○				3	
312	橡	エン				○	○		2	
313	縁覚の壳	エンガク(の)スケ						○	1	
314	縁組	縁クミ					○		1	
315	猿猴	エンコウ			○				1	
316	灸上	エンジヤウ				○			1	
317	薙丹	エンタン						○	1	
318	縁付	エンキ	○	2					2	
319	燕尾	エンビ	○						1	
320	閻浮檀金	エンブダゴン				○			1	
321	お甥	ヲヒ			○	○			2	
322	負	ヲヒ・ヲ(ふ)			○	○		○	3	
323	老婆	ヲトウバ			○				1	
324	生て	ヲヒ(て)						○	1	
325	追剥	ヲヒハギ			○				1	
326	黄金	オウゴン					○		1	
327	黃庇	オウダン							1	
328	庭弱	オウチヤク						○	1	
329	覆	ヲヒ・ヲホイ					○		2	
330	狼	ヲカミ			○				1	
331	大口舌	オクセツ					○		1	
332	大漚	オコリ				○			1	
333	大觕	オサツキ							1	
334	大酒宴	オザカモリ						○	1	
335	大酌子	オシヤクシ							1	
336	大葛篭	オツララ				○			1	
337	大吃	オドモリ						○	1	

338	大なみ	オホ(なみ)	○						1
339	大警	オヌサ		○					1
340	大寝坊	オヌ坊		○					1
341	大原ざし	オホバラ(ざし)	○						1
342	大柄	オホヘイ				○			1
343	大焼	オヤケ					○		1
344	可笑	ヲカシキ				○			1
345	御簾	ヲカタミ		○					1
346	罫部	ヲカベ		○					1
347	澳	ヲキ	○						1
348	置き駁	ヲキ(駁)					○		1
349	起て	ヲキ(て)					○		1
350	叟草	ヲキナ草	○						1
351	補(ふ)	ヲキナ(ふ)	○						1
352	奥	ヲク	○						1
353	聴辱	ヲクヂヨクト(右訓) マジメ(左訓)				○			1
354	奥蘭	奥ハ・奥バ		○	○				2
355	噫	ヲクビ					○		1
356	臆病風	ヲクベウ風	○						1
357	臆病者	ヲク病者				○			1
358	怠らす	ヲコタ(らす)	○						1
359	行ひ	ヲコナ(ひ)	○						1
360	癪	ヲコリ	○	○	○	○	○		4
361	驕	オゴリ	○				○		2
362	奢る	ヲゴ(る)					○		1
363	長	ヲサ					○		1
364	筈	ヲサ			○				1
365	舅	ヲヂ			○				1
366	鶯	ヲン		○					1
367	押	ヲン				○			1
368	伯父	ヲチ		○			○		2
369	男鹿	ヲ鹿					○		1
370	伯父者	ヲヂジヤ	○						1
371	和尚	ヲ尚					○		1
372	渥ひ	ヲソ(ひ)			○				1
373	御造作	ヲソワサ		○					1
374	御卒首雖	オソリ				○			1
375	御傍	ヲソバ		○					1
376	恐	ヲソレ				○			1
377	愛宕	ヲタギ	○						1
378	小手巻	ヲダマキ		○					1
379	脛脣	ヲツセイ	○						1
380	遠	ヲチ			○				1
381	御乳	ヲチ		○					1
382	乙卯	ヲチカシラ					○		1
383	落瀧	ヲチタキ		○					1
384	落武者	ヲチ武者		○					1
385	音	ヲト		○					1
386	落す	ヲト(す)		○					1
387	頤	ヲトカイ		○					1
388	乙卯	乙カド					○		1
389	威	ヲドシ					○		1
390	驚す	ヲド(す)					○		1
391	音高	ヲトタカ				○			1
392	大臣	ヲトボ						○2	2
393	一昨日	ヲトセ			○				1

394	跳	オドリ・ヲド(る)	○	○						2
395	躍出	ヲトリ出						○		1
396	薺	ヲドロ					○			1
397	衰ふ	ヲトコ(ふ)					○			1
398	女子衆	ヲナゴ衆							○	1
399	鬼	ヲニ			○					1
400	大根葉	ヲネバ					○			1
401	姨	ヲバ					○			1
402	御祓	ヲハラヒ					○			1
403	帶	ヲビ				○				1
404	夥	ヲビタヽ(し)	○							1
405	御しら露	ヲボン(しら露)					○			1
406	御月	オホン月						○		1
407	佛	ヲミカゲ	○	○	○				3	
408	侍兒	ヲモヒト						○		1
409	膳所	ヲモノ							○	1
410	重目	ヲモ目							○	1
411	走	ヲモケ						○		1
412	惟	ヲモン					○			1
413	親仁	ヲヤジ					○			1
414	親父	ヲヤヂ					○			1
415	及ぬ	オヨバ(ぬ)				○				1
416	折し	オラ(し)				○				1
417	阿蘭陀	ヲランダ						○		1
418	折鳥帽子	折エボシ	○							1
419	疎	ヲロソカ						○		1
420	飲食	ヲンシキ						○2		2
421	恩徳	オンドク				○				1
422	女神	ヲンナ神							○	1
423	隱坊	ヲンバウ				○				1
424	蚊	カ					○			2
425	蟻	ガ				○				1
426	我	ガ						○		1
427	峠	カヒ					○			1
428	甲斐	カイ				○				1
429	紙屋川	カイ川						○		1
430	亥氣	ガイキ							○	1
431	会稽	ケハイケイ	○							1
432	蠶	カイコ				○				1
433	海草	カイサウ				○				1
434	害せぬ	カイ(せぬ)				○				1
435	かい婚	(カハ)ダテ				○				1
436	海童	カイドウ				○				1
437	腕	カイナ				○				1
438	賈呑	カバミ				○				1
439	開闢	カヒヤク						○		1
440	貲もの	カヒ(もの)			○					1
441	賈	カウ・カハ(ふ)			○2					2
442	還	カヘリ				○				1
443	歸り	カヘ(り)						○		1
444	顧	カヘリミル							○	1
445	蝦蟇	カヘル							○	1
446	花燐	花エン							○	1
447	火熖	火エン				○				1
448	何億	カゾク							○	1
449	薰らし	カヲ(らし)				○				1

450	挑	カヽゲ			○					
451	抱へし	カヽ(へし)		○						1
452	驚庭	カダシ		○						1
	鹿鷺	カボリ	○							1
453	籌	カキ	○			○			○	3
454	墻	カキ	○							1
455	石花	カキ			○					1
456	鑑	カギ			○	○				2
	輪	カギ						○		1
457	搔上	カキ上						○		1
458	搔合せ	カキ合せ		○						1
459	搔板	カキ板			○			○		2
460	垣杭	垣グキ	○							1
461	輿とゞめ	カキ(とゞめ)	○							1
462	輿ひそめ	カキ(ひそめ)	○							1
463	搔飴	カキ飴						○		1
464	蝸牛	クワ牛						○		1
465	鍵蕨	カギ蕨	○							1
466	楽	ガク	○							1
467	額	ガク					○			1
468	隠し男	カク(し男)				○				1
469	隱(れ・す)	カク(れなし)		○2						2
470	隔番	カクバン				○				1
471	楽屋	ガクヤ・ガク屋			○			○		2
472	香久山	カク山	○							1
473	隔やみ	カク(やみ)	○							1
474	闕五器	カケ五器				○				1
475	欽る	カク(る)・カケ	○2							2
476	霍舌	クハグラン	○							1
477	梯	カケハシ						○		1
478	欠ゆく	カケ(ゆく)			○					1
479	絲絣	カケロフ			○					1
	野馬	カケロフ						○		1
480	駕籠	カゴ			○					1
481	罇	カゴ		○				○		2
482	開	カコフ				○				1
	圓	カコミ	○							1
483	瘡	カサ				○				1
484	葛西	カサイ						○		1
485	家財	カサイ	○							1
486	風折	カザオリ						○		1
487	挿頭	カサシ				○				1
488	かさね葺	(かさね)ダミ		○						1
489	瘡蓋	カサブタ				○				1
490	飭る	カザ(る)						○		1
491	櫻	カシ			○					1
492	椎	カチ		○						1
493	檜	カチ					○			1
494	かし駕籠	(かし)カゴ			○					1
495	櫻の箇	カシ(の)ドウ						○		1
496	粗枕	カヂ枕	○							1
497	糟	カス					○			1
498	迦葉	カセウ						○		1
499	救	カズ						○		1
500	幽な	カスカ(な)				○				1
501	霞	カスム	○							1
502	嫁せざる	カヤゼざる		○						1

503	鹿背山	カセイ山							○	1
504	肩	カタ			○				○	2
505	堅かりし	カタ(かりし)	○							1
506	片頬	カタカハ							○	1
507	堅炭	カタ炭			○					1
508	かた隅	(かた)スミ		○						1
509	方違へ	カタタガ(へ)	○							1
510	貌	カタチ			○			○		2
511	像	カタチ						○		1
512	象	カタチ						○		1
513	顔	カタチ						○		1
514	交野	カタノ						○		1
515	片肌	カタハダ						○		1
516	帷子	カタヒラ			○					1
	帷	カタヒラ						○		1
517	形躬	カタミ		○						1
	記念	カタミ						○		1
518	體	カチ		○						1
519	歩行	カチ		○				○		2
520	化中	クワ中						○		1
521	歩若党	カチワカタウ	○							1
522	鞆鼓	カツコ	○							1
523	髪僧	ガツソウ			○					1
524	癪病	カツタイ						○		1
525	合點	カツテン							○	1
526	葛	カツラ			○					1
527	桂川	カツラ川			○					1
528	化狄	クハテキ	○							1
529	川	カド	○			○			○2	4
530	瓦燃・瓦灯	クワトウ・クハトウ		○	○					2
531	首途	カドデ	○							1
532	角根	カト根						○		1
533	鉄床	カナ床						○		1
534	鉄火箸	カナ火箸							○	1
535	鉄棒	カナホウ	○							1
536	兼	カネ		○2						2
537	銀	カネ		○		○			○	3
538	銅	カネ			○					1
539	兼康	カネヤス			○					1
540	庚午	カノヘムマ							○	1
541	彼土	カノド							○	1
542	禿	カブロ			○					1
543	下坯	カヒ	○							1
544	鹿皮	カヒ						○		1
545	カビタン人	(カビタン)ビト							○	1
546	哥舞妓	カブキ	○							1
547	蕪	カブラ	○							1
548	禿	カブロ						○		1
549	甲	カブト							○	1
550	壁	カベ	○							1
551	竈	カマ		○						1
552	釜	カマ							○	1
553	鎌	カマ				○				1
554	蟾蜍	カマキリ	○		○					2
555	鎌倉	カマクラ	○							1
556	竈風呂	カマ風呂							○	1
557	蒲鉾	カマボコ			○				○	2

558	上	カミ	○						1
559	髪	カミ				○			1
560	神慮	カミコヽコ		○					1
561	紙袍袋	カミコ袋				○	1		
562	剃刀	カミソリ		○					1
563	瓶	カメ	○						1
564	龜が谷	亀(が)ヤツ	○						1
565	貨物	クハ物・クリ物			○2			2	
566	鳴	カモメ		○			○	2	
567	榧	カヤ				○	1		
568	栢	カヤ				○	1		
569	萱葺	カヤブキ	○						1
570	粥	カユ	○ ○ ○					3	
571	荷葉	カヨウ	○						1
572	唐	カラ				○		1	
573	碓	カラウス	○				○	2	
574	奪	カラカラ	○					1	
575	辛き	カラ(き)	○					1	
576	空車	カラ車				○	1		
577	枯し	カラ(ル)	○					1	
578	芥辛子	カラシ		○				1	
579	烏瓜	カラスウリ	○					1	
580	虜漕上	カラゼンシヤウ				○	1		
581	搦捕	カラ一カラバリ	○					1	
582	假	カリ		○	○			2	
583	假初	カリソメ				○	1		
584	苺つくす	カリ(つくす)			○			1	
585	假緘	カリトヂ			○			1	
586	臥龍	グワ龍			○			1	
587	迦陵頻	ガレウビン	○ ○					2	
588	果李	ケフリン	○					1	
589	故	カルカユヘ		○				1	
590	輕衫	カルサン	○					1	
591	輕業・かる業	カルワサ・(かる)ワザ		○		○		2	
592	餉	カレイヰ	○					1	
593	革	カハ		○				1	
594	皮	カハ				○	1		
595	乾かづ	カハ(かづ)			○			1	
596	河狩	河ガリ	○					1	
597	蟾	カハヅ	○					1	
598	瓦	カハラ			○2			2	
599	土器	カハラケ		○2				2	
600	丸	クワン				○	1		
601	顔淵	ガンエン		○				1	
602	看経	カンキン		○				1	
603	元真じ	グハンゴウ(じ)	○					1	
604	寒国	カンコク	○					1	
605	寒垢離	カンゴリ・寒コリ	○		○			2	
606	寒山	カンサン		○				1	
607	歎企	クハンジ			○			1	
608	観じ	クハン(じ)	○					1	
609	感じ入	カン(じ入)	○					1	
610	閑所	カンジョ	○					1	
611	勧諳	クハンジヤウ	○					1	
612	勸進帳	クハンチヤウ	○					1	
613	勸進坊主	クハンジンバウス	○					1	
614	龜前堂	ガン前堂	○					1	

615	五調	ガンデヴ	○						1
616	神田	カンタ						○	1
617	寒笛	カンテキ					○		1
618	銘唇	カンナクズ				○			1
619	假名月	カンナヅキ	○						1
620	間鍋	カンナハ				○2			3
621	堪忍	カンニン					○		1
622	看板	カンバン					○		1
623	問冷	カンヒヤ						○	1
624	看病	カンビヤウ	○						1
625	き 貨	キ		○					1
626	氣	キ				○2			2
627	繩	キ		○					1
628	儀	ギ						○	1
629	奇異	キイ					○		1
630	帰依	キエ						○	1
631	鬼界が嶋	キカイ(が嶋)	○						1
632	桔校	キハヤウ				○			1
633	菊持童	キハズウ					○		1
634	纏綿	キクトヂ	○						1
635	樵夫	キコリ	○						1
636	后	キサキ		○					1
637	着更衣	キサラキ			○				1
638	雉子	キジ		○					1
639	氣隨意	キズイ				○			1
640	背か	キセル				○			1
641	北側	北カワ				○			1
642	几帳	キチヤウ	○						1
643	絹	キヌ						○	1
644	甲子	キノエ子	○						1
645	紀の路	(紀)のヂ		○					1
646	牙	キバ		○				○	2
647	蓮	キビス				○		○	2
648	黍島	キビ島					○		1
649	貴布祢	キブネ		○					1
650	擬文章	ギモン章	○						1
651	狂乱	キヤウ乱		○					1
652	花車	キヤシヤ		○					1
653	脚布	キヤフ		○2					2
654	來やれ	キ(やれ)			○				1
655	急	キウ						○	1
656	几軒	ルケン				○			1
657	舊苔	キウタイ					○		1
658	旧里	キウリ				○	○		2
659	裾	キヨ	○	○					2
660	虚	キヨ				○			1
661	興	ケウ				○			1
662	堯	ギョウ	○						1
663	行菜	ギヤウギ					○		1
664	業々し	ギヤウ(々し)	○						1
665	清	キヨキ						○	1
666	玉樓	玉ロウ						○	1
667	曲彖	キヨクロク						○	1
668	御才	キヨ(才)						○	1
669	玉殿	ギヨクデン	○						1
670	玉兎	ギヨクト	○						1
671	虛劣	ギヨラウ				○			1

672	桐	キリ	○								
673	伐	キリ	○								1
674	切蟻	キリウヂ							○		1
675	器量	キリヤウ	○								1
676	麒麟	キリン			○	○					2
677	斬	キル							○		1
678	着る	キ(る)							○		1
679	奇麗	キレイ	○					○			2
680	際	キハ			○						1
681	際懸	キハ懸						○			1
682	琴	キン	○								1
683	吟	ギン	○								1
684	槿花	ギンクハ	○								1
685	銀公	ギンゴウ	○								1
686	巾着	キンチャク							○		1
687	金數	キンデン							○		1
688	銀錘	銀ナベ							○		1
689	金蓋	キンヅタ							○		1
690	巾頭	キントウ			○						1
691	禁盃	キンパイ	○								1
692	欽明	キンメイ	○								1
693	訓蒙図彙	キンモフズイ				○					1
694	く喰	クヒ・クイ・クラ(ひ)	○	○					○3		5
695	水鶴	クイナ					○				1
696	宮	クウ							○		1
697	寓言	グウ言						○			1
698	公宴	クエン	○								1
699	茎	クキ	○		○	○					3
700	嗅	クサク					○				1
701	草薙	クサナギ	○								1
702	蕈	クサビラ	○								1
703	鎗	クサリ							○		1
704	櫛	クシ					○		○		2
705	虞氏	グシ	○								1
706	串茹弱	串コンニヤク							○		1
707	孔雀	クシヤク			○	○					2
708	鯨・鯢	クジラ	○2								2
709	眉	クヅ		○							1
710	崩(して・れ)	クヅ(して・れ)	○		○		○	○			4
711	棗玉	クヌスマ	○								1
712	楠	クスノキ	○								1
713	葛	クズ							○		1
714	口舌	クゼツ				○					1
715	具足	グソク	○								1
716	具足櫃	具足ヒツ		○							1
717	碎て	クダケ(て)			○2	○					3
718	下す	クダ(す)							○		1
719	愚癡	グチ	○								1
720	朽(なむ)	クチ(なむ)							○		1
721	口真似	口マネ							○		1
722	脅踏皮	クツタビ							○		1
723	繕	クツハ							○		1
724	口説	クドク・クドキ		○					○		2
725	国人	クニウト	○								1
726	首	クヒ					○	○			2
727	頸	クビ			○						1
728	狗品	グビン	○	○							2

729	凹て	クボメ(て)			○				1
730	艶	クマ						○	1
731	角鷹	クマタカ	○						1
732	組いれ	クミ(いれ)		○					1
733	蔵	クラ		○					1
734	愚等	グラ					○		1
735	闇う	クラ(う)					○		1
736	藏為替	藏ガハセ					○		1
737	水母	クラゲ					○		1
738	椋橋川	クラ橋川				○			1
739	掠橋山	クラ橋山・クラハシ山			○		○		2
740	掠	クラベ		○					
741	暗み	クラ(み)				○			1
742	栗	クリ	○						1
743	庵裏	クリ					○		1
744	練臺	クリダイ						○	1
745	練ぬる	クリ(ぬる)			○				1
746	来	クル					○		1
747	胡桃	クルミ					○		1
748	グルスイ躍	(グルスイ)ヲドリ					○		1
749	猫	グルメウ				○			1
750	榎戸	クレ、戸	○						1
751	鉢	クハ					○		1
752	群集	クンジュ			○				1
753	薰づる	クン(づる)	○						1
754	[ナ]氣	ケ					○		1
755	筈	ケ		○					1
756	夏	ゲ	○						1
757	景	ケイ	○ ○						2
758	藝	ゲイ		○					1
759	稽古	ケイコ	○			○			2
760	競馬	ケイバ	○						1
761	外科箱	ケクハバコ					○		1
762	下疳	下カン			○				1
763	芥子	ケシ					○		1
764	艇	ゲシ／＼					○		1
765	化して	ケ(して)					○		1
766	化生	ケシヤウ	○						1
767	化粧	ゲシヤウ		○					1
768	梳る	ケヅル			○				1
769	解怠	ケダイ		○					1
770	下踏袋	ゲタ袋					○		1
771	假契	ケチ			○				1
772	假契買	ケチ買			○				1
773	假契部屋	ケチヘヤ			○				1
774	結構	ケツカウ				○			1
775	結し	ケツ(し)		○					1
776	血脉	ケツミヤク				○			1
777	解毒	ゲドク			○				1
778	毛兜羅面	毛トロメン					○		1
779	下曳	ケビ			○				1
780	結解し	ケツケ(し)	○						1
781	結講	ケツヨウ	○						1
782	実	ゲニ		○					1
783	鋸	ケヌキ					○		1
784	閥す	ケミ(す)					○		1
785	轡	ゲラ					○		1

786	蹴る・蹴立る	ケ(る)・ケ(立る)		○		○2				3
787	賢	ケン	○							1
788	眩暈	ケンウン					○			1
789	喧嘩	ケンクハ	○		○					2
790	元亨	ゲンカウ	○							1
791	乾坤	ケンコン			○					1
792	弦数	ケンサク			○					1
793	現じ	ゲン(じ)			○					1
794	建水	ケンスイ	○							1
795	懇食	ケンドン			○					1
796	玄贊	玄ビン			○					1
797	痺癪	ケンヘキ			○					1
798	戸	コ				○				1
799	碁	ゴ	○							1
800	御威勢	御イセイ	○							1
801	濃茶	コイチヤ・コヒ茶	○2							2
802	請て	コヒ(て)	○							1
803	殞臏	コイズネ		○						1
804	功	コウ	○							1
805	隸	カウガイ			○					1
806	笄	カウガイ								1
807	恒河砂	ガウカシヤ					○			1
808	高言	カウゲン		○						1
809	腋々	カウ(々)					○			1
810	趨	カウジ	○							1
811	格子	カウシ	○	○						2
812	香水	カウズイ	○							1
813	行成	カウゼイ	○							1
814	浩然	コウゾン					○			1
815	高祖	カウソ	○							1
816	噉訴	ガウソ	○							1
817	高足	カウソク			○					1
818	後朝	コウデウ	○							1
819	高津	カウツ		○						1
820	上野	カウヅケ		○						1
821	強盜	カウトウ・ガウダウ			○			○		2
822	九十	カウト					○			1
823	寄蟲	ガウナ					○			1
824	行年	カウネン						○		1
825	首	カウベ		○						1
826	綱目	カウ目					○			1
827	高麗	カウライ			○					1
828	高樓	カウロウ			○					1
829	肥	コヘ・コエ	○2				○			3
830	肥肉	コエジハ						○		1
831	牛王	ゴワウ	○							1
832	小面	コオモテ					○			1
833	凍	コホリ					○			1
834	氷砂糖	氷ザタウ	○							1
835	五月五日	ゴグハチゴニチ	○							1
836	金	コカネ					○	○		2
837	風	コカラシ					○			1
838	五器	五キ			○					1
839	故郷	コキヤウ	○							1
840	古郷	コキヤウ					○			1
841	漕	コグ・コキ	○					○		2
841	国阿	コクア	○							1

842	極印	コクイ			○					1
843	虚空	コクウ					○			1
844	獄卒	獄ソツ						○		1
845	苔	コケ			○					1
	莓	コケ						○		1
846	柿	コケラ	○							1
847	五侯	五コウ						○		1
848	小督	コガウ							○	1
849	九	コノ					○			1
850	和倫子	コハリンズ							○	1
851	小齋	コサイ							○	1
852	來(ざる・ぬ)	コ(ざる・ぬ)	○						○	2
853	越	コシ							○	1
854	輿	コシ			○					1
855	乞食	コジキ			○				○	2
856	扈從	コショウ・コサウ・コセウ			○2	○2				5
857	胡椒	コセウ			○					1
858	鯛簾	コス			○					1
859	牛頭	コヅ・ゴヅ	○						○	2
860	こせ瘡	(こせ)ガサ	○							1
861	御前	コゼン							○	1
862	御僕議	御セン儀					○			1
863	擧げる	コソリ(ける)							○	1
864	火縄	コダツ							○	2
865	木玉	コタマ					○			2
866	樹神	コタマ						○		1
867	國家	コツカ					○			1
868	骨箱	コツボ							○	1
869	小粒	小ツブ							○	1
870	泥鏡	コテ							○	1
871	御殿	ゴテン						○		1
872	如	コト							○	1
873	物	コト	○							1
874	事闇	事カキ							○	1
875	故殿	コトノ	○							1
876	五人与	五人グミ					○			1
877	粉糠	コヌカ							○	1
878	粉糠寺	コヌカ寺								1
879	粉糠袋	コヌカ袋								1
880	占奴兒	コヌミ								1
881	小猫	小ネコ					○			1
882	此土	此ド					○			1
883	木葉	コノハ							○	1
884	木間	コノマ・コマ					○			2
885	木皮	コハ							○	1
886	五百羅漢	五百ラカン					○			1
887	鱗	コノシロ							○	1
888	小袴	コバカマ								1
889	琥珀	コハク								1
890	碁盤	碁バン								1
891	小額	小ヒタイ							○	1
892	鼓腹	コフク								1
893	粉服綿	コブクメン								1
894	胡粉	ゴブン								1
895	牛粉	ゴブン						○		1
896	護摩	ゴマ	○						○	2

897	細か	コマ(か)	○							
898	兜	コマイヌ	○							1
899	駒摺	コマサラヘ			○					1
900	胡麻餅	ゴマ餅						○		1
901	徑	コミチ		○						1
902	小女郎	小メ郎		○						1
903	菰	コモ		○						1
904	菰かぶり	コモ(かぶり)					○			1
905	御物	ゴモツ	○							1
906	薺舟	コモ舟						○		1
907	籠り人	籠(り)ド		○						1
908	御門	ゴモン						○		1
909	籠屋	コモ屋						○		1
910	子安	コヤス	○							1
911	暦	コヨミ	○		○					2
912	垢離	コリ	○							1
913	籠履	コリ			○					1
914	樵	コリ					○			1
915	氷搔て	コリカキ(て)		○2						2
916	樵	コル			○					1
917	衣	コロモ	○					○		2
918	強(り)	コハ(り)			○					1
919	強食	コハ食			○					1
920	魂	コン					○			1
921	近衛	コンエ						○		1
922	矜迦羅	コンカラ	○							1
923	金光寺	コンクハウジ						○		1
924	金翅鳥	コンジテウ						○		1
925	紺青	コンセウ				○				1
926	渾沌	コントン						○		1
927	昆若	コンニヤク	○							1
	昆弱	コンニヤク				○				1
	蒟蒻	コンニヤク					○2			2
928	建立	コンリウ					○			1
929	紺溜壙	コンルリ						○		1
930	さ	サイ		○						1
931	菜	サイ	○							1
932	塞翁	サイヲウ		○						1
933	最後	サイゴ			○					1
934	彩色	サイシキ			○					1
935	罪孽	サインヤウ	○		○					2
936	催促	サイソク			○					1
937	災難	サイナン	○							1
938	催馬樂	サイバラ	○							1
939	窄守	サイフ	○							1
940	境目	サイメ	○							1
941	材木	ザイモク	○							1
942	寒かへる	サエ(かへる)			○					1
	涙還り	サエカヘ・サヘカヘ(り)	○	○						2
943	轉(り)	サエヅ(り)			○					1
944	小男鹿	サフ鹿			○					1
945	逆おとし	サカ(おとし)				○				1
946	逆	サカサマ			○				○	2
	倒	サカシマ						○		1
947	杯	サカヅキ						○		1
948	看棚	サカナダブ			○					1
949	逆春	サカマク			○					1

950	月代	サカヤキ	○		○	○	○		○2	6
951	前	サキ			○					1
952	先	サキ				○				1
953	開	サク							○	1
954	探目	サク日						○		1
955	桜	サクラ	○							
956	下髪	サケ髪			○					1
957	提重箱	サゲジウバコ	○							1
958	雄喉	サゴ	○							1
959	珊瑚樹	サゴジュ							○	1
960	狹衣	サ衣	○		○					2
961	笛竹	サ・竹							○	1
962	雀原	サ・原		○						1
963	榮螺	サ・イ・サイ						○	○	2
964	搘	サ・グ						○		1
965	人角立	サ・ゲ	○							1
966	細々浪	サ・浪						○		1
967	伴々良複壯子	サ・ラエオトコ						○		1
968	匙	サジ				○				1
969	剤	サジ				○				1
970	棟敷	サジキ	○							1
971	座敷能	座敷ノウ							○	1
972	指身	サシミ	○							1
973	授ぐる	サヅ(くる)			○					1
974	摩れ	サス(れ)	○							1
975	流石	サスガ	○							1
976	座頭	ザト	○							1
977	砂糖	サタ	○							1
978	茶堂	サダウ							○	1
979	悟	サトリ・サトツ(た)						○	○	2
980	三日	サ日							○	1
981	核	サネ						○		1
982	実朝	サネトモ	○							1
983	真盛	サネモリ	○							1
984	餌	サバ	○							1
985	小蠅	サハヘ						○		1
986	砂鉢	サハチ		○						1
987	砂鉢舟	サハチ舟						○		1
988	鋪	サビ		○						1
989	金精	サビ	○							1
990	鈷矢	サビヤ							○	1
991	寂けき	サビ(けき)						○		1
992	淋しき	サビ(しき)				○2		○		3
993	狹間	サマ	○							1
994	三味線	サミセン	○							1
995	小窓	サムシロ							○	1
996	狹楚	サムシロ			○2					2
997	寒病	サムヤミ						○		1
998	鮫	サメ						○		1
999	覚て	サメ(て)						○		1
1000	鞠	サヤ						○		1
1001	小夜	サヨ						○		1
1002	小夜躑躅	サヨ躑						○		1
1003	晒	サラシ						○		1
1004	更級	サラシナ		○						1
1005	晒櫃	サラシビツ			○					1
1006	諱	サハギ			○2			○		3

1007	騒く	サハ(く)						○	1
1008	障	サハリ					○		1
1009	産	サン	○						1
1010	饑悔する	サンゲ(する)	○				○	2	
1011	三皇	三クワウ	○						1
1012	棟敷	サン敷			○				1
1013	箸術	サンシユツ		○					1
1014	残暑	サン暑	○						1
1015	山莊	サンザウ	○						1
1016	謹奏	サンソウ		○					1
1017	讃談	サンダン	○						1
1018	三途河	ミヅ河・サウツカ	○			○		2	
1019	三の間	サン(の)・マ	○						1
1020	散葉	サンヤク	○						1
1021	死	シ		○			○	2	
1022	汐風	シホ風		○					1
1023	塙半	シホカラ		○					1
1024	塙垢離	シホゴリ	○						1
1025	汐時	シホトキ		○					1
1026	塙子	シホヒ	○						1
1027	鹿	シカ				○		1	
1028	死骸	シガイ	○						1
1029	戸	シカハネ				○		1	
1030	柵	シカラミ				○		1	
1031	仕着せ	シキ(せ)		○					1
1032	直	ジキ				○		1	
1033	時宜	ジギ		○					1
1034	閥	シキイ		○					1
1035	敷巻	シキカツヲ				○		1	
1036	色紙形	色紙グウ	○						1
1037	敷つめ	シキ(つめ)	○						1
1038	釐	シキミ	○		○			2	
1039	紫金諫	シキンヂヤウ				○		1	
1040	熊	シクマ				○		1	
1041		シグレ	○2						2
1042	繁(し・らん)	シグ(し・らん)		○		○			2
1043	茂鼻毛	シゲ鼻毛				○			1
1044	重まよふ	シゲ(まよふ)				○			1
1045	地獄	ヂゴク			○				1
1046	獅子	シ子		○					1
1047	獅笛	シハブエ	○						1
1048	肉	シムラ				○		1	
1049	蛻	シメ・シバミ		○			○	2	
1050	時守	ジシユ	○						1
1051	時守寺	ジシユデラ	○						1
1052	侍従	ジジウ	○						1
1053	師匠	シショウ			○				1
1054	時正	ジンヤウ	○						1
1055	下枝	シヅエ					○	1	
1056	辞世	ジセイ	○						1
1057	自然	シセン・シゼン			○2				2
1058	地蔵	地ザウ			○				1
1059	下	シタ					○	1	
1060	歯朶	シダ	○						1
1061	仁たい	シ(たい)					○	1	
1062	白駄	ジタイ	○						1
1063	薦	シタフ				○		1	

1064	下面	下オモ							○	1
1065	仕川し	シダ(し)							○	1
1066	下戔腹	ドシヤクハラ					○			1
1067	下闇	ドヤミ					○			1
1068	白旗落	ジダラク				○				1
1069	七賢	七ゲン			○					1
1070	冥	ジツ	○		○	○				3
1071	湿氣	シツケ		○	○					2
1072	軽方	シツケ方						○		1
1073	悉退散	シツタイサン					○			1
1074	七寶	シツボウ					○			1
1075	尿	シト	○							1
1076	禿	シトネ						○		1
1077	品	シナ			○					1
1078	死出	シニデ							○	1
1079	死人	死ビト				○				1
1080	篠薄	シノ薄						○		1
1081	柴積車	シバツミ車						○		1
1082	屢啼	シバナク・シバ啼		○				○		2
1083	司馬溫公	シバフンコウ		○						1
1084	渋團扇	シブウチワ・シブ團扇			○	○				2
1085	渋柿	シブガキ		○						1
1086	時平	シヘイ						○		1
1087	四壁	シベキ		○						1
1088	紫磨	シマ					○2			2
1089	鳴鶴	鳴ヒヨトリ						○		1
1090	自慢	ジマン					○			1
1091	清水精舎	シミヅ精舎						○		1
1092	注連	シメ		○3			○			4
1093	下をなご	シモ(をなご)		○						1
1094	下妻	シモツマ						○		1
1095	霜焼	霜ヤケ						○		1
1096	蛇	ジヤ						○2	○	3
1097	寂	シヤク					○			1
1098	錫杖	シヤクジヤウ		○						1
1099	赤熊	シヤグマ							○	1
1100	傭逆	シヤクリ		○						1
1101	邪見	ジヤケン						○		1
1102	磧	シヤコ						○		1
1103	麝香	ジヤカウ		○2						2
1104	蛇の鮐	ジヤ(の)スシ					○			1
1105	婆娑世界	シヤバセカイ			○					1
1106	邪魔	ジヤマ						○		1
1107	砂利	ジヤリ					○			1
1108	砂囊	ジヤリ						○		1
1109	秋	シウ							○	1
1110	秋	シウ	○	○						2
1111	孰ねき	シウ(ねき)		○						1
1112	主	シウ	○	○						2
1113	拾遺	シウイ		○						1
1114	従者	ジウザ		○						1
1115	姑	シウトメ					○			1
1116	壽永	ジユ永						○		1
1117	腫氣	シユキ				○				1
1118	樹下	ジユゲ					○			1
1119	柱杖	シユジヤウ					○			1
1120	念珠	ジユズ				○				1

	珠数	ジユズ	○						1
1121	術	ジユツ		○					1
1122	出離	シユツリ		○					1
1123	崇徳院	シユトキン		○					1
1124	須弥	シユミ		○					1
1125	修羅	シユラ	○						1
1126	棊櫻簷	シユロ簷			○				1
1127	鎧	ジヤウ		○					1
1128	章歌	セウガ				○			1
1129	生姜	シヤウガ		○					1
1130	生姜酢	生ガ酢		○					1
1131	賞讃	シヤウクハン		○					1
1132	鍾馗	セウキ	○						1
1133	床机	シヤウギ			○				1
1134	上客	シヤウキヤク	○						1
1135	小弓	小キウ		○					1
1136	鉦鼓	シヤウゴ				○			1
1137	莊嚴	シヤウゴン		○	○				2
1138	精進	サウジ・シヤウジ	○	○					2
1139	正真	正ジン	○						1
1140	小人	セウ人	○						1
1141	盛親僧都	ジヤウシンソウヅ		○					1
1142	樟(ス)	シヤウ(ス)			○				1
1143	憔悴	セウスイ	○						1
1144	常是	ジヤウゼ		○					1
1145	商船	シヤウセン	○						1
1146	束	シヤウゾク		○					1
1147	性躰	シヤウタイ		○					1
1148	諸待	シヤウタイ	○						1
1149	廁附	シヤウチウ			○				1
1150	證渉	シヤウチン		○					1
1151	焦熱	セウネツ		○					1
1152	樟腦	シヤウナフ			○				1
1153	肖柏	セウハク				○			1
1154	淨琉璃	ジヤウバリ		○					1
1155	笙咸角篥	シヤウヒチリキ	○						1
1156	常舞臺	ジヤウ舞臺				○			1
1157	小便	小ペシ	○						1
1158	上紅	上モミ				○			1
1159	声聞	シヤウモン				○			1
1160	松葉軒	セウエウケン				○			1
1161	書院	ショエン	○						1
1162	徐灝齋	ジョキサイ				○			1
1163	職	ショク	○						1
1164	蜀江	ショク江	○						1
1165	所作	ショサ			○				1
1166	序品	ジョホン		○					1
1167	新羅	シラキ・シンラ	○	○					2
1168	調	シラヘ				○	○3		4
1169	虱	シラミ	○						1
1170	尻	シリ	○				○		2
1171	尻馬	シリムマ	○						1
1172		シレヌモジ					○		1
1173	銀	シコカネ					○		1
1174	白髪	シコカミ	○						1
1175	城責	城セメ	○						1
1176	白庭鳥	シコ庭鳥			○				1

1177	鐵	シハ	○						1
1178	爲行	シワザ						○	1
1179	咳 頸	シハブキ	○						1
1180	晉	シン					○		1
1181	脣	ジン					○		1
1182	真切	シン切					○		1
1183	真剪	シンキリ					○		1
1184	真紅	シンク					○		1
1185	深谷	シンコク					○		1
1186	督せい	ヂン(せい)					○		1
1187	神泉苑	シンゼンエン	○						1
1188	心の臓	シン(の)ザウ					○		1
1189	身軀	シンタイ	○						1
1190	進(シ)退	進ダイ・シンダイ				○		○	2
1191	真鎌	シンチウ	○						2
1192	神農	神ノウ	○						1
1193	新発意	シンホチ	○						1
1194	腎薬	ジンヤク・ヂンヤク	○				○		2
1195	神興	シンヨ	○						1
1196	人倫	ジンリン	○						1
1197	す	ス	○						1
1198	醉	ス						○	1
1199	頭	ヅ				○			1
1200	推	スイ	○						1
1201	吹簫	吹カサ						○	1
1202	水晶	スインヤウ	○						1
1203	水腫	スイシユ						○	1
1204	隨身	スイジン	○						1
1205	翠巒	スイタイ						○	1
1206	水囊	スイノフ					○		1
1207	水門	スイモン	○						1
1208	橐菴	スイヤウ						○	1
1209	水籠	水ラウ					○		1
1210	居られ	スヘ(られ)	○						1
1211	菅井黨	スカヰタウ	○						1
1212	透とぞり	スキ(とぞり)	○						1
1213	透膠	スキニカワ					○		1
1214	透間	スキマ	○						1
1215	幘	ヅキン						○	1
1216	頭巾	ヅキン	○						1
1217	直	スグ				○			1
1218	救ふ	スク(ふ)					○		1
1219	すく藻	(すく)モ					○		1
1220	双六	スゴロク						○	1
1221	漬沙	スサ						○	1
1222	鮑	スシ	○				○		2
1223		スヅ						○	1
1224	厨子	ヅシ					○		1
1225	圖す	ヅ(す)					○		1
1226	煤	スヽ					○		1
1227	錫	スヽ							1
1228	涼かぜ	スヽ(かぜ)	○						1
1229	薄	スヽキ	○						1
1230	鰯	スヽギ			○				1
1231	雪ぐ	スヽ(ぐ)	○						1
1232	煤氣	スヽ、氣	○						1

1232	煤けたる	スヽ(けたる)	○						1
1233	煤竈	煤ハキ			○				1
1234	煤拂	スヽ拂		○					1
1235	勧	スヽメ			○				1
1236	硯	スマリ	○						1
1237	裾	スゾ					○		1
1238	裾野	スゾ野		○					1
1239	須達	スタツ					○		1
1240	靡(ル)	スタレ(ル)・スタ(れ)					○2		2
1241	銛	スツ	○						1
1242	既に	スデ		○2	○	○		○2	6
	已に	スデ(に)		○					1
1243	捨蓋	捨フタ					○		1
1244	膾	スネ	○				○		2
1245	筈子	スノコ	○					○	2
1246	枚百里	ス百里		○					1
1247	窄て	スベ(て)		○					1
1248	皇	スヘラキ・スメロギ					○	○	2
1249	圓法師	ツバウシ・ジボウシ			○			○	2
1250	隅	スミ	○	○			○	○	4
1251	澄	スミ		○					1
1252	角	スミ			○	○			2
1253	須弥	スミ					○		1
1254	栖	スミカ			○				1
1255	住かえ	スミ(かえ)			○				1
1256	住初	住ソメ					○		1
1257	角縞綿	スミヂリメン					○		1
1258	薙	スミレ					○		1
1259	墨付	スミツキ		○					1
1260	摺粉木	スリコ木		○					1
	搔子木	スリコギ			○				1
1261	摺鉢	スリハチ			○				1
1262	尖	スルド					○3		3
1263	諷訶	スハ	○						1
1264	セ情	セイ	○						1
1265	旌旗光	セイキ光					○		1
1266	聖訓	セイハイ					○		1
1267	青牛	セイギウ			○				
1268	西山	セイ山		○					1
1269	青磁	セイジ			○				1
1270	清淨殿	セイリヤウデン			○				1
1271	夕日	セキジツ	○						1
1272	石上	セキジヤウ			○				1
1273	雪踏	セチダ・セキダ			○			○2	3
1274	施行	セギヤウ	○						1
1275	寂寥	セキリヤウ					○		1
1276	背くらへ	セくらへ			○				1
1277	節	セチ	○						1
1278	節分	セチブ	○						1
1279	説相宣	説相バコ					○		1
1280	雪隱	セツチン・センチ		○			○		2
1281	攝津	セツツ	○						1
1282	絶命	ゼツム			○				1
1283	泊門	セト					○		1
1284	背中	セナカ		○					1
1285	背	セナカ					○		1
1286	狹き	セバ(き)	○						1

1287	仙	セン	○								1
1288	為方	セン方	○								1
1289	屑	セングズ							○		1
1290	嬪姫	センゲン							○		1
1291	善哉	センザイ							○		1
1292	尊鑑	センサク			○						1
1293	禪山	ゼン山							○		1
1294	洗濯	センダク	○	○					○		3
1295	浣濯物	センタク物						○			1
1296	錢湯	センタウ	○	○							2
1297	前頭	セントウ						○			1
1298	善導大師	センダウ大師		○							1
1299	冉伯牛	ゼンハクギウ				○					1
1300	紫蕨	ゼンマイ						○			1
1301	そ添	ゾヒ		○2							2
1302	奏す	ゾウ	○								1
1303	曠	ザウ	○								1
1304	雄山	ザウキン・サウモン			○	○					2
1305	象牙	ザウガ			○						1
1306	掃除	ザウジ					○				1
1307	莊周	ゾウ周						○			1
1308	増水	ザウスイ		○							1
1309	騒動	ザウトウ						○			1
1310	雜煮	ザウニ		○							1
1311	草履	ザウリ		○							1
1312	草履取	ザウリ取		○							1
1313	葬礼	サウレイ					○				1
1314	惻隱	ゾクイン		○							1
1315	素箋鳥	ゾサノヲ						○			1
1316	楚女	ゾヂヨ				○					1
1317	蘇生	ゾセイ	○								1
1318	庵相	ゾサウ		○							1
1319	育	ゾタチ					○				1
1320	生立	ゾタテ						○			1
1321	卒度	ゾツ度	○								1
1322	蘯鉄	ゾテツ						○			1
1323	外海	ゾト海					○				1
1324	衣通姫	ゾトボリビメ						○			1
1325	外面	ゾトモ		○							1
1326	外露地	ゾトロヂ							○		1
1327	備	ゾナヘ			○				○		2
1328	其	ゾノ		○							1
1329	閑	ゾノフ		○							1
1330	蕎麦	ゾバ					○				1
1331	最昔	ゾノカミ						○			1
1332	蘯摩那革油	ゾマナケユ						○			1
1333	蘇民	ゾミン	○								1
1334	染る	ゾム(る)							○		1
1335	染かねて	ゾメ(かねて)		○							1
1336	初て	ゾメ(て)							○2		2
1337	怎麼	ゾモサン				○					1
1338	虛病	ゾラ病			○						1
1339	剃	ゾリ		○							1
1340	素履	ゾリ						○			1
1341	反椀	ゾリワソ						○			1
1342	候	ゾロ	○								1
1343	曾呂盤	ゾロ盤						○			1

	十路盤	ソロバン			○				1
1344	損	ソン			○				1
1345	た對	タイ	○						1
1346	臺	ダイ	○						1
1347	大虚	タイキヨ				○			1
1348	對決	タイケツ		○					1
1349	醍醐	ダイゴ	○						1
1350	太閣	太カウ		○					1
1351	大蛇	大ジヤ			○				1
1352	帝釈天	ダイシヤクテン	○						1
1353	太真殿	タイシンデン		○					1
1354	代相	ダイサウ				○			1
1355	燈	タイ／＼					○		1
1356	抱つ	ダイ(つ)			○				1
1357	胎内	タイナイ			○	○			2
1358	大徳	ダイ徳	○						1
1359	堤婆	ダイバ			○				1
1360	太夫	ダイブ				○			1
1361	大無尽	大ムジン・大無ジン		○			○		2
1362		タイラギ					○		1
1363	田植	田ウエ		○					1
1364	手折じ	手ヲラ(じ)	○						1
1365	倒る	タホ(ろ)				○			1
1366	誰	タガ	○	○			○		3
1367	高き	タカ(き)					○		1
1368	鷹師	タカジヤウ	○						1
1369	高養歯	高ヤウシ	○						1
1370	薪	タキ	○						1
1371	薪割	薪フリ		○					1
1372	焼	タク					○	2	2
1373	燼	タク				○			1
1374	抱	ダク			○				1
1375	卓散	タクサン	○						1
1376	託宣	タクセン	○						1
1377	猛り	タケ(り)				○			1
1378	眞罪	ダザイ			○				1
1379	嗜	タシナム		○					1
1380	出す	ダ(す)	○	3					3
1381	扶起す	タスケ(起・す)				○			1
1382	尋	タヅネ	○						1
1383	黄昏	タソカレ				○			1
1384	唯	タヽ		○	2				2
1385	糸河原	タヂス河原	○						1
1386	々	タヽスム				○			1
1387	直	タヽチ				○			1
1388	疊	タヽミ	○	○					2
1389	鍾轍	タヽラ		○					1
1390	断	タチ			○				1
1391	立游	立フヨギ					○		1
1392	橋	タチバナ					○		1
1393	忽	タチマチ	○	○					2
1394	鰐	タヅ				○			1
1395	達丹	タツタン		○					1
1396	鞶靼	タツタン					○		1
1397	貴き	タツト(き)					○		1
1398	蓼	タテ・タデ	○	○	○				4
1399	建	タテ				○			1

1400	伊達	ダテ			○				○	2
1401	疊紙	タヽウ紙							○	1
1402	縦	タヒ・タト(ひ)						○	2	
1403	簷ば(たり)	タトヘ(ば・たり)						○	2	
1404	店	タナ				○			○	4
1405	谷上山	タナカミ山							○	1
1406	店貨	タナチン					○			1
1407	織垣	タナハタ					○			1
1408	烟草	タバコ						○		1
1409	良石盆	タバコ盆				○	○			2
1410	旅草鞋	旅フラズ				○				1
1411	陀拂	タブツ			○					1
1412	給	タブ・タベ		○	2					2
1413	給酔	タバエフ				○				1
1414	魂	タマ			○					1
1415	珠	タマ		○						1
1416	卵そうめん	タマゴ(そうめん)					○			1
1417	玉札	玉ヅサ	○							1
1418	玉蛭	玉ビル						○		1
1419	袂	タモト					○			1
1420	太夫揃	太夫ゾロヘ				○				1
1421	幸	タヨリ						○		1
1422	懇	タライ			○		○			2
1423	達磨大師	達磨大シ	○							1
1424	戯言	タハコト						○		1
1425	戯れに	タハム(れに)・タハフ・タハ(れ)		○	2	○			○	4
1426	多化礼嶋	タハレ嶋				○				1
1427	戯女	タハレメ					○			1
1428	痰	タン					○			1
1429	痰氣	タンケ	○							1
1430	團子	ダンゴ	○							1
1431	檀那	タンナ				○				1
1432	瘻持	タン持						○		1
1433	探幽	タンユウ				○				1
1434	ち力瘤	力コブ				○				1
1435	笪	チサ						○		1
1436	知死期	チシ期	○	○	チシ					2
1437	千束	チツカ				○			○	2
1438	茅原	チ原				○				1
1439	着到	チヤクタウ						○		1
1440	茶縮綿	茶デリメン						○		1
1441	茶湯	茶タウ					○			1
1442	茶瓶	チャビン						○		1
1443	中興	チウコウ						○		1
1444	寵愛	テウアイ				○				1
1445	調樂	デウガク	○							1
1446	猪口	チヨク						○		1
1447	調菜	テウサイ	○							1
1448	挑燈	テウチン	○	2						2
1449	蝶番ひ	デフツガ(ひ)				○				1
1450	兆典主	テウデンシス				○				1
1451	重寶	テウホウ					○			1
1452	塵	チリ				○			○	2
1453	塵紙	チリ紙				○				1
1454	沉	ヂン						○		1

1455	沈香亭	ヂンカウティ		○							1
1456	鎌守	チンジュ		○							1
1457	追従	ツイショウ(左)	○								1
1458	墜栗	ツイリ		○							1
1459	杖	ツエ		○							1
1460	塚穴	ツカアナ		○							1
1461	仕来て	ツカヘキ(て)			○						1
1462	酔む	ツカ(む)	○	○							2
1463	着ぬ	ツキ(ぬ)		○							1
1464	穴	ツキ	○								1
1465	接木	ツギ木		○							1
1466	継馬	ツギ馬				○					1
1467	付そめ	ツキ(そめ)	○								1
1468	突出す	ツキ(出す)			○						1
1469	撞川し	ツキダ(し)		○							1
1470	継錆壺	ツヅウコ					○				1
1471	盡し	ツク(し)	○								1
1472	造	ツクル					○				1
1473	繕ふ	ツクロ(ふ)		○							1
1474	刷	ツクロフ					○				1
1475	賛揚	ツゲ					○				1
1476	漬ざる	ツケ	○								1
1477	告て	ツゲ(て)					○				1
1478	付階子	ツケハシゴ					○				1
1479	蘿	ツタ			○2		○2				4
1480	鳶	ツタ		○	○		○				3
1481	槌音	ツチ音	○								1
1482	塊	ツチクレ					○				1
1483	筒	ツヽ		○							1
1484	躊躇	ツヽシ・ツヽヂ			○		○				2
1485	鼓	ツヅミ	○								1
1486	包	ツヽミ				○					1
1487	包み箸	ツヽ(み箸)					○				1
1488	包み餌頭	ツヽ(み)マンヂウ					○				1
1489	葛籠	ツヽラ		○							1
1490	綴る	ツヽ(る)・ツヽレ	○				○				2
1491	縫	ツヽレ		○							1
1492	勤め	ツト(め)・ツトメ	○			○					2
1493	綱	ツナ		○	○	○					3
1494	常	ツネ			○						1
1495	角盥	ツノグライ					○				1
1496	鐸	ツバ			○						1
1497	唾	ツハキ					○				1
1498	翅	ツバサ					○				1
1499	燕	ツバメ	○	○							2
1500	礪	ツブテ	○								1
1501	爪切丸	ツマ切丸					○				1
1502	爪櫛	ツマグシ			○						1
1503	爪さき	ツマ(さき)	○								1
1504	詰る	ツム(る)	○								1
1505	摘る	ツメ(る)	○								1
1506	爪	ツメ					○				1
1507	結奉公	ツメ(奉公)			○						1
1508	露	露シクレ	○								1
1509	強蔵	ツヨゾウ				○					1
1510	強弓	ツヨ弓			○						1
1511	頬	ツラ			○						1

1512	連(る・るゝ・て)	ツラナ・ツ(る)・ツレ					○2		○	○	○	5
1513	氷柱	ツラヽ									○	1
1514	釣針	ツリ針				○						1
1515	鈎漁籠	ツリヤクハン									○	1
1516	出る	ツ(る)					○2					2
1517	釣	ツルギ				○					○	2
1518	弦葉	ツル葉				○						1
1519	釣瓶	ツルベ						○				1
1520	弦外	ツル外						○				1
1521	出逢	ツアヒ								○		1
1522	躄	ティ				○						1
1523	泥	ディ			○							1
1524	亭主	ティンユ			○							1
1525	貞徳	ティクト						○				1
1526	出女	デ女				○						1
1527	手銅	手ガヒ			○							1
1528	出来さん	デカ(さん)			○							1
1529	手形	手ガタ			○							1
1530	敵	テキ			○							1
1531	出来て	デキ(て)			○2							2
1532	手縫	テグリ						○				1
1533	手鉢	テヂヤウ							○			1
1534	出た	デ(た)			○	○						2
1535	方便	テタテ							○			1
1536	鉄灸	テツキウ						○				1
1537	調布	テヅクリ								○		1
1538	調市	デツチ							○2			2
1539	鐵鑄	テツツハ								○		1
1540	鉄砲	デツハウ										1
1541	鉄鉢	デツハチ								○		1
1542	蝸虫	デヽムシ										1
1543	出刃	デバ							○			1
1544	出端哥	デハ哥								○		1
1545	出離れ	デハナ(れい)						○				1
1546	テリ布	(テリ)フ								○		1
1547	照	テル										1
1548	田家	デンカ			○							1
1549	田楽	デンガク			○	○						2
1550	電光	デンクハウ										1
1551	天柱	テンジユ								○		1
1552	傳奏	テンソウ					○					1
1553	轉々	デン(タ)							○			1
1554	巔峯	デンホウ									○	1
1555	典菜	デンヤク										1
1556	と 槍	トヒ								○		1
1557	胴	ドウ・トウ						○		○		2
1558	道桶	ダウ桶							○			1
1559	桃華	トウクワ									○	1
1560	蕃椒	タウガラシ									○	1
1561	唐荘	唐キヒ・タウキビ								○	○	2
1562	道外	タウケ								○		1
1563	道戯舞	ダウケマヒ									○	1
1564	道化役	ダウケ役								○		1
1565	銅章	ドウコ							○			2
1566	童子	ドウシ									○	1
1567	道場	タウジヤウ										1
1568	浴腋	タクゾク								○		1

1569	同塵	トウヂン			○					1
1570	筒取	トウ取			○					1
1571	豆腐	トウフ					○	1		
1572	同朋	トウボウ	○				○	1		
1573	胴骨	トウ骨・トウホネ			○			○	2	
1574	納涼	タウリヤウ	○						1	
1575	燈籠	トウロ	○						1	
1576	融	トホル					○	1		
1577	科	トカ	○						1	
1578	鐘る	トガ(る)	○2						2	
1579	冨樺	トガシ	○						1	
1580		トキ	○						1	
1581	畜	トキ	○						1	
1582	伽	トギ			○	○			2	
1583	磨立て	トギ(立て)				○			1	
1584	常盤橋	トキハ橋		○					1	
1585	吐逆	トキヤク		○					1	
1586	渡橋	ト橋				○			1	
1587	毒	トク	○2						2	
1588	徳又迦	トクシヤカ			○				1	
1589	得度	トクト	○						1	
1590	徳屋	トク屋					○	1		
1591	髑髏	トクロ	○						1	
1592	斗鶏	トケイ	○						1	
1593	時計	トケイ					○	1		
1594	解初 <small>て</small> く	トケ(初て)		○					1	
1595	床 <small>と</small>	トコ		○			○	2		
1596	常	トコ				○			1	
1597	長	トコシ <small>トハ</small>				○			1	
1598	兎鶴	トコツ				○			1	
1599	常闇	トコ開		○					1	
1600	凝海藻	トコテン		○					1	
1601	刀自	トジ					○	1		
1602	とし越	(とし)コシ	○						1	
1603	杜子美	トシミ	○						1	
1604	閑目	トシメ	○						1	
1605	土砂	トシヤ				○			1	
1606	鱗	トシヤウ		○					1	
1607	土鱗	トシヤウカニ	○						2	
1608	閑	トソ	○				○2	3		
1609	十千貰目	ト千貰目					○	1		
1610	都卒	トツツ					○	1		
1611	屠蘇白散	トツビヤクサン	○						1	
1612	莘	トチ	○						1	
1613	十津川	トツカハ	○						1	
1614	鷄冠	トツサカ			○	○			2	
1615	土墟町	トテ町						○	1	
1616	隣	トナリ					○	1		
1617	殿子	トノツコ					○	1		
1618	飛ばしり	ト(ばしり)		○					1	
1619	朧	トビ		○					1	
1620	鳶色	トビ色		○					1	
1621	飛来り	トビ(来り)						○	1	
1622	飛次第	トビ次第	○						1	
1623	飛つく	トビ(つく)						○	1	
1624	扉	トビラ					○	1		

1625	濁酪	ドブロク						○		1
1626	土扁	ドヘン						○		1
1627	泊り	トマ(り)						○		1
1628	苦	トマ					○			1
1629	苦屋	トマ屋					○			1
1630	富	トミ						○		1
1631	友 <small>ト</small>	トモ					○			1
1632	供先城	トモサキ城						○		1
1633	豊	トヨ						○		1
1634	豊牛	トヨトシ						○		1
1635	土龍	トリウ						○		1
1636	執體	トリナリ						○		1
1637	泥	ドロ	○2			○		○	4	
1638	鈍漢	ドンカン					○			1
1639	緞子	ドンス					○			1
1640	飛た	トン(た)						○		1
1641	鈍太郎殿	ドン太郎殿					○			1
1642	螭蛤	トンハウ					○	○		2
1643	食欲	トンヨク								1
1644	な葉	ナ					○			1
1645	泣た	ナイ(た)						○		1
1646	直す	ナヲ(す)					○		○	2
1647	中	ナカ						○		1
1648	長辛螺	ナガニシ						○		1
1649	中飲	ナハミ					○			1
1650	仲麿	ナカマロ								1
1651	詠め	ナガ(め)						○		1
1652	泣いる	ナキ(いる)								1
1653	渚	ナギサ					○		○	2
1654	啼て	ナキ(て)						○		1
1655	投(かへし・る)	ナゲ					○	○	○2	4
1656	歎(かし・き)	ナゲ(かし・き)							○2	2
1657	情	ナサケ					○			1
1658	梨壺	ナシツボ					○			1
1659	茆	ナスピ					○			1
1660	謠子	ナゾ▽								1
1661	灘	ナダ				○2		○	○	5
1662	宥	ナダメ							○	1
1663	那智	ナチ				○				1
1664	號られ	ナツケ(られ)						○		1
1665	納豆	ナツトウ				○				1
1666	撫られ	ナテ(られ)				○				1
1667	七面	ナ・ヲモテ							○	1
1668	七子	ナ・コ						○		1
1669	名主	ナヌシ						○		1
1670	鏹	ナベ						○		1
1671	四十九口	ナ・ナヌカ								1
1672	菜畑	ナバタ				○				1
1673	雛	ナヒク・ナビ(く)				○	○2			3
1674	半酔	ナマエヒ							○	1
1675	生貝	ナマ貝							○	1
1676	生壁	ナマカベ							○	1
1677	鰐	ナマス							○	1
1678	膾	ナマス						○		2
1679	生風呂	ナマ風呂						○		1
1680	鉢	ナマリ				○			○	2
1681	滑	ナメラカ				○			○	3

1682	納屋	ナヤ							○	1
1683	穡	ナリハイ	○							1
1684	成	ナル						○		1
1685	鳴神	ナルカミ				○				1
1686	馴て	ナレ(て)						○		1
1687	何歳	ナンザイ	○							1
1688	難差	ナンザン	○							1
1689	何人	ナンニン				○				1
1690	何本	ナンボン	○							1
1691	〔新〕枕	ニギツ	○							1
1692	面炮	ニキビ	○					○		2
1693	握(わせ・る)	ニギ(わせ)		○				○		2
1694	悪き	ニク(き・み)						○	2	2
1695	迹疵	ニゲキズ		○						1
1696	迹(て・る)	ニゲ(て・る)	○3			○				4
1697	尼公	ニコウ	○							1
1698	濁(り・る)	ニゴリ		○2	○					3
1699	入室	ニシツ	○							1
1700	煮染	煮シメ						○		1
1701	二条家	二条ケ	○							1
1702	二の町	ニ(の町)	○							1
1703	二幅	ニフク	○							1
1704	二夜	ニヤ						○		1
1705	若僧	ニヤク僧	○							1
1706	入心	ニウ心						○		1
1707	人部	ニウブ	○							1
1708	女房	女ホ					○	○	○2	3
1709	蘿	ニラ		○						1
1710	睨(へ)	ニラマ(へ)						○		1
1711	煮る	ニ(る)	○2							2
1712	場	ニハ	○							1
1713	庭竈	庭カ・マド					○			1
1714	人形	ニンゲウ	○							1
1715	人彌	人ジン		○						1
1716	人足	人ソク					○			1
1717	忍冬	ニンドフ			○					1
1718	忍辱	ニンニク		○						1
1719	ぬ縫(たて・ふ)	ヌイ(たて)	○		○					2
1720	脱(で)	ヌイ(で)						○		1
1721	縫津繩	縫ネハシ						○		1
1722	縫殿寮	ヌイ寮						○		1
1723	棟	ヌカ		○2						2
1724	抜捨(ご)	ヌキ(捨ご)						○		1
1725	抜(し)	ヌケ(し)	○							1
1726	幣	ヌサ					○			1
1727	盜	ヌスミ	○							1
1728	布小	ヌノコ						○		1
1729	塗川(し)	ヌリダ(し)						○		1
1730	根	ネ	○							1
1731	寢覚人	ネサメ人						○		1
1732	捻杖	ネヂ杖						○		1
1733	捻箸	ネヂバシ						○		1
1734	妬み	ネタ(み)						○		1
1735	佞智者	ネチモノ						○		1
1736	根繼	ネツギ						○		1
1737	熱啖	ネツタン	○							1
1738	寝卯	ネハダ		○						1

1793	捕縄	ハキダメ			○						
1794	剥たる	ハギ(たる)	○					○			2
1795	箔	ハク			○	○			○		3
1796	吐	ハク・ハキ・ハカ			○	○			○		3
1797	摸	バク						○			1
1798	蘭莖	ハグキ			○				○		2
1799	白居易	ハクキヨイ				○					1
1800	白蛇散	ハクシヤサン						○			1
1801	薄暮山	ハクホ山							○		1
1802	爾黒	ハグロ	○						○		2
1803	箔椀	ハクワン							○		1
1804	刷	ハケ				○					1
	刷毛	ハケ					○				1
1805	化蝶	バケ蝶						○			1
1806	化て	バケ(て)			○						1
1807	妖物	バケ物							○		1
	化妖物	バケ物	○								1
	化物	バケ物	○								1
1808	勵(す)	ハゲマ(す)・ハゲミ	○					○			2
1809	筈	ハコ		○							1
1810	運べ	ハコ(べ)	○						○	2	3
1811	挟み	ハサ(み)						○	○		2
1812	挾箇	ハサミ箇						○			1
1813	筭箱	ハサミ箱						○			1
1814	筭	ハシ							○		1
1815	橋桁	橋ケタ	○								1
1816	階子	ハシゴ				○					1
1817	はし爪	(はし)ツメ			○						1
	橋結	橋ヅメ		○							1
1818	櫛紅葉	ハシ(紅葉)							○		1
1819	巴豆	ハヅ						○			1
1820	はすは女	メ			○						1
1821	破損	ハソン		○							1
1822	肌	ハダ		○		○	○				3
1823	秦氏	ハダウヂ	○								1
1824	裸	ハタカ					○		○		2
1825	旅筆	ハタゴ		○							1
1826	二十	ハタチ		○		○					2
1827	機殿	ハタトノ	○								1
1828	機	ハタモノ							○		1
1829	撥	バチ				○					1
1830	蜂	ハチ	○								1
1831	八ビ	ハチ(ビ)	○								1
1832	八熟	ハネット							○		1
1833	初	ハツ							○		1
1834	初子	ハツネ	○								1
1835	鼻	ハナ					○				1
1836	咲す	ハナ	○								1
1837	嘶	ハナシ・ハナ(し)						○	3		3
1838	蘆橘	ハナタチバナ					○				1
1839	芭し	ハナハダ(し)					○				1
1840	離れ屋	(離れ)ヤ							○		1
1841	羽	ハネ			○						1
1842	刎馬	ハネ馬							○		1
1843	祖母	バヽ				○			○	○	3
1844	帝	ハヽキ							○	2	2
1845	幅廣	ハヽビロ			○						1

1846	葉廣柏	葉ヒロ柏		○					
1847	字	ハフジ						○	1
1848	羽ぶるひ	ハ(ぶるひ)	○						1
1849	濱	ハマ	○2						2
1850	蛤	ハマグリ	○						1
1851	刃物	ハ物	○						1
1852	早	ハヤ					○		1
1853	頓	ハヤ				○			1
1854	速礎	ハヤ礎					○		1
1855	囁子	ハヤ子			○				1
1856	早津	ハヤ津					○		1
1857	鶴	ハヤブサ					○		1
1858	腹ごゝろ	ハラ(ごゝろ)	○						1
1859	拂ふ	ハラ(ふ)	○						1
1860	腹這	腹ハヒ・ハラバイ					○	○	2
1861	妊娠	ハラ(まし)			○				1
1862	孕	ハラミ		○					1
1863	腸	ハラワタ・ラワタ・ワタ			○		○	○	3
1864	鍼	ハリ					○		1
1865	張子	ハリコ	○						1
1866	不レ霧	ハレザル					○		1
1867	腫たる	ハレ(たる)			○				1
1868	半襟	半エリ					○		1
1869	板木	ハンギ	○						1
1870	反魂香	ハンゴン香	○			○			2
1871	磐石	バンシヤウ・バンジヤク	○		○				2
1872	斑女	ハンジョ	○						1
1873	繁昌し	ハンジヤウ(L)	○2						2
1874	半壹	ハンデウ		○					1
1875	萬歳・万歳	バンゼイ・万ゼイ	○				○		2
1876	半捕	ハンザウ			○				1
1877	槃特	ハントク					○		1
1878	半纏	ハンビツ					○		1
1879	半分	ハン分	○						1
1880	半夜	ハンヤ			○				1
1881	范蠡	ハンレイ				○			1
1882	ひ脾	ヒ	○						1
1883	臍冒	ヒイ			○				1
1884	柊	ヒイラギ			○				1
1885	火燧石	ヒウチ石						○	1
1886	稗廟子	ヒエダンゴ						○	1
1887	僻言	ヒガコト	○						1
1888	掩	ヒキ	○						1
1889	引負	引ヲイ					○		1
1890	引捨	ヒキスツ	○						1
1891	曳窓	ヒキ窓						○	1
1892	比丘尼	ヒクニ						○	1
1893	媢	ヒクラシ		○					1
1894	懿	ヒグ						○	1
1895	卑下	ヒゲ	○	○					2
1896	火事	ヒ事	○						1
1897	川来	ヒココ			○				1
1898	膝	ヒザ	○	○	○				3
1899	菱	ヒシ	○						1
1900	肱	ヒヂ						○	1
	臂	ヒヂ	○						1
1901	海鹿	ヒジキ						○	1

1902	醤	ヒシホ						○	1
1903	非情	ヒジヤウ			○				1
1904	砒霜石	ヒサウ石		○					1
1905	潛に	ヒソカ(に)				○			1
1906	口剝	ヒソリ				○			1
1907	美樽	ヒソン				○			1
1908	左り	ヒダ(り)	○						1
1909	額	ヒタイ			○		○	2	
1910	直申	ヒタ申				○			1
1911	浸す	ヒタ(す)			○				1
1912	乞食國	ヒダルイコク				○			1
1913	畢竟	ヒツキヤウ	○						1
1914	跛行	ヒツコ				○			1
1915	筆耕	ヒツカウ			○		○	2	
1916	蹄	ヒヅメ					○		1
1917	旱	ヒデリ	○						1
1918	非凹悔	ヒテンハイ		○					1
1919	人	ヒト	○						1
1920	他	ヒト		○					1
1921	人足	ヒト足				○			1
1922	人香	人ガ	○						1
1923	一敷	ースクヒ		○					1
1924	人魂	人タマ		○	○				2
	魂魄	ヒトタマ				○			1
1925	一番	一ツガヒ		○					1
1926	一笔	ヒト筆				○			1
1927	一間	一マ					○		1
1928	人御々供	人ミコク	○						1
1929	一群	一ムラ			○				1
1930	獨	ヒトリ		○					1
1931	雛	ヒナ				○			1
1932	皮肉	ヒニク	○						1
1933	日々記	ヒニツキ	○						1
1934	雲雀	ヒバリ		○					1
1935	猶々	ヒヒ					○		1
1936	響かせて	ヒヽ(かせて)		○					1
1937	平日	ヒボク				○			1
1938	隙毎に	隙ゴト(に)					○		1
1939	干物	ヒ物					○		1
1940	百足	百アシ		○					1
1941	白散	ヒヤクサン	○						1
1942	百草	ヒヤクサウ	○						1
1943	百人一首	ヒヤクニンーンユ	○						1
1944	冶汗	ヒヤ汗					○		1
1945	瓢箪	ヒヨウダン				○			1
1946	比翼	ヒヨク		○					1
1947	平躰	平クモ					○		1
1948	開闢	ヒラケハシマル					○		1
1949	毘爾樹	ビランジュ	○						1
1950	下る	ヒ(る)		○					1
1951	丘	ヒル			○				1
1952	蜃嵐	ヒル嵐					○		1
1953	蜃狐	ヒル狐	○						1
1954	拾ひ	ヒロ(ひ)					○		1
1955	尾篋	ヒロウ	○	○					2
1956	天鵝毛	ヒロウド						○	1
	天鵝絨	ヒロウド					○		1

1957	天鵝鼻緒	ヒロウトバナオ							○	1
1958	麋鹿	ビ鹿							○	1
1959	琵琶	ビハ			○					1
1960	贅	ビン						○	○	2
1961	頻迦	ビンガ							○	1
1962	便宜	ビンギ			○					1
1963	駄水	ビン水	○							1
1964	鬱	ビンツラ						○		1
1965	貧乏	ビンボウ					○		○	2
1966	貧乏神	ビンボウ(神)						○		1
1967	秉拂	ビンボツ			○					1
1968	ふ	フ			○					1
1969	齧	フ	○							1
1970	富貴	フウキ				○				1
1971	風蘭	フウラン							○	1
1972	豊干	ブカン					○			1
1973	壹	ブキ				○				1
1974	吹出す	吹ダ(す)			○					1
1975	吹嵐	ブキ嵐						○		1
1976	無興	ブケウ			○					1
1977	和巾	フクサ					○			1
	服巾	フクサ						○		1
	服紗	フクサ						○		1
1978	鰯	ブクト					○			1
1979	覆面	ブクメン			○					1
1980	梶	ブクロウ	○							1
1981	含で	ブクン(で)						○		1
1982	不孝	ブケウ	○							1
1983	分限	ブゲン			○					1
1984	籠	ブゴ							○	1
1985	房	フサ						○		1
1986	無作法	ブサ法							○	1
1987	裸炮	フサ砲								1
1988	巫山	ブ山							○	1
1989	節	ブシ	○							1
1990	節穴	ブシ穴							○	1
1991	藤川	ブチ川						○		1
1992	蘭	ブヂバカラ								1
1993	諷誦文	ブジヨ・文	○							1
1994	不祥	ブシヤウ						○		1
1995	不如歸	ブジョキ	○							1
1996	普請	ブシン			○					1
1997	櫻	ブスマ			○				○	3
1998	食雪	ブスマ雪	○							1
1999	伏芝	ブセバ							○	1
2000	薔	フタ	○	○	○	○	○			6
2001	猪	ブタ								1
2002	家猪	ブタ						○		1
2003	舞臺	フタイ							○	1
2004	二齒	フタバ			○					1
2005	二女狂ひ	フタメクル(ひ)			○					1
2006	補陀樂	フダラク	○							1
2007	不斷香	フダンカウ	○							1
2008	扶持	フチ・ブチ	○		○	○	○			3
2009	舞蝶	ブ蝶							○	1
2010	不図	不ト			○					1
2011	不動	ブトク	○							1

2012	懷	ブトコロ		○						1
2013	贋鼻	フドシ					○		1	
2014	太股	フトモヽ			○					1
2015	蒲囲	フトン	○	○			○	○	4	
2016	船遊び	ボソアソ(び)	○						1	
2017	舟逍遙	フナゼウヨウ	○						1	
2018	船底'	フナゾコ		○					1	
2019	鮒鰯	フナナマス			○				1	
2020	夫人	ブニン					○	1		
2021	舟鉢	ブネボコ	○						1	
2022	不犯	ブボン	○						1	
2023	踏たて	ブミ(たて)	○						1	
2024	踐	ブム				○			1	
2025	麓寺	ブモト寺	○						1	
2026	降らし	ブ(らし)					○	1		
2027	振	ブリ		○					1	
2028	瓜	ブリ				○			1	
2029	鯽	ブリ			○				1	
2030	振翫	ブリクジ					○	1		
2031	不律義	ブリチギ			○				1	
2032	吉かね店	(吉かね)ダナ			○				1	
2033	古着店	古着タナ			○				1	
2034	古脚布	古キヤフ			○				1	
2035	古巣	古ス				○			1	
2036	古狸	古タヌキ			○				1	
2037	無礼譁	ブレイ譁	○						1	
2038	風爐釜	ブロ釜	○						1	
2039	文	ブン	○						1	
2040	糞	ブン	○	○		○			3	
2041	分	ブン	○						1	
2042	ヘ	ヘ			○				1	
2043	嬖	ヘイ	○						1	
2044	兵鼓	ヘイコ				○			1	
2045	閉門	ヘイモン		○					1	
2046	僻諧	ヘキ諧				○			1	
2047	碧玉	ヘキ玉				○			1	
2048	壁書	ヘキ書				○			1	
2049	臍	ヘソ	○		○	○			3	
2050	臍土器	ヘソ土器			○				1	
2051	臍の緒	ヘソ(の緒)				○			1	
2052	隔つ	ヘダ(つ)		○	○		○		3	
2053	別	ペチ	○						1	
2054	籠甲	ベツカウ				○			1	
2055	竈	ベツヽイ				○	○		2	
2056	別当	別タウ	○						1	
2057	諧はふ	ヘツラ(はふ)					○		1	
2058	紅粉	ベニ	○				○	2	3	
2059	経ぬ	ヘ(ぬ)					○		1	
2060	艸の袴	ヘ(の袴)	○						1	
2061	蛇	ヘビ	○	○	○				3	
2062	部や	ヘ(や)	○						1	
2063	篠	ヘラ			○		○		2	
2064	簾竹	ヘラ竹					○		1	
2065	縁	ヘリ			○				2	
2066	邊	ヘン		○					2	
2067	辨天	ベン天			○				1	
2068	法	ホウ	○	○					2	

2069	坊	ハウ		○						1
2070	反故	ホウグ						○		1
2071	宝劍	ホウケン						○		1
2072	法軀	ハウタイ				○				1
2073	亡母	ハウボ				○				1
2074	蓬萊	ホウライ		○						1
2075	吠	ホエ				○				1
2076	煩	ホウ				○				1
2077	鬼灯	ホウヅキ			○					1
2078	鶏躑躅	ホウヅ				○				1
2079	朗	ホカラ・ホラケ						○	2	2
2080	僕	ホク	○							1
2081	歩行	ホウキ						○		1
2082		ホコリ				○				1
2083	干菜	ホシナ		○						1
2084	干瓜	ホシブリ						○		1
2085	細蛇	ホソクチナハ				○				1
2086	細脛	ホソハギ						○		1
2087	穂麥	ホタデ				○				1
2088	布袋	ホテイ				○				1
2089	程	ホド		○						1
2090	蜀魂	ホトヽギス						○	2	2
2091	頭	ホトリ				○				1
2092	骨	ホネ		○						1
2093	仄	ホノ						○	3	3
2094	焰	ホノヲ						○		1
2095	懷慈童	ホヽ慈童						○		1
2096	誉る	ホム(ろ)		○						1
2097	補襄	ホヤク	○	○						2
2098	掘ふ	ホラ(ふ)	○							1
2099	法論味噌	ホロミソ		○						1
2100	反古	ホンゴ					○			1
2101	本草綱目	ホンサウコウヨ						○		1
2102	本朝通鑑	ホンチツカン						○		1
2103	煩惱	ホンノウ						○		1
2104	本復	ホンフク		○						1
2105	凡夫心	ホンブシン	○							1
2106	齧訊	ホンヤク	○							1
2107	ま間	マ							○	1
2108	毎朝	マイテウ	○							1
2109	前	マヘ			○					1
2110	畜夫	マオトコ	○							1
2111	真瓜	マクハ						○		1
2112	摩訶魯純	マカタハケ						○		1
2113	真銀	マカネ						○		1
2114	牧	マギ						○		1
2115	摩詰	マキツ						○		1
2116	楨尾	マキノヲ	○							1
2117	卷向	マキ(の尾)	○							1
2118	卷魑魘	マクハコ						○		1
2119	真桑	マクハ						○		1
2120	馬子	マゴ						○		1
2121	真菰	マコモ						○		1
2122	猿	マシ						○		1
2123	馬鳴	マジマ					○			1
2124	坐	マス						○		1

2125	辯	マス							○	1
2126	藩架塘	マセ墻	○							1
2127	跨	マタ						○		1
2128	天蓼	マタハビ	○							1
2129	斑	マタラ					○			1
2130	町若衆	マチワカ衆	○							1
2131	真倒	マツサカザマ		○						1
2132	真白	マツ白	○							1
2133	真直	マツスグ		○						1
2134	松脂	マツヤニ						○		1
2135	馬刀	マテ					○			1
2136	纏ふ	マト(ふ)	○							1
2137	俎	マナイタ					○2	○		3
	俎板	マナイタ						○		1
2138	真鶴	マナ鶴	○							1
2139	俎箸	マナバシ・マナ箸		○				○		2
2140	招く	マネ	○		○					2
2141	間歩	マブ				○				1
2142	幻	マホロシ					○			1
2143	継子	マハコ	○							1
2144	継母	マハ母				○				1
2145	摩利支天	マリシテン		○						1
2146	圓裸	圓ハダカ	○							1
2147	稀	マレ	○							1
2148	丸	マロ						○		1
2149	まん川	(まん)なか	○							1
2150	幔幕	マンマク	○							1
2151	み実・實	ミ	○		○					2
2152	御明	ミアカン			○					1
2153	木乃伊	ミイラ		○						1
2154	御折敷	ミヲシキ						○		1
2155	漂冷	ミヲジルシ				○				1
2156	研石	ミガキ石						○		1
2157	御影	ミカゲ						○		1
2158	帝	ミカト				○				1
2159	三寸	ミキ	○							1
	三木	ミキ	○							1
2160	御躰	ミクジ				○				1
2161	三行半	ミクタリ半	○							1
2162	親王	ミコ	○					○		2
2163	御絃子	ミカウシ						○		1
2164	御蘆	ミココロ						○		1
2165	御こゝろ	ミ(こゝろ)	○							1
2166	神輿	ミコシ						○		1
2167	尊	ミコト		○	○					2
2168	水棹	ミサホ	○							1
2169	短ふ	ミチカ(ふ)				○				1
2170	短弓	ミジカ弓						○		1
2171	未熟	ミシユク						○		1
2172	未進	ミシン			○					1
2173	湖	ミツウミ	○					○		2
2174	水碓	水カラウス				○				1
2175	御厨子	ミヅシ						○		1
2176	水汽	水ツケ				○				1
2177	水梨	水ナシ	○							1
2178	溝	ミゾ	○2	○	○					4
2179	御田植	ミダウヘ	○							1

2180	乱し髪	ミダし髪		○							
2181	御棚	ミタナ							○		1
2182	三谷	ミタニ							○		1
2183	満	ミヂ						○			1
2184	道人	ミヂビト							○		1
2185	御帳臺	ミチヤウダイ		○							
2186	御戸代	御トシロ						○			1
2187	碧	ミトリ						○			1
2188	翠	ミドリ		○							1
2189	緑	ミヅリ							○		1
2190	緑濱國	ミトリ濱國						○			1
2191	御名	ミ名			○	○					2
2192	水上	ミナカミ							○		1
2193	漲り	ミナギ(り)				○			○		2
2194	隈ふ	ミニク(ふ)				○					1
2195	御野	ミノ							○		1
2196	蓑	ミノ		○							1
2197	蓑笠	ミンカラ		○							1
2198	蓑亀	ミノガメ		○							1
2199	身延	ミノヅ		○							1
2200	耳搔	ミミカキ							○		1
2201	木兎	ミツク	○								1
2202	御室	ミ室			○						1
2203	御もと	ミ(もと)							○		1
2204	土産	ミヤゲ		○					○		2
2205	宮箭物	ミヤゲ物	○								1
2206	宮司	ミヤジ	○								1
2207	御山	ミ山					○				1
2208	行幸	ミユキ	○								1
2209	海松	ミル		○							1
2210	弥勒	ミロク	○		○						2
2211	明朝	ミン朝						○			1
2212	む	ムカデ	○						○		2
2213	麦秋	ムキ秋	○								1
2214	麦飯	ムキ飯	○								1
2215	實	ムキミ							○		1
2216	麦藁	麦ワラ							○		1
2217	酬ひ	ムク(ひ)						○			1
2218	農犬	ムクイヌ						○			1
2219	葎	ムグラ							○		1
2220	蟹	ムコ							○		1
2221	向疵	向キヅ					○				1
2222	无(無)慙	ムザン	○	○							2
2223	蒸	ムシ							○		1
2224	蒸菓子	ムシ菓子			○						1
2225	虫気	虫ケ	○								1
2226	虫積	虫シヤク			○						1
2227	蒸竹	ムシ竹	○								1
2228	席	ムシロ							○		1
2229	生子	ムスコ							○		1
2230	結ひ	ムス(ひ)					○				1
2231	婦	ムスメ							○		1
2232	鞭	ムチ	○								1
2233		ムツキ							○		1
2234	胸先	ムナ先								○	1
2235	胸	ムネ		○							1
2236	棗	ムネ						○			1

2237	謀叛	ムホン	○2						2
2238	廐	ムマヤ	○	○2					3
2239	驛	ムマヤ	○						1
2240	無懲者	ムヨク者		○					1
2241	村砦	ムヨミヂ		○					1
2242	群雲	ムラ雲			○				1
2243	群	ムレ				○			1
2244	室咲	ムロ咲		○					1
2245	ぬ女	メ	○						1
2246	明漬	メイギ				○			1
2247	目犹	メイボ				○			1
2248	名譽	メイヨ			○				1
2249	妻敵	メカタキ	○						1
2250	眼鏡	メカネ・メガネ		○2					2
2251	日利	メキ、		○					1
2252	恵み	メグ(み)				○			1
2253	盲	メクラ				○			1
2254	廻り	メグ(リ)				○			1
2255	食	メシ				○			1
2256	馬頭	メヅ				○			1
2257	滅金	メツキ		○		○			2
2258	珍しく	メヅラ(しく)	○						1
2259	磚	メヌウ				○	○		2
2260	日臘	日ヤニ			○				1
2261	面	メン				○			1
2262	眠巣	メンノウ	○						1
2263	麺類	メンルイ	○						1
2264	毛藻	モ	○	○					2
2265	妄執	モウシウ			○				1
2266	毛氈	モウセン	○						1
2267	燃	モエ		○			○		2
2268	苗黄	モエキ				○			1
2269	燃入	モヘ入				○			1
2270	最上	モガミ	○						1
2271	藻屑	モクズ					○		1
2272	日代	モクダイ	○						1
2273	沐浴	モクヨク			○				1
2274	木蘭色	モクランジキ					○		1
2275	文字余り	モジアマ(り)	○						1
2276	賜	モズ					○		1
2277	海雲	モヅク	○						1
2278	持來子	モチキゴ					○		1
2279	餅突	餅ツキ	○						1
2280	餅躊躇	モチツ、ジ	○						1
2281	持	モツ	○		○				2
2282	牧溪	モツケイ	○						1
2283	没収	モツシユ					○		1
2284	物相	モツサウ				○			1
2285	もとし	基俊	○						1
2286	求る	モトム(る)					○3	3	
2287	元來	モトヨリ				○			1
2288	戻る	モド(る)	○2		○				3
2289	者	モノ	○						1
2290	物怨じ	モノエン(じ)	○						1
2291	物裁	物タチ					○		1
2292	権	モミ	○						1
2293	穀	モミ					○		1

2294	紅	モミ							○ 1
2295	艳	モミヂ						○	1
2296	木綿	モメン				○			2
2297	木綿財布	モメンザイフ						○	1
2298	股	モハ			○				1
2299	百の媚	モハ(の)コビ			○				1
2300	摸様	モヤウ					○		1
2301	囁ひ	モラ(ひ)					○		1
2302	鯛ふ	モラ(ふ)・モロ(ふ)	○	○2					3
2303	貫て	モラツ(て)					○		1
2304	森	モリ			○				1
2305	守	モリ・モル			○		○	○	3
2306	諸	モロ✓						○	1
2307	紋	モン			○				1
2308	文	モン				○			1
2309	門徒	モント			○				1
2310	や屋内	屋ウチ					○		1
2311	樓船	ヤカタ						○	1
2312	野干	ヤカン				○			1
2313	薬籠	ヤクバン					○	○	2
2314	焼めし	ヤキ(めし)	○	○					2
2315	厄	ヤク			○				1
2316	疫病	ヤクビヤウ						○	1
2317	燒兼る	ヤケ(兼る)				○			1
2318	薬研	ヤケン					○		1
2319	嫋姫	ヤサシ			○				1
2320	艶しき	ヤサ(しき)			○				1
2321	安んじて	ヤス(んじて)				○			1
2322	瘦て	ヤセ(て)	○	○					2
2323	瘦豕	ヤセブタ						○	1
2324	八十瀬	ヤソセ						○	1
2325	厄害	ヤツカイ					○		1
2326	奴	ヤツコ			○	○			2
2327	雇(はれ・ひ)	ヤト(はれ・ひ)			○		○		2
2328	宿り	ヤドリ					○		1
2329	柳	ヤナギ						○	1
2330	柳船	柳バエ							1
2331	屋鳴	ヤナリ						○	1
2332	矢橋	ヤバセ	○						1
2333	養父入	ヤブ入				○	○		2
2334	敷医館	ヤブクシ				○			1
2335	山鬼	山アラシ				○			1
2336	山陵	ヤマガラ						○	1
2337	仙びと	ヤマ(びと)	○						1
2338	山禿	山カブロ						○	1
2339	山科	山シナ	○						1
2340	八岐	ハマタ						○	1
2341	棣棠	ヤマブキ				○			1
2342	山次	山ブキ				○			1
2343	山守	山モリ						○	2
2344	閭	ヤミ					○	○2	3
2345	止ぬ	ヤメ(ぬ)	○						1
2346	漸	ヤハ					○		1
2347	夜遊	ヤユウ					○		1
2348	鮒	ヤリ						○2	2
2349	餽	ヤリ	○		○				2
2349	湯	ユ	○2		○2				2

2350	維摩經	ユイマ經		○						1
2351	木綿襪	ユフダスキ			○					1
2352	木綿付鳥	ユフツケ鳥				○				1
2353	優な	イフ(な)	○					○		1
2354	夕栄	タバヘ・タバエ			○			○	2	
2355	夕催ひ	タモヨ(ひ)			○					1
2356	幽霊	ユウレイ			○					1
2357	床	ユカ	○							1
2358	弓懸	ユガケ	○							1
2359	明衣	ユカタ		○	○					2
2360	浴衣	ユカタ					○	○	2	3
2361	邪む	ユガ(す)			○					1
2362	鞠	ユキ	○							1
2363	行ずり	ユキ(ずり)					○			1
2364	譲る	ユヅ(る)	○							1
2365	豊し	ユタケ(し)					○			1
2366	油单	ユタン		○						1
2367	弓断	ユダン	○							1
2374	湯津	ユヅ		○						1
2375	弓楓	ユツキ			○					1
2376	茹草魚	ユデダコ					○			1
2377	湯桶	ユトウ					○			1
2378	指	ユビ	○				○		2	
2379	指抜	ユビ抜				○				1
2380	柚べし	ユ(べし)	○							1
2381	柚味噌	ユ味噌	○							1
2382	夢	ユメ					○	2		2
2383	湯谷	ユヤ					○	2		2
2384	免され	ユル(され)		○						1
2385	よ容儀	ヨウギ		○						1
2386	養齒	ヨウジ					○			1
2387	窓透	ヨウソウ					○			1
2388	洋中	ヤウチウ	○							1
2389	永氷焼	ヤウチンヤキ					○			1
2390	楊名	ヤウメイ					○			1
2391	瓔珞	ヤウラク	○							1
2392	横川	ヨ(川)		○						1
2393	斧	ヨキ		○		○				2
2394	惱	ヨク			○					1
2395	横脣	ヨコ脣			○					1
2396	よこ鮑	(よこ)ヅチ		○						1
2397	横手	ヨコテ			○					1
2398	与謝	与サ	○							1
2399	葭	ヨシ				○				1
2400	蟻て	ヨヂ(て)					○			1
2401	便	ヨス			○					1
2402	棄門	ヨステビト					○			1
2403	四隅	ヨスマ						○		1
2404	粧ひ	ヨゾ(ひ)・ヨソホ(ひ)					○	○		2
2405	夕立	ヨダチ	○							1
2406	涎	ヨダレ		○			○			2
2407	涎懸	ヨタレ懸			○					1
2408	四つ手	ヨ(つ)デ						○		1
2409	夜殿	ヨドノ						○		1
2410	世中	ヨノ中		○						1
2411	夜這	ヨバイ・夜バイ・夜バヒ	○	○				○		3
2412	呼續	ヨビツギ			○					1

2413	呼	ヨブ			○					1
2414	読	ヨム			○					1
2415	嬢	ヨメ				○				1
2416	嫂いり	ヨメ(いり)			○					1
2417	嫂入	ヨメリ				○	2			2
2418	四方霧	ヨウガキ						○		1
2419	夜	ヨル				○	○			2
2420	弱者	ヨワ者					○			1
2421	弱律儀	ヨハ律儀						○		1
2422	ら	ヨラ							○	1
2423	来迎	ライカウ					○			1
2424	礼盤	ライバン			○					1
2425	癪病	ライビヤウ			○					1
2426	雜漢達	ラカン達				○				1
2427	裸形	ラギヤウ						○		1
2428	楽	ラク							○	1
2429	樂單	ラク單							○	1
2430	樂寢	ラクネ			○					1
2431	落葉	ラクエウ			○					1
2432	蘿紗	ラシヤ				○	○		○	3
2433	欄干	ラン干						○		1
2434	蘭溪織	ランケイ織							○	1
2435	卵密	ランタウ			○					1
2436	濫坊	ランハウ								1
2437	り	リギョ						○		1
2438	律義	リチ義						○		1
2439	琉球	リウキウ			○					1
2440	龍灯	リウトウ						○		1
2441	龍腦	リウナウ			○					1
2442	薩修靜	リクシユセイ				○				1
2443	驪山	リ山							○	1
2444	理屈	リクツ				○				1
2445	律	リツ			○				○	2
2446	利發	リハツ				○				1
2447	靈	リョウ			○					1
2448	龍	レウ・リウ			○			○		2
2449	料	レウ			○					1
2450	兩岸	両ガシ				○				1
2451	龍鍋	リヤウケキ							○	1
2452	寥亮	リヤウ々							○	1
2453	利慾	利ヨク							○	1
2454	厘	リン							○	1
2455	格氣	リンキ・リン氣			○	○	○			4
2456	淋竟	リンキヤウ							○	1
2457	臨時	リンジ			○					1
2458	淋病	リンヒヤウ			○					1
2459	輸寶	リンボウ							○	1
2460	る	ルリ								1
2461	れ例	レイ			○					1
2462	礼	レイ			○					1
2463	麗菓子	レイ菓子							○	1
2464	鈴錫杖	レイシヤクジヤウ							○	1
2465	靈地	レイチ							○	1
2466	靈寶	レイボウ							○	1
2467	灵文	レイモン			○					1
2468	連飛	レントビ				○				1
2469	恋慕	レンボ			○	2				2

2470	連理	レンリ				○				1		
2471	ろ	ロ	○							1		
2472	勞咳	ロウガイ				○				1		
2473	籠輿	ロウゴシ						○		1		
2474	日記	ロキ						○		1		
2475	録	ロク	○							1		
2476	綠青	ロク青・ロクショウ					○		○	2		
2477	六孫王	ロソン王			○					1		
2478	轆轤頭	ロクロクビ	○							1		
2479	蘆路	ロヂ	○							1		
2480	蘆地 <small>リ</small>	ロヂ <small>リ</small>	○							1		
2481	蘆齋	ロセイ			○					1		
2482	わ我	ワカ		○						1		
2483	脇	ワキ	○							1		
2484	脇ぐるひ	ワキ(ぐるひ)	○							1		
2485	分て	ワキ(て)・ワケ	○				○			2		
2486	禡	ワク							○ ²	2		
2487	簾	ワク					○			1		
2488	菴	ワザ		○						1		
2489	鷺	ワシ	○			○				2		
2490	輪珠数	ワジユズ	○							1		
2491	讐	ワツカ				○				1		
2492	忘れ	ワス(れ)	○							1		
2493	縞	ワタ		○						1		
2494	敏	ワダチ	○							1		
2495	滄海	ワダヅミ				○				1		
2496	渡辺	ワタナヘ			○					1		
2497	割て	ワツ(て)			○					1		
2498	鰐口	ワニロ	○							1		
2499	佗	ワビ		○						1		
2500	佗言	ワビゴト	○							1		
2501	藁	ワラ	○							1		
2502	藁屑	藁クヅ					○			1		
2503	草鞋	ワラヂ・ワランヂ				○			○ ²	3		
2504	蕨	ワラヒ		○					○	2		
2505	藁や	ワラ(や)	○							1		
2506	童	ワランベ				○				1		
2507	破籠	ワリヂ	○	○						2		
2508	割袴賣	ワリ袴ウリ				○				1		
2509	悪	ワル		○						1		
2510	割・跟	(割)カト						○		1		
合計数		295	655	202	291	232	235	100	49	362	610	3034
異なり語数		289	615	193	277	229	227	95	48	347	575	2895

・それぞれの俳諧集に収録のある語には○印に付け、横に付す数字は出度数を示す。

・漢字はなるべく資料の字体に近付けたが、通用文字を使用したのもある。

・漢字欄の()内に付す片仮名は小字である。

・もとどし」のみ振り漢字であるが記載した。

・「斧」は『江戸蛇之館』では「ワキ」と見えるが訂正した形跡があり「フ」を「ヨ」と見做す。

・俳諧集名は 正章:正章千句 紅梅:紅梅千句 宗因:宗因七百韻 江八:江戸八百韻 当流:當流籠抜 西鶴:西鶴五百韻 江蛇:江戸蛇之鉢 江宮:江戸宮箇 軒端:軒端の独活 七百:七百五十韻の略称である。